ISSN　2435-2950

様　似　郷　土　館　紀　要

BULLETIN OF SAMANI FOLK MUSEUM

４号　2022.3

口絵

＜紀要＞

【論　　文】幌満かんらん岩体の定置形態と体積見積もり（新井田 清信・島田 哲也）・・・・・・・・・・ 1
【調査報告】アポイ山塊において高山植物群落から置換中のハイマツ低木林について
（佐藤 謙・田中 正人・水永 優紀・加藤 聡美・坂下 志朗・田村 裕之）・・・・・・・・・11
【調査報告】日高主衝上断層再訪：日高耶馬溪の地質と岩石
（新井田 清信 ・島田 哲也 ・谷村 利幸・加藤 聡美）・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
【調査報告】冬島遺跡調査報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
・地域研究を目的とした冬島遺跡有識者検討会について（髙橋 美鈴）・・・・・・ 43
・冬島遺跡の意義（高瀬 克範）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
・北海道様似郡様似町冬島遺跡出土石器群の評価（髙倉 純）・・・・・・・・・・・ 59
・冬島遺跡から出土した骨角器について（高橋 健）・・・・・・・・・・・・・・・ 69
・冬島遺跡令和元年度調査出土の動物遺体（新美 倫子）・・・・・・・・・・・・・ 77
【資料紹介】冬島遺跡出土の特徴的な土器２(大泰司 統)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
【調査報告】矢本家文書調査報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
・矢本家文書について（髙橋 美鈴）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
・東蝦夷地シャマニ場所から日高国様似郡へ
～アイヌ史的観点から矢本家文書をよむために～（谷本 晃久）・・・・・・・・・ 95
・矢本家文書からみる様似アイヌの生活の諸相（浅倉 有子）・・・・・・・・・・・107
・矢本家文書「当座帳」及び「土人勘定帳」について（三浦 泰之）・・・・・・・139

＜年報＞

様似郷土館 ・・・ 197
1. 施設概要
2. 運　　営
3. 郷土館利用状況
4. 郷土館事業活動内容
5. 学芸員の館外対応
6. 様似郷土館条例・施行規則

アポイ岳ジオパークビジターセンター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・205
1. 施設概要
2. 運　　営
3. ビジターセンター利用状況
4. ビジターセンター事業活動内容
5. 学芸員の館外対応
6. アポイ岳ジオパークビジターセンターの設置及び管理運営に関する要綱

冬島遺跡遠景（南西→北東）

冬島遺跡出土遺物集合写真

土器集合写真

動物遺存体集合写真

石器集合写真

骨角器集合写真

土器俯瞰写真

※写真撮影　㈲写真事務所クリーク　佐藤雅彦

【論文】

幌満かんらん岩体の定置形態と体積見積もり

(Mode of Emplacement and Volumetry of the Horoman Peridotite Complex)

新井田　清信[1]・島田　哲也[2]（Niida Kiyoaki・Shimada Tetsuya）

１．はじめに

幌満かんらん岩体は、古くから多数の調査・研究が行われ、世界的に最も詳細に調べられたかんらん岩体の１つである。最近の地球科学の進歩、とくに地球内部物質の研究の進展とともに上部マントルかんらん岩の理解が進み、幌満岩体は「造山帯レルゾライト（Orogenic Lherzolite)」の代表的な岩体として世界的に有名になった。2002 年には、様似町で「国際レルゾライト会議」が開催され、100 名以上の参加者たちが現地でかんらん岩を見学しながら地球マントルプロセスの議論を展開した。

しかし、これまでに、幌満かんらん岩体の迸入や定置などの地質形成史については明快な解説は行われていない。なぜなら、かんらん岩が上部マントルから固体で持ち上げられ、地殻浅所に迸入して定置した一連のプロセスを議論するためには、最も基礎的な地質の理解が必要であり、今更ながらその基礎資料に乏しいからである。

ここでは、幌満かんらん岩体の定置形態について再検討し、岩体全体の特徴を把握するための基礎情報としてかんらん岩の体積の算出を試みる。

２．幌満かんらん岩体の概要

幌満かんらん岩体は、日高山脈南西端のアポイ岳（標高 810.2m）周辺に分布する大きな岩体で、幌満川下流～中流域、さらに東の坊主山（幌満岳）周辺にかけて広く分布し、南北約 10 km ×東西約 8 km におよぶ（猪木，1953；舟橋・猪木，1956；など)。岩体の形は、緩やかに湾曲した厚い板状の岩体であり、その厚さは約 3,000m と見積もられている（Niida，1974)。

主に、ダナイト・ハルツバージャイト・レルゾライト・斜長石レルゾライト、および少量の輝岩やはんれい岩質の苦鉄質岩からなり、これらが成層してみごとな層状構造を示す。この層状構造の特徴の違いから、岩体下部（層厚約 2,000 m）と岩体上部（層厚約 1,000m）に区分されている（Niida，1974，1984)。岩体下部は，厚いハルツバージャイト～レルゾライト～斜長石レルゾライトが漸移的に規則正しく繰り返し成層する。岩体上部は、主に斜長石レルゾライトからなり、苦鉄質岩が薄く縞状に累重する。このように、幌満かんらん岩体は多彩な岩石タイプから構成されている。

さらに、Takahashi（1991）は、幌満かんらん岩を MHL 系列・SDW 系列・BDH 系列の３つの系列に区分した。それぞれの系列は、異なる鉱物モード組成や鉱物化学組成を示す。MHL は、岩体の主要部分を構成するハルツバージャイト・レルゾライト・斜長石レルゾライトで、上部マントル起源の溶け残

1 北海道大学総合博物館／ジオラボ_アポイ岳（様似町アポイ岳地質研究所）
2 理科研究室（様似町アポイ岳調査研究支援センター）

りかんらん岩。SDW は、ダナイト・ウェールライトで，上部マントルを通過した玄武岩質マグマからのキュムレート。BDH は、ダナイト・ハルツバージャイトで、いちじるしく MgO や Cr_2O_3 に富む高 $Mg^{\#}$ 値タイプのキュムレートである。すなわち、幌満かんらん岩体は、３つの異起源のマントルかんらん岩が複合してできた「複合かんらん岩体（peridotite complex)」であるとみなされている。

かんらん岩は、いずれも著しい変形作用や再結晶作用、圧砕岩化作用を受けており、構成鉱物は岩石組織などの特徴から初生鉱物と再結晶鉱物とに識別される（Niida, 1975)。初生鉱物は大型のポーフィロクラストで、キンクバンドをもつ。再結晶鉱物はモザイク状の細粒結晶で、ポリゴナルな結晶形態を示す。これら全てが上部マントルで作られ、固体状態で上昇・迸入し、地表近くに定置した(Niida, 1974, 1975, 1984 ; Niida et al., 2002)。また、かんらん岩体の下部から上部にかけて，特徴的な５つの変形組織が識別され、その変形センスの解析が試みられている（Sawaguchi, 2004)。

なお、幌満かんらん岩の地質や岩石についての研究は、古くから多数行われ、その総説的な解説は、2002 年に様似で開催された国際レルゾライト会議の巡検ガイドブック（Niida et al., 2002）や日本地質学会見学旅行案内書（新井田・高澤、2007)、日本地質学会が編集した日本地方地質誌（新井田、2010）などに要約されている。

３．幌満かんらん岩体の定置形態

ここで、幌満かんらん岩体の定置形態に関する研究史をたどってみる。最初に、幌満かんらん岩体の全体像を明らかにした先駆的な仕事は、猪木（1953）の地質学雑誌の公表論文、および５万分の１地質図幅「幌泉」（舟橋・猪木，1956）である。かんらん岩体の分布や、かんらん岩体の周囲の地質や岩石について明らかになった。

図１：５万分の１地質図幅「幌泉」のかんらん岩体部分の地質図（舟橋・猪木，1956)。

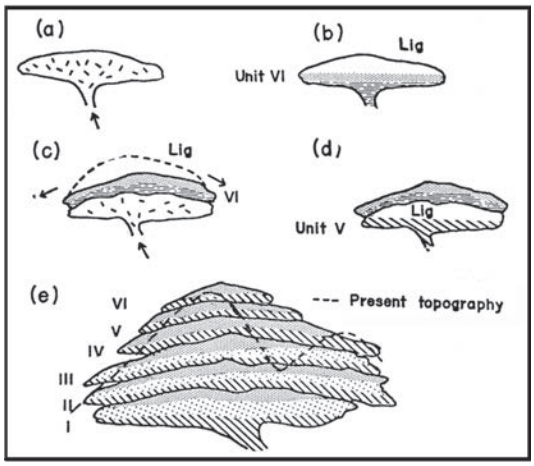


図２：Nagasaki,（1966）による幌満かんらん岩体の分別結晶作用モデル 。

しかし、この時、猪木(1953)や舟橋・猪木（1956）の地質図に描かれたかんらん岩体内部の層状構造や変形組織は、「流理」「流離構造」と記載され、地表近くに貫入したマグマのマグマ溜まり内部の流動組織とみなされた（図１）。これには、当時の地球科学の時代背景があり、地球内部上部マントルの実体が解明されていなかったという事情があった。かんらん岩体の定置の形状についても、地殻浅所で固結した花こう岩体と同じようなバソリス（batholith「底盤」）状の形が想定されている。

次に、Nagasaki（1966）は、現在の位置に玄武岩質マグマが６回繰り返し貫入してできたとする「玄武岩質マグマの分別結晶作用」モデルを提唱した（図２）。このモデルについては、発表当初から問題点が指摘され、その後の詳細な野外観察、とくに層状構造の実体や規則性などの記載によって、すぐに否定された（小松・野地，1966；Niida，1974）。また、地表近くに定置したマグマの結晶作用モデルは、かんらん岩の変形組織が上部マントルで形成された組織を示すことから見直され、上部マントルかんらん岩の固体迸入が想定されるようになった(Niida，1974，1975，1984；Sawaguchi and Takagi，1997；Sawaguchi，2004；など)。

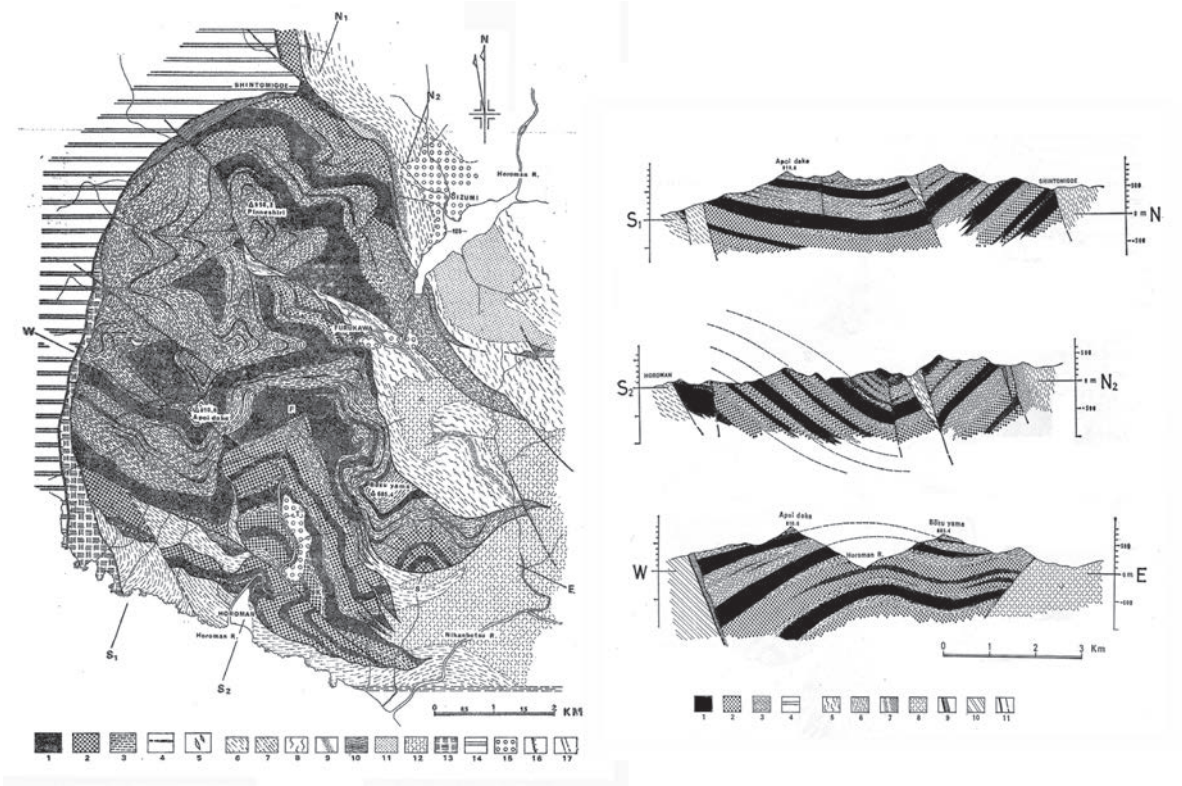


図３：幌満かんらん岩体の地質図(左)および地質断面図(右)(Niida，1974)。地質断面図の断面線 S1-N1、S2-N2、および W-E の位置は、地質図に示されている。主な凡例は、1-ダナイト・ハルツバージャイト、2-レルゾライト、3-斜長石レルゾライト、4-苦鉄質岩。

かんらん岩体の定置形態の考察には、岩体全域が描かれた地質図が必要である。これまでに、幌満かんらん岩体の主要かんらん岩タイプ（ダナイト・ハルツバージャイト・レルゾライト・斜長石レルゾライト）の岩相分布を示した岩体全域の地質図としては、Niida（1974）の地質図（図３左）および Sawaguchi（2004）の地質図が公表されている。Niida（1974）の最初の地質図は、Niida（1984）によって岩相境界が部分的に修正されたが、大きな変更はない。また、上部マントルから固体で上昇・迸入して地表近くで定置したかんらん岩についての議論には、地質図のみならず、地下の胚胎状態を推

定できる精度の地質断面図が欠かせない。これまでに公表されている地質断面図は、次の２つの文献のみである。Niida（1974）の地質断面図（図３右）では地下-1,000ｍまで、Sawaguchi（2004）の地質断面図では海抜０ｍまで描かれている。これらの地質図と地質断面図から、岩体全体の形（巨視的構造）や岩体の地下部分を含む定置状態の読み取ることができる。

４．幌満かんらん岩体の迸入通路の推定

上部マントルに由来する幌満かんらん岩体が固体で地表まで迸入した時の地下通路については、Niida（1974）の議論がある。以下に、論文の関連部分（p.41～42）をそのまま抜粋する。

C. Shape of the massif and mode of emplacement（抜粋：Niida, 1974）

As mentioned above, megascopic structures of the Horoman massif are characterized by synclinal structure with E-W axis at the central part and semi-dome structure at the southern half of the massif. The following evidences may suggest that the massif represents a thick sheet as a summarized shape.

1) Although the massif is bounded by many faults and shear zones, it may be regarded as a continuous body, considering from the same sequence of rock types throughout the whole massif as shown in Figure 6.

２）Typical sheet structures are recognized in the masses of Uenzaru, Pankenuushi, Tottabetsu, Poroshiri, Niobetsu, and so on, which are composed of the similar rock types to the Horoman massif and occur along the same thrust zone at the western side of the Hidaka metamorphic belt.

３）Lineation throughout the whole massif shows a constant trends, about N15°E – S15°W.

The mode of emplacement of the thick sheet is still remains as problem. However, it is probable that the massif went up to the present level along the thrust fault zone (about NW-SE) which passes through northern side of the Horoman massif to the Nikanbetsu body. Then the sheet was thrust up to the south-west with very gentle inclination at the present level. As the northern part of the ultramafic sheet was dragged up and dipped to the south. Therefore, the synclinal structure with E-W axis was formed.

上記の抜粋部分（Niida（1974）：p.41～42）に書かれている主な論点を、以下に要約する。幌満かんらん岩体は、層厚が約3,000ｍの板状岩体で、その巨視的構造は、岩体中央部にE-W方向の軸を持つ向斜構造と岩体南部の半ドーム構造で特徴付けられること。岩体全体が連続的なひとつながりの岩体であり、鉱物層の長軸方向や初生鉱物の変形による伸張方向が示す線構造（lineation）は、岩体全域で一定の方向を示し、N15°E – S15°W 方向に集中すること。岩体の迸入・定置に関しては、幌満岩体の北縁からニカンベツ岩体にかけて伏在する衝上断層の地下通路に沿って上昇し、現在のレベルで南側に倒れるように緩やかに湾曲して定置したと考えられること。さらに、岩体の北側の日高変成岩類がその後も上昇したために、かんらん岩体の北半部も引きずり上げられて南に傾斜し、向斜構造が作られた。

また、新井田・加藤（1978）は、北海道の蛇紋岩やかんらん岩について総括し、幌満かんらん岩体の産状と迸入機構について次のように解説した。その関係部分をそのまま引用すると、『幌満岩体の通路となった衝上断層帯は、幌満岩体の北縁部を通ってポンニカンベツ・ニカンベツ・アベヤキの各かんらん岩体を結ぶ地帯に伏在すると考えられる。この伏在断層は、日高研究グループが「幌満三角地帯」と呼んだ地域（原田ほか、1960）の一辺に相当する。また、岩体全体を通じて一定方向に配列する線構造は、岩体固結時の動きの方向を暗示し、迸入の最終段階で、岩体はSW方向に突き出したと考えられる。・・・』と解説されている。

すなわち、新井田（2010）の解説のように、幌満かんらん岩体は、日高山脈の日高主衝上断層（小松ほか、1982；小山内、1985）に沿って分布する大小10のかんらん岩体と同様に、日高主衝上断層の地下通路に沿って上部マントルから持ち上げられたと想定され、この通路が、「幌満三角地帯」すなわち日高山脈に分布する主要な深成岩や変成岩の分布から外れて南西側に張り出した地域の北東縁にあたると見なすことができる。この通路を上昇した幌満岩体は、迸入の最終段階でSW方向に突き出して定置した。そのために、層厚約3,000 mの厚い板状の幌満岩体は、南半部が南西側に押し倒されたように緩やかに湾曲した形態を示して定置したと考えられる。

５．幌満かんらん岩体の地下部分の連続性と体積見積もり

ここでは、すでに述べた幌満かんらん岩体の迸入・定置の考察にもとづき、岩体の地下部分の連続性を検討し、地下に胚胎するかんらん岩の埋蔵量（体積）を見積もってみる。

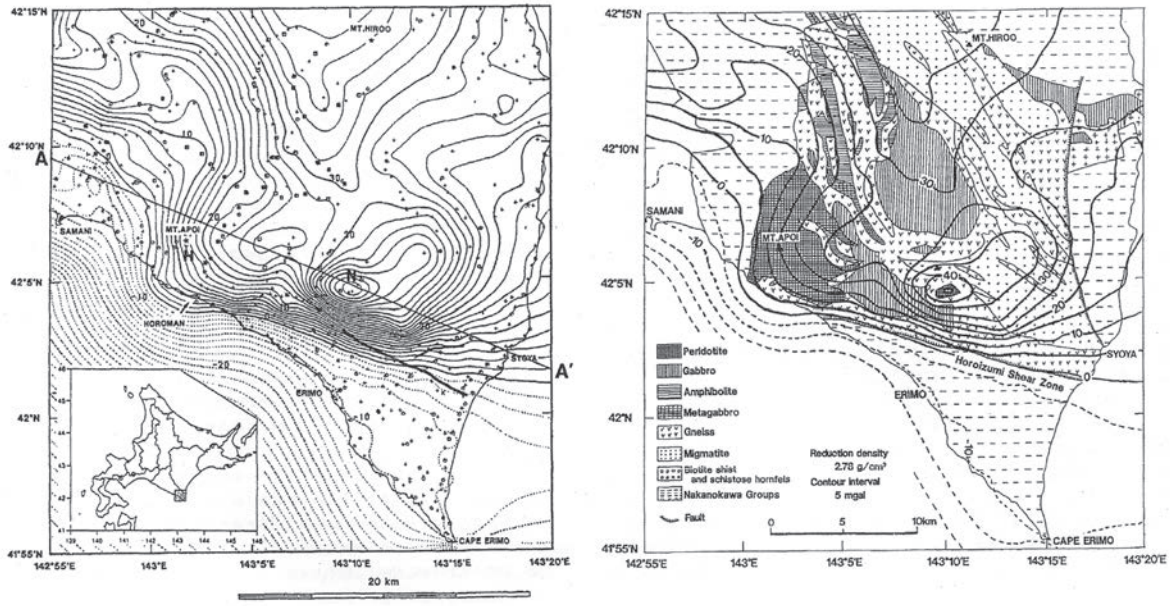


図４：幌満周辺地域の重力異常図（山本ほか、2001）。幌満かんらん岩体（H）とニカンベツかんらん岩体（N）の地域で高重力異常が観測される。右図は、重力異常と地質の密接な関係を示す。

（１）底浅岩体を示唆する地下部分の連続性

Niida（1974）は、幌満かんらん岩の主要な岩石タイプの層状構造を詳細に記載し、岩体が厚さ約

3,000 m の緩やかに湾曲した厚い板状の岩体であることを示した。しかし、Niida（1974）の地質断面図（図３右）には、かんらん岩が地下 -1,000 m までしか描かれておらず、かんらん岩が地下に連続的に胚胎するする様子は描かれているものの、その下のさらなる地下部分の連続性や下面など、地下の定置形態については判別できない。すでに述べた幌満かんらん岩体の巨視的構造や形態、および迸入・定置に関する少ない情報からの推論として、幌満かんらん岩体は底浅で、地下深くまで連続しない岩体であると考えられてきた。

幌満かんらん岩体が底浅の定置形態を示すと考えられるもう１つの有力な地下情報は、山本ほか（2001）の重力異常図（Gravity anomaly map）である。山本ほか（2001）は、日高山脈南部の幌満地域とその周辺地域の重力異常を測定し、その結果を重力異常図（図４）にまとめた。幌満から東方のえりも町庶野に続く断層（幌泉剪断帯）の北側に近接する幌満かんらん岩体（H）～ニカンベツかんらん岩体（N）の分布地域に、急勾配の高重力異常が認められた。とくに、最も高い重力異常の中心（図４のN）の位置は、ニカンベツかんらん岩体が露出する部分に一致しており、地下深部まで高密度のかんらん岩が胚胎することが予想される。一方、幌満かんらん岩体の分布域でも、かんらん岩の分布にほぼ対応して高重力異常になっており、地下に高密度のかんらん岩の胚胎が予想される。しかし、ニカンベツかんらん岩体ほど急立した高異常にはなっていない。その理由として、山本ほか（2001）は幌満かんらん岩が地下深部まで連続しない底浅の岩体であると考えた。そこで、論文では、幌満岩体とニカンベツ岩体を横切る側線（図４の A-A’）に沿って地下構造の推定を試み、かんらん岩が地下 -3,000 m まで胚胎する密度モデルを想定して、ブーゲ異常の観測値とモデル計算結果が調和することを示した。

以上のように、Niida（1974）の推論や山本ほか（2001）の重力異常の調査結果から、ここでは幌満かんらん岩の地下深部の連続性はせいぜい約 2～3 km 程度であるとみなし、底浅の地下の定置形態を想定することにする。

（２）地下埋蔵量の見積もり

幌満かんらん岩の地下深部の連続性は約 2～3 km 程度の底浅の厚板状の岩体を想定し、以下に、かんらん岩の地下埋蔵量（体積見積もり）を試みる。

その方法として、Niida（1974）のかんらん岩分布図（図３左）および地質断面図（図３右）を用いて、立体的な一辺 500 m のキューブ（0.125 km^3）を数えて集計する方法を採用した。キューブの全てがかんらん岩からなるキューブはキューブ１個の体積としてカウントし、部分的にキューブに含まれる場合は、その大小にかかわらず、どのキューブも半分の体積（1/2 キューブ）として計算した。

図５は、今回試みた地下埋蔵量の見積もりのために、幌満かんらん岩の地下の下限を最深-2,500 m と仮定し、Niida（1974）の断面図（図３右）に描かれている断面線 S2-N2 沿い（幌満川本流に近い断面線）に、最深 -2,500 m の厚板状の岩体を想定したものである。図５の破線は、幌満かんらん岩体の上限と下限の想定線で、緩やかに湾曲した厚さ約 3,000 m の岩体の定置形態が描かれている。

この断面図の西側に 500 m 間隔で平行して断面線を９本設定し、図５と同様の断面図を描いて、一辺 500 m のキューブを数えて集計した。また、この断面図の東側にも 500 m 間隔で平行して断面線を８本設定し、500 m の幅のキューブ列を描き、キューブ列の壁ごとにかんらん岩キューブの個数を数えた。

岩体全域では、断面線 S2-N2 方向に西側と東側に合計 17 列のキューブ列が描かれ、それぞれの列ごとにかんらん岩のキューブを数えて、これを総計した。

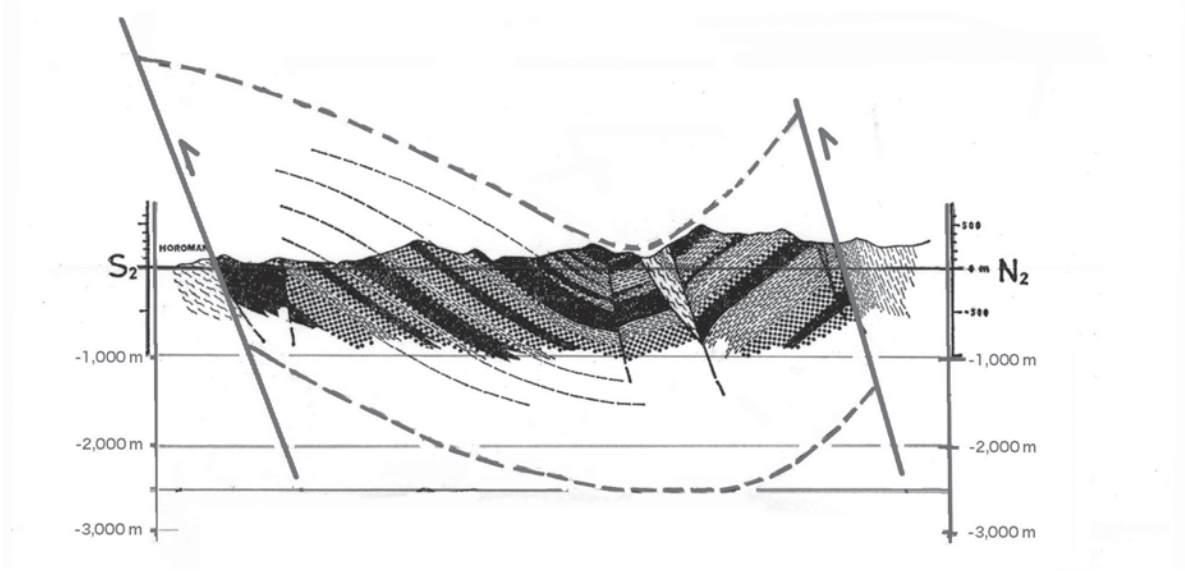


図５：幌満かんらん岩体の定置形態。図３の地質断面 S2-N2 を用いて、破線のように、厚さ約 3,000 m の板状岩体の上限と下限を想定した。最も深い岩体の下限は、地下-2,500 m である。

その結果､幌満かんらん岩体の全域の地下に埋蔵されているかんらん岩の一辺 500 m のキューブは、総計で 741.5 個であった。したがって、かんらん岩の海水準 0 m 以下の地下埋蔵量（体積）は、以下のように見積もられる。

741.5（cubes）x 0.125（km³）＝ 92.6875（km³）

６．幌満かんらん岩体の地上部体積の見積もり

次に、幌満かんらん岩体の地上部分の体積見積もりを試みる。この作業の基礎資料として、地質図 Navi の画像（産総研地質調査総合センターウェブサイト：https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php#3,42.11912,143.03738)、およびアポイ岳付近立体地形図（島田、1991 年頃作成）を使用した。

（１）体積見積もりの作業手順

ここで、幌満かんらん岩体の地上部分の体積見積もり作業で実際に行った作業の流れを、以下に箇条書きで示す。

１：地質図 Navi の画像から、幌満かんらん岩体の分布部分を切り抜く。

２：アポイ岳付近立体地図を高度 90°、標高表示 50 m 間隔で２次元の平面に描画する。この平面図には､標高０ m から 950 m まで合計 20 本の縞（すなわち､標高 0～50 m、50～100 m､100～150 m､・・・・・900～950 m）が描かれている。

３：両者を同縮尺で重ねて作業図を作る（図６）。

４：標高毎のかんらん岩体の断面積を求め、それに高さ（50 m）を乗じて標高毎の部分体積を求める。

５：標高 0～950 m までの標高毎の部分体積を合計して、岩体全体の地上体積を求める。

（２）体積見積もり計算の前提と計算結果

まず、図６のように、平面図のかんらん岩の分布域全体に５ mm の方眼（メッシュ：マス目）をかけ、50 m 間隔の標高毎にマス目の数を数え、各標高のかんらん岩体の断面積を求めた。この作業で用いた平面図のマス目の距離は、アポイ岳～ピンネシリ岳山頂間の距離（3,650 m）が図の上で 12.8 cm になることから、5 mm のマス目の一辺は実距離で 142.6m に相当する。したがって、１マス（５mm x ５mm）の面積は、20334.76 m^2（0.02033476 km^2）である。また、平面図から各標高毎のマス目を数える際に、かんらん岩が１マスの４分の３以上を占めるときは１マス、４分の１以下は０、その中間は 0.5 マスとして数えた。

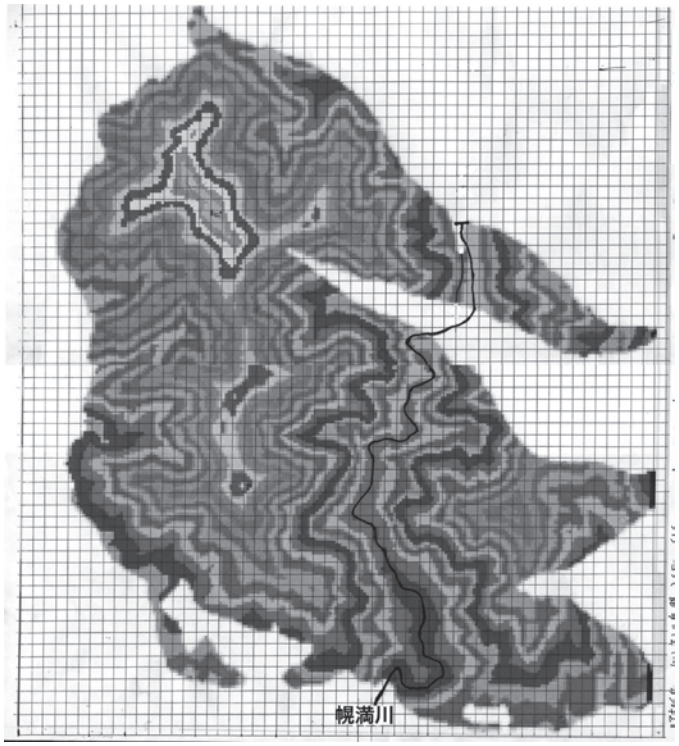


図６：地上部体積見積もり作業の平面図。幌満かんらん岩の分布域の中に標高 50 m ごとに異なる色の縞が描かれている。これに 5 mm 方眼（メッシュ）をかけて、標高 50 m ごとにマス目を数えた。

これらの前提に従って、かんらん岩が実在するマス目を数え、標高毎のかんらん岩の断面積を計算する。標高毎の体積は、それぞれ以下のように求められる。

標高毎のかんらん岩の体積（km^3）＝標高毎の断面積（km^2）x 高さ 0.05（km）

以上から、標高毎の部分体積を総計すると、幌満かんらん岩体の地上部分の全体の体積（km^3）が求められ、17.082 km^3 と見積もられた。

７．まとめ

（１）これまでに公表されている幌満かんらん岩体の地質図や地質断面図を精査し、岩体が上部マントルから固体で上昇・迸入した際の地下通路やかんらん岩の定置形態を再検討した。ここでは、Niida（1974）や新井田・加藤（1979）が議論した岩体の迸入・定置の様式に従って、現在の定置形態として、緩やかに湾曲した厚さ約 3,000 m の板状岩体を想定した。

（２）幌満かんらん岩体の地下への連続性は約 2〜3 km 程度であり、最大深度が地下-2,500m の底浅の岩体を想定した。この想定に基づいて地下埋蔵量（体積見積もり）を試みた。その結果、標高 0 m 以深の地下に胚胎する幌満かんらん岩の体積は、92.6875 km^3 と見積もられた。

（３）さらに、幌満かんらん岩の地上部体積の見積もりも試みた。その結果、地上部体積は、17.082km^3 と見積もられた。地上部分の体積見積もりは、立体地形図を用いて標高 50m 間隔でかんらん岩の断面積を処理し、その平面図作業も 5 mm 方眼を用いることができたので、地下部分の体積見積もりよりも極めて高い精度になっている。

【引用文献】

原田準平・舟橋三男・小林英夫　1960「日高国アポイ岳かんらん岩体調査報告特殊地帯地下資源開発調査」. 日高地方調査報告 III： 35-54.

舟橋三男・猪木幸男　1956「５万分の１地質図幅「幌泉」および同説明書」. 地質調査所, 64p.

猪木幸男　1953「幌満地方の輝石橄欖岩体」. 地質学雑誌, 59, 111-121.

小松正幸・野地正保　1966「日高変成帯の超塩基性岩 I -幌満超塩基性岩とその産状について-」. 地球科学, 87, 21-29.

小松正幸・宮下純夫・前田仁一郎・小山内康人・豊島剛志・本吉洋一・在田一則　1982「日高変成帯のおける大陸性地殻-上部マントル衝上体の岩石学的構成」. 岩鉱特別号, 3, 229-238.

Nagasaki, H., 1966, A layered ultrabasic complex at Horoman, Hokkaido, Japan. Jour. Fac. Sci., Univ. Tokyo, 16, 313-346.

Niida, K., 1974, Structure of the Horoman ultramafic massif of the Hidaka metamorphic belt in Hokkaido, Japan. Jour. Geol. Soc. Japan, 80, 31-44

Niida, K., 1975, Textures and olivine fabrics of the Horoman ultramafic rocks, Japan. J. Japan Assoc. Min. Petr. Econ. Geol., 70, 265-285.

Niida, K., 1984, Petrology of the Horoman ultramafic rocks in the Hidaka metamorphic belt, Hokkaido, Japan. Jour. Fac. Sci., Hokkaido Univ. Ser.IV, 21, 197-250.

Niida, K., Takahashi, N., Takazawa, E., Sawaguchi, T., Morishita, T., Ozawa, K., Arai, S., Obata, M., 2002, Guide book for field excursion to the Horoman peridotite complex. In: Field Guide, 4th Intern. Workshop on Orogenic Lherzolite and Mantle Processes. Samani, 1-98.

新井田清信・加藤孝幸　1978「北海道中軸帯の超苦鉄質岩類」. 地団研専報, 21, 61-81.

新井田清信・高澤栄一　2007「幌満かんらん岩体の層状構造とその起源」. 地質学雑誌, 113（補遺）, 167-184.

新井田清信　2010「4.5 かんらん岩類（第４章）」. 日本地質学会（編）日本地方地質誌１『北海道地方』, 朝倉書店, 158-166.

小山内康人　1985「静内川上流地域における日高変成帯主帯変成岩類の地質と変成分帯」. 地質学雑誌, 91, 259-278.

Sawaguchi, T., 2004, Deformation history and exhumation process of the Horoman Peridotite Complex, Hokkaido, Japan. Tectonophysics, 379, 109-126.

Sawaguchi, T., and Takagi, H., 1997, Inverted ductile shear movement of the Horoman peridotite complex in the Hidaka metamorphic belt, Hokkaido, Japan. Mem. Geol. Soc. Japan, 47, 193-208

Takahashi, N., 1991, Origin of three peridotite suites from Horoman peridotite complex, Hokkaido, Japan: Melting, melt segregation and solidification processes in the upper mantle. J. Japan Assoc. Min. Petr. Econ. Geol., 86, 199-215.

山本明彦・斉藤松彦・山田一夫・石川春義　2001「北海道日高衝突帯南部の重力異常と地殻構造」. 北海道大学地球物理学研究報告, No. 64, 21-49.

【調査報告】

アポイ山塊において高山植物群落から置換中のハイマツ低木林について

(On the *Pinus pumila* scrub displacing alpine plant communities in the Apoi Mountains, Hokkaido, Japan)

佐藤　謙[1]・田中正人[2]・水永優紀[3]・加藤聡美[3]・
坂下志朗[4]・田村裕之[4]
(Ken SATO[1], Masahito TANAKA[2], Yuki MIZUNAGA[3], Satomi KATO[3],
Shiro SAKASHITA[4] and Hiroyuki TAMURA[4])

1．はじめに

アポイ岳(標高810.2m)とその周辺の吉田山(約810m)、ピンネシリ(957.7m)および幌満岳(684.9m)は、一体のかんらん岩からなり、これら山岳の固有植物、希少植物ならびに多数の高山植物からなる山塊固有の高山植物群落によって特徴づけられる。本稿では、以上の範囲を「アポイ山塊（以下、山塊)」と呼ぶ。そのうち、アポイ岳からピンネシリまでの山稜部が国の特別天然記念物「アポイ岳高山植物群落」に指定され、これらと幌満川を挟んで対峙する幌満岳の西斜面が国の天然記念物「幌満ゴヨウマツ自生地」に指定されている。上記のように、山塊には異なる名称の文化財が併存するが、高山植物群落とハイマツ低木林は同質であり、他地域に認められない特徴を有している。さらに、国内で山塊に限られる高山チョウ、ヒメチャマダラセセリは、国の天然記念物に指定されている。

山塊の高山植物群落は、とくに過去約40年間に主にハイマツ低木林に遷移し、森林限界付近ではキタゴヨウ林に遷移したため、その面積が顕著に減少している（渡邊2001、渡邊2005b、様似町2021、渡辺展・渡辺修 2021)。また、山塊に認められる多数の希少植物は、上記の植生遷移による生育地減少とともに、希少であるほど顕著であった盗掘の影響を長期間被り（田中 2010)、エゾシカ食害があいまって（様似町 2021)、危機的状況に陥ったものが少なくない。他方、高山植物キンロバイを幼虫の食草(食樹)とし、多くの高山植物を成虫の吸蜜植物として生息するヒメチャマダラセセリもまた、生息地減少と高山植物の減少に伴って激減した。

山塊を特徴づける高山植物群落、希少植物・高山植物ならびに高山チョウは、氷河期の遺存群落または遺存種として1万年以上の長期間、相互に関連しながらこの山塊に生残してきた希少な存在である。しかし、これらは、過去わずか約40年間に進行した植生遷移によって急減したのである。

この危機的状況に対して、山塊では様々な保全活動が実施されてきた。1997年に発足したアポイ岳ファンクラブによる高山植物盗掘防止パトロール、登山道管理、防鹿柵設置など多面的な保全活動、2006年のアポイ岳ファンクラブと研究者有志（渡邊定元・増沢武弘ら）による「カムバック1952アポイ岳再生委員会」による保全活動、2013年の日本チョウ類保全協会と研究者有志によるハイマツ除去試験の開始などである。

2015年には、高山植物等の保護管理に関する公的な検討組織「アポイ環境科学委員会」が設置され、2016～2020年に多面的な調査研究が実施された。その結果は、調査結果とそれに基づく保全に関する提言を含み「特別天然記念物アポイ岳高山植物群落再生事業調査報告書（様似町2021)」にまとめら

1．北海道大学総合博物館資料部　2．アポイ岳ファンクラブ
3．アポイ岳ジオパークビジターセンター　4．様似町役場

れている。高山植物群落や希少種の減少に結果したハイマツ低木林の拡大に対して、同委員会は、2013年の民によるハイマツ除去試験を継続し、新たに2017年および2019年のハイマツ除去試験を加えてきた。そこでは、高山植物群落とそこに生活する希少種（高山植物とヒメチャマダラセセリ）の再生策としてハイマツ低木林の伐採・除去、すなわち植生遷移の逆行試験が実施され、一定の効果が確認されている。

筆者らは、上記のハイマツ除去試験地における調査とは別に、山塊のハイマツ低木林を広範に踏査した。とくに、高山植物群落とハイマツ低木林（とくにハイマツ疎生植分）が交錯し、過去に高山植物群落が成立し近年にハイマツ低木林に遷移した場所を中心に、ハイマツ低木林の現状を把握したので、ここにその結果を報告し、山塊のハイマツ低木林について考察する。

２．既存研究に認められる維管束植物相、高山植物群落ならびにハイマツ低木林の特徴

（１）維管束植物相

かんらん岩は、多量のマグネシウムや微量でも生物に有害な重金属を含む超塩基性岩（超苦鉄質岩）の一つであり、植物の生育に影響を与えることが知られる。超塩基性岩は、世界各地で固有植物を分化・進化させ、寒冷期または温暖期の植物が生き残る・遺存する場となり、固有植物や隔離分布植物の宝庫、すなわち希少植物のホットスポットを形成する。

山塊の維管束植物相は、その代表例となり、極めて特異である（舘脇1928、Tatewaki1928、中井1930、Hara1934-1939、渡邊1971、山路1997、高橋・田中2003、渡邊2005a、佐藤2018）。とりわけ、ヒダカソウ、アポイカンバ、エゾコウゾリナ、ヒダカトウヒレンなど山塊の固有種、アポイツメクサ、アポイマンテマ、アポイキンバイ、アポイヤマブキショウマ、アポイクワガタ、サマニユキワリ、ヒメシラネニンジンなど山塊の固有変種、エゾタカネニガナ、ヒダカイワザクラ、ホソバトウキなどの北海道超塩基性岩地に限られる固有種（以上、超塩基性岩植物）が特記される。また、山塊ではアポイカラマツ、オヤマソバ、キンロバイ、ミヤマワレモコウ、ミヤマハンモドキ、チシマキンレイカ、タカネクロスゲなど顕著な隔離分布を示す希少植物を含み多数の高山植物が知られる。

（２）高山植物群落（高山風衝草原と高山荒原）

山塊の高山植物群落は、前述の希少植物を主体とする高山風衝草原（エゾコウゾリナーオノエスゲ群集）と高山荒原（アポイツメクサ群集、アポイマンテマーアポイクワガタ群落など）からなる（大場1968、Ohba1974、中村1988、佐藤2002、2003a、2003b、2005、2007）。これらの高山植物群落は、山塊に固有であり、冬季季節風の風衝側（風上側）となる山稜の西～北西斜面上部や吹き抜け鞍部、すなわち高山風衝地に成立する。高山風衝地において、その大半を高山風衝草原が占め、局所的な崩壊地に高山荒原が小規模に成立している。

大場（Ohba1974）は、山塊に固有な高山風衝草原としてエゾコウゾリナーオノエスゲ群集を記載し、その下位単位としてケトダシバ亜群集（ススキ変群集とチシマキンレイカ変群集）とウラシマツツジ亜群集を細分している。上記のうち、ケトダシバ亜群集のススキ変群集（8 方形区）は、標高 300～340m の 6 方形区と 520～690m の 2 方形区からなり、前者が 5 合目付近と幌満第一お花畑から、後者が西稜の南斜面からそれぞれ得られたと推測される。また、チシマキンレイカ変群集（4 方形区）は、ヒダカソウが出現し標高 680～700m と記されているので、旧幌満お花畑から得られたと推測される。他方、ウラシマツツジ亜群集（7 方形区）は、標高が 690～800m、方位が西ないし北に向いた斜面で確認されているので、アポイ岳の西稜上部と北稜の吉田山付近までの間で得られたと推測される。この研究では、ケトダシバ亜群集は低標高地に、ウラシマツツジ亜群集が高標高地にそれぞれ成立する特

徴が明らかにされている。

中村（1988）は、高山風衝草原エゾコウゾリナーオノエスゲ群集とその2亜群集を追認するとともに、それぞれの2方形区資料を示している。佐藤（2007）もまた、同群集とその2亜群集を追認するとともに、ケトダシバ亜群集をコハマギク植分群（9方形区）、ヒダカソウ植分群（8方形区）およびサマニユキワリ植分群（3方形区）に細分し、ウラシマツツジ亜群集についてはチングルマ植分群（7方形区）とエゾルリムラサキ植分群（7 方形区）に細分している。細分した前者のうち、コハマギク植分群とヒダカソウ植分群が大場によるススキ変群集とチシマキンレイカ変群集にほぼ相当する。佐藤による残る細分は、高山風衝草原の種組成が山塊の小地域ごとに変化することを示している。

山塊の高山荒原に関して、大場（1968）は、アポイツメクサ、アポイマンテマなどを群集標徴種とするアポイツメクサ群集（2方形区）を記載している。佐藤（2007）は、群集標徴種に挙げられたアポイツメクサがアポイマンテマ、そして大場が記録しなかったアポイクワガタと同所的に出現する植分が非常に少ないので、同群集を採用せずアポイマンテマーアポイクワガタ群落（7 方形区）として記述した。現在、筆者らは、山塊の崩壊地においてアポイツメクサが出現する植分が小面積に成立し、これとは異所的にアポイマンテマーアポイクワガタ群落が成立することを確認している。研究史の上では前後するが、中村（1988）は、アポイツメクサ群集を追認し、典型亜群集（3方形区）とエゾルリムラサキ亜群集（3 方形区）に細分している。その論拠は、大場が挙げた群集標徴種のうちアポイマンテマが常在することにあり、アポイツメクサはエゾルリムラサキ亜群集の2方形区に出現している。中村が追認したアポイツメクサ群集は、アポイツメクサを欠くアポイマンテマーアポイクワガタ群落を包含するように、山塊の高山荒原を包括する一群集と見なしている。以上の異なる考え方については、本稿とは別に検討する必要がある。

（３）ハイマツ低木林（コケモモーハイマツ群集）

山塊のハイマツ低木林（コケモモーハイマツ群集）として、中村（1988）は2方形区資料を示し、同群集ゴゼンタチバナ亜群集典型変群集に組み入れている。中村の資料では群集標徴種・区分種としてコケモモ・キバナシャクナゲ、亜群集識別種としてゴゼンタチバナ・マイヅルソウ、上級単位標徴種・区分種としてハイマツ・タチハイゴケ・オオフサゴケなど、他の出現種としてイソツツジが挙げられている。しかしながら、2 方形区資料は、本稿で述べる高山風衝草原構成種が多く出現しない密生植分（優占度 5）を調査したこと、そして、道内他地域のハイマツ低木林に多く出現するダチョウゴケ・チャシッポゴケなどの蘚苔類が欠ける、またはそれらが低い優占度で出現する山塊のハイマツ低木林の特徴を示している。

佐藤（2007）は、ハイマツ密生植分を中心に（優占度1～5）調査し、同群集を追認するとともにキンロバイ植分群（5方形区）、ヒロハヘビノボラズ植分群（5方形区）、アポイカンバ植分群（2方形区）およびイソツツジ植分群（3 方形区）を細分している。このうち、イソツツジ植分群が道内他地域のハイマツ低木林と種組成が共通するコケモモーハイマツ群集ゴゼンタチバナ亜群集に相当する。残る3植分群は、比較的多数の高山風衝草原構成種が混生する、山塊ハイマツ低木林の特徴を示している。

３．調査地と調査方法

（１）調査地（図1～3）

山塊のハイマツ低木林は、第一に、アポイ岳の西稜（馬の背～9合目付近：610～740m）と馬の背南西稜（6合目半～馬の背：標高約500m～610m）、ならびにそれらの南西～北西斜面上部に発達する。第二に、アポイ岳の南稜では、3 ヵ所の吹き抜け鞍部（旧幌満お花畑：580～630m、第二お花畑：480～

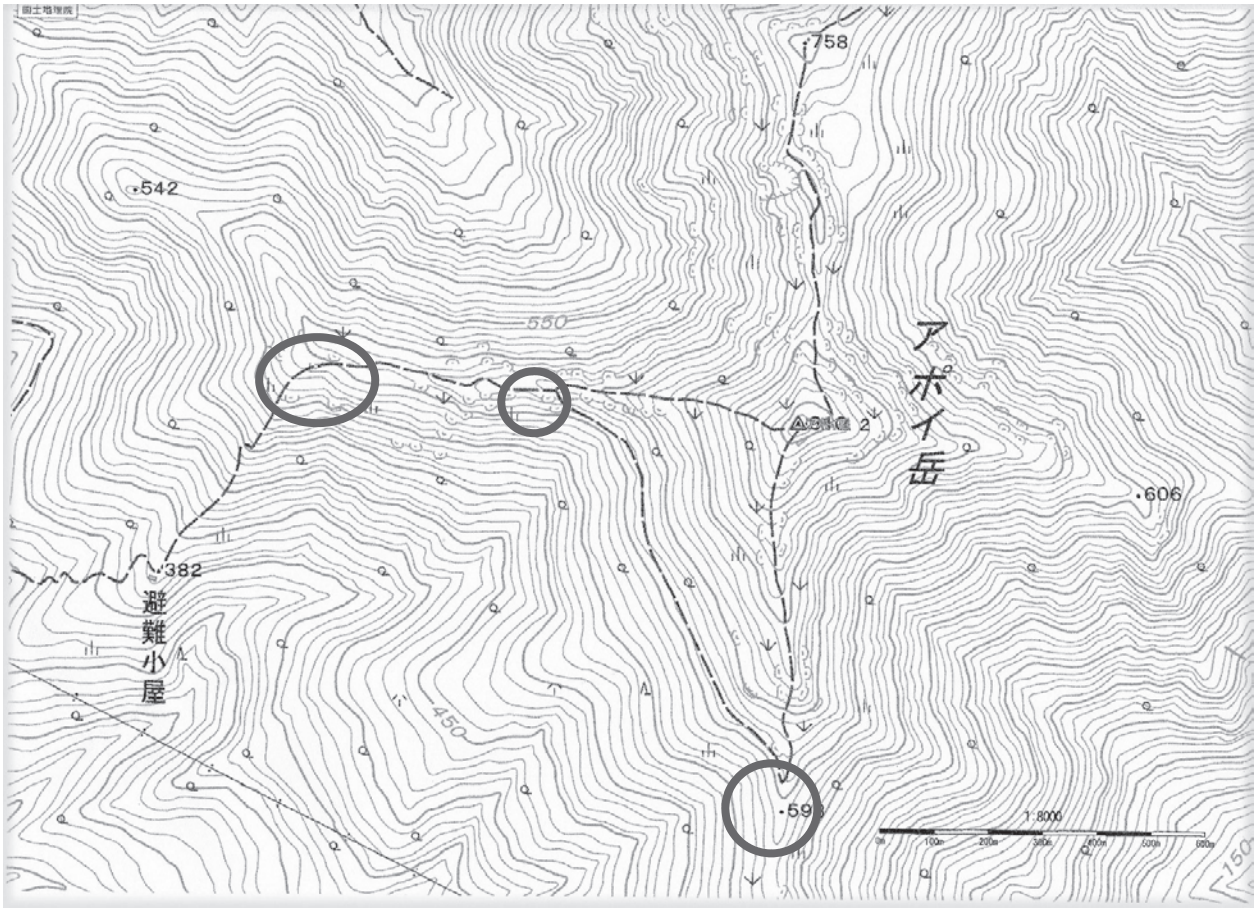


図１．アポイ山塊において高山植物群落とハイマツ疎生植分が交錯する場所（１）

左：馬の背周辺、中央：馬の背・８合目間アポイカンバ出現植分、右：旧幌満お花畑

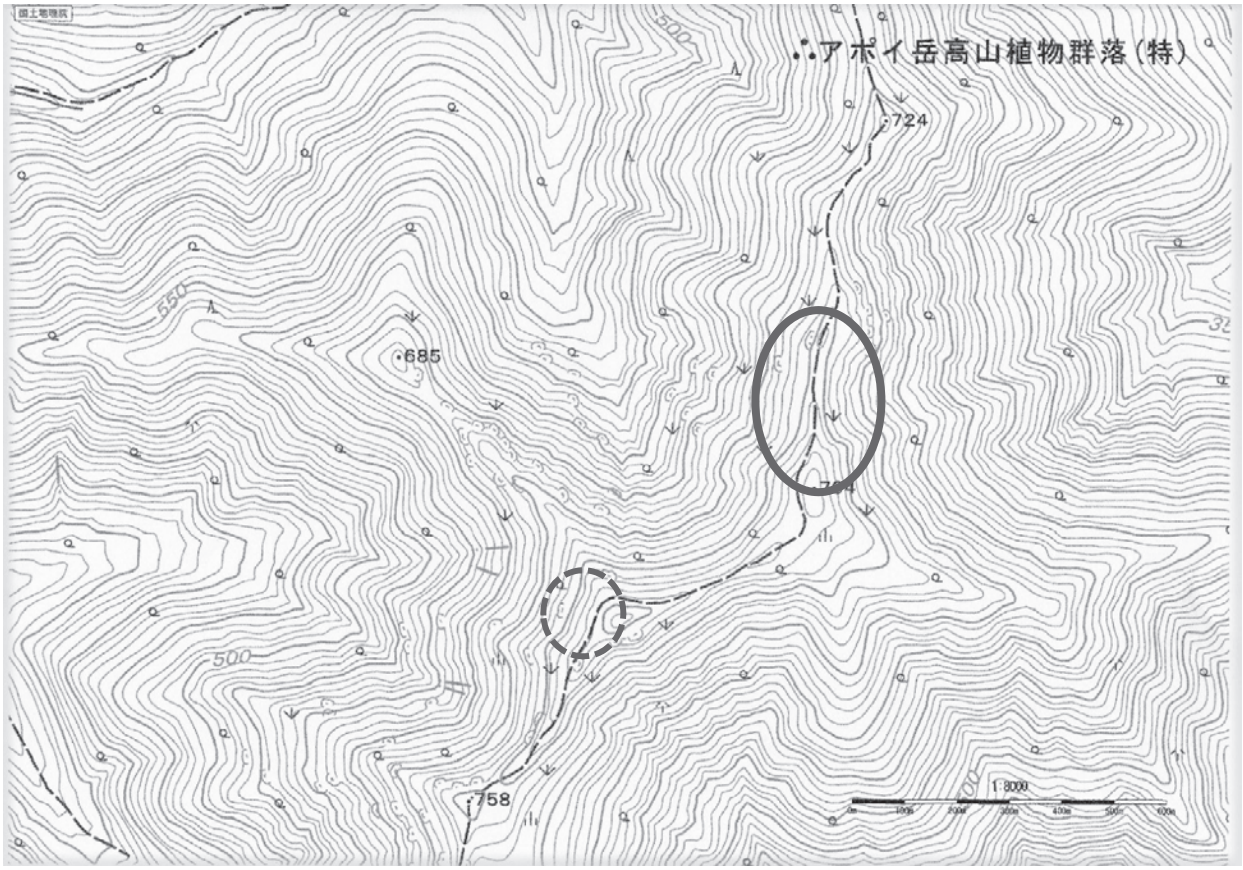


図２．アポイ山塊において高山植物群落とハイマツ疎生植分が交錯する場所（２）

吉田お花畑（実線；参考として密生植分が成立する吉田山西斜面上部を破線で示す）

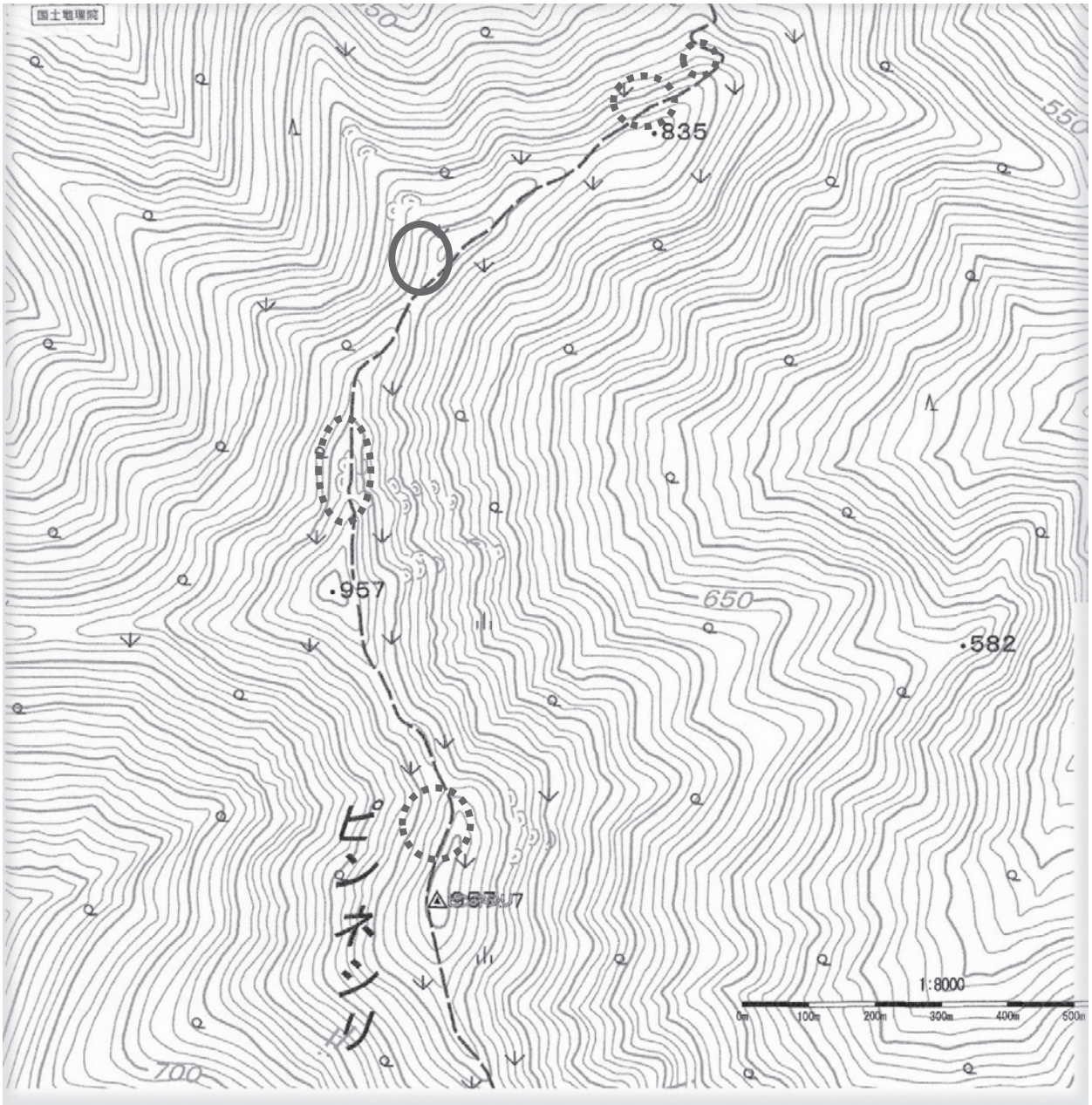


図 3. アポイ山塊において高山植物群落とハイマツ疎生植分が交錯する場所（3）ピンネシリ（小地域を北から 1a、1b、2、3 および 4 と呼び、表 4～5 と対応する。ハイマツ疎生植分は実線の 2 に多く、破線の 4 ヶ所では密生植分が多い。高山風衝草原は、ハイマツ低木林に介在する小面積の露岩周辺に点在する。）

500m および第一お花畑：310m）に局所的にハイマツ低木林が成立している。第三に、ハイマツ低木林はアポイ岳から北方の吉田山・吉田お花畑（740～810m）とピンネシリ（685～950m）、ならびに幌満岳（南稜の約 570～684.9m と南西稜の 497m 峰付近）において山稜とその西斜面上部に成立している。これらに対して、山稜の東斜面や低標高地に向けてダケカンバ林または針葉樹林（キタゴヨウ林など）が成立する。

本稿では、調査地として、高山植物群落からハイマツ低木林への植生遷移が顕著であった馬の背周辺（標高 585～605m）と旧幌満お花畑（587～629m）、また上記の遷移が推定される馬の背～８合目間（615～674m）、吉田お花畑（746～750m）およびピンネシリ（685～950m、とくに 853～858m）を選定した（図 1～3）。

（２）現地調査の方法

植生調査は、植物社会学の方形区法によった。方形区の面積は、基本的に 5m×5m（25 ㎡）を採用し、群落の広がりに応じて 3m×5m または 3m×3m を採用した。方形区ごとにハイマツの植物高と被度（%）、群落高（ハイマツ植物高と一致する場合が多い）、草本層の植被率（%）、全出現種の優占度と群度（Braun-Blanquet 1964）を測定した。また立地環境として、標高、斜面の方位と傾斜角を測定した。

植物群落の区分・分類を目的とする植生調査では、通常、植物群落の広がりの中で均質な相観を示す群落の中央（代表的な植分）に方形区を設置し、群落を特徴づける種組成と立地を把握する。ハイマツ低木林に関する既存研究では、ハイマツの優占度・被度が高い植分（密生植分、ハイマツ低木林に普通な状態）の中央に方形区を設置した結果を報告している。筆者らの一人、佐藤による山塊における研究（佐藤 2002：アポイ岳～ピンネシリ、佐藤 2003：幌満岳）においても、ハイマツ密生植分を主な対象とした。

しかし、山塊では、高山植物群落からハイマツ低木林に遷移する、すなわちハイマツ低木林が拡大する過程において、高山植物群落に侵入中のハイマツが種々の程度の疎生植分を形成している。ハイマツ疎生植分は、面積 5m×5m、3m×3m などの方形区を設置すると、高山植物群落の広がりの中にハイマツの小個体（一株）がパッチ（小斑）状に散在する場合と、ハイマツが方形区の全面を被うが優占度３～４程度で相対的に疎生する場合が認められる。本稿では、主に、高山植物群落に隣接、あるいはそれと交錯する、上記のハイマツ疎生植分を対象とし、周辺にあるハイマツ密生植分を多少加えて調査した。その調査結果は、群落組成表として示す。

学名と和名は、基本的に、新たな見解が示された大橋ほか編（2015-2017）と海老原（2016-2017）に従った。ただし、アポイヤマブキショウマ、サマニユキワリ、タカネショウジョウスゲ、ヒメシラネニンジンおよびミヤマウシノケグサについては、筆者らの見解により大井（1975）または杉本（1965）の植物名を使用した。

なお、道内他地域のハイマツ低木林では林床に蘚苔類が比較的高い優占度で出現する。しかし、山塊のハイマツ低木林では、ハイマツの匍匐する太い地上茎上に蘚苔類が見られるが、それを除く林床にはハイマツ落葉が堆積し蘚苔類がほとんど出現しない特徴がある。そのため、本稿では、ハイマツ低木林における蘚苔類は調査対象外としている。

（３）高山風衝草原からハイマツ低木林への移行に関する検討

馬の背周辺の 2019 年ハイマツ除去試験地において、ハイマツの植物高または被度と草本層の植被率または高山風衝草原構成種数の間に負の相関が認められた（佐藤ほか 2020a）。この結果に基づき、

ハイマツ除去対象地としてハイマツ疎生植分を選択すると、高山風衝草原への回復を早めることができると判断された。

本稿では、５ヶ所のハイマツ低木林に関して、前項(2)に述べた植生の詳細調査とは別に5m四方の方形区を多数設置し、ハイマツの植物高または被度（%）と高山風衝草原構成種の有無をデータとして記録した。５ヶ所のうち、ピンネシリの方形区数が最多の36個であったので、以下のデータ開析の対象とした。ハイマツの植物高または被度（%）が高山草原構成種の種数に影響するかを調べるため、ポアソン分布（対数リンク関数）を仮定した一般化線形モデル（GLM）を使用して行った。高山風衝草原構成種の種数を応答変数、ハイマツの植物高または被度を説明変数とした。全ての統計解析は、R ver.4.1.2で行った。

４．調査結果

４－１．植物群落の種組成と立地の特徴

（１）馬の背周辺のハイマツ低木林（表１、図１）

表１に、アポイ岳馬の背の南～南東斜面に設置した17方形区（高山風衝草原2方形区とハイマツ低木林15方形区）の調査結果を示す。ハイマツ低木林の15方形区は、ハイマツ疎生植分5方形区と同密生植分10方形区からなる。

17方形区に合計69種が出現した。馬の背近隣でハイマツ疎生植分を中心にした2013年ハイマツ除去試験地と2019年同試験地では2ヶ所ともにそれぞれ合計62種が出現したので、17　方形区の出現種は、馬の背周辺の出現種をほぼ網羅したといえる。69種のうち、高山風衝草原構成種は、草原とハイマツ疎生植分に限られる18種と草原からハイマツ疎生・密生の両植分まで出現する22種の合計40種（総出現種の約58%）を数え、疎生植分ほど種数が多い。

この場の高山風衝草原構成種は、アポイ岳固有の高山風衝草原エゾコウゾリナーオノエスゲ群集ケトダシバ亜群集（Ohba1974、中村1988、佐藤2007）の主要構成種であり、佐藤（2007）によって細分されたコハマギク植分群の構成種を含んでいる。

それに対して、ハイマツ低木林を特徴づける種は、道内・国内のハイマツ低木林との比較に基づくと、ハイマツ・コケモモ・ミヤマナナカマドの3種が挙げられる。他の出現種26種は、大半がダケカンバ林や針葉樹林など森林との共通種であり、そのうちススキ以下に列記した6種が道内他地域のハイマツ低木林においてほとんど出現しない温帯性植物である。馬の背のハイマツ低木林は、佐藤(2007)により細分された4植分群のうちヒロハヘビノボラズ植分群に当たる。

（２）馬の背～８合目間におけるアポイカンバが出現するハイマツ低木林（表２、図１）

表２に、アポイ岳西稜を馬の背から８合目に向う途中、旧幌満お花畑分岐点手前付近に成立する山塊固有種アポイカンバが出現するハイマツ低木林８方形区の調査結果を示す。

８方形区に出現した59種には、ハイマツ低木林を特徴づけるハイマツ・コケモモ・ミヤマナナカマド・イソツツジの4種（約7%）とともに、高山風衝草原構成種20種（約34%）と他の出現種35種（約59%）が含まれる。この場の高山風衝草原構成種は、エゾコウゾリナーオノエスゲ群集ケトダシバ亜群集の主要構成種である（Ohba1974、中村1988、佐藤2007）。他方、他の出現種として、ハイマツ低木林と森林に共通する26種と道内・国内他地域でハイマツ低木林にほとんど出現しない温帯性植物（ススキ以下の９種）の出現が特徴的である。この場のハイマツ低木林（コケモモーハイマツ群集）は、佐藤（2007）によるアポイカンバ植分群に当たる。

アポイカンバが多く出現する南斜面の植分（表２整理番号1～5の５方形区）では、温帯性植物が優

勢に混生し、アポイカンバとハイマツとともに、相観的に樹高 3〜4m のキタゴヨウや 1〜2m のミズナラ、エゾイタヤが単木的・パッチ状に散生し、低木のパッチ間に小規模な高山風衝草原が交錯する相観を示している。他方、北斜面（表 2 整理番号 6〜8 の 3 方形区）では、アポイカンバがハイマツ・ミヤマハンノキ・ダケカンバと混生し、最上階層が閉じた植分を形成して、南斜面の植分と比較すると高山風衝草原構成種が少ない傾向が認められる。

南斜面では、やや凹形となる斜面を呈して比較的大きな岩塊が多いので、群落立地に岩塊移動という不安定な特徴が認められる。そのため、ハイマツ低木林やキタゴヨウ林への植生遷移が十分には進まず、高山風衝草原構成種が生残した、しかし南斜面では相対的に冬季の風衝が弱く積雪が多いことから凹形斜面の中で相対的に安定した大きな岩塊周辺にキタゴヨウやミズナラなどが侵入した、そのように想定される。この場のハイマツ低木林は、顕著な高山風衝地において高山風衝草原とハイマツ低木林（疎生植分）が交錯する他の 4 ヶ所とは、種組成と立地に関して上記のような異なる特徴が認められる。

（3）旧幌満お花畑（表 3、図 1）

表 3 に、アポイ岳南稜の吹き抜け鞍部、旧幌満お花畑におけるハイマツ低木林 6 方形区の調査結果とともに、同所で過去に得た高山風衝草原 3 方形区の資料（佐藤 2002）を加えた調査結果を示す。

まず、ハイマツ低木林 6 方形区に出現した 31 種のうち、高山風衝草原構成種は 14 種（約 45%）を数えた。総出現種と高山風衝草原構成種は本稿で述べる他の 4 ヶ所と比較して明らかに少ない。その理由として、一つは、ハイマツ疎生植分の調査が不足であったことが考えられるので、次年度以降、疎生植分を中心に詳細な調査を必要とする。もう一つの理由として、ここの立地が比較的大きな岩塊が堆積した斜面であるため、ハイマツの被度が比較的高い植分が多いが、林床に岩塊が横たわり草本植物が定着する場が少ないことが挙げられる。

表 3 において、過去に得た 3 方形区資料に基づいて高山風衝草原構成種 12 種を加えたが、これらはハイマツ低木林に隣接または介在して認められる。以上を合わせた高山風衝草原とハイマツ低木林の総出現種は 43 種、そのうち高山風衝草原構成種は 26 種を数えた。これらは、佐藤（2007）におけるエゾコウゾリナーオノエスゲ群集ケトダシバ亜群集ヒダカソウ植分群の構成種である。ヒダカソウ植分群は、ケトダシバ亜群集の中で、対立するウラシマツツジ亜群集に最も種組成が近縁である。他方、ここのハイマツ低木林は、佐藤（2007）によるヒロハヘビノボラズ植分群に該当する。

（4）吉田お花畑（表 4、図 2）

アポイ岳北稜を北方に進み、吉田山（標高約 810m）と 794m 峰を経てピンネシリとの鞍部手前に達すると、稜線とその西斜面上部に高山風衝草原が発達し、周囲をハイマツ低木林が取り囲んでいる。この「吉田お花畑」において、高山風衝草原とそれに隣接するハイマツ低木林にそれぞれ 4 方形区を設置した（表 4）。

ハイマツ低木林 4 方形区（概して疎生植分）の総出現種は 38 種、そのうち高山風衝草原構成種は 26 種（約 68%）を占め、その割合は本稿で述べる 5 ヶ所の中で最も高い。ハイマツ疎生植分に隣接または介在する高山風衝草原 4 方形区では 34 種が出現し、高山風衝草原構成種が 29 種を数えた。高山風衝草原構成種は、高山風衝草原とハイマツ疎生植分に 22 種が共通し、両者を合わせると合計 33 種を数えており、馬の背と同様に豊富に認められる。

ここの高山風衝草原は、エゾコウゾリナーオノエスゲ群集ウラシマツツジ亜群集（Ohba1974）にあたり、同群集ケトダシバ亜群集に該当する既述 3 ヶ所とは種組成が明瞭に異なる。この草原はまた、佐藤（2007）がエゾコウゾリナーオノエスゲ群集ウラシマツツジ亜群集の中で細分したチングルマ植

分群にあたる。

他方、ハイマツ低木林については、佐藤（2007）の細分によると、ハイマツ疎生植分の 4 方形区のうち、最後の方形区（表 4 の整理番号 8）がイソツツジ植分群（相対的な密生植分）にあたるが、残る 3 方形区はキンロバイ植分群に該当する。

（5）ピンネシリ（表 5、図 3）

ピンネシリのハイマツ低木林は、北側登山口から山頂に至る登山道沿い、標高約 700m 以上の山稜とその西斜面に発達している（図 3）。ハイマツ低木林に 9 方形区（顕著な疎生植分 4 方形区、疎生植分 5 方形区）を設置した調査結果を表 5 に示す。ピンネシリのハイマツ低木林は、佐藤（2007）による細分と照合すると、表 5 に示していない密生植分がイソツツジ植分群にあたり、表 5 に示した方形区（B）はキンロバイ植分群にあたる。

9 方形区に出現した 50 種のうち、高山風衝草原の構成種は 32 種（約 64%）を数え、ピンネシリに出現する高山風衝草原構成種は比較的豊富に認められる。これらは、エゾコウゾリナーオノエスゲ群集ウラシマツツジ亜群集（Ohba1974）と、同亜群集で細分されたチングルマ植分群（佐藤 2007）の主要構成種であり、吉田お花畑との共通種が多い。しかし、ピンネシリにおいて相観的に高山風衝草原と見なされる植分は露岩地周辺に限られ小面積（1～2m 四方程度）でわずかに点在する。ピンネシリでは、高山風衝草原の構成種は、高山風衝草原ではなく、むしろハイマツ被度 10～20%を示す顕著なハイマツ疎生植分（表 5 の A、図 3 の実線の範囲）に多く見られ、山塊他地域と同程度のハイマツ被度 40～50%を示す疎生植分（表 5 の B）にも出現する。面積的には後者の疎生植分（B）が大半を占め、その立地が比較的大きな岩塊堆積地となる点で旧幌満お花畑に似ている。そこでは岩塊間にハイマツ・キンロバイ・ミヤマハンモドキなどの低木類が根を下ろし低木類の枝条が種々の程度の優占度で広がっている。それに対して、顕著なハイマツ疎生植分（A）は岩塊の堆積が不明瞭な斜面に成立する。

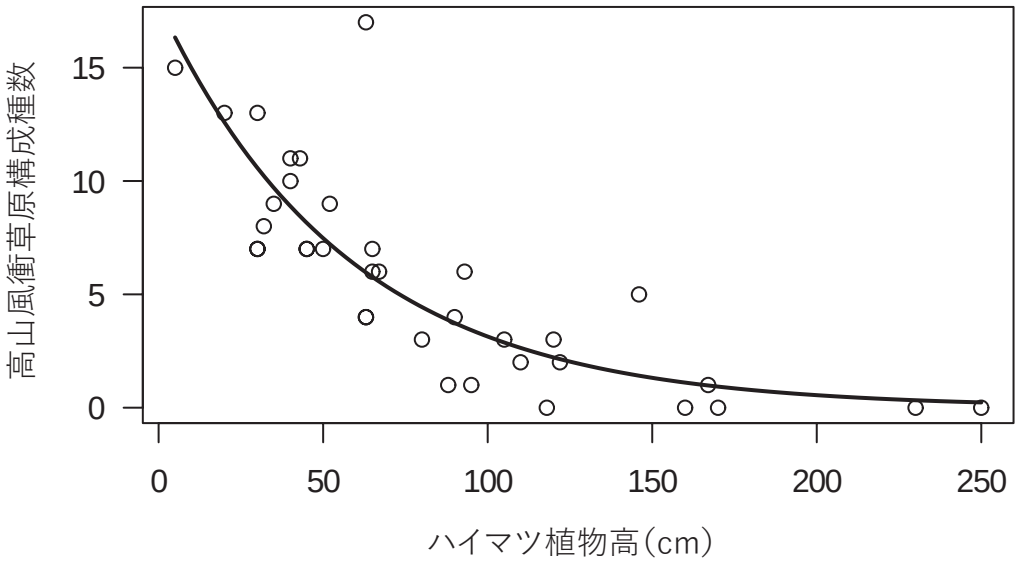
４－２．ハイマツ低木林の群落形態と高山風衝草原構成種数（表 6～7、図 4）

表 6 に、ピンネシリのハイマツ低木林について、ハイマツの植物高と被度（%）、そして高山草原構成種数を記録した結果を示す。この群落組成表は、出現種の有無で示してあるが、高山風衝草原とハイマツ低木林の構成種はすべて出現の都度記録し、他の出現種についてはハイマツ低木林とダケカンバ林やキタゴヨウ林との共通種を主体に記録した結果である。

上記のデータを一般化線形モデル（GLM）によって開析した結果、ハイマツの植物高または被度が低いほど高山風衝草原構成種数が増加する傾向があることが示された（図 4、表 7）。概ね、ハイマツの植物高が 60cm 以下、ハイマツの被度 40%以下となるハイマツ疎生植分において、高山風衝草原構成種が多い傾向が確認された。この傾向は、馬の背付近の 2019 年ハイマツ除去試験地における分析結果（ハイマツの植物高 70cm 以下、被度 40%以下で高山風衝草原構成種が多い。佐藤ほか 2020a）とほぼ同じであった。

５．高山植物群落の再生に関する考察とまとめ

本稿と既存研究（佐藤ほか 2020a）により、ハイマツの植物高や被度が小さな値を示すほど、草本層の植被率や高山風衝草原構成種数が増加する傾向が認められた。この傾向は、ハイマツ低木林が高山風衝草原へ侵入拡大し、置き換わってきた植生遷移を示唆する。山塊において激減した高山植物群落、そしてヒメチャマダラセセリ生息地を再生する目的のため、2013 年から開始したハイマツ除去試験では、ハイマツ疎生植分を対象にすると高山風衝草原への再生が容易であると予測し、現在までの



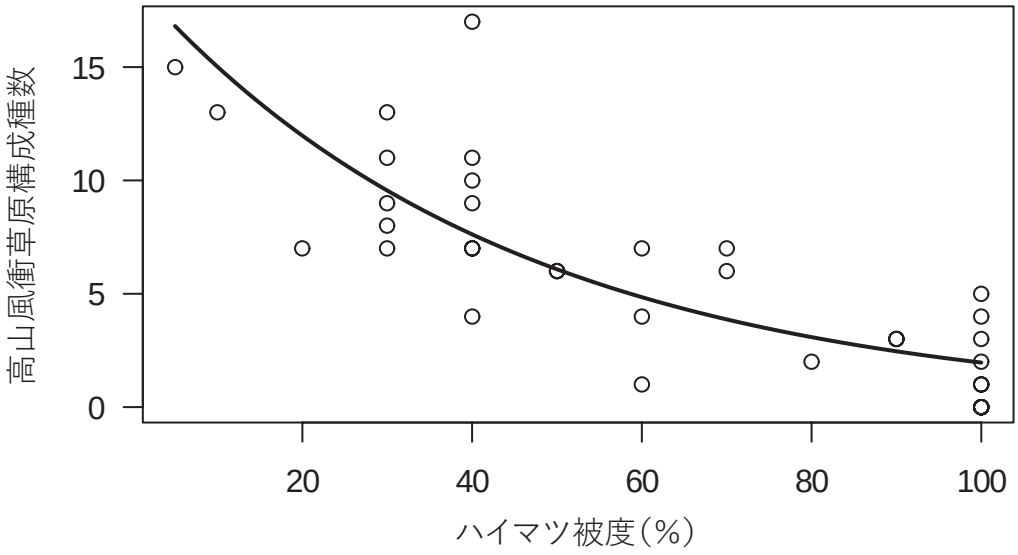


図4. ハイマツ植物高もしくは被度と高山風衝草原構成種数の関係。曲線は、GLM(説明変数はそれぞれ、ハイマツ植物高と被度)の予測である$y=e^{\beta_1+\beta_2 x}$への当てはめである。yは高山風衝草原構成種数、xはハイマツ植物高もしくは被度、β_1,β_2はポアソン分布を仮定したGLMの係数である。

結果はその予測通りであると判断されている。

山塊を広く踏査した結果、ハイマツ低木林が広範に成立するが、それに対して、高山風衝草原とその構成種を多く含むハイマツ疎生植分は、それらが交錯した小地域として点在している。近い将来、高山風衝草原はハイマツ低木林（疎生植分）に置換され、後者の疎生植分は密生植分に遷移してしまう事態が想定される。最後の段階は、高山風衝草原構成種が少ないので、高山風衝草原への再生が容易ではない段階と考えられる。したがって、高山風衝草原が激減した現状に対して、残された草原とそれを取り巻くハイマツ疎生植分が現状における厳密な保護対象となり、ハイマツ疎生植分から高山風衝草原へ遷移の逆行（ハイマツの除去・伐採）策を講じなければならない。

調査結果 4-1 で述べた 5 ヶ所は、高山風衝草原の再生候補地になりうる。ただし、ハイマツ疎生植分を除去する対策を講じる際、隣接・介在する高山風衝草原にはいっさい損傷を与えてはいけない。

ところで、5 ヶ所それぞれに植生の特徴と実施作業上の長短が考えられるので、再生計画として順位付けが必要である。その順位は、4-1 調査結果の記述順序になる。第一位の候補地、①馬の背周辺は、他の 4 ヶ所と比較して、高山風衝草原とハイマツ疎生植分の組み合わせが最大面積で認められ、過去からの植生遷移が明確に確認されている。第二位の候補地、②馬の背～8 合目間ではアポイカンバ出現植分の成立が特記されるので、アポイカンバ生育地を維持・再生する対策として、ハイマツと温帯性高木種の除去が必要である。第三位の候補地、③旧幌満お花畑は、高山風衝草原の縮小が顕著であった事実が明らかであるので、ハイマツ伐採による再生を図りたい場所である。しかし、残されたヒダカソウ生育地であることから、同種の保全を第一に考えなければならない。また、ヒダカソウ保全と考え合わせると、小面積のハイマツ除去地を散在させるなど、詳細な再生計画が必要である。

第四位の候補地、④吉田お花畑は、高山風衝草原構成種数が非常に多く、その種類がエゾコウゾリナーオノエスゲ群集ウラシマツツジ亜群集を構成するので、重要な再生候補地の一つと考えられる。しかし、吉田お花畑は、アプローチが非常に長いので、実際の作業が容易でない欠点がある。第五位の候補地、⑤ピンネシリでは、図 3 に実線で示したハイマツ疎生植分の範囲が再生候補地になりうる。しかし、この地もアプローチが長いという作業上の大きな欠点がある。

高山植物群落の減少という喫緊に取り組むべき課題に対して、ハイマツ疎生植分に焦点を当てたハイマツ除去は重要な方策と考えられる。その際、上記のハイマツ除去候補地ごとにさらに詳細な調査が必要である。ちなみに、馬の背では、2021 年度に具体的なハイマツ除去候補地を設定し、本稿で示した植生資料とは別に詳細な植生調査を実施しているので、その結果は、次号以降に公表したい。いずれにしても、慎重なモニタリング調査と評価、すなわち順応的管理を実施しながら、高山植物群落の再生を図りたいと考える。

別の観点からの考察として、以下を加える。ハイマツを除去した 2013 年試験地と 2019 年試験地ではともに、ハイマツ伐採後にエゾシカの痕跡が少なからず認められる。前者の試験地ではアポイアズマギクの花茎に多くの食痕が認められた調査年があり、また、両者ともにシカ糞が多く認められるので、伐採地というオープンな場所になった後にエゾシカ歩行が頻繁になったことが考えられる。ハイマツ除去による高山風衝草原を目的とした再生候補地の設定とエゾシカの関係については、小地域ごとにさらなる調査が必要である。

ピンネシリでは、しばしばハイマツが登山道を覆い歩行しにくい状況が生じる。登山者の安全確保に関わる登山道管理として、登山道脇のハイマツを除去または枝切りを実施する必要がある。その登山道管理のために、登山道の両側を仮に 1m の幅でハイマツ除去を実施するならば、高山風衝草原再生を直接の目的としない行為であっても、結果として高山風衝草原再生につながると考える。

引用文献

海老原淳 2016-2017. 日本産シダ植物標準図鑑Ⅰ-Ⅱ. 475 頁と 507 頁. 学研プラス.

増沢武弘 2005. 北海道アポイ岳の高山植物群落の現状と将来について. 日本生態学会誌 55: 61.

増沢武弘・光田準・田中正人・名取俊樹・渡邊定元 2005. 北海道アポイ岳の高山植物群落―カンラン岩土壌における植物群落の遷移―. 日本生態学会誌 55: 85-89.

光田準・増沢武弘 2005. 北海道アポイ岳における植物の分布と土壌環境. 日本生態学会誌 55: 91-97.

中井武之進 1930. 日高国様似郡アポイ山の植物調査報告. 天然記念物調査報告 12: 1-80. 内務省. 東京.

中村幸人 1988. 亜高山性針葉樹低木林(コケモモーハイマツ群集)、高山風衝草原(エゾコウゾリナーオノエスゲ群集)、ならびに高山性荒原植生(アポイツメクサ群集). 宮脇昭編:日本植生誌北海道 313-316+Tab.85, 333-334+Tab.91, 342+Tab.94. 至文堂.

大場達之 1968. 日本の高山寒冷気候下における超塩基性岩地の植生. 神奈川県立博物館研究報告 1(1): 37-64. 横浜.

大橋広好・門田裕一・邑田仁・米倉浩司・木原浩編 2015-2017. 改訂新版日本の野生植物 1～5. 1:ソテツ科～カヤツリグサ科、391 頁、2015; 2: イネ科～イラクサ科、381 頁、2016; 3: バラ科～センダン科、338 頁、2016; 4: アオイ科～キョウチクトウ科、348 頁、2017; 5: ヒルガオ科～スイカズラ科、474 頁、2017. 平凡社.

大井次三郎(北川政夫改訂) 1992. 新日本植物誌顕花篇改訂版. 1716 頁. 至文堂.

様似町 2021. 特別天然記念物アポイ岳高山植物群落再生事業調査報告書―平成 28 年度～令和 2 年度事業実施報告書―. 250 頁. 様似.

佐藤謙 2002. アポイ山塊の超塩基性岩地植生(Ⅰ)植物研究史と 2001～2002 年における植生の現状. 北海学園大学学園論集 No.114 :53-87. 札幌.

佐藤謙 2003a. 北海道幌満岳の超塩基性岩地植生. 北海学園大学学園論集 No.115: 15-43. 札幌.

佐藤謙 2003b. アポイ山塊の超塩基性岩地植生(Ⅱ) 1994 年以前の状況. 北海学園大学学園論集 No.116: 37-61. 札幌.

佐藤謙 2005. アポイ山塊と幌満岳の超塩基性岩地植生―偽の永久方形区によって示された植生変化―. 日本生態学会誌 55: 71-83.

佐藤謙 2007. 北海道高山植生誌. 688 頁. 北海道大学出版会. 札幌.

佐藤謙 2018. アポイ岳の特異な植物相と植生、それらの保全を考える. 様似郷土館紀要 No.1: 1-22. 様似.

佐藤謙・丹羽真一・中村康弘・渡辺康之・永盛俊行 2019. 七合目ハイマツ伐採試験地(先行試験地)のモニタリング調査. アポイ環境科学委員会・運営事務局編「特別天然記念物アポイ岳高山植物群落再生事業平成 30 年度実施報告書」21-33. 様似町.

佐藤謙・中村康弘・永盛俊行 2020a. ハイマツ伐採による高山植生・希少チョウ回復試験(新規). アポイ環境科学委員会・運営事務局編「特別天然記念物アポイ岳高山植物群落再生事業令和元年度実施報告書」23-30. 様似町.

佐藤謙・丹羽真一・田中正人・水永優紀 2020b. アポイ岳ハイマツ伐採試験地における 6 年間の植生変化. 様似郷土館紀要 No.2: 1-20. 様似.

杉本順一 1965. 日本草本植物総検索誌双子葉篇. 832 頁. 六月社.

田中正人 2016. 守っても、守っても、あ～守ってもアポイ岳. 北方山草 27: 53-56. 札幌.

舘脇操 1928. 日高様似アポイヌプリ植物. 北海道帝国大学農学部演習林研究報告 5: 49-134. 札幌.

高橋誼・田中正人 2003. アポイ岳の高山植物と山草. 様似町文化協会北方植物研究会. 様似観光開発公社.

山路弘樹 2000. 様似町の植物相 ver.2. 25 頁. (東北大学理学部生物学教室卒業論文の改訂版、同大学理学研究科所属の山路氏から 2000 年 9 月 12 日付けで様似町教育委員会へ送付された未公表論文)

渡邊定元 1971. 北海道日高・夕張山系における高山植物の植物地理学的研究. 国立科学博物館専報 4: 95-126. 東京.

渡邊定元 2001. アポイ岳超塩基性岩フロラの 45 年間（1954-1999）の変化. 地球環境研究 3: 25-48. 立正大学.

渡邊定元 2005a. アポイ岳超塩基性岩フロラの特異性. 日本生態学会誌 55: 63-70.

渡邊定元 2005b. アポイ岳超塩基性岩フロラの 50 年間（1954-2003）の変遷. 日本生態学会誌 55: 105-110.

渡辺展之・渡辺修 2021. 空中写真判読に基づく広域的な植生変化の把握. 様似町「特別天然記念物アポイ岳高山植物群落再生事業調査報告書」27-35. 様似.

Braun-Blanquet, J. 1964. Pflanzensoziologie Grundzuege der Vegetationskunde. 3 Aufl. 865p. Springer. Wien. New York. （ブラウン－ブランケ 1964. 植物社会学、第 3 版. シュプリンガー. ウィーン、ニューヨーク）

Hara, H. 1934-1939. Preliminary report on the flora of southern Hidaka, Hokkaido (Yezo) Ⅰ-XXXⅥ. Bot. Mag., Tokyo, Vols. 48-53. （原寛 1934-1939. 北海道日高南部ノ植物予報 1～36. 植物学雑誌 48-53）

Ohba, T. 1974. Vergleichende Studien ueber die alpine Vegetation Japans 1. Carici rupestris-Kobresietea bellardii. Phytocoenologia 1(3): 339-401. Berlin （大場達之 1974. 日本の高山植生に関する比較研究１. カラフトイワスゲーヒゲハリスゲクラス. Phytocoenologia 1(3): 339-401. ベルリン）

Tatewaki, M. 1928. A new species of *Callianthemum* from Japan. Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc., 10: 79-80. Sapporo. （舘脇操 1928. 日本におけるキタダケソウ属の新種. 札幌博物学会報 10: 79-80. 札幌.）

表1. 馬の背のハイマツ低木林（2020年6月24日、佐藤謙・加藤聡美調査）

Plant commnity or stand group　植物群落・植分群　＊	A		B					C									
Running number　整理番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
Quadrat number　方形区番号	U9	U1	U12	U17	U2	U5	U3	U8	U14	U7	U10	U11	U15	U4	U6	U13	U16
Area of quadrat (㎡)　方形区面積	4	4	25	25	25	25	25	9	15	25	25	25	25	25	25	25	25
GPS number　ＧＰＳ番号	98	89	101	106	90	94	91	97	103	96	99	100	104	93	95	102	105
Atitutude(m)　標高	596	601	592	585	598	599	599	599	595	604	594	593	593	600	605	599	588
Slope aspect　方位	S40W	S30W	S60W	S20W	S50W	S55W	S60W	S60W	S15W	S40W	S40W	S50W	S10W	S55W	S20W	S20W	S20W
Inclination (°)　傾斜角	26	22	18	28	20	22	20	22	30	17	18	17	18	22	25	28	20
Height of community (cm)　群落高	18	20	30	60	40	40	55	32	50	56	65	60	110	120	250	170	130
Height of Pinus pumila (cm)　ハイマツ植物高	–	–	40	42	32	27	55	30	40	56	65	60	58	100	95	95	130
Cover of Pinus pumila(%)　ハイマツ被度	–	–	20	20	40	40	70	100	80	90	90	100	90	100	100	80	90
Vegetational cover(Herb layer, %)　草本層植被率	40	40	80	80	50	50	40	30	20	30	20	20	20	30	40	30	20
Number of species　出現種数	17	19	20	22	23	21	25	18	16	22	17	14	19	22	26	20	13
(Species of the wind-swept meadow 高山風衝草原構成種)	16	16	15	15	18	16	14	11	10	8	9	6	8	10	8	8	7
（ハイマツ低木林の構成種）																	
Pinus pumila ﾊｲﾏﾂ	・	・	2.3	2.3	3.3	3.3	4.4	5.5	5.5	5.5	5.5	5.5	5.5	5.5	5.5	5.5	5.5
Vaccinium vitis-idaea ｺｹﾓﾓ	・	1.1	・	・	1.1	・	2.2	2.2	・	2,2	2.2	1.2	1.1	2.2	2.2	1.2	・
Sorbus sambucifolia var. pseudogracilis ﾐﾔﾏﾅﾅｶﾏﾄﾞ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・
（高山風衝草原の構成種１）　＊＊																	
Hypochoeris crepidioides ｴｿﾞｺｳﾞﾘﾅ	1.1	2.2	1.1	1.1	1.2	1.2	1.1	+	+	・	+	+	+	+	・	・	・
Erigeron thunbergii subsp. glabratus var. angustifolius ｱﾎﾞｲｱｽﾞﾏｷﾞｸ	2.2	1.1	2.3	・	1.2	2.2	・	1.1	・	+	・	・	・	・	・	・	・
Crepis gymnopus ｴｿﾞﾀｶﾈﾆｶﾞﾅ	・	・	1.1	1.1	1.1	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・
Angelica stenoloba ﾎｿﾊﾞﾄｳｷ	+	1.1	・	・	+	+	+	・	+	・	・	・	・	・	・	・	・
Viola sacchalinensis var. alpina ｱﾎﾞｲﾀﾁﾂﾎﾞｽﾐﾚ	+	1.1	+	・	+	+	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・
Veronica schmidtiana subsp. senanensis var. yezoalpina f. exigua ｱﾎﾞｲｸﾜｶﾞﾀ	1.1	1.1	・	・	・	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
Allium schoenoprasum var. yezomonticola ﾋﾒｴｿﾞﾈｷﾞ	1.1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
Tofieldia coccinea var. kondoi ｱﾎﾞｲｾﾞｷｼｮｳ	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
Anaphalis alpicola f. robusta ｱﾎﾞｲﾊﾊｺ	・	・	+	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・
Thalictrum foetidum var. apoiense ｱﾎﾞｲｶﾗﾏﾂ	・	・	+	・	・	+	1.1	1.1	1.1	・	・	・	・	・	・	・	・
Thymus quinquecostatus var. ibukiensis ｲﾌﾞｷｼﾞｬｺｳｿｳ	2.2	2.2	2.2	1.2	1.2	2.2	1.2	・	+	・	・	・	・	・	・	・	+
Arundinella hirta ｹﾄﾀﾞｼﾊﾞ	2.2	2.2	2.3	1.2	2.3	2.3	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
Geum pentapetalum ﾁﾝｸﾞﾙﾏ	・	1.2	・	・	2.3	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
Carex tenuiformis ｵﾉｴｽｹﾞ	・	1.1	・	・	1.2	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
Aconogonon nakaii ｵﾔﾏｿﾊﾞ	・	・	・	+	・	+	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・
Scabiosa jezoensis ｴｿﾞﾏﾂﾑｼｿｳ	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
Parnassia palustris var. palustris ｳﾒﾊﾞﾁｿｳ	・	1.1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
Chrysanthemum yezoense ｺﾊﾏｷﾞｸ	・	・	・	・	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
（高山風衝草原の構成種２）　＊＊																	
Hypericum nakaii subsp. nakaii ｻﾏﾆｵﾄｷﾞﾘ	+	1.1	1.2	1.1	1.2	1.2	1.2	1.2	+	+	・	+	+	1.2	・	1.2	+
Sanguisorba longifolia ﾐﾔﾏﾜﾚﾓｺｳ	1.2	+	・	+	1.1	1.2	1.1	1.2	1.1	・	・	1.1	1.1	・	+	1.1	・
Aruncus dioicus var. subrotundus ｱﾎﾞｲﾔﾏﾌﾞｷｼｮｳﾏ	・	+	1.2	1.2	1.2	1.2	2.3	・	1.2	1.2	1.2	・	1.2	1.2	1.2	2.2	2.3
Carex humilis var. nana ﾎｿﾊﾞﾋｶｹﾞｽｹﾞ	1.2	2.2	2.3	1.2	2.2	2.2	2.2	2.2	1.1	2.3	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2	1.2
Festuca ovina var. alpina ﾐﾔﾏｳｼﾉｹｸﾞｻ	2.2	2.2	2.2	1.2	2.2	1.2	1.2	1.2	・	・	1.2	・	1.2	・	・	1.2	・
Galium verum subsp. asiaticum var. asiaticum ｷﾊﾞﾅｶﾜﾗﾏﾂﾊﾞ	・	・	1.1	・	1.1	1.1	1.2	+	・	+	1.1	・	1.1	1.1	+	・	1.1
Lespedeza bicolor var. nana ﾁｬﾎﾞﾔﾏﾊｷﾞ	・	・	・	・	+	・	+	+	・	+	+	+	・	・	・	・	・
Elliottia bracteata ﾐﾔﾏﾎﾂﾂｼﾞ	・	・	・	・	・	・	1.2	・	・	・	1.2	・	・	・	2.2	1.1	・

表1. 続き

Plant commnity or stand group 植物群落・植分群 ＊	A		B					C									
Running number 整理番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	13	12	14	15	16	17
Number of species 出現種数	17	19	20	22	23	21	25	18	16	22	17	14	19	22	26	20	13
(Species of the wind-swept meadow 高山風衝草原構成種)	16	16	15	15	18	16	14	11	10	8	9	6	8	10	8	8	7
Aquilegia flabellata var. pumila ﾐﾔﾏｵﾀﾞﾏｷ	+	・	・	・	・	・	・	+	+	・	・	・	・	・	・	・	・
Dasiphora fruticosa ｷﾝﾛﾊﾞｲ	1.2	+	3.4	2.3	3.3	3.3	1.2	2.3	2.2	2.3	2.3	2.2	2.3	1.2	+	2.3	2.3
Berberis amurensi ﾋﾛﾊﾍﾋﾞﾉﾎﾞﾗｽﾞ	・	・	2.3	2.3	・	・	1.2	・	・	1.2	2.2	・	・	1.1	1.2	・	・
Juniperus chinensis var. sargentii ﾐﾔﾏﾋﾞｬｸｼﾝ	・	・	・	2.3	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1.2	・	1.2
（他の出現種）																	
Calamagrostis sachalinensis ﾀｶﾈﾉｶﾞﾘﾔｽ	・	・	・	1.2	・	・	2.3	・	・	・	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	・	2.3
Carex blepharicarp var. dueensis ﾀｶﾈｼｮｳｼﾞｮｳｽｹﾞ	・	1.2	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1.2	・	1.2	1.2	・	・
Alnus alnobetula subsp. maximowiczii ﾐﾔﾏﾊﾝﾉｷ	1.1	・	・	・	1.2	・	・	・	1.2	1.2	・	1.2	・	1.1	・	・	・
Rhododendron dauricum ｴｿﾞﾑﾗｻｷﾂﾂｼﾞ	・	・	1.2	・	・	・	・	・	・	1.2	+	1.2	+	・	・	1.1	・
Thalictrum minus var. hypoleucum ｱｷｶﾗﾏﾂ	・	・	・	+	・	・	1.1	+	1.1	・	・	・	・	1.1	1.1	1.1	・
Rhododendron brachycarpum ﾊｸｻﾝｼｬｸﾅｹﾞ	・	・	・	+	・	・	1.1	・	・	・	・	・	・	2.2	1,1	1.1	・
Bupleurum nipponicum var. yesoense ｴｿﾞｻｲｺ	・	・	・	・	・	+	・	+	・	+	・	・	・	・	・	・	・
Picea glehnii ｱｶｴｿﾞﾏﾂ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・	1.1	・	1.1	+	・
Solidago virgaurea subsp. leiocarpa ｺｶﾞﾈｷﾞｸ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1.1	・	・	・	・	1.1	・	+
Maianthemum dilatatum ﾏｲｽﾞﾙｿｳ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1.2	・	・	・	・	1.1	・	・
Clematis ochotensis var. ochotensis ｴｿﾞﾐﾔﾏﾊﾝｼｮｳﾏﾞﾙ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・	・	1.1	・	・
Cornus canadensis ｺﾞｾﾞﾝﾀﾁﾊﾞﾅ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	2.2	1.2	・
Cirsium apoense ｱﾎﾟｲｱｱﾐ	・	・	・	1.2	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
Asarum heterotropoides var. heterotropoides ｵｸｴｿﾞｻｲｼﾝ	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
Spiraea media var. sericea ｴｿﾞｼﾓﾂｹ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・	・
Anemone debilis ﾋﾒｲﾁｹﾞ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・
Spiraea betulifolia var. betulifolia ﾏﾙﾊﾞｼﾓﾂｹ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1.2	・	・
Abies sachalinensis ﾄﾄﾞﾏﾂ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1.1	・	・
Veratrum maackii var. reymondianum ｼｭﾛｿｳ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	+	・	・
Melica nutans ｺﾒｶﾞﾔ	・	・	・	1.2	・	+	1.2	1.1	・	+	+	・	+	・	・	・	1.2
Miscanthus sinensis ｽｽｷ	・	+	1.2	3.3	1.2	2.2	2.3	1.2	2.3	2.2	1.2	1.2	2.3	2.2	1.1	2.3	2.3
Rhododendron kaempferi var. kaempferi ﾔﾏﾂﾂｼﾞ	・	・	1.2	1.2	・	・	・	・	1.2	+	1.2	・	1.2	・	+	1.1	・
Adenophora triphylla var. japonica ﾂﾘｶﾞﾈﾆﾝｼﾞﾝ	・	・	+	・	1.1	1.1	1.1	・	1.1	1.1	・	・	1.1	1.1	1.1	1.1	・
Fraxinus lanuginosa f. serrata ｱｵﾀﾞﾓ	・	・	・	・	・	・	1.2	+	・	1.1	1.1	1.1	1.1	2.2	2.3	1.2	1.1
Toxicodendron trichocarpum ﾔﾏｳﾙｼ	・	・	・	・	・	・	+	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
Toxicodendron orientale subsp. orientale ﾂﾀｳﾙｼ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1.1	・

＊ A: 高山風衝草原、B: ハイマツ疎生植分、C: ハイマツ密生植分

＊＊ 高山風衝草原構成種は、ハイマツ疎生植分（B)まで見られる植物とハイマツの疎生植分と密生植分（C）の両者に出現する植物を含むので、それぞれの種群を１と２に区別した。

表２．馬の背・8合目間のアポイカンバが出現するハイマツ低木林（２０２０年６月２３日、佐藤謙・田中正人調査）

Running number　整理番号	1	2	3	4	5	6	7	8
Quadrat number　方形区番号	6	4	3	5	2	7	8	1
Area of quadrat (㎡)　方形区面積	25	25	25	25	9	25	25	25
GPS number　ＧＰＳ番号	77	75	74	76	73	78	80	62
Atitutude(m)　標高	623	633	628	630	631	626	615	674
Slope aspect　方位	S40W	S10W	S	S10W	S10E	N10E	N10W	N
Inclination (°)　傾斜角	25	24	28	25	24	27	26	25
Height of community (cm)　群落高	400	300	140	120	77	80	60	130
Height of Pinus pumila (cm)　ハイマツ植物高	70	60	60	45	60	60	60	70
Cover of Pinus pumila(%)　ハイマツ被度	30	40	70	30	60	40	40	90
Vegetational cover(Herb layer, %)　草本層植被率	100	100	100	100	100	100	100	100
Number of species　出現種数	22	25	26	23	27	23	22	31
(Species of the wind-swept meadow 高山風衝草原構成種)	11	11	10	8	9	7	10	10
（ハイマツ低木林の構成種）								
Pinus pumila ﾊｲﾏﾂ	3.4	3.3	4.4	3.3	4.4	3.4	3.3	5.5
Vaccinium vitis-idaea ｺｹﾓﾓ	・	+	・	・	・	・	1.1	・
Sorbus sambucifolia var. pseudogracilis　ﾐﾔﾏﾅﾅｶﾏﾄﾞ	・	・	・	・	・	+	・	・
Rhododendron diversipilosum ｲｿﾂﾂｼﾞ	・	・	・	・	・	・	・	2.2
（高山風衝草原の構成種）								
Sanguisorba longifolia ﾐﾔﾏﾜﾚﾓｺｳ	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	2.2	1.1
Carex humilis var. nana ﾎｿﾊﾞﾋｶｹﾞｽｹﾞ	2.3	2.3	2.3	2.2	1.2	1.2	・	2.2
Festuca ovina var. alpina ﾐﾔﾏｳｼﾉｹｸﾞｻ	・	1.2	2.3	1.2	1.2	・	1.2	・
Lespedeza bicolor var. nana ﾁｬﾎﾞﾔﾏﾊｷﾞ	1.1	+	1.1	1.1	+	・	・	・
Crepis gymnopus ｴｿﾞﾀｶﾈﾆｶﾞﾅ	・	1.1	・	1.1	1.1	・	+	+
Hypericum nakaii subsp. nakaii ｻﾏﾆｵﾄｷﾞﾘ	1.1	・	1.1	・	1.1	・	2.2	・
Aruncus dioicus var. subrotundus ｱﾎﾞｲﾔﾏﾌﾞｷｼｮｳﾏ	・	・	1.2	・	・	1.2	1.2	1.2
Galium verum subsp. asiaticum var. asiaticum ｷﾊﾞﾅｶﾜﾗﾏﾂﾊﾞ	・	+	・	・	・	+	・	1.1
Arundinella hirta ｹﾄﾀﾞｼﾊﾞ	2.3	1.2	1.2	・	・	・	・	・
Hypochoeris crepidioides ｴｿﾞｺｳﾞﾘﾅ	+	+	・	・	・	・	・	・
Angelica stenoloba ﾎｿﾊﾞﾄｳｷ	+	・	・	・	・	・	・	・
Thalictrum foetidum var. apoiense ｱﾎﾞｲｶﾗﾏﾂ	・	・	・	・	・	1.1	+	・
Saussurea kudoana ﾋﾀﾞｶﾄｳﾋﾚﾝ	・	・	・	・	・	・	1.2	・
Elliottia bracteata ﾐﾔﾏﾎﾂﾂｼﾞ	・	・	・	・	・	・	1.2	+
Betula apoiensis ｱﾎﾞｲｶﾝﾊﾞ	2.2	2.2	2.3	2.2	2.3	3.4	2.2	1.2
Dasiphora fruticosa ｷﾝﾛﾊﾞｲ	2.3	1.2	1.2	1.2	1.2	2.2	1.2	1.2
Berberis amurensis ﾋﾛﾊﾍﾋﾞﾉﾎﾞﾗｽﾞ	1.2	1.2	1.2	・	・	・	・	+
Juniperus chinensis var. sargentii ﾐﾔﾏﾋﾞｬｸｼﾝ	1.2	・	・	・	・	・	・	+
Lonicera caerulea subsp. edulis var. edulis ｹﾖﾉﾐ	・	・	・	1.2	・	・	・	・
Juniperus communis var. montana ﾘｼﾘﾋﾞｬｸｼﾝ	・	・	・	・	1.2	・	・	・
（他の出現種）								
Calamagrostis sachalinensis ﾀｶﾈﾉｶﾞﾘﾔｽ	2.2	2.2	2.3	2.2	2.3	2.2	2.2	1.2
Carex blepharicarpa var. dueensis ﾀｶﾈｼｮｳｼﾞｮｳｽｹﾞ	2.2	・	2.3	2.2	2.2	1.2	1.2	・
Rhododendron brachycarpum ﾊｸｻﾝｼｬｸﾅｹﾞ	+	1.1	+	+	1.2	+	1.2	1.2
Thalictrum minus var. hypoleucum ｱｷｶﾗﾏﾂ	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	・	・	+
Melica nutans ｺﾒｶﾞﾔ	・	2.2	2.2	1.2	1.2	・	1.1	1.2
Picea glehnii ｱｶｴｿﾞﾏﾂ	・	+	+	1.1	1.2	・	・	1.1
Peucedanum multivittatum ﾊｸｻﾝﾎﾞｳﾌｳ	・	+	・	・	・	・	・	・
Pinus parviflora var. pentaohylla ｷﾀｺﾞﾖｳ	1.1	2.2	・	・	・	・	・	・
Maianthemum dilatatum ﾏｲｽﾞﾙｿｳ	・	・	1.1	1.1	1.1	2.2	・	1.1
Cirsium apoense ｱﾎﾞｲｱｻﾞﾐ	・	・	+	・	+	・	・	+
Spiraea media var. sericea ｴｿﾞｼﾓﾂｹ	・	・	1.1	・	・	・	・	・
Lysimachia europaea var. europaea ﾂﾏﾄﾘｿｳ	・	・	+	・	・	・	・	・
Vaccinium smallii var. smallii ｵｵﾊﾞｽﾉｷ	・	・	・	+	・	・	・	・
Leucothoe grayana var. grayana ﾊﾅﾋﾘﾉｷ	・	・	・	1.1	1.1	・	1.1	1.1
Betula ermanii var. ermanii ﾀﾞｹｶﾝﾊﾞ	・	・	・	・	1.2	1.1	・	+
Alnus alnobetula subsp. maximowiczii ﾐﾔﾏﾊﾝﾉｷ	・	・	・	・	・	2.2	1.2	2.2
Clematis ochotensis var. ochotensis ｴｿﾞﾐﾔﾏﾊﾝｼｮｳﾏﾞﾙ	・	・	・	・	・	1.1	・	2.2
Rhododendron dauricum ｴｿﾞﾑﾗｻｷﾂﾂｼﾞ	・	・	・	・	・	+	1.1	・
Geranium erianthum ﾁｼﾏﾌｳﾛ	・	・	・	・	・	+	+	・
Dactylorhiza arisatata ﾊｸｻﾝﾁﾄﾞﾘ	・	・	・	・	・	+	・	・
Spiraea betulifolia var. betulifolia ﾏﾙﾊﾞｼﾓﾂｹ	・	・	・	・	・	+	・	・
Bupleurum nipponicum var. yesoense ｴｿﾞｻｲｺ	・	・	・	・	・	・	+	・
Carex longirostrata var. lonngirostrata ﾋｴｽｹﾞ	・	・	・	・	・	・	・	2.2
Carex microtricha ﾁｬｼﾊﾞｽｹﾞ	・	・	・	・	・	・	・	1.2
Veratrum maackii var. reymondianum ｼｭﾛｿｳ	・	・	・	・	・	・	・	+
Euphorbia tsukamotoi ﾋﾒﾅﾂﾄｳﾀﾞｲ	・	・	・	・	・	・	・	+
Miscanthus sinensis ｽｽｷ	2.2	2.3	2.2	2.2	2.2	1.2	・	1.2
Rhododendron kaempferi var. kaempferi ﾔﾏﾂﾂｼﾞ	2.2	・	2.2	1.2	2.2	1.2	・	1.1
Fraxinus lanuginosa f. serrata ｱｵﾀﾞﾓ	・	・	1.1	+	+	1.2	+	1.1
Adenophora triphylla var. japonica ﾂﾘｶﾞﾈﾆﾝｼﾞﾝ	1.2	+	1.1	1.1	1.1	・	・	+
Quercus crispula var. crispula ﾐｽﾞﾅﾗ	2.2	1.2	1.2	1.2	1.2	・	・	・
Acer mono subsp. mono ｴｿﾞｲﾀﾔ	1.2	・	・	・	・	・	・	・
Iris sanguinea ｱﾔﾒ	・	+	・	・	+	・	・	・
Hydrangea paniculata ﾉﾘｳﾂｷﾞ	・	+	・	・	・	・	・	・
Potentilla fragarioides ｷｼﾞﾑｼﾛ	・	・	・	・	+	・	・	・

表３．　旧幌満お花畑のハイマツ低木林（2019年6月23日、佐藤謙・水永優紀調査）

Plant community 植物群落　＊	A　＊＊			B					
Running number　整理番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
Quadrat number　方形区番号	110	109	112	2	6	5	4	3	1
Area of quadrat (㎡)　方形区面積	4	4	4	25	25	25	25	25	25
GPS number　ＧＰＳ番号	−	−	−	208	215	211	210	209	206
Atitutude(m)　標高	585	600	610	619	587	603	607	612	629
Slope aspect　方位	S80W	W	S70W	S30W	S80W	S60W	S40W	S50W	S20W
Inclination (°)　傾斜角	20	15	18	12	18	16	16	18	18
Height of community (cm)　群落高(ハイマツ植物高)	12	32	20	35	43	45	48	53	68
Cover of Pinus pumila(%)　ハイマツ被度	−	−	5	80	60	70	70	80	90
Vegetational cover(Herb layer, %)　草本層植被率	50	30	40	30	30	30	25	30	20
Number of species　出現種数	13	18	20	15	15	14	15	21	14
(Species of the wind-swept meadow 高山風衝草原構成種)	13	16	18	9	8	7	8	10	6
（ハイマツ低木林の構成種）									
Pinus pumila ハイマツ	・	・	1.2	5.5	4.4	4.4	4.4	5.5	5.5
Vaccinium vitis-idea コケモモ	・	1.1	・	・	・	2.2	2.2	1.1	2.2
Sorbus sambucifolia var. pseudogracilis ミヤマナナカマド	・	・	・	・	・	・	・	・	1.1
（高山風衝草原の構成種）									
Arundinella hirta ケトダシバ	2.2	2.2	1.1	＋	1.2	・	・	・	・
Thymus quinquecostatus var. ibukiensis イブキジャコウソウ	1.1	・	1.1	＋	・	・	・	・	・
Hypochoeris crepidioides エゾコウゾリナ	1.1	1.1	2.2	・	＋	・	・	・	・
Callianthemum miyabeanum ヒダカソウ	+	+	＋	・	・	・	・	+	・
Hypericum nakaii subsp. nakaii サマニオトギリ	・	1.1	・	・	・	・	・	1.1	・
Carex tenuiformis ｵﾉｴｽｹﾞ	2.2	2.2	2.2	・	・	・	・	・	・
Erigeron thunbergii subsp. glabratus									
var. angustifolius ｱﾎﾞｲｱｽﾞﾏｷﾞｸ	1.1	1.1	1.1	・	・	・	・	・	・
Angelica stenoloba ﾎｿﾊﾞﾄｳｷ	1.1	1.1	1.1	・	・	・	・	・	・
Eritichium nipponicum var. albiflorum ｴｿﾞﾙﾘﾑﾗｻｷ	+	+	1.1	・	・	・	・	・	・
Potentilla matsumurae var. apoiensis ｱﾎﾟｲｷﾝﾊﾞｲ	1.1	・	2.2	・	・	・	・	・	・
Geum pentapetalum ﾁﾝｸﾞﾙﾏ	・	2.3	1.2	・	・	・	・	・	・
Allium schoenoprasum var. yezomonticola ﾋﾒｴｿﾞﾈｷﾞ	+	・	1.1	・	・	・	・	・	・
Viola sacchalinensis var. alpina ｱﾎﾟｲﾀﾁﾂﾎﾞｽﾐﾚ	・	+	+	・	・	・	・	・	・
Aguilegia flabellata var. pumila　ﾐﾔﾏｵﾀﾞﾏｷ	・	+	・	・	・	・	・	・	・
Patrinia sibirica ﾁｼﾏｷﾝﾚｲｶ（ﾀｶﾈｵﾐﾅｴｼ）	・	・	1.1	・	・	・	・	・	・
Primula hidakana var. hidakana ﾋﾀﾞｶｲﾜｻﾞｸﾗ	・	・	1.1	・	・	・	・	・	・
Primula modesta var. samanimontana ｻﾏﾆｭｷﾜﾘ	・	・	＋	・	・	・	・	・	・
Galium verum subsp. asiaticum									
var. asiaticum キバナカワラマツバ	・	・	・	1.1	・	＋	＋	1.1	1.1
Aruncus dioicus var. subrotundus アポイヤマブキショウマ	・	・	・	・	・	2.3	1.2	+	＋
Sanguisorba longifolia ミヤマワレモコウ	1.1	2.2	1.1	1.1	1.1	2.2	2.2	2.2	1.1
Festuca ovina var. alpina ミヤマウシノケグサ	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2	1.2	1.2	1.2	・
Carex humilis var. nana ホソバヒカゲスゲ	・	1.2	・	2.2	2.2	1.2	2.2	2.2	2.2
Thalictrum foetidum var. apoiense アポイカラマツ	・	1.1	+	1.1	＋	1.1	・	1.1	・
Dasiphora fruticosa キンロバイ	+	1.2	・	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	2.2
Berberis amurensis ヒロハヘビノボラズ	・	・	・	＋	2.3	・	1.2	1.2	1.2
Betula apoiensis アポイカンバ	・	・	・	・	・	・	＋	・	・
（他の出現種）									
Carex blepharicarpa var. dueensis タカネショウジョウスゲ	・	+	・	・	1.2	1.2	1.2	2.2	・
Calamagrostis sachalinensis タカネノガリヤス	・	・	1.2	1.2	2.3	2.3	2.3	1.2	1.2
Melica nutans コメガヤ	・	・	・	2.2	1.1	2.2	1.1	・	・
Anemone debilis ヒメイチゲ	・	・	・	＋	＋	＋	・	＋	・
Clematis ochotensis var. ochotensis エゾミヤマハンショウヅル	・	・	・	・	・	1.1	1.1	1.1	・
Bupleurum nipponicum var. yesoense エゾサイコ	・	・	・	・	・	・	・	1.1	・
Rhododendron brachycarpum ハクサンシャクナゲ	・	・	・	・	・	・	・	・	＋
Sorbus commixta var. commixta ナナカマド	・	・	・	・	・	・	・	・	＋
Thalictrum minus var. hypoleucum アキカラマツ	・	・	・	・	＋	・	・	・	・
Miscanthus sinensis ススキ	・	・	・	1.2	1.2	・	・	+	1.2
Fraxinus lanuginosa f. serrata アオダモ	・	・	・	＋	・	・	・	+	・
Adenophora triphylla var. japonica ツリガネニンジン	・	・	・	・	・	・	＋	1.1	・
Carex microtricha チャシバスゲ	・	・	・	・	・	・	・	1.1	1.1
Rhododendron kaempferi var. kaempferi ヤマツツジ	・	・	・	・	・	・	・	・	・

＊　A:高山風衝草原、B:ハイマツ低木林

＊＊　高山風衝草原の３方形区資料は、2001年6月17日に調査した佐藤（2002）より抜粋

表４．　吉田お花畑の高山風衝草原とハイマツ低木林（2020年6月4日、佐藤謙・坂下志朗調査）

Plant commnity　植物群落　＊	A				B			
Running number　整理番号	1	2	3	4	5	6	7	8
Quadrat number　方形区番号	Yo8	Yo4	Yo5	Yo1	Yo6	Yo7	Yo3	Yo2
Area of quadrat (㎡)　方形区面積	4	4	4	4	25	25	25	25
GPS number　ＧＰＳ番号	207	199	204	194	205	206	196	195
Atitutude(m)　標高	748	755	750	746	748	750	749	746
Slope aspect　方位	W	N50W	N60W	N70W	N70W	N70W	N50W	N50W
Inclination (°)　傾斜角	18	22	18	15	22	20	15	15
Height of community (cm)　群落高(Bではハイマツ植物高)	10	20	12	10	37	22	20	46
Cover of Pinus pumila(%)　ハイマツ被度	0	0	0	0	30	40	30	60
Vegetational cover(Herb layer, %)　草本層植被率	50	40	40	60	70	60	80	70
Number of species　出現種数	14	16	19	22	25	19	19	16
(Species of the wind-swept meadow 高山風衝草原構成種)	14	15	18	17	17	15	12	7
（ハイマツ低木林の構成種）								
Pinus pumila ﾊｲﾏﾂ	・	・	・	・	3.3	3.3	3.3	4.4
Sorbus sambucifolia var. pseudogracilis ﾐﾔﾏﾅﾅｶﾏﾄﾞ	・	・	・	・	1.2	・	・	1.1
Vaccinium vitis-idaea ｺｹﾓﾓ	・	＋	・	1.1	・	・	1.2	1.1
Rhododendron diversipilosum ｲｿﾂﾂｼﾞ	・	・	・	・	・	・	・	1.1
（高山風衝草原の構成種）								
Geum pentapetalum ﾁﾝｸﾞﾙﾏ	1.2	2.3	1.2	2.3	2.3	1.2	3.4	＋
Aquilegia flabellata var. pumila ﾐﾔﾏｵﾀﾞﾏｷ	・	1.1	1.1	1.1	1.1	2.2	1.2	＋
Hypochoeris crepidioides ｴｿﾞｺｳﾂﾞﾘﾅ	2.2	2.2	2.2	2.2	・	1.1	2.2	・
Crepis gymnopus ｴｿﾞﾀｶﾈﾆｶﾞﾅ	・	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	・
Saussurea kudoana ﾋﾀﾞｶﾄｳﾋﾚﾝ	1.1	・	1.1	1.1	1.1	・	＋	＋
Sanguisorba longifolia ﾐﾔﾏﾜﾚﾓｺｳ	・	・	1.1	1.1	1.1	1.1	2.3	1.1
Festuca ovina var. alpina ﾐﾔﾏｳｼﾉｹｸﾞｻ	・	＋	2.2	1.2	2.3	2.3	1.2	・
Thesium refractum ｶﾏﾔﾘｿｳ	・	＋	＋	・	・	＋	＋	・
Thalictrum foetidum var. apoiense ｱﾎﾞｲｶﾗﾏﾂ	・	・	＋	1.1	1.2	1.1	1.1	・
Arctous alpinus var. japonicus ｳﾗｼﾏﾂﾂｼﾞ	・	・	＋	1.1	・	・	1.2	・
Primula modesta var. samanimontana ｻﾏﾆﾕｷﾜﾘ	2.2	2.2	2.2	2.2	2.3	2.3	・	・
Tilingia ajanensis var. angustissima ﾋﾒｼﾗﾈﾆﾝｼﾞﾝ	2.2	＋	2.2	1.2	1.2	2.2	・	・
Allium schoenoprasum var. yezomonticola ﾋﾒｴｿﾞﾈｷﾞ	2.2	1.1	1.1	・	1.1	1.1	・	・
Eritichium nipponicum var. albiflorum ｴｿﾞﾙﾘﾑﾗｻｷ	1.1	＋	1.1	・	1.1	1.1	・	・
Aruncus dioicus var. subrotundus ｱﾎﾞｲﾔﾏﾌﾞｷｼｮｳﾏ	・	1.2	・	・	1.2	1.2	・	・
Tofieldia coccinea var. kondoi ｱﾎﾞｲｾﾞｷｼｮｳ	・	＋	・	＋	・	＋	・	・
Carex tenuiformis ｵﾉｴｽｹﾞ	・	・	・	1.2	1.2	1.1	・	・
Parnassia palustris var. palustris ｳﾒﾊﾞﾁｿｳ	＋	1.1	＋	1.1	＋	・	・	・
Carex humilis var. nana ﾎｿﾊﾞﾋｶｹﾞｽｹﾞ	・	1.2	1.2	2.2	1.2	・	・	・
Potentilla matsumurae var. apoiensis ｱﾎﾞｲｷﾝﾊﾞｲ	＋	1.1	・	・	1.2	・	・	・
Erigeron thunbergii subsp. glabratus var. angustifolius ｱﾎﾞｲｱｽﾞﾏｷﾞｸ	＋	・	・	・	1.2	・	・	・
Viola brevistipulata subsp. hidakana var. hidakana ｴｿﾞｷｽﾐﾚ	1.1	・	・	・	＋	・	・	・
Angelica stenoloba ﾎｿﾊﾞﾄｳｷ	1.1	・	1.1	・	・	・	・	・
Arenaria katoana var. lanceolata ｱﾎﾞｲﾂﾒｸｻ	1.2	・	・	・	・	・	・	・
Patrinia sibirica ﾁｼﾏｷﾝﾚｲｶ（ﾀｶﾈｵﾐﾅｴｼ）	＋	・	・	・	・	・	・	・
Silene repens var. apoiensis ｱﾎﾞｲﾏﾝﾃﾏ	・	1.1	・	・	・	・	・	・
Viola sacchalinensis var. alpina ｱﾎﾞｲﾀﾁﾂﾎﾞｽﾐﾚ	・	・	＋	・	・	・	・	・
Swertia tetrapetala subsp. tetrapetala var. yezoalpina ｴｿﾞﾀｶﾈｾﾝﾌﾞﾘ	・	・	・	＋	・	・	・	・
Juniperus chinensis var. sargentii ﾐﾔﾏﾋﾞｬｸｼﾝ	・	・	・	＋	・	・	・	・
Dasiphora fruticosa ｷﾝﾛﾊﾞｲ	・	・	・	・	1.2	1.2	・	1.2
Berberis amurensis　ﾋﾛﾊﾍﾋﾞﾉﾎﾞﾗｽﾞ	・	・	・	・	・	・	・	2.3
Elliottia bracteata ﾐﾔﾏﾎﾂﾂｼﾞ	・	・	・	・	・	・	＋	1.2
Pedicularis chamissonis ｴｿﾞﾖﾂﾊﾞｼｵｶﾞﾏ	・	・	・	・	・	・	＋	・
（他の出現種）								
Carex blepharicarpa var. dueensis ﾀｶﾈｼｮｳｼﾞｮｳｽｹﾞ	・	・	1.2	2.2	2.2	1.2	・	＋
Calamagrostis sachalinensis ﾀｶﾈﾉｶﾞﾘﾔｽ	・	・	・	・	2.3	・	2.2	・
Maianthemum dilatatum ﾏｲｽﾞﾙｿｳ	・	・	・	＋	・	・	＋	1.1
Leucothoe grayana var. grayana ﾊﾅﾋﾘﾉｷ	・	・	・	＋	・	・	・	1.1
Bupleurum nipponicum var. yesoense ｴｿﾞｻｲｺ	・	・	・	＋	・	・	・	・
Anemone debilis ﾋﾒｲﾁｹﾞ	・	・	・	・	＋	・	1.1	1.1
Alnus alnobetula subsp. maximowiczii ﾐﾔﾏﾊﾝﾉｷ	・	・	・	・	＋	・	1.1	・
Rhododendron brachycarpum ﾊｸｻﾝｼｬｸﾅｹﾞ	・	・	・	・	・	＋	・	1.2
Veratrum maackii var. reymondianum ｼｭﾛｿｳ	・	・	・	・	・	・	＋	・

＊　A:高山風衝草原、B:ハイマツ低木林（ハイマツ疎生植分）

表５.ピンネシリのハイマツ低木林（2020年6月3日、佐藤謙・田村裕之調査）

Stand group　植分群　＊	A				B				
Running number　整理番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
Quadrat number　方形区番号	P7	P13	P3	P8	P9	P4	P5	P2	P1
Area of quadrat（㎡）　方形区面積	25	25	25	25	25	25	25	25	25
GPS number　ＧＰＳ番号	149	122	95	151	153	120	136	91	84
Atitutude(m)　標高	853	915	765	858	855	915	935	758	695
Slope aspect　方位	N80W	W	N20W	N70W	N80W	－	N70W	－	N45W
Inclination（°）　傾斜角	27	18	22	27	28	－	30	－	25
Height of community (cm)　群落高	20	22	30	35	40	40	43	63	65
Height of Pinus pumila (cm)　ハイマツ植物高	20	5	30	32	40	40	43	63	65
Cover of Pinus pumila(%)　ハイマツ被度	10	5	20	20	40	30	30	30	50
Vegetational cover(Herb layer, %)　草本層植被率	80	70	30	30	40	40	30	40	50
Number of species　出現種数	19	19	19	17	18	21	20	27	17
(Species of the wind-swept meadow 高山風衝草原構成種)	14	15	15	10	11	11	12	18	8
（ハイマツ低木林の構成種）									
Pinus pumila ﾊｲﾏﾂ	1.2	1.1	2.2	2.3	3.3	3.3	3.3	3.3	4.4
Empetrum nigrum var. japonicum ｶﾞﾝｺｳﾗﾝ	1.2	・	・	1.2	1.2	1.2	1.2	＋	・
Vaccinium vitis-idaea ｺｹﾓﾓ	1.1	・	・	1.1	1.1	＋	1.2	・	・
Sorbus sambucifolia var. pseudogracilis ﾐﾔﾏﾅﾅｶﾏﾄﾞ	・	・	・	1.1	＋	1.2	1.2	＋	2.2
Rhododendron diversipilosum ｲｿﾂﾂｼﾞ	・	・	・	・	・	＋	・	・	・
（高山風衝草原の構成種）									
Hypochoeris crepidioides ｴｿﾞｺｳﾂﾞﾘﾅ	1.1	1.2	1.1	1.1	1.1	1.2	1.2	＋	・
Sanguisorba longifolia　ﾐﾔﾏﾜﾚﾓｺｳ	2.2	1.2	1.1	2.2	2.2	・	1.1	2.2	1.2
Festuca ovina var. alpina ﾐﾔﾏｳｼﾉｹｸﾞｻ	1.2	2.3	・	1.1	1.1	2.3	1.2	1.2	・
Geum pentapetalum ﾁﾝｸﾞﾙﾏ	2.3	3.3	3.4	2.3	1.2	・	1.2	＋	・
Angelica stenoloba ﾎｿﾊﾞﾄｳｷ	＋	1.1	＋	・	1.2	1.2	1.1	1.1	・
Saussurea kudoana　ﾋﾀﾞｶﾄｳﾋﾚﾝ	2.2	2.2	2.3	・	1.2	・	・	3.4	2.3
Crepis gymnopus ｴｿﾞﾀｶﾈﾆｶﾞﾅ	1.1	＋	・	1.2	・	＋	1.1	＋	・
Elliottia bracteata ﾐﾔﾏﾎﾂﾂｼﾞ	＋	・	1.1	・	・	＋	1.2	1.1	＋
Erigeron thunbergii subsp. glabratus var. angustifolius ｱﾎﾞｲｱｽﾞﾏｷﾞｸ	・	＋	＋	・	・	＋	・	＋	・
Viola sacchalinensis var. alpina ｱﾎﾞｲﾀﾁﾂﾎﾞｽﾐﾚ	＋	＋	・	・	・	＋	・	・	＋
Parnassia palustris var. palustris ｳﾒﾊﾞﾁｿｳ	・	・	1.1	・	・	・	・	＋	・
Arctous alpinus var. japonicus ｳﾗｼﾏﾂﾂｼﾞ	2.2	2.3	1.1	1.2	1.1	＋	・	・	・
Carex humilis var. nana　ﾎｿﾊﾞﾋｶｹﾞｽｹﾞ	1.2	＋	・	1.2	・	・	・	・	・
Thalictrum foetidum var. apoiense ｱﾎﾞｲｶﾗﾏﾂ	1.1	1.2	・	・	＋	・	・	・	・
Primula modesta var. samanimontana　ｻﾏﾆﾕｷﾜﾘ	・	2.2	2.2	・	・	・	・	＋	・
Aquilegia flabellata var. pumila　ﾐﾔﾏｵﾀﾞﾏｷ	・	＋	＋	・	・	・	・	＋	・
Aconogonon nakaii　ｵﾔﾏｿﾊﾞ	・	・	＋	＋	・	・	・	・	＋
Carex tenuiformis　ｵﾉｴｽｹﾞ	・	・	＋	1.2	1.2	・	・	・	・
Tilingia ajanensis var. angustissima　ﾋﾒｼﾗﾈﾆﾝｼﾞﾝ	・	1.2	・	・	・	・	・	・	・
Dianthus superbus　var. speciosus　ﾀｶﾈﾅﾃﾞｼｺ	・	・	＋	・	・	・	・	・	・
Primula hidakana var. hidakana ﾋﾀﾞｶｲﾜｻﾞｸﾗ	1.2	・	・	・	1.1	・	＋	1.2	・
Aruncus dioicus var. subrotundus ｱﾎﾞｲﾔﾏﾌﾞｷｼｮｳﾏ	1.2	・	・	・	・	・	1.2	2.3	1.2
Dasiphora fruticosa ｷﾝﾛﾊﾞｲ	・	・	1.2	1.1	・	・	2.3	1.2	1.2
Juniperus communis var. montana ﾘｼﾘﾋﾞｬｸｼﾝ	・	・	・	・	・	1.2	＋	・	1.2
Rhamnus ishidae ﾐﾔﾏﾊﾝﾓﾄﾞｷ	・	・	・	・	・	・	2.2	2.3	・
Berberis amurensis ﾋﾛﾊﾍﾋﾞﾉﾎﾞﾗｽﾞ	・	・	・	・	1.2	・	・	・	・
Hylotelephium cauticola　ﾋﾀﾞｶﾐｾﾊﾞﾔ	・	・	・	・	・	＋	・	・	・
Patrinia sibirica　ﾁｼﾏｷﾝﾚｲｶ（ﾀｶﾈｵﾐﾅｴｼ）	・	・	・	・	・	＋	・	・	・
Viola brevistipulata subsp. hidakana var. hidakana ｴｿﾞｷｽﾐﾚ	・	・	・	・	・	・	・	1.1	・
Huperizia selago　ｺｽｷﾞﾗﾝ	・	・	・	・	・	・	・	＋	・
（他の出現種）									
Calamagrostis sachalinensis ﾀｶﾈﾉｶﾞﾘﾔｽ	2.2	1.2	・	2.2	2.2	2.2	2.2	1.2	3.3
Carex blepharicarpa var. dueensis ﾀｶﾈｼｮｳｼﾞｮｳｽｹﾞ	1.2	2.2	2.2	2.2	2.2	1.2	2.2	1.2	・
Geranium erianthum ﾁｼﾏﾌｳﾛ	・	+	・	・	・	・	・	・	+
Picea glehnii ｱｶｴｿﾞﾏﾂ	・	・	1.2	・	・	・	1.2	1.2	・
Bupleurum nipponicum var. yesoense ｴｿﾞｻｲｺ	・	・	・	＋	・	＋	・	・	+
Salix reinii ﾐﾔﾏﾔﾅｷﾞ	・	・	1.2	・	・	・	・	・	・
Rhododendron brachycarpum ﾊｸｻﾝｼｬｸﾅｹﾞ	・	・	・	・	・	1.1	・	＋	1.1
Anemone debilis ﾋﾒｲﾁｹﾞ	・	・	・	・	+	・	・	1.1	・
Maianthemum dilatatum ﾏｲｽﾞﾙｿｳ	・	・	・	・	・	＋	・	・	1.1
Betula ermanii var. ermani ﾀﾞｹｶﾝﾊﾞ	・	・	・	・	・	・	＋	・	・
Alnus alnobetula subsp. maximowiczii ﾐﾔﾏﾊﾝﾉｷ	・	・	・	・	・	・	・	2.3	・
Leucothoe grayana var. grayana ﾊﾅﾋﾘﾉｷ	・	・	・	・	・	・	・	・	2.2
Clematis ochotensis var. ochotensis ｴｿﾞﾐﾔﾏﾊﾝｼｮｳﾂﾞﾙ	・	・	・	・	・	・	・	・	＋

＊　A: 高山風衝草原に近い顕著なハイマツ疎生植分、B: ハイマツ疎生植分

＊＊　整理番号６と８の方形区は、全体に北西に向く露岩上に設置したが、その方位と傾斜角が変化に富むため測定しなかった

表6. ピンネシリのハイマツ低木林（2020年6月3日、佐藤謙・田村裕之調査）

植分群 ＊	A									B										C															
整理番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
小区域 ＊＊	3	2	1b	2	2	2	2	3	1b	2	4	1b	3	4	3	1b	1b	4	4	3	1a	1a	2	2	3	1a	1b	4	3~4	2	1a	2	1b	1~2	4	1b
特記事項（R:岩塊地、E:東斜面）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	R	-	-	-	E	-	-	-	-	-	-	-	-	-	E	-	-
標高（m）	915	853	765	858	857	858	855	915	758	853	935	760	915	935	915	758	775	935	950	890	695	695	852	860	918	688	790	955	915	855	685	868	800	845	933	725
ハイマツ植物高（cm）	5	20	30	35	32	30	40	40	63	30	43	52	45	45	63	67	63	88	93	80	65	50	65	110	105	146	90	120	95	122	167	118	170	160	230	250
ハイマツ被度（%）	5	10	30	30	30	30	40	40	40	20	30	40	40	40	40	50	60	60	70	90	50	60	70	80	90	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
方形区番号	Q13	Q7	Q3	Q8	-	-	Q9	Q4	Q2	-	Q5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	Q1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
出現種数	19	19	19	17	16	13	18	21	27	11	20	15	10	13	9	10	10	7	11	7	17	11	13	4	8	6	7	7	6	5	3	3	3	3	2	1
高山風衝草原構成種数	15	13	13	9	8	7	11	10	17	7	11	9	7	7	4	6	4	1	6	3	6	7	7	2	3	5	4	3	1	2	1	0	0	0	0	0
（高山風衝草原の構成種）																																				
Geum pentapetalum チングルマ	●	●	●	●	●	●	●	-	●	●	●	●	●	●	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Festuca ovina var. alpina ミヤマウシノケグサ	●	●	-	●	●	-	●	●	●	-	●	●	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Crepis gymnopus エゾタカネニガナ	●	●	-	●	-	-	-	●	●	-	●	-	●	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Hypochoeris crepidioides エゾコウゾリナ	●	●	●	●	●	-	●	●	●	-	●	●	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Primula hidakana var. hidakana ヒダカイワザクラ	-	●	-	-	●	-	●	-	●	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Arctous alpinus var. japonicus ウラシマツツジ	●	●	●	●	●	●	●	●	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Angelica stenoloba ホソバトウキ	●	●	●	-	-	-	●	●	●	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Primula modesta var. samanimontana サマニユキワリ	●	-	●	-	-	-	-	-	●	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Parnassia palustris var. palustris ウメバチソウ	-	-	●	-	-	-	-	-	●	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Erigeron thunbergii subsp. glabratus var. angustifolius アポイアズマギク	●	-	●	-	-	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Aquilegia flabellata var. pumila ミヤマオダマキ	●	-	●	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Carex tenuiformis オノエスゲ	-	-	●	●	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Tilingia ajanensis var. angustissima ヒメシラネニンジン	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Dianthus superbus var. speciosus タカネナデシコ	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Hylotelephium cauticola ヒダカミセバヤ	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Patrinia sibirica チシマキンレイカ	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Huperizia selago コスギラン	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Viola brevistipulata subsp. hidakana var. hidakana エゾキスミレ	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Rhamnus ishidae ミヤマハンモドキ	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	●	-	●	●	●	-	-	-	●	-	-	-	●	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Sanguisorba longifolia ミヤマワレモコウ	●	●	●	●	●	●	●	-	●	●	●	●	-	●	●	●	●	-	●	-	●	●	●	●	-	-	●	●	●	-	-	-	-	-	-	-
Dasiphora fruticosa キンロバイ	-	-	●	●	●	●	-	-	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	-	●	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Berberis amurensis ヒロハヘビノボラズ	-	-	-	-	-	-	●	-	-	●	-	-	●	●	-	-	-	-	●	●	-	●	●	-	●	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-
Juniperus communis var. montana リシリビャクシン	-	-	-	-	-	-	-	●	-	●	●	-	-	●	●	-	●	-	-	●	●	-	●	●	●	-	-	●	-	●	●	-	-	-	-	-
Aruncus dioicus var. subrotundus アポイヤマブキショウマ	-	●	-	-	-	●	-	-	●	-	●	-	●	●	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Carex humilis var. nana ホソバヒカゲスゲ	●	●	-	●	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Juniperus chinensis var. sargentii ミヤマビャクシン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-
Viola sacchalinensis var. alpina アポイタチツボスミレ	●	●	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	●	●	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Saussurea kudoana ヒダカトウヒレン	●	●	●	-	-	-	●	-	●	●	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Thalictrum foetidum var. apoiense アポイカラマツ	●	●	-	-	●	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Silene repens var. apoiensis アポイマンテマ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
（ハイマツ低木林の構成種）																																				
Pinus pumila ハイマツ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Sorbus sambucifolia var. pseudogracilis ミヤマナナカマド	-	-	-	●	●	●	●	●	●	-	●	-	-	-	●	-	●	●	●	●	●	●	●	-	●	-	-	●	●	●	-	●	-	-	-	-
Empetrum nigrum var. japonicum ガンコウラン	-	●	-	●	●	●	●	●	●	-	●	●	-	-	-	●	●	●	-	-	-	-	●	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Vaccinium vitis-idaea コケモモ	-	●	-	●	-	●	●	●	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Rhododendron diversipilosum イソツツジ	-	-	-	-	-	-	-	●	-	●	-	-	●	●	●	●	●	●	●	●	-	-	●	●	●	-	-	●	●	●	●	●	●	●	●	-
（他の出現種）																																				
Calamagrostis sachalinensis タカネノガリヤス	●	●	-	●	●	●	●	●	●	●	●	●	-	●	●	●	●	●	●	●	●	-	●	-	●	-	●	●	●	-	-	-	●	-	-	-
Carex blepharicarpa var. dueensis タカネショウジョウスゲ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	-	●	●	●	●	●		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Elliottia bracteata ミヤマホツツジ	-	●	●	-	-	-	-	●	●	-	●	-	-	●	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Aconogonon nakaii オヤマソバ	-	-	●	●	●	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	●	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Salix reinii ミヤマヤナギ	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	●	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Geranium erianthum チシマフウロ	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Picea glehnii アカエゾマツ	-	-	●	-	-	-	-	-	●	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Bupleurum nipponicum var. yesoense エゾサイコ	-	-	-	●	●	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Anemone debilis ヒメイチゲ	-	-	-	-	-	-	●	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Rhododendron brachycarpum ハクサンシャクナゲ	-	-	-	-	-	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Maianthemum dilatatum マイヅルソウ	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Betula ermanii var. ermanii ダケカンバ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Alnus alnobetula subsp. maximowiczii ミヤマハンノキ	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Lonicera caerulea subsp. edulis var. edulis ケヨノミ	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Leucothoe grayana var. grayana ハナヒリノキ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Clematis ochotensis var. ochotensis エゾミヤマハンショウヅル	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Spiraea betulifolia var. betulifolia マルバシモツケ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Peucedanum multivittatum f. linearilobum エゾノハクサンボウフウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	●	-	-

＊ 植分群A:ハイマツ疎生植分、植分群B:岩塊地の植分（ハイマツが比較的疎生するが、小規模な露岩と林床での岩塊堆積が明らかな植分）、植分群C:相対的なハイマツ密生植分。

＊＊ 小区域と標高範囲　1a: 685-695m、1b: 720-800m、2: 850-865m、3: 880-920m、4: 930-950m（図3参照）

表7. ハイマツ植物高もしくは被度と高山風衝草原構成種数に関するGLMの解析結果

(a) ハイマツ植物高（モデル：高山風衝草原構成種数～ハイマツ植物高）

Variable	Coefficient	Std.Error	*t* value	*P* level
Intercept	2.88	0.13	22.5	<0.001***
植物高	-0.02	0.002	-8.24	<0.001***

(b) ハイマツ被度（モデル：高山風衝草原構成種数～ハイマツ被度）

Variable	Coefficient	Std.Error	*t* value	*P* level
Intercept	2.93	0.13	22.6	<0.001***
被度	-0.02	0.003	-8.79	<0.001***

【調査報告】

日高主衝上断層再訪：日高耶馬溪の地質と岩石

(Revisiting the Hidaka Main Thrust :
Geology and Rocks in the Hidaka-Yabakei area)

新井田 清信[1]・島田 哲也[2]・谷村 利幸[3]・加藤 聡美[4]
(Niida Kiyoaki・Shimada Tetsuya・Tanimura Toshiyuki・Kato Satomi)

１．はじめに

アポイ岳の南麓は太平洋にせり出し、冬島から幌満までの約５km の海岸は断崖絶壁の岩場の海食崖がつづき、「日高耶馬溪」と呼ばれている。ここは、日高山脈の南端部にあたり、えりも町の黄金道路とともに古くから交通の難所になっていた。江戸時代（約 200 年前）に、山側の海食崖の上には「様似山道」が開削され、現在、国の史跡に指定されている。

この海岸沿いの地域は、アポイ岳ユネスコ世界ジオパークでは「日高耶馬溪エリア」に設定され、ジオサイト D1～D6 が展開されている。ここで、アポイ岳の山の自然と人々の生活の歴史を一緒に学習できる。また、この地域は、アクセスしやすい海岸地域で、日高山脈の地質を容易に観察できるために、ジオパークの重要なテーマの１つ「プレート衝突現場といにしえの道」が体験できる地域になっている。

この調査報告では､アポイ岳のかんらん岩を上部マントルから持ち上げた地球規模の変動に注目し、日高耶馬溪の海岸沿いで、町民に「昔のプレート境界を体感してもらえるかどうか（！？)」を検討することにした。プレート境界周辺の地質や岩石を調べて、その結果、もしも「プレートの所属関係の違い」や「プレートの配置関係」を精度良く示すことができるなら､「日高山脈ができた時のプレート境界を跨いで渡ることができるかもしれない（！？)」と考えたのである。以上の経緯から、この調査報告の目標としては、日高耶馬溪の「昔のプレート境界」周辺の地質や岩石を調べ、従来よりも格段に精度の高い地質区分や地質境界を示すことをめざした。

２．日高耶馬溪の地質の概要

日高耶馬溪の海岸沿いの地域は、地質学的に特徴的な地域になっている。西側から東に向かって、白亜紀前弧海盆の堆積物（空知-エゾ帯)・白亜紀末期～古第三紀初頭の付加体（イドンナップ帯）から変はんれい岩（オフィオライト帯）を挟んで新生代に地下深部でできた変成岩や深成岩（日高変成帯）に地質が急変する。海岸沿いには、昭和の旧国道が改修されて平成のトンネルとシェルターが連なる国道 336 号線があり、随所に地質を観察できる露頭が残されている。国道沿いの冬島から日高耶馬溪がはじまり、東冬島付近で付加体とオフィオライトを挟む大規模な断層が観察できる。平成の山中トンネルの入口手前で国道 336 号線と旧国道が分岐しており、ちょうどこの付近で、オフィオライ

1 北海道大学総合博物館／ジオラボ_アポイ岳（様似町アポイ岳地質研究所）
2 理科研究室（様似町アポイ岳調査研究支援センター）
3 様似町字冬島 214-11
4 アポイ岳ジオパークビジターセンター

ト質の変はんれい岩から高温高圧の地下深部でできた日高変成帯の岩石に変わる。

この地域は、古くは江戸時代末期の鉱産資源調査やその後のライマンたちによる北海道開拓時代の地質調査（Lyman et al., 1876）にはじまり、多数の資源開発のための調査が行われ、さらに５万分の１地質図幅「幌泉」（舟橋・猪木, 1956）の調査によって変成岩や深成岩からなる特殊な地質が分布する地域として注目されてきた。北海道中央部には神居古潭系と日高系の２つの特徴的な地質が分布する地域であるとみなされ、ここから東側に日高系がはじまるのである。

日高耶馬溪の地質について、猪木（1953）や舟橋・猪木（1956）の地質図では以下のように記載されている。東冬島の国道正面の大露頭をつくっている付加体の岩石は、主に黒色泥岩・粘板岩の基質からなり、ブロック状に砂岩が混在する。これは、1950 年代の地質図凡例では神居古潭系の地質に扱われており、「粘板岩（千枚岩）」や「砂岩・粘板岩質砂岩」と記述されていた。東冬島～西山中海岸には、部分的に角閃岩に変成された塊状の変はんれい岩が露出する。これは幌尻岳周辺に模式的に分布するオフィオライトのはんれい岩に酷似し、地質図幅では「ソーシュル石斑糲岩」と記載された。山中トンネル付近からは、この調査報告の焦点になっている大断層（ＨＭＴ：日高主衝上断層）を挟んで、日高変成帯の変成岩や深成岩が分布する。これらは、地下深部（地殻最下部）の高温高圧の条件下でできた岩石で、今では深部から上昇した時に強度に圧砕された変成岩や深成岩の圧砕岩になっている。地質図幅では、「黒雲母片麻岩」「斜長石斑状変晶黒雲母片麻岩」「片状黒雲母ホルンフェルス」と記載された。これらの圧砕岩には、高温の褐色角閃石からなる角閃岩が随所に伴われ、地質図幅では「斑糲角閃岩」という特殊な岩石名で記載された。実際には、高温の角閃岩の一部が部分融解してできた角閃石トーナル岩が混在する高度の変成岩になっている。

アポイ岳のかんらん岩は、ここで概観した日高耶馬溪の北側に広く分布し、アポイ岳からピンネシリにつづく南北約 10km の大きな山塊をつくっている。その西縁は日高主衝上断層で境され、変はんれい岩（オフィオライト）を挟んで、白亜紀末期～古第三紀初頭の付加体（イドンナップ帯）に変わる。この地域の地質区分と地質の概要については、日高山脈全体の地質図（小山内ほか、2010）で確認しておきたい（図１：日高山脈の地質概略図）。日高耶馬溪は、図１のように、日高山脈の南端にあるアポイ岳のかんらん岩分布域の南側の山麓部に位置している。また、日高山脈の地質の概要については、新井田（1999）の解説がわかりやすい。なかでも、日高山脈の地質断面図やモデル断面図からは、上述した地質区分の実体やその意味を知ることができる（図２）。同様に、様似町役場前の「かんらん岩広場」の解説パンフレット「アポイの鼓動～かんらん岩、見る・触れる・感じる広場～」（発行：様似町）にも簡単な地質解説が載っており、アポイ岳ジオパークのホームページ（http://www.apoi-geopark.jp/）からダウンロードできる。

３．日高主衝上断層

日高山脈は、主に地下深部でできた変成岩や深成岩からなり、かつて「日高変成帯」という名前でその特徴的な地質がひとまとめに呼ばれていた（Hunahashi, 1957; 橋本、1958）。1970 年代には、その地質や岩石の起源について活発に議論されるようになり、小松ほか（1979）によって日高変成帯は大陸性の地殻の岩石からなる日高変成帯「主帯」と海洋性の地殻の岩石からなる日高変成帯「西帯」に区分された。その後、この地質区分が踏襲され、主帯と西帯の異なる地質帯の間にある断層は「日高主衝上断層（ＨＭＴ：Hidaka Main Thrust）」と呼ばれるようになった（小松ほか、1982；宮下、1983；小山内、1985；など）。なお、この頃から、日高山脈の西縁を境する衝上断層は、「西縁衝上断層（ＷＢＴ：Western Boundary Thrust）」と呼ばれている。

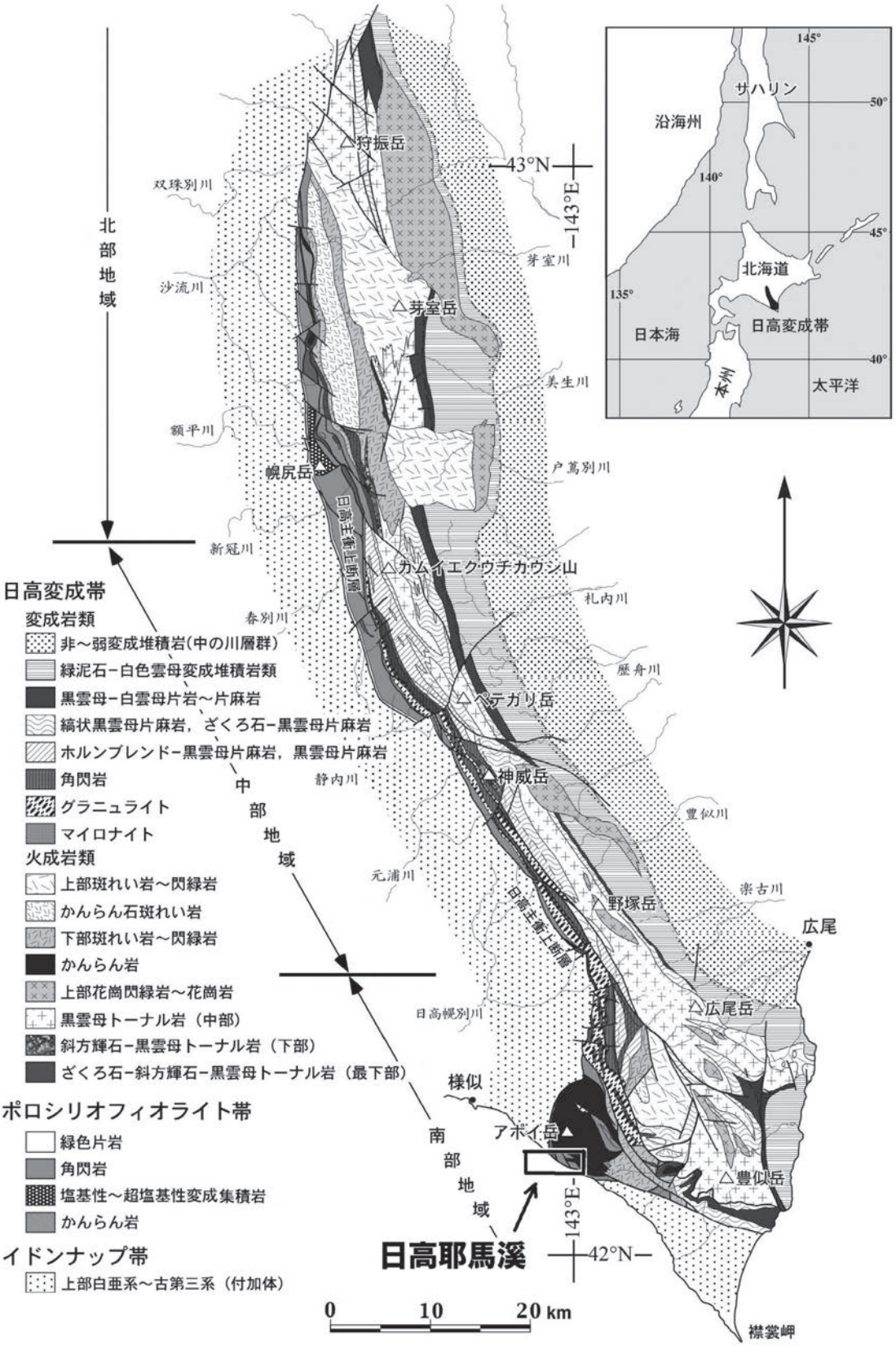


図１　日高山脈の地質概略図（小山内ほか、2010）。日高耶馬溪の位置を示す。日高主衝上断層を挟んで、東側地域には日高変成帯、西側地域にはポロシリオフィオライト帯の岩石が分布する。

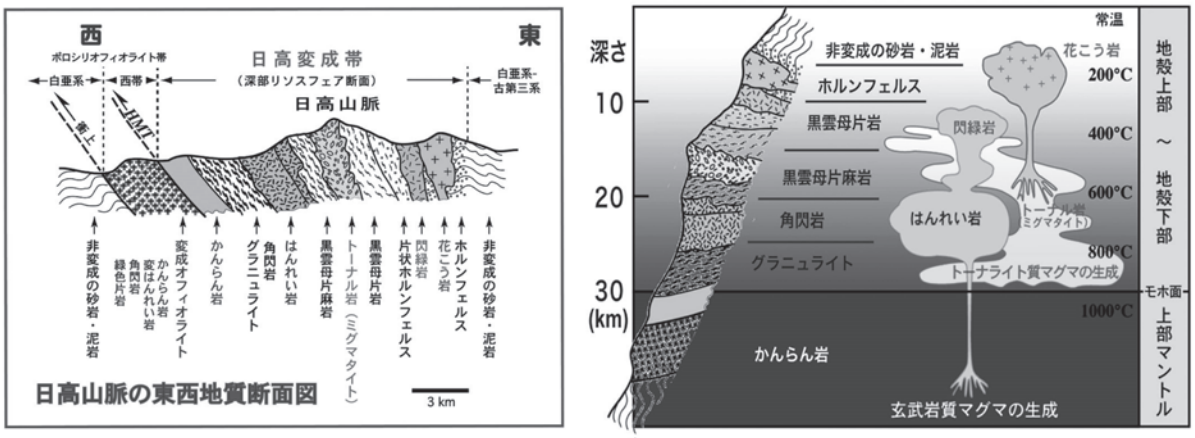


図２　日高山脈の東西地質断面図（左）および日高山脈の形成を示すモデル断面図（右）。日高変成帯の地質や岩石が、高温・高圧の地殻深部～上部マントルでできたことを模式的に示した（新井田、1999）。日高主衝上断層（ＨＭＴ）の位置に注目して欲しい。

日高山脈の地質帯区分については、朝倉書店の日本地方地質誌１「北海道地方」（日本地質学会（編）、2010）によって大幅に見直された。図１（日高山脈の地質概略図）のように、日高変成帯西帯が幌尻岳周辺に模式的に分布するオフィオライト質の岩石のみから構成されることから、西帯は「ポロシリオフィオライト帯」に、日高変成帯主帯は「日高変成帯」に改められた。この変更によって、西帯が主帯とは全く異なる地質帯であり、日高変成帯が主帯だけからなることがはっきりした。もちろん、これは単に呼び名だけの変更にとどまらない。それぞれの地質帯のプレート所属の関係も議論され、地質帯を境する日高主衝上断層や西縁衝上断層はそれぞれ当時のプレート境界として認識されるようになった。

日高主衝上断層を最初にプレート境界として議論したのは、木村（1982）である。ここで、日高主衝上断層の北方延長がサハリンにおよぶことが明示され、北米プレートが西進して西側のユーラシアプレートに衝上した造構モデル図が示された。このプレート境界モデルは、先に議論された北海道東部の「網走構造線」の形成モデル（木村、1981）が北海道全域スケールまで拡大され、千島弧と本州弧が会合する島弧会合部の造構場として議論された。

その後、プレート所属関係、とくに上部マントル由来のアポイ岳のかんらん岩と地殻深部でできた日高変成帯の岩石が同一のプレート所属だったかどうかについて注目され、地質学論集「日高地殻～マントル系のマグマ活動」（荒井ほか、1997）が編集された。さらに、新井田（1999）は、木村（1982）のプレート境界モデルを支持し、アポイ岳のかんらん岩が上位の地殻深部の岩石と共通の高温の地質環境でできたことを示す「日高島弧の形成モデル」を提案した（図２）。新井田（1999）の日高島弧モデルによると、日高島弧マグマ活動の最盛期には島弧脊梁部直下の高温の地温勾配（地下増温率が約34°C/1km）をもち、上部マントルかんらん岩が部分融解して玄武岩質マグマを生じ、同時に地殻最下部も部分融解してトーナル岩質マグマを発生した。

また、日本地方地質誌１「北海道地方」（日本地質学会（編）、2010）でも、日高山脈から東側の北海道東半分と西側の地域の地質と地下構造の違いが強調され、地球北半球を２分する北米プレートとユーラシアプレートのプレート境界で起こったプレート衝突による大規模な地球変動の結果であると解説されている（新井田、2010）。

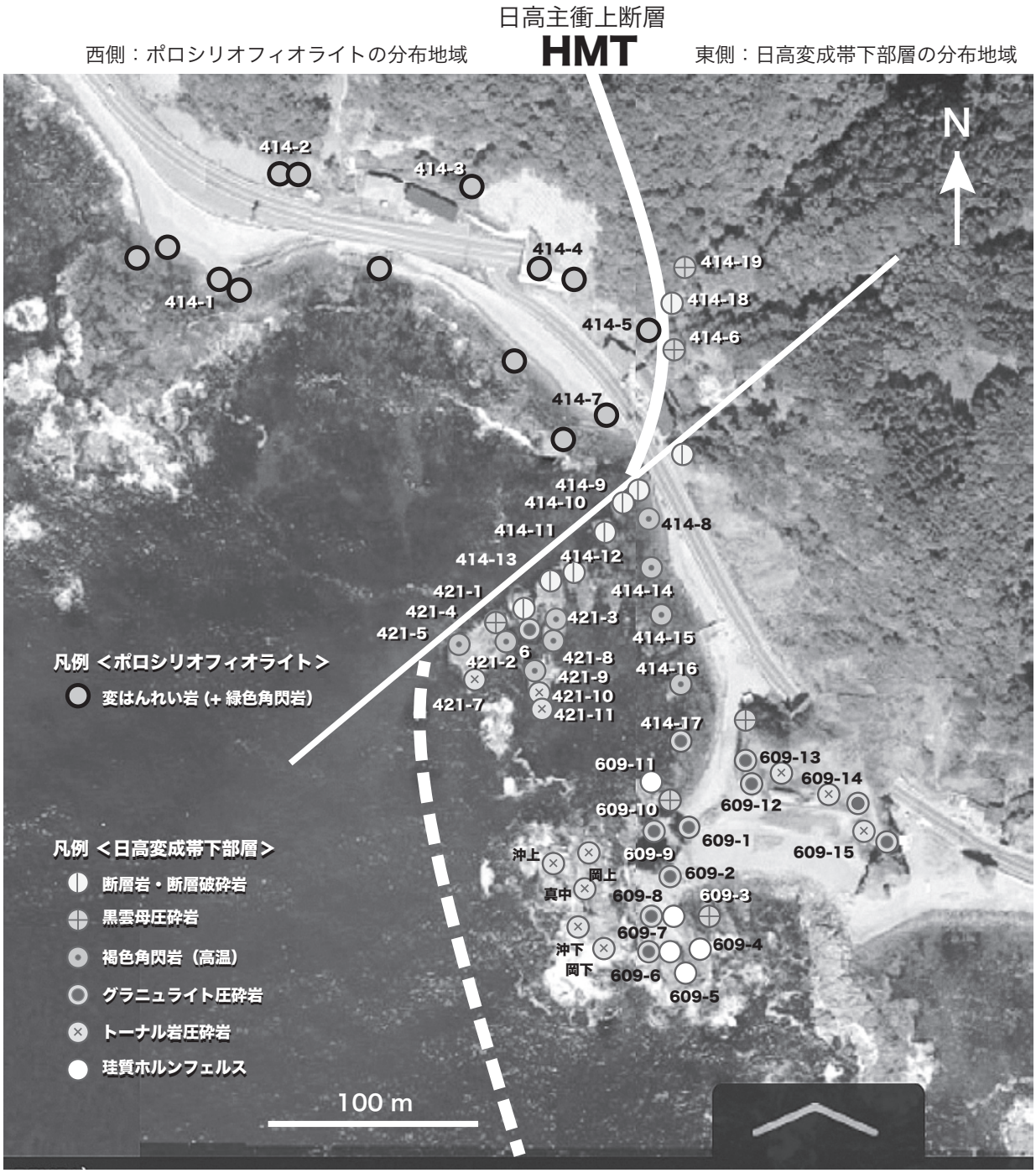


図３　日高耶馬溪（山中海岸地域）の地質調査図（Google Earth 画像を使用）。今回の調査で確認できた岩石タイプの分布を示す。数字は採取した岩石の試料番号で、表１の「サンプル No.」に対応する。図面中央に描かれている北北西―南南東に伸びる太い実線は、日高主衝上断層（HMT）。西側のオフィオライト地域と東側の日高変成帯下部層の地域の地質境界になっている。この図面の北に隣接する山中川下流域の川沿いでも、同様の地質境界が観察できる（表１（５）参照）。

表１　採取サンプルの岩石タイプと地質区分。

サンプルNo.	岩石タイプ	英名	サンプル観察	処理	地質区分
（1）日高耶馬渓（山中トンネル入口付近の陸上部〜岩礁）の岩石：2019.4.14 採集（新井田・島田）					
414-1	変はんれい岩	meta-gabbro	切断面観察	研磨写真標本	オフィオライト
414-2	緑色角閃岩	green amphibolite	切断面観察	切断	オフィオライト
414-3	変はんれい岩	meta-gabbro	サンプル表面		オフィオライト
414-4	変はんれい岩	meta-gabbro	サンプル表面		オフィオライト
414-5（滝左）	変はんれい岩	meta-gabbro	切断面観察	研磨標本	オフィオライト
414-6（滝右）	黒雲母圧砕岩	biotite mylonite	切断面観察	研磨標本	日高変成帯下部層
414-7	変はんれい岩	meta-gabbro	切断面観察	切断	オフィオライト
414-8	褐色角閃岩	brown amphibolite	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
414-9	断層岩	fault rock	サンプル表面		日高変成帯下部層
414-10	断層破砕岩	cataclasite	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
414-11	断層岩	fault rock	サンプル表面		日高変成帯下部層
414-12	断層岩	fault rock	サンプル表面		日高変成帯下部層
414-13	断層破砕岩	cataclasite	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
414-14	褐色角閃岩	brown amphibolite	サンプル表面		日高変成帯下部層
414-15	褐色角閃岩	brown amphibolite	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
414-16	褐色角閃岩	brown amphibolite	サンプル表面		日高変成帯下部層
414-17	グラニュライト圧砕岩	granulite mylonite	サンプル表面		日高変成帯下部層
414-18	断層破砕岩	cataclasite	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
414-19	黒雲母圧砕岩	biotite mylonite	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
（2）日高耶馬渓（山中海岸旧国道沿いの岩礁）の岩石：2019.4.21 採集（谷村・島田）					
421-1	断層岩	fault rock	サンプル表面		日高変成帯下部層
421-2	褐色角閃岩	brown amphibolite	サンプル表面		日高変成帯下部層
421-3	褐色角閃岩	brown amphibolite	サンプル表面		日高変成帯下部層
421-4	黒雲母ホルンフェルス	biotite hornfels	サンプル表面		日高変成帯下部層
421-5	褐色角閃岩	brown amphibolite	サンプル表面		日高変成帯下部層
421-6	グラニュライト圧砕岩	granulite mylonite	サンプル表面		日高変成帯下部層
421-7	トーナル岩圧砕岩	tonalite mylonite	サンプル表面		日高変成帯下部層
421-8	褐色角閃岩	brown amphibolite	サンプル表面		日高変成帯下部層
421-9	褐色角閃岩	brown amphibolite	サンプル表面		日高変成帯下部層
421-10	トーナル岩圧砕岩	tonalite mylonite	サンプル表面		日高変成帯下部層
421-11	トーナル岩圧砕岩	tonalite mylonite	サンプル表面		日高変成帯下部層

４．調査報告：日高耶馬溪山中海岸地域の地質と岩石

日高耶馬溪の山中トンネルの入口手前で、国道 336 号線が旧国道が分岐する。ちょうどこの付近で、オフィオライト質の変はんれい岩（ポロシリオフィオライト帯）から高温高圧の地殻深部でできた変成岩や深成岩（日高変成帯）に変わる。その地質境界が、日高主衝上断層（HMT）である。

ここでは、2019 年〜2020 年に実施した地質調査の結果を整理し、調査データを要約する。地質調査は、日高耶馬溪の山中トンネル入口周辺の海岸地域に集中し、露出全体（全ての露頭）をくまなく観察して岩石タイプを確かめるための調査である。したがって、野外観察と試料採集が重視された。また、沿岸の引潮時に露岩する岩礁も詳細に調査した。今回の調査のベースマップとしては、国土地理院発行の 25,000 分の 1 地形図では岩礁部分の位置や形が明瞭ではないために、図３のように、『Google Earth』の空撮図（2019 年公開画像）を用いた。

図３は、今回の調査結果をまとめた地質図である。図にプロットされている岩石タイプは、今回の野外調査と室内で切断処理を含む肉眼観察で確認できた全ての岩石サンプルである。表１は、採取された岩石サンプルのリストであり、「サンプル観察」「処理」の内容を示し、「地質区分」にそれぞれの岩石が所属する地質を明記した。

表１　（左表からつづく）

サンプルNo.	岩石タイプ	英名	サンプル観察	処理	地質区分
（３）日高耶馬渓（山中海岸旧国道沿いの沖側の岩礁）の岩石：2019.4.30 採集（谷村・加藤）					
430-1（沖下）	石英質圧砕岩	quartzose mylonite	サンプル表面		日高変成帯下部層
430-2（岡上）	トーナル岩圧砕岩	tonalite mylonite	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
430-3（真中）	トーナル岩圧砕岩	tonalite mylonite	サンプル表面		日高変成帯下部層
430-4（沖上）	結晶質石英	crystalline qurtz	サンプル表面		日高変成帯下部層
430-5（岡下）	石英質圧砕岩	quartzose mylonite	サンプル表面		日高変成帯下部層
（４）日高耶馬渓（山中海岸旧大正トンネル付近の陸上部）の岩石：2019.6.9 採集（新井田・島田）					
609-1	グラニュライト圧砕岩	granulite mylonite	切断面観察	研磨写真標本	日高変成帯下部層
609-2	グラニュライト圧砕岩	granulite mylonite	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
609-3	片状ホルンフェルス	schistose hornfels	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
609-4	珪質ホルンフェルス	siliceous hornfels	サンプル表面		日高変成帯下部層
609-5	珪質ホルンフェルス	siliceous hornfels	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
609-6	グラニュライト圧砕岩	granulite mylonite	サンプル表面		日高変成帯下部層
609-7	グラニュライト圧砕岩	granulite mylonite	サンプル表面		日高変成帯下部層
609-8	珪質圧砕岩	siliceous mylonite	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
609-9	グラニュライト圧砕岩	granulite mylonite	サンプル表面		日高変成帯下部層
609-10	ホルンフェルス	hornfels	サンプル表面		日高変成帯下部層
609-11	珪質ホルンフェルス	siliceous hornfels	サンプル表面		日高変成帯下部層
609-12	グラニュライト圧砕岩	granulite mylonite	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
609-13	トーナル岩圧砕岩	tonalite mylonite	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
609-14	トーナル岩圧砕岩	tonalite mylonite	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
609-15	トーナル岩圧砕岩	tonalite mylonite	切断面観察	切断	日高変成帯下部層
（５）日高耶馬渓（西山中：山中川下流域）の岩石：2020.6.13 採集（新井田・島田・谷村）					
613-1	変はんれい岩	meta-gabbro	切断面観察	研磨標本	オフィオライト
613-2	変はんれい岩	meta-gabbro	切断面観察		オフィオライト
613-3	黒雲母圧砕岩	biotite mylonite	切断面観察		日高変成帯下部層
613-4	トーナル岩圧砕岩	tonalite mylonite	切断面観察		日高変成帯下部層
613-5	グラニュライト圧砕岩	granulite mylonite	切断面観察	研磨標本	日高変成帯下部層

図３の中央部分で、西側の地域と東側の地域で明瞭に岩石タイプが異なっており、それぞれ異なる地質の間には大規模な境界断層が推定される。この断層こそが、日高主衝上断層（HMT）である。図３の図面では、北北西−南南東方向に伸びる太い実線で示されている。海岸の海蝕台（岩礁）の沖側に描かれた太い破線は、日高主衝上断層の海側延長部にあたる。ここでは、さらに沖側の地質が確認できないために、破線のように推定した。海岸の中央部分には、日高主衝上断層を斜め横切りする断層があり、地形的には東西の海蝕台の間に深い溝ができていているために、地元の漁師さんたちに「おおま」と呼ばれている。

さて、今回の調査報告は、図３（岩石タイプの分布図）および表１（採取サンプルリスト）の形で総括されているが、以下にその基礎になった岩石タイプの観察内容を要約する。

日高主衝上断層の西側地域には、変はんれい岩が分布し、ポロシリオフィオライト帯の塩基性岩集積岩に対比されている（図１参照）。また、変はんれい岩のかなりの部分が変成されていて、緑色角閃岩に置き換わっている。しかし、図４（Ａ：左側）の変はんれい岩サンプルの研磨面写真のように、もともとの「はんれい岩」の鉱物（斜長石や輝石）や深成岩組織が随所に残されている。そのために、野外観察でも岩石タイプ識別は難しくなく、また実験室で切断された試料表面の肉眼観察も容易である。図５に、代表的な変はんれい岩の露頭写真を示す。

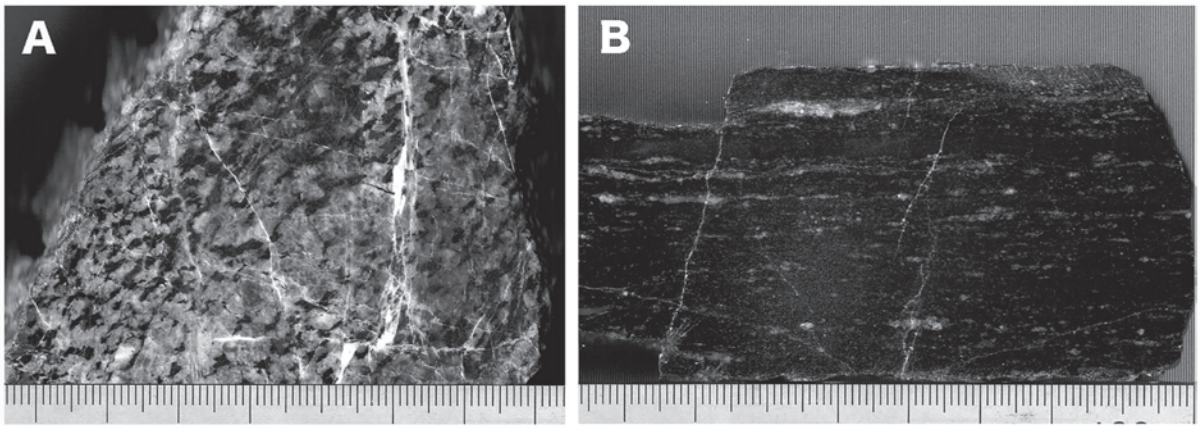


図４　代表的な岩石の切断研磨面写真。スケールの最小目盛、1 ㎜。
（Ａ：左側）変はんれい岩。サンプル No. 414-1。斜長石の集積岩組織が残されていて、ポロシリオフィオライト帯の塩基性集積岩に酷似する。
（Ｂ：右側）グラニュライト圧砕岩（黒雲母片麻岩）。サンプル No. 609-1。砕屑性グラニュライトの斜長石（残晶）を含む。

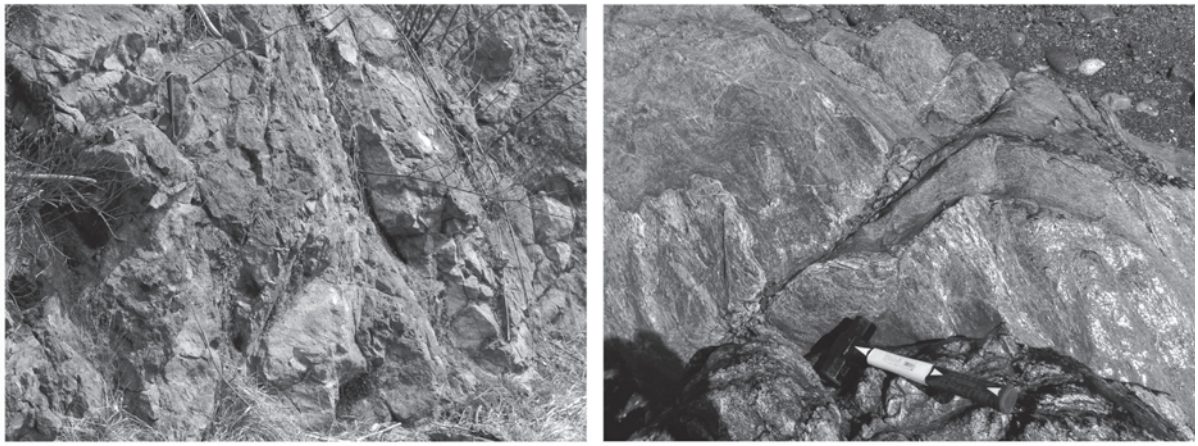


図５　変はんれい岩（ポロシリオフィオライト帯）の代表的な露頭写真。
（左側）国道 336 号線沿いの変はんれい岩の露頭。サンプル（No. 414-2）採取地点。
（右側）海岸の波打ち際に露出する変はんれい岩。サンプル（No. 414-7）採取地点。大半が緑色角閃岩に変成して片状になっている。

断層の東側には、「グラニュライト圧砕岩（黒雲母片麻岩）」「褐色角閃岩（高温角閃石岩）」「トーナル岩圧砕岩」「珪質ホルンフェルス」「黒雲母圧砕岩」などが分布する。図１の凡例のように、確認できた岩石タイプは著しく多彩である。これらは、もともとは日高変成帯下部層（最下部）の岩石であったと考えられ（図２参照）、全てが著しく圧砕されて変成・変形した岩石である。図４（Ｂ）は、グラニュライト圧砕岩の切断研磨標本の写真である。もともとは高温高圧の地下深部でできた高度の変成岩（砕屑性グラニュライト）で、上昇中に圧砕されて黒雲母片麻岩になった。図４（Ｂ）の事例でも、グラニュライトの斜長石（残晶）が、黒雲母片麻岩に点々と含まれているのが判別できる。図６に、代表的なグラニュライト圧砕岩（左）と褐色角閃岩（右）の露頭写真を示す。

図６　日高変成帯下部層の代表的な変成岩の露頭写真。
（左側）大正トンネルの海側の岩場に露出するグラニュライト圧砕岩（黒雲母片麻岩）。特徴的にグラニュライトの斜長石（残斑晶）を含む。サンプル（No.609-1）採取地点。
（右側）旧国道の海側岩礁部に露出する褐色角閃岩。サンプル（No.414-15）採取地点。

５．調査報告のまとめ

アポイ岳の南麓海岸「日高耶馬溪」で知られていた日高主衝上断層を再訪し、その周辺海岸の地質と岩石タイプを詳細に調査した。その結果、国道 336 号線山中トンネルの入口手前で旧国道が分岐する山中海岸に実在する日高主衝上断層を確認し、さらに図３には、その東西の地質の分布状況を要約的に明示できた。ここで、調査目的に応えて表現すると、『日高耶馬溪を旧国道沿いに歩いてみると、「昔のプレート境界を跨いで渡ることができる」（！）』と結論される。

図７は、日高耶馬溪の写真である。左の写真の中央部に、国道 336 号線の山中トンネルの入口がある。その手前で旧国道が海岸沿いに分岐し、海食崖の右手前方に昭和のトンネルや大正トンネルが並んでいる。図７左の写真に、破線（白色）で日高主衝上断層の位置が描かれている。その手前の地質はオフィオライトで、右手東側の地域には日高変成帯下部層が分布する。日高主衝上断層を挟んで、全く違う地質になっているのである。旧国道の左手に山側の小沢から流れ落ちる滝があり（図７左の写真の☆印）、ちょうど昆布漁の作業家屋の裏手の崖で、ここで２つの異なる地質の地質境界（接触関係）が観察できる（図７右の写真の破線）。破線の左側は変はんれい岩（サンプル No.414-5）、右側は黒雲母を含む圧砕岩（サンプル No.414-6）になっている（表１の（１）参照）。

その境界（図の破線部）には、幅約５cm ほどの赤い錆色の破砕帯があり、部分的に赤色粘土になっているものの、大規模な断層粘土帯は認められない。しかし、この断層の東側（右側）の日高変成帯下部層の岩石は、著しい破砕・圧砕を受けていて、「断層岩」「断層破砕岩」「黒雲母圧砕岩」になっている。言い換えれば、極めて大規模に断層破砕を受けた地質で特徴づけられるのである。

本報告の最後のまとめにあたり、日高耶馬溪で「跨いで渡ることできる」日高主衝上断層の意味について述べる。この断層境界は、およそ 1,300 万年前に日高山脈が海底から上昇を開始した時には、北米プレートが西側のユーラシアプレートに衝上する「プレート衝突境界」になっていた（新井田、2010）。この北米プレートとユーラシアプレートは地球の北半球を覆う２つの巨大プレートであり、日高山脈がこの２つのプレート境界で地下深部から持ち上げられてできたことを考えると、日高主衝上断層沿いで起こった大地の動きがいかに大規模な地球変動であったかが解る（新井田、2010）。

図７　今回の調査で確認できた日高主衝上断層。
（左の写真）国道 336 号線の山中トンネル入口付近の日高耶馬溪。日高主衝上断層の位置を白い破線で示す。☆印は、右の写真の露頭の位置。
（右の写真）小沢の滝の崖で観察される断層境界（白い破線）。崖の破線の左側は変はんれい岩（サンプル No. 414-5）、右側は黒雲母を含む圧砕岩（サンプル No. 414-6）。

【引用文献】

荒井章司・前田仁一郎・小山内康人・新井田清信（編）1997「日高地殻-マントル系のマグマ活動」. 地質学論集、47、323p.

橋本誠二　1958「日高変成帯」. 鈴木醇教授還暦記念論文集、17-36.

Hunahashi, M., 1957, Alpine orogenic movement in Hokkaido, Japan. Jour. Fac. Sci., Hokkaido Univ., IV, 9, 415-464.

舟橋三男・猪木幸男　1956「５万分の１地質図幅「幌泉」および同説明書」. 地質調査所, 64p.

猪木幸男　1953「幌満地方の輝石橄欖岩体」. 地質学雑誌、59、111-121.

木村　学　1981「千島弧南西端付近のテクトニクスと造構応力場」. 地質学雑誌、87、757-768.

木村　学　1982「島弧会合部のテクトニクス－北海道の場合-」. 構造地質（構造地質学会誌）、28、 5-22.

小松正幸・在田一則・宮下純夫・前田仁一郎・本吉洋一 1979 「日高変成帯西帯と主帯の境界」. 日本地質学会第 86 年会講演要旨、289.

小松正幸・宮下純夫・前田仁一郎・小山内康人・豊島剛志・本吉洋一・在田一則　1982「日高変成帯における大陸性地殻-上部マントル衝上体の岩石学的構成」. 岩石鉱物鉱床学会誌、特別号 3、229-238.

Lyman, B. S., Munroe, H. S., Yamauchi, T., Akiyama, Y., Inagaki, T., Kuwada, T., Misawa, S., Takahashi, J., Kada, T., Ban, I., Saito, T., Shimada, J., Yamagiwa, E., Mayeda, S., and Nishiyama, S., 1876, Geological Survey of Hokkaido, a geological sketch map of the Island of Yesso, Japan (scale 1/2,000,000 of nature).

宮下純夫　1983「日高変成帯西帯におけるオフィオライト層序の復元」. 地質学雑誌、89、69-86.

日本地質学会（編）「日本地方地質誌１『北海道地方』」. 朝倉書店、631p.

新井田清信　1999「日高山脈：島弧深部でできた岩石」. 北海道大学総合博物館学術資料展示解説書『北の大地が海洋と出会うところ－アイランド・アーク－』、22-28.

新井田清信　2010「北海道概説（第１章）」. 日本地質学会（編）日本地方地質誌１「北海道地方」、朝倉書店、1-15.

小山内康人　1985「静内川上流地域における日高変成帯主帯変成岩類の地質と変成分帯」地質学雑誌、91、259-278.

小山内康人・在田一則・新井田清信　2010「日高衝突帯（日高山脈）の地質と岩石」. 日本地質学会（編）日本地方地質誌１「北海道地方」、朝倉書店、115-166p.

【調査報告】

冬島遺跡調査報告１

地域研究を目的とした冬島遺跡有識者検討会について

(The excavation report of the Fuyushima site in SAMANI, Japan)

髙橋　美鈴[1]（TAKAHASHI Misuzu）

はじめに

様似町教育委員会では、平成 26 年度から令和 2 年度にかけて調査を実施した続縄文文化期初頭の遺跡である冬島遺跡（Ｋ－08－11）の詳細分布調査を実施している。

この発掘調査によって当町における続縄文文化期の様相が明らかになってきているが、当町で調査をしている冬島遺跡から日高管内における続縄文文化期の特徴や生業について明らかにし、それらを北海道における続縄文文化期研究に落とし込むとともに更に冬島遺跡に付加価値をつけることができ、今後、更なる普及活用を図ることが可能となる。

このことから、令和３年度において、文化庁「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」を活用し、有識者検討会による地域研究の落とし込みをおこなった。

１.様似町概要

様似町は、北海道日高振興局管内に位置し、東部にはえりも町、西部には浦河町が隣接しており、東西に 20.2km 南北に 20.6km からなる。町の総面積は 364.30 ㎢である。主な産業は漁業であるが、馬産地としても知られる。地勢は、北東にかけて日高山脈に覆われており、東部には日高山脈支稜線西南端に位置するアポイ岳(810.5m)やピンネシリ(958m)が聳えている。南西にかけて太平洋に面し、海岸線までは何面かの段丘地形が発達している。海岸線の多くは急峻な崖が続き、日高耶馬溪と呼ばれる約７km におよぶ海食崖がみられる。

図１　位置図

2015 年に世界ジオパークに認定され、「地球深部からの贈りものがつなぐ大地と自然と人々の物語」をメインテーマとし、サブテーマに「かんらん岩から大地の変動を学び楽しむ」、「アポイ岳の高山植物から自然環境を学び楽しむ」、「歴史から自然と人間社会の共生を学び楽しむ」があり、歴史と自然の繋がりについての活用も行なっている。

２.地域研究の目的

本地域研究の目的は、当町で調査をしている冬島遺跡から日高管内における続縄文文化期の特徴や生業について明らかにし、それらを北海道における続縄文文化期研究に落とし込むとともに普及活用事業に供すことである。

様似町では、これまで開発に伴う発掘調査がなく、昭和 40 年代から 60 年代にかけて町の郷土史研究会や町民が表採したものがあるだけで、断片的な情報しかないのが実情である。

1.様似町教育委員会

その為、様似町教育委員会では遺跡の内容や範囲を確認して当町の歴史と文化を理解することを目的に平成２６年度より過去に郷土史研究会等が発掘調査を実施していた冬島遺跡の詳細分布調査を実施している。

その結果、豊富な動物骨や骨角器が出土し、続縄文文化期初頭における日高地方で唯一確実に先史時代の貝層を伴う遺跡であることが判明している。

図２　続縄文文化期の貝塚遺跡の様相

当町では、古くから漁業を主産業としており、遺跡から大量に出土した魚骨や骨角器を元に海の利活用・漁猟方法を研究することによって地域研究として当町の歴史に反映することができる。

また、北海道内の貝塚は、太平洋沿岸地域では西部の噴火湾周辺か釧路市を中心とする東部にのみに調査事例が集中しており、太平洋中部に位置する日高管内において当町冬島遺跡で貝塚を伴う遺跡が確認されたことは、これらの東西の歴史文化の伝播を考える上でも重要な遺跡である。

しかしながら、現状ではこれらの調査結果を当該地の生業や東西の歴史文化の伝播を中心とした当時の様相を明らかにするに至っていない。

このことから、有識者による研究会を実施し、**①骨角器及び動物骨からみた生業の検討**、**②物質の伝播及び流通交易**の２つの事柄について検討を行い、これによって得られた新たな知見を用いた普及活用事業を実施する。

３.有識者検討委員会について

本検討会は、令和３年度文化庁地域の特色ある埋蔵文化財活用事業によっておこなった。検討委員及び検討会の開催については、下記のとおりである（五十音順）。

検討委員：高倉　純　氏（北海道大学埋蔵文化財調査センター）、高瀬　克範　氏（北海道大学大学院文学研究院）、高橋　健　氏（横浜ユーラシア文化館）、新美　倫子　氏（名古屋大学博物館）

検討会開催日：第１回有識者検討会　令和３年７月 11 日、18 日、27 日～28 日
※コロナウイルス感染症予防のため小グループでの検討会
第２回有識者検討会　令和３年 12 月 22 日

おわりに

検討会よって得られた研究成果は､パネル展｢冬島遺跡パネル展～ここまでわかった！冬島遺跡～｣（令和４年３月８日～２２日）において、地域研究の成果を公開・展示をおこなった。また、成果を抜粋したものでわかりやすいパンフレットを作成し町内小中学校及び一般、近隣博物館等に配布することで、地域研究の促進を図り、普及活用事業に活用する。

有識者検討委員による詳細な報告を次頁より掲載する。

謝　辞

文末になりますが、本事業にあたり多忙な中、有識者検討委員をご快諾いただきました高倉純氏、高瀬克範氏、高橋健氏、新美倫子氏に深謝いたします（五十音順）。

冬島遺跡調査報告２

冬島遺跡の意義

(Significance of the Fuyushima site)

高瀬　克範[1]（Takase　Katsunori）

はじめに

冬島遺跡は，様似町冬島地区の標高 40m 弱の海岸段丘上に立地する。この遺跡の最初の調査は，昭和 40 年代に藤本英夫氏の指導のもと二日間にわたって実施されたようである（第一次調査とよぶ）。しかし，第一次調査にかかわる情報は，当時の新聞記事があるのみで，出土遺物の詳細は不明である。ここでは，1981 年の様似町郷土史研究会による調査（「第二次調査」とよぶ，様似町郷土館 1988，様似町郷土史研究会 1993），および様似町教育委員会による 2014〜2016，2018〜2020 年の調査成果（「第三次調査」とよぶ，髙橋 2018，2020a，2020b，2021a）をふまえ，現在の観点から冬島遺跡が有していると考えられる意義についてまとめる。筆者自身は出土土器の観察を行ったのみであり，発掘調査や遺物の整理作業には参加していない。このため限られた情報にもとづいた判断にはなるが，今後，出土資料の評価や遺跡の歴史的位置づけを明確にしたうえで，それらの利活用をすすめる際のたたき台となれば幸いである。

１．遺跡の形成時期

(1) 出土土器の概要

1981 年に小柳正夫氏（当時，様似高等学校）が主導して実施された第二次調査で出土した土器については，すでに大泰司（2021）によって検討が行われている。また，第三次調査で出土した資料のうち，TR1 の A4・5 区で人為的に形成された堆積物と考えられている III 層中で確認された土器集中出土土器についても型式論的な検討が行われている（大泰司 2021）。その結果，これらの資料は，広域編年で弥生 II〜III 期並行に位置づけられた。

本遺跡出土土器のうち，これまでに図や写真が公表されているのは，上記の第二次調査資料 1 点の実測図のほか（大泰司 2021），第三次調査の 2015 年度出土土器 2 点（髙橋 2018），TP10 および TP6 出土の 12 点（髙橋 2018），土器集中出土の 10 点（髙橋 2020b，大泰司 2021），TR1 包含層およびその内部の P4 出土の計 2 点（髙橋 2020a），TR11・12・15 出土の 21 点である。ただし，そのなかには無文や地紋だけの胴部破片や，類似した文様をもつものも含まれていることから，器形と文様の変異幅を把握することが難しい。ここでは，筆者が本遺跡出土土器を概観したうえで，型式論的なヴァリエーションをより理解しやすいように選択した土器片を図 1〜3 にしめした。すべて色情報なしの三次元モデル（STL）をもとに取得した画像であり，断面も三次元モデルをもとに作成した。各資料の出土位置や層位などの基本的な情報は，表 1 にしめした。

図 1 : 1 には変形工字文もしくはそれに類する文様がみられる。変形工字文の交点が短い縦位の沈線で描出され，そこを頂点として三角形のモチーフが沈線で描かれている。主線は複数本ではなく一本で描出されており，副線が主線に沿う。また，三角形内の空隙部分には列点が充填されている。図 1 : 2 は波状工字文をもつ土器片である。文様の一部のみが観察可能であるが，主線はおそらく一本で描かれており，右肩上がりの斜線部には上下に一本ずつ副線が沿うものと推定される。空隙部にはやは

1．北海道大学大学院文学研究院

り列点が充填されている。

図 1：3，5 には，地紋（RL 縦走・斜行縄文）を切って口縁部に数本の横走沈線が描かれている。口唇部には刻みが施されているが，口縁部に無文帯があるかどうか，口縁部がやや開くか否かなどの点においてヴァリエーションが認められる。こうした特徴にくわえて，横走沈線に沿って 1〜2 列の列点が施される一群が図 1：8，10，11，12，図 2：1，2，3 である。細かくみれば，列点の形状や施文方法にも違いがある。また，横走沈線にくわえて曲線的な沈線文が採用されているのが図 1:9 である。

沈線のかわりに，縄の側面圧痕（縄線文）を文様要素とする資料も認められる。図 2：4，5，6 がその例であり，このうち図 2：4 の地紋（RL）は口縁部で横走，胴部で縦走しており，とくに胴部では帯縄文化している点が特徴的である。また，図 1：4 では縄線文にくわえて沈線による曲線的な波状のモチーフも描かれている。斜行縄文上に突瘤文をもつ一群も認められる。本遺跡では，少なくとも IO（図 1：6）と OI（図 1：7）の双方が存在することは確実である。白泉や潮見台では IO が多数を占めているが（浦河町教育委員会 1969，松田 2006），冬島では事例数が少ないため量的にどちらが優勢であるかは現時点で判断することが難しい。

以上が，主たる文様帯である口縁部文様帯に着目したヴァリエーションである。底部には，平底と若干の揚底がある（図 3）。図 3：1 は平底といってもよいが，底面は若干ではあるが外面側に盛り上がっている。凸底としての特徴がより明確に観察できる資料は，大泰司（2021，図 2：8）によっても紹介されている。

(2) 相対年代

上記のような器形，地紋，文様は，これまで知られている日高地方出土の前期続縄文土器のヴァリエーションのなかに収まると考えられる（松田 2005，2006）。近年の石狩低地帯の編年との対比では，変形工字文のモチーフをもつものを除いて H37 丘珠式，H317 式，H37 栄町式との類似性が高いが，縄文晩期のタンネトウ L 式期まで遡るものはないと考えられる（鈴木 2021）。土器集中の土器群を興津式から宇津内 IIa 式の時間幅のなかに位置づける大泰司（2021）の見解にも異論はないが，冬島遺跡から出土した土器全体に目をむけた場合は，その年代の上限はやや古くなる可能性があるかもしれない。

表 2 は，図 1・2 の口縁部文様帯と地紋に着目して，その要素の組合せを分類した結果である。これに，縄文晩期末〜続縄文前期前半の土器変遷についてもっとも詳細な型式論的，層位的，数値年代的検討を行うことができる札幌市 H508 遺跡（札幌市埋蔵文化財センター2016）から出土した土器にみられる情報を比較目的のために付けくわえた。H508 では紀元前 5 世紀以前の縄文晩期と，紀元前 4 世紀以降の続縄文前期の境界は 4a 層の内部にある（図 4）。冬島遺跡出土土器にはいまのところ縄文晩期土器は含まれていないため，H508 で冬島と直接的に対比できるのは 4a 層およびその上位の層から出土した土器である。年代測定の結果をみても，H508 遺跡 4a 層の IAAA-133481（図 4）と冬島における獣骨の測定結果はともに 2190±20yBP であり（髙橋 2020b, 株式会社加速器分析研究所 2020），冬島と H508 はその形成年代の少なくとも一部は重なっている。したがって，表 2 では H508 の 4 層群とその上位の 3 層群から出土した土器を比較対象としている。

表 2 では，冬島出土土器のうち H508 の 4 層と共通した要素をもつタイプを濃い網掛けとし，3 層と共通した要素をもつタイプを薄い網掛けで表現した。また，網掛けしていないタイプは，3 層と 4 層のどちらにもみられるものである。H508 との比較では，タイプ 1，4，12 が比較的古く位置づけられ，逆にタイプ 7，10 が新しく位置づけられるもので，それ以外はただちに新旧関係を判断できないタイ

プとなる。しかし，この理解は，冬島遺跡で確認されている層位とは齟齬がある。たとえば，タイプ4はH508との比較では古く位置づけられるが，II層出土のため層位的には新しい段階に位置づけられてもおかしくない。H508との比較からはより新しい段階に位置づけられるタイプ7，10が，冬島ではいずれもII層ではなくIII層から出土している点も両遺跡のあいだの相違点といえるかもしれない。

こうした齟齬の要因として，冬島のIII層には形成機構からみて長い時間幅の遺物が混在している点，遺構の有無・性格などに不明な部分が多いためにII層のなかに本来III層以下に含まれていた土器がどの程度混在しているのかが判断できない点，遺構にともなう一括性の高い土器のまとまりに不明な点が多いことなどあげられる。また，表2において網掛けがないタイプが多いことからもわかるように，土器の変化の幅は小さい傾向があり，H508の情報を参照しても型式論的な特徴にもとづいて段階を細かく分ける作業は現時点では難しいことがわかる。

とはいえ，年代の上限と下限についてはできるかぎり明確にしておく必要がある。上限については，H508の4a層で搬入品の砂沢式が出土しているため，冬島の上限もここまで遡る可能性はあるであろう。また，図2：4のように口縁部に比較的密な横走縄文が，その下部に縦走・斜行縄文が施されるものは，H508では3層から出現するものである（表2）。弥生中期中葉並行まで降る東歌別式（扇谷1963b，乾1991）といわれてきた資料と共通する特徴であることからみても，冬島のなかでは比較的新しい段階のものと考えることができる。したがって，冬島遺跡出土土器の年代は，広域編年上では弥生I期新段階から弥生III期と理解しておくのが妥当であろう。

(3) 絶対年代

冬島遺跡にかかわる数値年代として，上記のとおり2190±20yBP（III層出土獣骨）のほか，III層の土器集中出土土器の付着炭化物（No.21，29）の年代（2900±20yBP，2720±30yBP）がえられている（髙橋2020b，株式会社加速器分析研究所2020）。獣骨については試料の詳しい情報が提示されておらず，質量分析計による炭素・窒素安定同位体分析も行われていないため，それが陸獣か海獣かを判断できない。また，土器付着炭化物についてもサンプルを採取したのが土器の外面か内面かが明記されていない。

このため不明な部分がのこるものの，獣骨の年代は上記の相対年代から想定される暦年代と整合的である。OxCal ver. 4.4.3，IntCal20（Bronk Ramsey，2009Reimer et al. 2020）による2190±20yBP（同位体効果を考慮して補正した較正用年代は2230±24 yBP）の較正結果は，2σで紀元前4世紀前葉～紀元前3世紀末（384calBC–202calBC）であり，弥生前期後葉から弥生中期中葉と考えられるからである（臼杵編2007，藤尾2009，小林2009など）。これに対して土器付着炭化物の年代はともに獣骨よりも数百年古く，北海道島における土器付着炭化物の一般的な傾向を考慮しても海洋リザーバー効果を受けている可能性がきわめて高い。おそらく獣骨は陸生の草食動物の骨であり，その年代は付着炭化物のそれよりも信頼性が高いものと考えられる。

注意を要するのは，このほかにもTR1のIII層出土エゾシカの年代として2445±20yBP，2860±20yBP，2410±20yBPもえられている点である（髙橋2020a，パレオ・ラボ年代測定グループ2020）。これらの較正年代は2σで紀元前12世紀～紀元前5世紀であり，明らかに縄文文化晩期にはいる年代である。冬島ではいまのところ縄文晩期の土器は確認されていないが，遺跡の形成年代が縄文晩期まで遡る可能性は視野に入れておくべきであろう。

２．空間構成と遺跡の性格

遺跡の空間的な広がりは，まだ正確には把握されていない。しかし，海岸段丘上の平坦面では，現在干場になっている場所もふくめてひろく比較的良好なII層の分布が確認されている。東端部は現代の造成によって遺物包含層が消滅しているものの，そこでも遺物は出土しており（髙橋2020a），本来，遺跡は平坦面のほぼ全面に分布していた可能性が高い。現時点では十分な情報が集まっていないが，段丘内陸側にはしる道路よりも北側や，段丘の斜面部や下部についても遺物や遺構の広がりはつづいている可能性もある。今後の調査で遺跡の範囲が明確になることが期待される。

第二次調査では，西側の干場下部で「住居跡」の半分ほどが発見されたとされている（様似町郷土館1988，様似町郷土史研究会1993）。柱穴と考えられた5個のピットが半円状にめぐり，炉がともなっていることが報じられている。しかし，プランや掘りこみの有無，深さなどの情報がなく，これが住居であるとの理解を第三者が追認することは難しい。炉の位置や構造も判然としないが，見つかった炉は写真では石囲炉のようにもみえることから，そこに住居があった可能性は完全には排除できない。遺跡西半に住居が分布しているという推定は，ひとつの仮説として考慮されてもよいであろう。

遺跡東側がおもな調査対象とされてきた第三次調査では，調査面積が小さいにもかかわらず出土遺物がかなり多い。TR1ではこの遺跡の中心的な時期からは大きく外れると思われるTピットにくわえて，人為的な堆積層と考えられているIII層，III層の下面・中間やそれを切って構築された土坑類，焼けた砂の集中，配石遺構，土器集中などが確認されており，遺構の密度も高い。A3〜5区では地山であるVI層の直上にIII層が堆積していることから，IV層（黒色土層）やV層（漸移層）が掘削されたと考えられている。人為的に掘りくぼめられた範囲内にIII層が堆積していることから，これがたんなる廃棄場所などではなく，より大型の遺構であるかどうかを明確にすることが今後必要になるであろう。その結果は，本遺跡の空間構成や性格の理解を大きく左右すると考えられるからである。トレンチの断面では竪穴住居の存在を示唆するような壁の立ち上がりは確認できなかったとのことであるが，今後は，A5区よりも南側にトレンチを伸ばしてIII層の分布限界をとらえるか，より広い面積で少なくともII層の除去までを行うことによってIII層の平面的な広がりを記録することなどが求められる。

かりにIII層の分布範囲が居住施設としてふさわしい規模・形態であった場合，本遺跡は集落としての蓋然性が高くなる。日高地方では，続縄文前期の墓地遺跡は数多く知られてきているが（藤本1961，浦河町教育委員会1969，扇谷1963a，1979），居住施設はその可能性のある事例が若干報告されるにとどまっている（扇谷1963b）。集落の実情はまだほとんど明らかになっていないため，それが冬島で確認されれば大きな意義をもつことになるであろう。また，「配石遺構」はIII層下面，IV層直上で検出されているため，ここに竪穴住居があるならば「配石遺構」は住居床面に構築された遺構の可能性もでてくる。「配石遺構」の性格を考えるうえでも，重要な手がかりがえられることにつながるだろう。

たとえそこに住居がなかった場合でも，人為的に形成された分厚い堆積物とそこに含まれる遺物の多さからみて，かなり濃密な人類活動が行われていたことは疑いない。短期的な居住のために利用されたたんなる野営地ではなく，より長期にわたって利用されていた場の可能性が高い。土坑のなかには，P6やP9のように墓であったとしてもおかしくない規模，形態のものも含まれている。実際，第一次調査では，正確な場所は不明であるものの，墓坑の可能性がある遺構1基が確認されていたようであり，本遺跡が墓地としての性格を有することも十分に考えられる。上記P6，P9は，III層が堆積したのちに形成されたと理解されており，「配石遺構」は先述のとおりIII層の下面に位置している。このため，整地・掘削行為が行われたのち「配石遺構」が構築され，そのうえに土砂や遺物が廃棄さ

れ，墓がつくられたという場の機能の変遷にかかわるシナリオも想定できる。いずれにせよ，III 層の拡がりや竪穴住居の有無の確認が重要になってくる。

冬島遺跡の性格を考えるために, 現時点で参考になる遺物として石器がある。これまでの調査では，まとまった数の石鏃，尖頭器，石錐，掻器，有茎スクレイパー，磨製石斧が出土しているほか，2 万点以上の剥片，10 点以上の石核もみつかっており，積極的な剥片剥離，石器製作が行われていたことをつよく示唆している。剥片石器のなかには両面調整石器として報告されているものも多い。筆者は石器をひろく実見してはいないが，髙倉純氏のご教示によれば，これはいわゆる両面調整体であり，黒曜石の流通時の形態である可能性があるという。だとすれば，道東部との交流において冬島遺跡が果たしていた役割を探る手がかりともなるであろう

このほか，石鋸が 8 点ほど，砥石も 7 点ほど出土している点も注目される。当時，神居古潭変成帯の変成岩を素材として擦切技法で製作された磨製石斧が，北海道島内だけでなく本州島東北部の弥生文化にも積極的に輸出されている（高瀬 2002，佐藤 2013，2016，佐藤ほか 2016）。貝製装飾品や管玉など，本州島から輸入される威信財の対価としての役割を担っていたものと思われ（高瀬 2014a，2014b），日高地方南部における石斧製作は道東部への輸出にも関係していた可能性もある。なお，冬島では擦切残片は未発見であるが, 白泉, 潮見台, 油駒などでは出土している（浦河町教育委員会 1969，赤石・中岡 2000）。

小破片が多いため，土器の器種認定が十分にできるわけではないが，最も多いのは深鉢・鉢であることは確実視できる。このほかにも，壺，ミニチュア土器などがあるが，その数は圧倒的に少ない。当該期の日高地方においては，墓地遺跡出土土器もまた深鉢・鉢が中心となるため，必ずしも壺や高坏などが増加するわけではない。このため，遺跡の性格による器種組成の差はかなり小さい。冬島遺跡においても深鉢･鉢が中心であることから, この遺跡が集落や墓地であっても何ら不思議ではない。

３．資源利用

動物遺体については，2018 年調査の P4 と TR1 の III 層から回収された資料の同定結果が報告されている（西本 2020）。哺乳類はイヌやイノシシなどもみられるものの，最も多いのがエゾシカとクジラ・イルカ類である。鳥類はミズナギドリ類，ウミガラス類，アホウドリなど海鳥が多く，魚類はタラ類が最多で，ヒラメがそれに続く。

海産物が多く利用されている点は，海に面した冬島遺跡の立地と整合的である。鳥類の構成もそれをよく反映しているが，哺乳類や魚類についてはこれまでの理解とはやや異なる点がある。続縄文文化にかぎらず，北海道島では狩猟対象として海棲哺乳類が重要で，なかでもキタオットセイが長期的に多用されてきた（金子・西本 1985，Takase 2020）。しかし，冬島遺跡では鰭脚類はみられず，クジラ・イルカ類が多い。ただし，キタオットセイが確認されているという情報もあり（髙橋 2021b），幼獣と成獣・若獣の比率をふくめて今後のさらなる情報の蓄積が望まれる。

魚類については，同定結果を報告している西本豊弘氏による次の発言が，この遺跡の特徴をよく表している。「ヒラメは恵山貝塚など続縄文文化の遺跡でよく出土する魚類として知られているが，この遺（ママ）タラ類のほうが多く，しかも中型のヒラメが多いことは意外であった。」（西本 2020，p.45）。続縄文文化前期の漁労は，道央部ではサケ科，道南ではヒラメ，道東ではメカジキやヒラメを重視していたと考えられ（牛沢 1979，金子 1996，1999），なおかつヒラメやメカジキについては大きな個体に光を当てていたと考えられる（西本 1981，1983，金子・土肥 2004，2005，高瀬 2014a，2016，2017a）。こ

うした理解と比較すると，冬島ではヒラメでもメカジキでもなくタラ類が中心で，しかもヒラメは中型の個体が多いことはたしかに「意外」である。ただし，タラ類が多く出土する遺跡そのものはほかにもあり（右代編 2001 など），どのような条件下でこうした遺跡が分布するのかを評価できるようになることが期待される。哺乳類に対する魚類の比率も続縄文文化の評価にとっては重要であるが（高瀬 2014a，2016，2017a），こうした考察に利用できる資料は日高地方においてはほぼ皆無であった。非常に細かな骨まで回収されている冬島の動物遺体は，この問題を考えるうえでも今後の基準となる重要性をもつことは間違いないであろう。

植物遺体は，土壌の水洗選別によって A1，A2 区の III 層から回収された資料が同定されている（髙橋 2018）。エノコログサ属，タデ科，スゲ属，アカザ科，スベリヒユ，ナデシコ科，カタバミ属，キイチゴ属が出土しており，完新世北海道島の先史時代でしばしば確認される野生種のみである。とくに多いのがアカザ科で，7000 個以上が確認されている。エノコログサ属には未炭化の資料もみられるが，炭化種子もふくまれているようである。出土種子は遺跡内かその周辺のやや日当たりの良い場所に生育していた植生を反映しているものと思わるが，人為的に移動された層からの出土であることから人類が意図的に採取・利用していたものとは断言できない。今後，明確な炉が発見されれば，そこから回収された種子との比較が可能となるため，すでに出土している種子についてもより踏み込んだ評価が可能となるであろう。

４．地域間交流

他地域との交流を考える手がかりとして，イノシシ，非在地系土器，玉類，黒曜石がある。イノシシは本州島との関連性を示唆すると思われ，これは変形工字文，波状工字文を有する非在地系土器が本州島東北部とのつよい関連性をしめしていることと連動している。日高地方から釧路地方では搬入品と思われる大洞 A1～大洞 A’式が数多く出土しており（愛下 1975，澤田 2014 など），砂沢・江豚沢式から二枚橋式にかけての搬入土器やその要素が取りいれられた在地製作の土器も珍しくない（石川編 1996，1999，赤石・中岡 2000）。釧路地方を終着点とする太平洋側のネットワークの中間点に位置しているのが冬島遺跡であり，この遺跡が本州島との交流においてどのような役割を果たしたのか解明されることが期待される。かりに道南・石狩低地帯と道東部太平洋側のあいだの中継地点としての役割を果たしていたのであれば，本州島東北部的な要素だけでなく，釧路地方との交流を示す証拠，たとえば貼付文を有する興津式などが持ち込まれている可能性もある。

一方で，北海道島内での濃密な交流も認められる。先述のとおり，出土土器の構成は石狩低地帯との類似性が高いとはいえ，まったく同じではなく日高地方としてのまとまり，つまりこれまで大狩部式（藤本 1961）から東歌別式などとされてきた伝統のなかに冬島遺跡を位置づけることができる。そのなかで，突瘤文は北海道島のほぼ全域に共通して認められる要素であり，とくに二枚橋式並行期を中心に興津式（沢編 1978，澤田 2016），兜野式（千代 1968，1978），青苗 B（木村編 1999），琴似式（羽賀 1980），元町 2 式（熊木 1997，2018），メクマ式（菅 1972），香深井式（林 1953），声問大曲 III 群 B 類（種市・土肥 1993）などでホライズンの様相を呈する（福田 1999，乾ほか 2013，2014，高瀬・福田 2001，高瀬 2017b など）。ただし，その前後でも尾白内 II 群（千代ほか 1981），東歌別式（扇谷 1963，乾 1991），下田ノ沢（宇田川 1977，1982），宇津内式（金盛 1973，宇田川 1977）などでも多用されており，道央太平洋側では縄文晩期から継続している可能性もあるため，明確な時間的指標にはならない（赤石 2001）。とはいえ，冬島においてもこうした土器が認められること自体，北海道島内に広く張りめぐらされていた当時のネットワークに組み込まれていたことを示している。銛頭にみられる恵

山文化との類似性（大泰司 2021）も，こうした観点から説明が可能である。

黒曜石も，北海道島内の交流を示唆する証拠である。エネルギー分散型蛍光 X 線分析によって原産地は上士幌と置戸と推定されている（竹原 2020）。緑泥石片岩製（報告では緑泥石岩あるいは緑色泥岩）の玉は，エネルギー分散型蛍光 X 線分析によって蛇紋岩源の緑泥石片岩と同定され，北海道島内で採取された可能性も指摘されている。なお，報告ではまだ具体的な情報が報じられていないが，コハク玉も出土しているようである（髙橋 2021）。縄文晩期から続縄文前期において，コハク玉の利用は珍しくはない（遠藤ほか 1998，1999，乾 2018 など）。原産地分析の技術はまだ確立されていないが，本州産ではなくサハリン産の可能性もある。続縄文文化とサハリンとの関係は少なくとも千島・カムチャツカ方面よりも強かったことは確実視できることから（福田 2015，高瀬 2015），間接的にサハリンと関係してくるかもしれない。

おわりに

2020 年度までに公表された情報，および筆者自身が 2021 年度内に遺跡，遺物を実見することができた成果に依拠して冬島遺跡の意義について考えた。石器，骨角器，動物遺体を専門とする研究者による個別の検討は本稿の執筆と同時並行で進められたため，その成果をここに十分に盛り込むことはできなかった。そのため，指摘した課題のなかには，それら論考によってすでに解決されたものや，本稿の理解に変更をせまるものもあるかもしれない。それでも，冬島遺跡はこれまで墓地遺跡が多かった当該期の日高地方においてはじめて明確なかたちで確認される集落，しかも一定の拠点性をそなえた遺跡になる潜在的な可能性を秘めている。開地遺跡で，標高 40m 弱の海岸段丘上に立地しているにもかかわらず，動物と植物の双方が豊富に出土する点も大きな特徴のひとつといえよう。明確な目的意識をもった今後の調査と問題解明に期待したい。

謝辞

本稿の執筆にあたり，下記の方々からにご教示いただいた。記して感謝申し上げる（五十音順）。

髙倉純氏，髙橋健氏，髙橋美鈴氏，新美倫子氏。

引用文献

愛下　淳 1975『氷川遺跡』新冠町教育委員会。

赤石慎三 2001「縄文時代晩期後葉から続縄文時代初頭の突瘤文について」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』3，pp.19-30.

赤石慎三・中岡利泰 2000『油駒遺跡』えりも町教育委員会。

石川　朗編 1996『釧路市幣舞遺跡調査報告書 III』釧路市埋蔵文化財調査センター。

石川　朗編 1999『釧路市幣舞遺跡調査報告書 IV』釧路市埋蔵文化財調査センター。

乾　茂年・氏江敏文・疋田吉識 2013『ブタウス遺跡（I）』浜頓別町教育委員会。

乾　茂年・氏江敏文・伊比博和 2014『ブタウス遺跡（II）』浜頓別町教育委員会。

乾　芳宏 1991「えりも町東歌別遺跡遺跡出土の続縄文土器について」『十勝考古学とともに』，pp.55-62。

乾　芳宏 1998「日高地方の琥珀玉について―門別町トニカ遺跡の分析―」石附喜三男先生を偲ぶ本刊行会編『道を辿る』，pp.159-179。

牛沢百合子 1979「釧路市興津遺跡 1977・1978 年度に調査時に出土した動物遺体の概要」『釧路市興津遺跡発掘報告 III』，pp.129-132，釧路市教育委員会。

右代啓視編 2001『貝取澗 2 洞窟』北海道開拓記念館。
臼杵　勲編 2007『北海道における古代から近世の遺跡の暦年代　研究成果報告書』札幌学院大学。
宇田川洋 1977『北海道の考古学 2』北海道出版企画センター。
宇田川洋 1982「道東の続縄文土器」『縄文土器大成 5 続縄文』，pp.124-126，講談社。
浦河町教育委員会 1969『浦河町の遺跡』浦河町教育委員会。
遠藤香澄・村田　大・愛場和人・影浦　覚・酒井秀治 1998『滝里遺跡群 VIII』財団法人北海道埋蔵文化財センター。
遠藤香澄・村田　大・愛場和人・影浦　覚・酒井秀治・佐藤和雄・広田良成・立田　理 1999『滝里遺跡群 IX』財団法人北海道埋蔵文化財センター。
扇谷昌康 1963a「門別町トニカ墳墓遺跡について」『北海道の文化　特集号』，pp.1-8。
扇谷昌康 1963b「幌泉郡東歌別遺跡調査概報」『北海道の文化　特集号』，pp.9-23。
扇谷昌康 1979『日高門別の先史遺跡』門別町教育委員会
大泰司統 2021「冬島遺跡出土の特徴的な土器」『様似郷土館紀要』3，pp.9-16。
金盛典夫 1973「宇津内 A 地点」『宇津内遺跡』，pp.12-33，斜里町教育委員会。
金子浩昌 1996「釧路市幣舞遺跡出土の動物遺体」『釧路市幣舞遺跡調査報告書 III』，pp.173-190，釧路市埋蔵文化財調査センター。
金子浩昌 1999「釧路市幣舞遺跡出土の動物遺存体―1997，1998 年度―」『幣舞遺跡調査報告書 IV』，pp.133-240，釧路市埋蔵文化財調査センター。
金子浩昌・土肥研晶 2004「動物遺体の調査」『恵山貝塚』，pp.61-75，北海道立埋蔵文化財センター。
金子浩昌・土肥研晶 2005「恵山貝塚の動物遺体」『恵山貝塚 II』，pp.77-111，北海道立埋蔵文化財センター。
金子浩昌・西本豊弘 1985「北海道・本州東北におけるオットセイ猟の系譜」『季刊考古学』11，pp.17-22。
株式会社加速器分析研究所 2020「冬島遺跡における放射性炭素年代測定（AMS 測定）及び炭素・窒素含有量測定，炭素・窒素安定同位体分析」『様似郷土館紀要』2，pp.66-72。
木村哲郎編 1999『青苗 B 遺跡』奥尻町教育委員会。
熊木俊朗 1997「宇津内式土器の編年」『東京大学考古学研究室研究紀要』15，pp.1-38。
熊木俊明 2018『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』北海道出版企画センター。
小林謙一 2009「近畿地方以東の地域への拡散」西本豊弘編『新弥生時代のはじまり　第 4 巻　弥生農耕のはじまりとその年代』，pp.55-82，雄山閣。
札幌市埋蔵文化財センター2016『H508 遺跡』札幌市教育委員会。
佐藤由紀男 2013「北海道・道南地域における縄文時代晩期後半から続縄文時代前半の磨製石斧の様相」『みずほ別冊　弥生研究の群像』，pp.1-22。
佐藤由紀男 2016「磨製石斧の流通からみた紀元前一千年紀の北海道・東北北部」『北方島文化研究』12，pp.1-18。
佐藤由紀男・平原英俊・三浦一樹・佐藤桃子 2016「北海道・東北北部出土の緑色片岩・青色片岩製磨製石斧の蛍光X線分析」『秋田考古学』60，pp.1-22。
沢　四郎編 1978『釧路市興津遺跡発掘報告 II』釧路市立郷土資料館・釧路市埋蔵文化財調査センター。
澤田恭平 2014「北海道釧路市幣舞遺跡出土の亀ヶ岡式土器について」『釧路市立博物館紀要』35，pp.1-20。
澤田恭平 2016「興津式土器標識資料についての考察」『釧路市立博物館紀要』36，pp.7-14。
様似町郷土館 1988「冬島遺跡発掘調査」『ふるさと』9，pp.53-57。
様似町郷土史研究会 1993「冬島遺跡発掘調査」『様似町郷土史研究会 30 周年記念誌　史甦』，pp.27-28。
菅　正敏 1972「稚内市メクマ遺跡発掘調査概要」『北海道考古学』8，pp.39-47。
鈴木　信 2021『北海道続縄文文化の変容と展開』同成社。

高瀬克範 2002「日本列島北部の擦切技法」『古代文化』54(10)，pp.37-46。
高瀬克範 2014a「続縄文文化の資源・土地利用―隣接諸文化との比較にもとづく展望―」『国立歴史民俗博物館研究報告』185，pp.15-61。
高瀬克範 2014b「東北北部の初期弥生文化」『縄文！岩手 10000 年のたび』，pp.90-97，大阪府立弥生文化博物館。
高瀬克範 2015「オホーツク海北岸・カムチャツカ半島からみた「サハリン・千島ルート」」『「サハリン・千島ルート」再考』，pp.61-94，北海道考古学会
高瀬克範 2016「資源利用から見た縄文文化と続縄文文化」小林謙一編『縄文時代の食と住まい』，pp.51-78，同成社。
高瀬克範 2017a「弥生文化の北の隣人―続縄文文化―」藤尾慎一郎編『弥生時代って，どんな時代だったのか』，pp.114-136，朝倉書店。
高瀬克範 2017b『北海道猿払村エサヌカ 2 遺跡出土の考古資料』北海道大学大学院文学研究科考古学研究室。
高瀬克範・福田正宏 2001「入舟遺跡出土の土器について―道央の終末期縄文土器と初期続縄文土器の編年―」『余市水産博物館研究報告』4，pp.59-68，余市水産博物館。
髙橋美鈴 2018「様似町冬島遺跡発掘調査報告」『様似郷土館紀要』1，pp.53-74。
髙橋美鈴 2020a「平成 30 年度様似町冬島遺跡発掘調査報告」『様似郷土館紀要』2，pp.31-52。
髙橋美鈴 2020b「令和元年度様似町冬島遺跡発掘調査報告」『様似郷土館紀要』2，pp.53-90。
髙橋美鈴 2021a「令和 2 年度様似町冬島遺跡発掘調査報告」『様似郷土館紀要』3，pp.1-8。
髙橋美鈴 2021b「冬島遺跡　北海道様似郡様似町」『アルカ通信』213，p.3。
竹原弘展 2020「冬島遺跡出土黒曜石製石器の産地推定」『様似郷土館紀要』2，pp.84-86。
種市幸生・土肥研晶 1993『声問大曲遺跡』稚内市教育委員会。
千代　肇 1968「北海道瀬棚郡兜野遺跡」『日本考古学年報』16，pp.109-110。
千代　肇 1978「弥生時代における恵山文化」『北奥古代文化』10，pp.54-60。
千代　肇ほか 1981『尾白内―続縄文遺跡の調査報告―』森町教育委員会。
西本豊弘 1981「須藤遺跡出土の動物遺存体」『斜里町文化財調査報告 I』，pp.173–176，斜里町教育委員会。
西本豊弘 1983「動物遺存体」『南有珠 6 遺跡』，pp.40–48，札幌医科大学解剖学第二講座。
西本豊弘 2020「冬島遺跡平成 30 年度調査出土の動物遺体」『様似郷土館紀要』2，pp.45-49。
羽賀憲二 1980「札幌市西区琴似二十四軒出土の土器」『北海道考古学会だより』8，ページなし（表紙裏）。
林　欣吾 1953「日本北地の古文化と種族」『ロシア人日本遠訪記』: 157-349，内外社。
パレオ・ラボ年代測定グループ 2020「放射性炭素年代測定」『様似郷土館紀要』2，pp.41-44。
福田正宏 1999「種屯内貝塚の晩期縄文土器と続縄文土器について」『海と考古学』1，pp.9-20。
福田正宏 2015「完新世日本列島北辺域における温帯性定着民の寒冷地適応史―北海道の縄文文化と「サハリン・ルート」―」『「サハリン・千島ルート」再考』，pp.3-32，北海道考古学会。
藤尾慎一郎 2009「弥生時代の実年代」西本豊弘編『新弥生時代のはじまり　第 4 巻　弥生農耕のはじまりとその年代』，pp.9-54，雄山閣。
藤本英夫 1961「北海道日高国新冠村大狩部の墳墓遺跡」『古代学』9，pp159-168。
松田宏介 2005「日高地方東部における続縄文期の土器様相―えりも町東歌別遺跡出土土器群の検討から―」『北海道考古学』41，pp.1-20。
松田宏介 2006「続縄文期における日高地方在地土器群の系譜―浦河町白泉遺跡 10 号ピット出土資料の位置づけ―」『北海道考古学』42，pp.61-74。
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, *51*(1), pp.337–360.
Reimer, Paula J., William E. N. Austin, Edouard Bard, Alex Bayliss, Paul G. Blackwell, Christopher Bronk Ramsey, Martin Butzin,

Hai Cheng, R. Lawrence Edwards, Michael Friedrich, Pieter M. Grootes, Thomas P. Guilderson, Irka Hajdas, Timothy J. Heaton, Alan G. Hogg, Konrad A. Hughen, Bernd Kromer, Sturt W. Manning, Raimund Muscheler, Jonathan G. Palmer, Charlotte Pearson, Johannes van der Plicht, Ron W. Reimer, David A. Richards, E. Marian Scott, John R. Southon, Christian S. M. Turney, Lukas Wacker, Florian Adolphi, Ulf Büntgen, Manuela Capano, Simon M. Fahrni, Alexandra Fogtmann-Schulz, Ronny Friedrich, Peter Köhler, Sabrina Kudsk, Fusa Miyake, Jesper Olsen, Frederick Reinig, Minoru Sakamoto, Adam Sookdeo, and Sahra Talamo 2020 The IntCal20 northern hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon 62(4):725–757.

Takase, K. 2020 Long-term marine resource use in Hokkaido, Northern Japan: new insights into sea mammal hunting and fishing, *World Archaeology*, 51(3), pp.408-428.

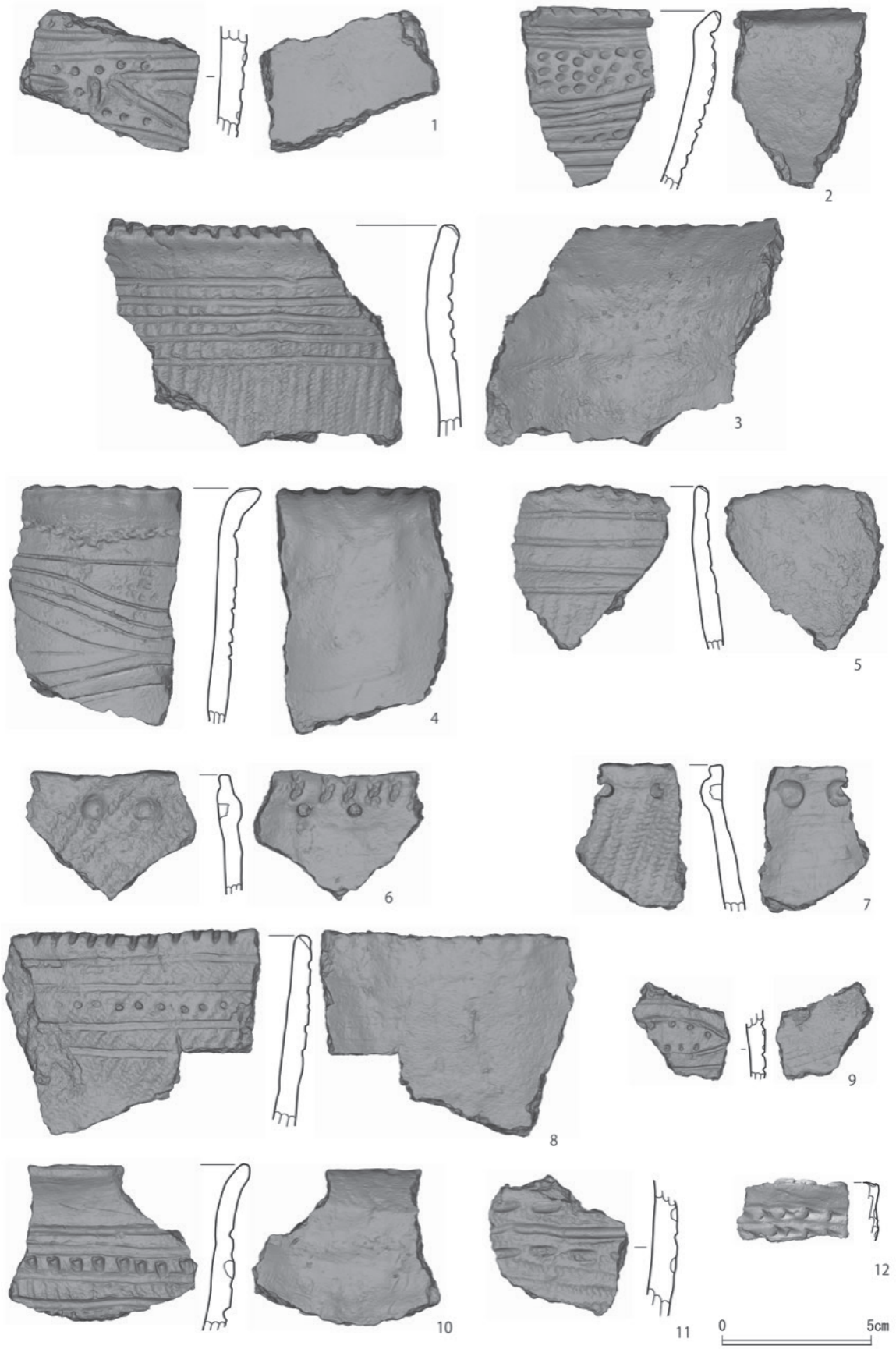


図１　冬島遺跡出土土器（1）

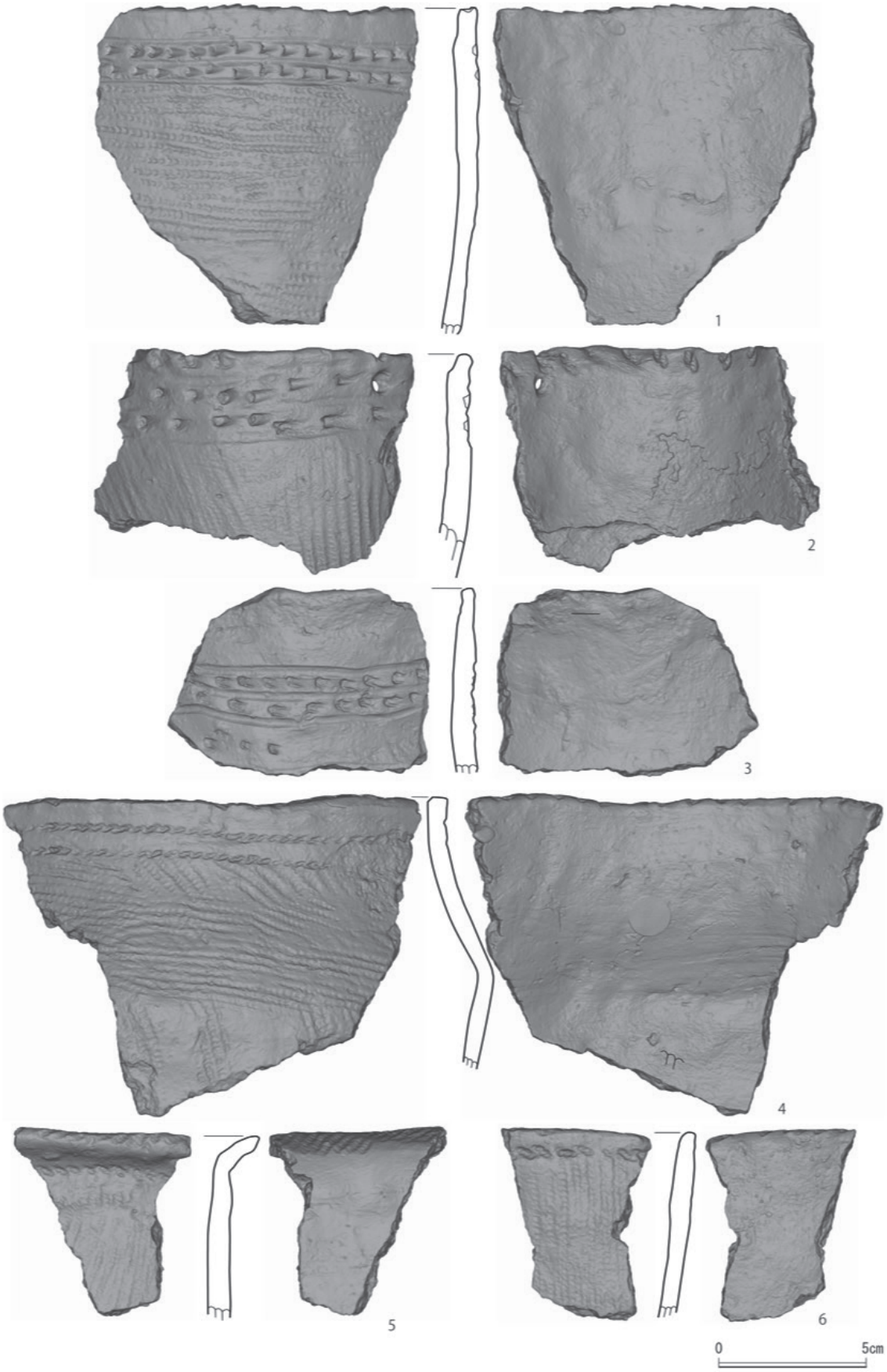


図２　冬島遺跡出土土器（2）

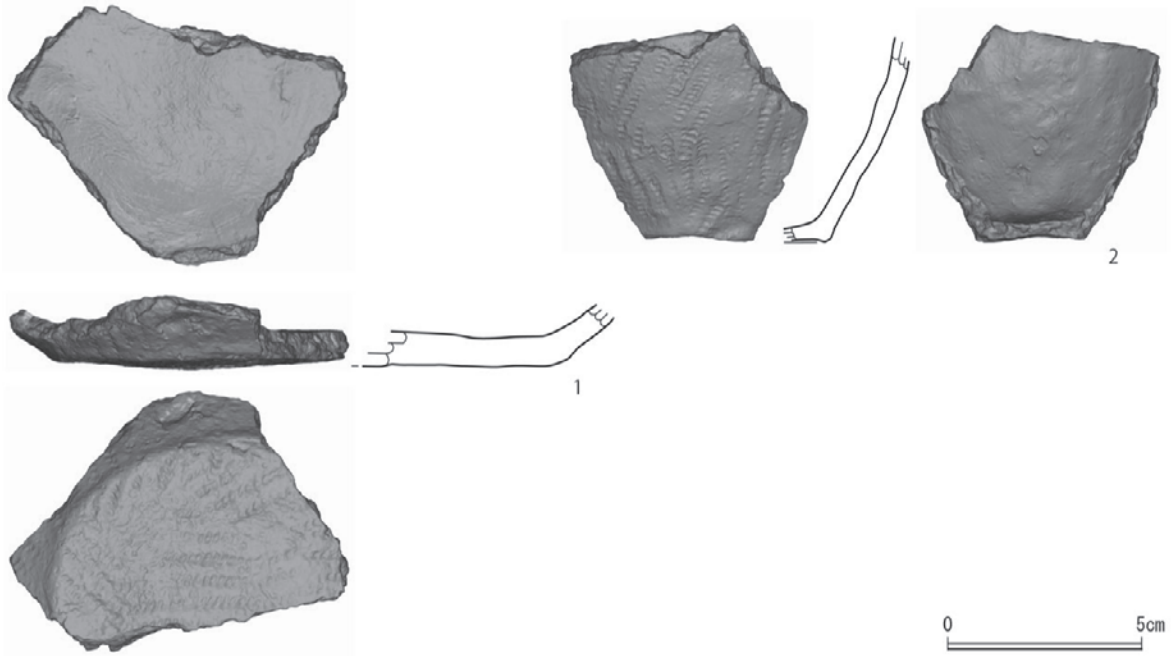


図３　冬島遺跡出土土器（3）

表１　冬島遺跡出土土器一覧

図番号	調査年	グリッド，遺構	層位	遺物No.	既報告図番号
図1:1	2019（R1）	A5	III	6475	
図1:2	2016 (H28)	B2, TP10	II	5357	髙橋2018，図版2:9
図1:3	2016 (H28)	B1, TP10	III	5357	髙橋2018，図版2:7
図1:4	2018 (H30)	TR1, P4	埋土	6428	
図1:5	2016 (H28)	A2, TP10	III	5357	髙橋2018，図版2:5
図1:6	2015 (H27)		II	5259	髙橋2018，図版1-1:1
図1:7	2016 (H28)	A2, TP10	III	5357	髙橋2018，図版2:6
図1:8	2016 (H28)	B1, TP10	III	5357	髙橋2018，図版2:8
図1:9	2015 (H27)		II	5259	髙橋2018，図版1-1:2
図1:10	2016 (H28)	A1, TP10	III	5357	髙橋2018，図版2:2
図1:11	2019（R1）	礫集中1	III	6475	
図1:12	2019（R1）	A5	III	6475	
図2:1	2019（R1）	A5	III	6475	
図2:2	2018 (H30)	TR1	III	6428	
図2:3	2019（R1）	A5	III		
図2:4	2019（R1）		III	14	
図2:5	2016 (H28)	A1, TP10	III	5357	髙橋2018，図版2:3
図2:6	2016 (H28)	B2, TP10	III	5357	髙橋2018，図版2:10
図3:1	2016 (H28)	A1, TP10	III	5357	髙橋2018，図版2:1
図3:2	2016 (H28)	A1	III	5357	髙橋2018，図版2:4

表２　冬島遺跡出土土器タイプ一覧

（濃い網掛け：札幌市 H508 遺跡 4 層と共通した要素をもつタイプ；薄い網掛け：同遺跡 3 層と共通した要素をもつタイプ；網掛けなし：同遺跡 3・4 層の双方と共通した要素をもつタイプ）

		方位形態文様				施文具形態文様					地紋			
	層位	変形工字文	波状工字文	波状・曲線沈線文	横走沈線文	横位列点文	充填列点文	横位縄側面圧痕	突瘤文（IO）	突瘤文（OI）	縦走・斜行縄文	横走縄文	横走縄文＋縦走・斜行縄文	タイプ
図1:1	III	＋			＋		＋							タイプ1
図1:2	II		＋		＋		＋							タイプ2
図1:4	III			＋				＋						タイプ3
図1:9	II			＋			＋							タイプ4
図1:3	III				＋						＋			タイプ5
図1:5	III				＋						＋			
図1:8	III				＋	＋					＋			タイプ6
図1:10	III				＋	＋					＋			
図2:2	III				＋	＋					＋			
図1:12	III				＋	＋								タイプ8
図2:3	III				＋	＋								
図1:11	III				＋	＋						＋		タイプ7
図2:1	III				＋	＋						＋		
図2:5	III							＋			＋			タイプ9
図2:6	III							＋			＋			
図2:4	III							＋					＋	タイプ10
図1:6	II								＋		＋			タイプ11
図1:7	III									＋	＋			タイプ12
H508	3			＋	＋	＋		＋			＋	＋	＋	
H508	4	＋		＋	＋	＋	＋	＋		＋	＋			

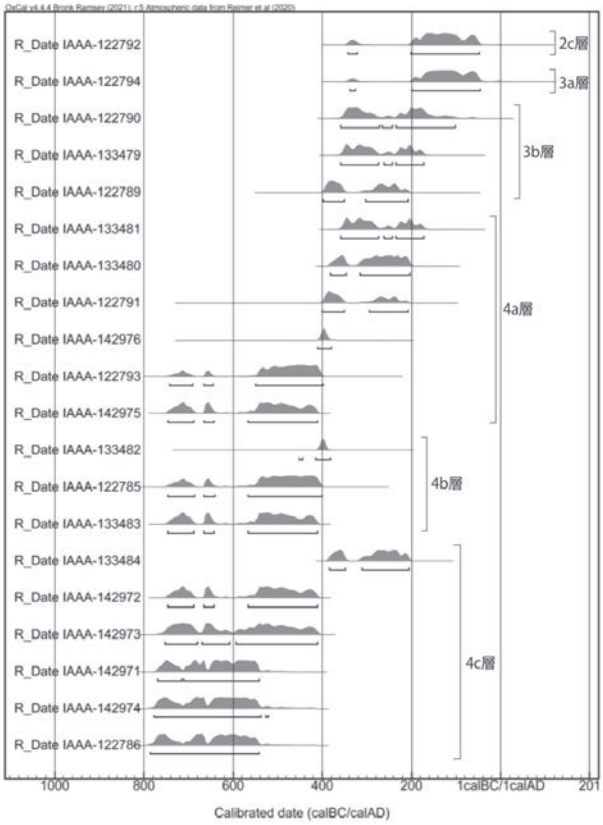


図４　H508 遺跡の較正年代（札幌市埋蔵文化財センター2016, Reimer et al. 2020, Bronk Ramsey 2009 をもとに筆者作成）

冬島遺跡調査報告 3

北海道様似郡様似町冬島遺跡出土石器群の評価

(An evaluation of the lithic assemblage from the Fuyushima site in Hokkaido)

髙倉　純[1]（TAKAKURA Jun）

はじめに

本稿では、北海道様似郡様似町冬島遺跡から出土した石器群における石器石材や石器の型式組成、石器製作技術を概観し、本遺跡が所在する日高地域および周辺諸地域の石器群との関係のなかでその位置づけを考察することを目的とする。

冬島遺跡は、冬島川とポンサヌシベツ川に挟まれた標高 38m 前後の海岸段丘上に立地する。本遺跡では昭和 40 年代から断続的に数次にわたって発掘調査が実施されてきた。発掘調査では、かならずしも詳細は明らかとはなっていないが、竪穴住居址や土坑、T ピット、焼土等の確認が報告されている。ここでは平成 26 年度以降、様似町教育委員会の発掘調査によって出土した石器資料を対象として検討をおこなっていく（髙橋 2018、2020a、2020b、2021）。様似町教育委員会による発掘調査の出土資料には、続縄文時代前半期に帰属する土器資料が含まれていることが確認されている（大泰司 2021）。筆者が石狩低地帯北部や北海道東部の続縄文時代石器群を検討した際の時期区分に対応させるとすれば（髙倉 2006、2009）、続縄文時代のⅠ期からⅡ期にかけての時期に帰属していることになる。現状では、発掘調査が遺跡内の限られた範囲のみを対象としており、本遺跡内での占地活動の時空間推移について、かならずしも詳細な検討が可能なわけではない。ここでは取り扱う石器資料に関して、続縄文時代前半期のⅠ期からⅡ期に相当する時期のものを主体としていることを前提として以下の検討を進めていきたい。調査トレンチごとでの出土土器との共伴関係の検討によって、あらためて細分時期との対応関係については将来的に検証していく必要がある。

本遺跡から出土した続縄文時代前半期の石器群の位置づけを、地域間の関係のなかで考察することの意義とは何か。続縄文時代前半期に関しては、石器にとどまらず様々な文化形質において有意な地域差が道内から見出せることが重視されてきた（藤本 1982 など）。そこで問題とされたのは、北海道のなかでも北部、東部、中央部、南部といった大地域相互間での差異である。しかし、そうした大地域間の境界に地理的に位置する遺跡においてはどのような人類活動が営まれていたのか、それは当該期のヒトとヒトが取り結ぶ関係（社会関係）の復元に対していかなる示唆を与えるのか、といった点について、これまであまり注目が向けられてこなかったことは確かである。北海道東部と中央部との場合、当該期の濃密な遺跡分布が確認されているオホーツク海南部・根室水道・太平洋東部の沿岸域や石狩低地帯に対して、石狩川上流域あるいは冬島遺跡が所在する日高地域の諸遺跡がそうした議論の対象になり得る。石器資料の検討からは、石器石材の調達や石器型式・製作技術の関連性の把握などを通して、そうした議論の進展に重要な寄与を果たしていくことが可能であろう。冬島遺跡の出土資料は、こうした問題の議論の進展にとってきわめて重要な意義をもつものと考えられる。

石器石材

表 1～6 に年度ごとの調査で得られた石器資料における石器石材と石器型式の集計を示した。表 7 はその総計を示す。平成 30 年度や平成 31・令和元年度の調査出土資料における集計結果についてはす

1.北海道大学埋蔵文化財調査センター

でに報告されている（髙橋 2020a、202b）。今回の集計は、その際の結果と比較を可能にするため、同一の基準・名称で分類したものにもとづく。

23,876 点が出土している剥片石器の石材には、点数の多い順からみていくと、黒曜石、頁岩、メノウ、チャート、泥岩、砂岩、鉄石英、緑色泥岩、安山岩、粘板岩、石英、蛇紋岩、緑色片岩、粗粒玄武岩、スコリアの利用が認められた。全出土石器資料に対する比率では、黒曜石が 85.3%に達し、頁岩が 13.8%、メノウが 0.3%と続く。剥片石器に関しては、黒曜石と頁岩によって大半が占められていることがわかる。黒曜石・頁岩以外の石材に関しては、点数が 83 点以下、比率で 0.3%以下となり、きわめて僅かしか出土していないことになる。冬島遺跡に占地していた住民にとっては、生産財として黒曜石と頁岩の入手がきわめて大きなウェートを占めるものであったことが推察できる。

以下、それぞれの石材の産地について言及していくこととする。なお、ここでは直線距離で 100km 以上離れた産地を遠距離・遠隔地、50～100km 離れた産地を中距離・中隔地、50km 以下の産地を近距離・隣接地に位置すると便宜的に区分する（林 2004:265）。

エネルギー分散型蛍光 X 線分析計を利用した黒曜石の原産地推定分析は、本遺跡では 15 点の資料を対象に実施されている（髙橋 2020b）。対象としている石器は石鏃が 14 点、両面調整石器が 1 点である。分析の結果、4 点が上士幌、11 点が置戸エリア産と推定された。1 点分析された両面調整石器は置戸エリア産と推定されている。分析結果からは、いずれも北海道東部の産地から黒曜石がもたらされていたことが明らかとなった。これらの産地は、本遺跡から直線距離で約 140～180km 離れており（ただし上士幌エリアに関しては、産地から河川を流下した採集可能地を対象とすると 100～140km の距離となる）、最も利用されている石器原料が遠距離・遠隔地からもたらされていることになる。

比較の対象として、石狩低地帯北部に所在する北海道大学構内の遺跡の分析事例を取り上げる（髙倉 2013）。ここでは、続縄文時代の石器群において通時的に赤井川地区産の黒曜石が多量に用いられていた。また、北海道東部の産地としては、白滝地区産の黒曜石の利用が続縄文時代前半期では一定の割合で認められたのに対し、十勝・置戸地区産の利用は僅かであることが判明している。本遺跡で確認された傾向とは明らかに異なることが注目される。石狩低地帯北部と日高地域では、北海道東部から黒曜石を入手する際のルートや石器原料の供給を仰ぐ相手に違いがあったことになる。本石器群での分析点数が少ないため、石器群全体での利用産地の傾向を、この分析結果がどこまで反映しているのかは確定できないが、上士幌や置戸エリア産の黒曜石が多く利用されていた可能性が提起されたことは重要であろう。上士幌や置戸エリア産の黒曜石利用が主体を占めるという傾向は、釧路・根室地域の続縄文時代前半期石器群で認められたものである（髙倉他 2013）。

黒曜石の次に多く利用されている頁岩は、灰褐色・茶褐色を呈し、珪質化の発達がそれ程顕著ではないものを主体としている。本遺跡の帰属時期からみて同時期もしくは先行する時期に占地されていたとみられるえりも町油駒遺跡においても、ナイフやスクレイパー、両面調整石器等において頁岩の利用が一定数認められる（赤石編 2000）。冬島遺跡の近隣では、直線距離にして約 40～80km 離れた三石川、静内川、厚別川、門別川の流域に分布する新第三系の静内層や元神部層で硬質頁岩の産出が確認できる（松野・山口 1958、佐藤・山口 1960、和田他 1992）。また冬島遺跡から直接距離で約 100～120km の位置にある鵡川中流域に分布する新第三系の軽舞層においても硬質頁岩の分布が確認できる（高橋・和田 1987）。軽舞層の硬質頁岩は、緻密な岩質で、ノジュールを伴うことがある。一方、十勝地域の太平洋沿岸域においても新第三系の硬質頁岩の分布が知られている。冬島遺跡から直接距離で約 40～80km の位置にある歴舟川流域の尾田村層や生花苗川流域の生花苗層では、石器に使用可能な緻密で珪質化が進行した硬質頁岩が少量ながらも産出している（髙倉 2006a）。日高地域における硬質

頁岩の分布や産状については、岩石学・考古学的観点からの詳しい調査が必要であり、ここで冬島遺跡出土の頁岩製石器の由来について特定の言及はできないが、100km 前後圏内の中距離・中隔地の産地からもたらされた可能性があることを指摘しておきたい。

僅かに確認されている堆積岩や火成岩、変成岩の産地について手がかりを得ることは難しい。本遺跡から約 20km の距離圏内には、日高帯の冬島変成岩類や岡田ユニット、ナイ沢ユニット、蛇紋岩、空知—エゾ帯の蝦夷累層群等が分布しており、チャートや泥岩、砂岩、蛇紋岩、緑色片岩、玄武岩といった様々な岩石の産出が確認できる（蟹江・酒井 2002）。さらに約 50km の距離圏内まで拡げると、粘板岩の分布も確認できる（松下・鈴木 1962）。これら本遺跡の近距離・隣接地で採集できる岩石が石器製作に適合する石質や産出量を示すのかどうかは、野外調査にもとづいた検討をおこなうことが必要であるが、多様な岩石が分布する環境に本遺跡が立地していることは明らかである。

それぞれの石材において自然面が認められる資料の点数・比率、および自然面の状態を調べることによって、どのような採集地から本遺跡に石材がもたらされたのか、本遺跡内ではどのような石器製作作業が実施されていたのか、についての把握が可能となる。今後の課題としておきたい。

礫石器・礫としては、総計 134 点が確認されている。不明 64 点を除くと、砂岩が 40 点と最も多く、次いで軽石 9 点、頁岩 4 点、緑色泥岩 4 点、鉄石英 3 点、安山岩 2 点、チャート 2 点、石鉄鉱 2 点、斑れい岩 1 点と続く。

石器の型式組成と製作技術

a. 黒曜石

黒曜石製の二次加工石器としては、石鏃 145 点、両面調整石器 133 点、スクレイパー16 点、有柄ナイフ 13 点、ピエスエスキーユ 7 点、石槍 6 点、石錐 5 点、掻器 2 点が確認されている。石核が 7 点、棒状原石が 1 点出土している。

石鏃は 145 点出土している。そのなかで完形資料 77 点を抽出し、基部形態をもとに、a 類: 無茎平基、b 類: 無茎凹基、c 類: 有茎、d: 木葉形に分類した。結果的に a 類: 14 点、b 類: 56 点、c 類: 4 点、d 類: 3 点であった。無茎の凹基（図 1: 1-7）が最も多く、次いで無茎の平基（図 1: 8）が多く認められる一方で、木葉形（図 1: 9）や有茎のものの割合は少ない。続縄文時代前半期の石器群における石鏃の基部形態を通観すると、北海道南部には有茎のものが多いのに対し、中央部から東部にかけて無茎のものの比率が高まることが知られている（内山 1998）。本遺跡の石鏃の形態は、北海道中央部・東部を中心に分布するものの傾向と合致する。

両面調整石器は 133 点出土している。これらの両面調整石器には、サイズや剥離面の状態において多様性が認められるため、異なるリダクションの進行段階を反映しているものが含まれていると考えられる。19,901 点出土しているフレイクには、いわゆるポイント・フレイクを多く含まれていることから、本遺跡内で両面調整石器のリダクションがまとまって進められていたことは間違いない。こうした両面調整石器は、石核と石器利器という二つの側面を兼ね備えていたものであったとみてよかろう。すなわち、リダクションの過程で剥離された剥片は、スクレイパーや石錐、掻器等の中・小型の剥片石器の素材となっていたとともに、それ自体が石器利器として使用され、さらにリダクションが進行すると両面に調整がなされて作出されている石槍や有柄ナイフに変形されていったものもあったことが推定できる。こうしたリダクションの解明には、接合資料の検出やサイズ・剥離面構成等の属性分析が必要である。こうした黒曜石製の両面調整石器の組成は、北海道東部の続縄文時代前半期石器群が有している顕著な特徴の一つであり、石狩低地帯の同時期の石器群とは対照的な傾向を示す（髙

倉 2009、2010）。

有柄ナイフは 13 点出土している。表裏両面が平坦な剥離により成形がなされ、基部端部は平縁を呈し、明瞭な茎部の作り出しが認められ、先端部は尖頭状を呈するものを基本的な形態としている（図 1: 10～14）。茎部の張り出しから先端部までの長さは個体によってばらつきがあり、これは使用による刃部再生を受けた頻度を反映しているのであろう。こうした形態的な特徴は、釧路市興津遺跡（澤編 1978、1979、澤・西編 1977）や釧路市三津浦遺跡（澤・西編 1976）、釧路町天寧 1 遺跡（鈴木編 2011）等、釧路地域における当該期の石器群において認められる特徴と共通している。

石錐は 5 点出土している。フリーフレイキングによって割り出された剥片を素材に、その端部に刃部が作出されている（図 1: 16）。

本石器群では、ピエスエスキーユ 7 点の組成も認められた。剥離痕跡の観察からは、両極打撃法による剥離作業が実施されていたことは明らかである。石狩低地帯北部の続縄文時代前半期石器群では、小型の黒曜石原石から両極打撃法によって楔形石器や石鏃、一部の石錐や掻器の素材がもたらされるという系列が認められた（髙倉 2006b）。本石器群では、ピエスエスキーユ以外の剥片石器において、両極打撃法から剥離されたものが素材に主体的に利用されているという関係性は見出せなかった。したがって、両極打撃法と特定の石器型式、あるいは石器石材との対応関係は、本石器群では認められなかったことになる。この点も北海道東部の同時期の石器群との間で共通する特徴となっている（髙倉 2009）。

b. 頁岩

頁岩製の二次加工石器としては、両面調整石器 8 点、スクレイパー7 点、石錐 4 点、有柄ナイフ 3 点、つまみ付きナイフ 3 点、石匙 2 点、ピエスエスキーユ 2 点、掻器 1 点、石鏃 1 点が確認されている。石核は 3 点出土している。つまみ付きナイフや石匙のように頁岩製だけが確認できるものもあるが、多くの石器型式では黒曜石と頁岩の両者が利用されて製作されており、石器型式と石材との間での排他的な対応関係は見出せなかった。

黒曜石とは異なり石鏃の組成は少なかった。一方で、両面調整石器やスクレイパー等のより大型の石器に利用されているという傾向が認められる。頁岩のフレイクは 3,208 点が確認されており、それらのなかにはいわゆるポイント・フレイクが多く含まれている。このことからみて、両面調整石器からの剥片剥離が遺跡内で実施されていたことが指摘できる。棒状で両端が刃部となっている石錐（図 1: 17）や掻器等、小型の剥片を素材としているものは、両面調整石器から剥離された剥片が素材に利用されている可能性がある。一方でスクレイパー（図 1: 15）、つまみ付きナイフ（図 1: 18）、有柄ナイフ、石匙には大・中型の剥片が素材とされており、そうした素材の剥離作業が本遺跡内で実施されていたのかどうかは不明である。

c. その他

メノウ製の二次加工石器としては、石鏃 2 点、両面調整石器 2 点、スクレイパー1 点が認められた。それ以外には、緑色泥岩製の二次加工石器として磨製石斧 6 点、鉄石英製の二次加工石器として両面調整石器 1 点、チャート・砂岩・蛇紋岩・スコリア製の二次加工石器としてスクレイパーがそれぞれ 1 点認められた。各石材に帰属する資料の出土点数はきわめて僅かであり、磨製石斧の緑色泥岩製と泥岩製を含め、出土したフレイクの点数が僅かであることも勘案すると、これらの石材が原石の状態で本遺跡に持ち込まれ、そこから剥離作業が始まっていたとは考え難い。いずれもある程度剥離が進行した状態の石核で、もしくは製品の状態で持ち込まれていたと考えるのが妥当であろう。

礫石器としては、砂岩製の砥石 2 点、石鋸 5 点、頁岩製の砥石 4 点が確認されている。また石製品

として緑色泥岩製のものが 2 点確認されている。

考察

本石器群で利用されている石器石材として、剥片石器では黒曜石が 85%を超す高い比率を占め、頁岩がそれに次いでいた。黒曜石は、磨製石斧や石匙、つまみ付ナイフを除くすべての石器利器の素材になっており、冬島遺跡の住民にとっては、占地のなかでの様々な活動を遂行していくうえでの重要な物資となっていたことは間違いない。これらの石器原料の入手がどのような過程を経たものであるのかを把握することは、冬島遺跡の住民の資源利用やそれにかかわる社会関係を理解する重要な手がかりとなろう。

頁岩に関しては、今後の調査と検討を要するものの、中距離・中隔地の産地からもたらされた可能性があることを述べたが、黒曜石に関しては、産地推定分析から、遠距離・遠隔地に位置する北海道東部の上士幌や置戸エリアの産地に由来することが明らかとなっている。分析サンプルを増やす必要性はあるものの、石狩低地帯北部の同時期の石器群で赤井川と白滝エリア産の黒曜石が主に利用されていることとは対照的な傾向を示している点が注目を要する。

湧別川流域の白滝周辺では、遠軽町旧白滝 8 遺跡（髙橋他 2004）、新野上 2 遺跡、栄野 1 遺跡（髙橋他 2005）での発掘調査において、続縄文時代前半期の石器群が検出されており、様々な形態の石核からの剥片剥離とともに、両面調整石器のリダクションの実施が確認されている。上士幌や置戸エリアの周辺の河川上流域においても、同様の石器製作作業が実施されていた続縄文時代前半期の遺跡が残されている可能性は当然考えられてよい。ただし、これまでそうした事例が発掘調査においては確認されておらず、同じ上士幌や置戸エリアの産地由来の黒曜石をさかんに利用していた続縄文時代前半期の釧路・根室地域（髙倉他 2013）や日高地域の住民が、どのようにしてその調達を実現させていたのかについては、手がかりがとぼしい。冬島遺跡の住民を主体としたメンバーが、あるいは近隣の複数のムラがメンバーを束ねて遠征隊を組織し、遠距離・遠隔地の産地まで直接赴いて調達をおこなっていたのか。または黒曜石産地を管理・占有していた住民との接触を介して入手していたのか。さらには釧路・根室地域に遺跡を残していた住民と共同で産地を管理・占有していたということはなかったのか。これらの問いを確かめる手段は現在のところない。

しかし、ここで注意を喚起しておきたいのは、利用している黒曜石の産地だけにとどまらず、石器の型式組成や石器製作技術においても、冬島遺跡の石器群と北海道東部、とくに釧路地域の石器群とは様々な共通点を示している、ということである。石鏃や有柄ナイフの形態的特徴、あるいは両面調整石器のリダクションや両極打撃法と石器型式・石材との対応関係等において、石狩低地帯の石器群よりむしろ釧路地域の石器群との間で多くの共通点が見出せた。紙数の制約から本稿で詳しい言及はできないが、本遺跡と占地時期が同時もしくは先行していると想定される油駒遺跡出土の石器群も同様の傾向を示しているとみることができる。

以上のような共通点に対し、日高地域南部は、続縄文時代前半期において北海道東部の「文化圏」に含まれていた、ないしは「文化的な影響圏にあった」と述べるだけでは、確認された現象を言い換えただけの記述になってしまう。社会関係の文脈に即して、より具体的に日高地域南部のムラのメンバーと釧路地域のムラのメンバーが、石器利器とその製作にかかわる知識やノウハウを共有するような接触の関係性を取り結んでいた、という解釈を採り得ることに眼を向けていかなければならない。十勝地域の太平洋沿岸域における続縄文時代前半期の遺跡分布の欠落にもとづく限り、この交渉の網の目は、相当の面積にわたる空閑地を超えて結ばれていたことになる。こうした技術の共有をもたら

した関係性の成立を前提にすると、冬島遺跡の住民による上士幌や置戸エリア産の黒曜石の入手についても、釧路地域の住民による同じ産地の黒曜石利用とまったく無関係に遂行されていたとは考え難いことになろう。冬島遺跡の住民にとって黒曜石は生産財として必須の物資であったがゆえに、定期的に接触を保って安定的な調達を維持していたという事情が働いていたのではないか。

領域というものの働きには、ある人間が占有（あるいは所有）している土地とともに、人間が必要とする物資の確保があるとするならば、領域には「人間と土地がじかに結びついている範囲（＝せまい意味の領域）」と「ほかの人間を仲立ちとして間接に結びついている範囲（＝ひろい意味の領域）」の区別が可能である。林謙作（2004:238-9）は、周期的に繰り返し利用する土地として前者を「核領域」と呼び、後者を「交渉圏」と呼んだ。この用語法に倣うならば、冬島遺跡あるいは日高地域南部の住民にとっての交渉圏は、相当の面積にわたる空閑地を超えて北海道東部の広範囲な区域に及んでいたことになる。交渉圏の成立を明らかにするためには、林による一連の研究の経過が示すように、遺跡で発見されている物資の産地とその調達の過程を把握することが重要であるが、それとともに、交渉圏において住民の相互がどのような状況下で接触し、いかなる関係を取り結んでいたのかを探る試みも議論の進展には有益な示唆をもたらすに違いない。石器利器とその製作技術に関する知識やノウハウの共有は、「収斂進化」の過程を想定しない限り、接触した製作者相互間で何らかの技術の伝習過程が生じていたことを反映するものである。技術の伝習と技量の習熟の過程（髙倉 2020）は、核領域において継続的に生活をともにしたメンバー間で起こっていたとともに、交渉圏において接触した住民相互の間でも双方向的に起こり得たものと考えねばならない。そうした観点から冬島遺跡と釧路地域における続縄文時代前半期石器群の共通点をあらためて考えるならば、石器利器の形態的諸特徴だけにとどまらず、石器のリダクションの過程においても多くの共通点が見出せたことは、交渉圏における住民相互の接触の状況や製作者相互間の関係を解釈していくうえで重要な意味があろう。

おわりに

本稿では、冬島遺跡出土の石器群の検討を通して、物資としての石材原料の入手、石器利器とその製作にかかわる知識やノウハウの共有という観点から、日高地域南部と釧路地域の住民との間での交渉圏の成立に着目する議論を提示してきた。石器石材の産地推定や石器群間の比較に関しては、限られたデータにもとづいた議論に終始せざるを得なかったが、今後の分析に取り組んでいくにあたっての基本的な論点は提示できたのではないかと考える。冬島遺跡での生業資源利用の実態解明については、動植物遺存体の検討結果の提示を待ちたいが、それによって本遺跡での占地がどのような経緯によってなされていたのかがより具体的に明らかになれば、冬島遺跡の住民における核領域の成立と交渉圏との関係についても、新たな視点からの議論が可能となろう。

当然ながら冬島遺跡の住民が、ムラの外の住民との間で取り結んでいた社会関係の網の目は、釧路地域の住民との間のものだけに限定されることはなかったであろう。北海道中央部や南部、あるいは本州の住民との間での多層的な交渉圏の成立も視野にいれ、土器資料（その一端については大泰司 2021 を参照）や骨角器資料の検討結果とすり合わせていくことが求められる。そこでは、冬島遺跡の住民が取り結んでいた交渉相互の関係性をふまえた社会的分業の問題を視野にいれていく必要がある。

謝辞

本稿で示した実測図や一覧表に関しては、様似町教育委員会の髙橋美鈴氏から提供をいただいた。本稿執筆にいたる貴重な資料検討の機会を賜ったこともあわせ、記して御礼を申し上げたい。

引用文献

赤石慎三編　2000『油駒遺跡』えりも町教育委員会

内山真澄　1998「続縄文期における石鏃の変化」『時の絆』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行会、167-179 頁

大泰司統　2021「冬島遺跡出土の特徴的な土器」『様似郷土館紀要』第 3 号、9-16 頁

蟹江康光・酒井　彰　2002『浦河地域の地質　地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）』産総研地質調査総合センター

佐藤博之・山口昇一　1960『5 万分の 1 地質図幅説明書　春立』地質調査所

澤　四郎編　1978『釧路市興津遺跡発掘報告Ⅱ』釧路市郷土博物館

澤　四郎編　1979『釧路市興津遺跡発掘報告Ⅲ』釧路市郷土博物館

澤　四朗・西　幸隆編　1976『釧路市三津浦遺跡発掘報告』釧路市郷土博物館

澤　四郎・西　幸隆編　1977『釧路市興津遺跡発掘報告Ⅰ』釧路市郷土博物館

鈴木宏行編　2011『釧路町天寧 1 遺跡（2）』財団法人北海道埋蔵文化財センター

髙倉　純　2006a「十勝平野周辺域における石器石材の分布と産状（2）―十勝平野南部の堆積岩―」『帯広百年記念館紀要』第 24 号、11-19 頁

髙倉　純　2006b「石狩低地帯北部の続縄文時代石器群」林謙作編『ムラと地域の考古学』同成社、147-171 頁

髙倉　純　2009「北海道東部の続縄文時代石器群」『北方人文研究』第 2 号、23-42 頁

髙倉　純　2010「北海道の縄文時代から続縄文時代前半期にかけての石器群の変遷」『北海道考古学』第 46 輯、43-58 頁

髙倉　純　2013「黒曜石はどこから運ばれてきたのか？―北大構内遺跡における縄文晩期～続縄文の黒曜石製石器原産地分析―」『第 6 回北海道大学埋蔵文化財調査室調査成果報告会要旨集』北海道大学埋蔵文化財調査室、11-16 頁

髙倉　純　2020「石器製作者の技量とその伝習過程への考古学的アプローチ」『物質文化』第 100 号、75-94 頁

髙倉　純・金成太郎・杉原重夫　2013「北海道東部の続縄文時代における黒曜石利用―釧路・根室地域の遺跡を対象とした原産地推定分析にもとづいて―」『考古学と自然科学』第 64 号、27-45 頁

髙橋和樹・鈴木宏行・直江康雄　2005『遠軽町栄野 1・新野上 2 遺跡』財団法人北海道埋蔵文化財センター

髙橋和樹・鈴木宏行・直江康雄・立田　理　2004『白滝遺跡群 V』財団法人北海道埋蔵文化財センター

高橋功二・和田信彦　1987『5 万分の 1 地質図幅説明書　穂別』北海道立地下資源調査所

髙橋美鈴　2018「様似町冬島遺跡調査報告」『様似郷土館紀要』第 1 号、53-73 頁

髙橋美鈴　2020a「平成 30 年度様似町冬島遺跡発掘調査報告」『様似郷土館紀要』第 2 号、31-52 頁

髙橋美鈴　2020b「令和元年度様似町冬島遺跡発掘調査報告」『様似郷土館紀要』第 2 号、53-90 頁

髙橋美鈴　2021「令和 2 年度様似町冬島遺跡発掘調査報告」『様似郷土館紀要』第 3 号、1-8 頁

林　謙作　2004『縄紋時代史Ⅰ』雄山閣

藤本　強　1982「続縄文文化概論」加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究 6　続縄文・南島文化』雄山閣、10-20 頁

松下勝秀・鈴木　守　1962『5 万分の 1 地質図幅説明書　農屋』北海道開発庁

松野久也・山口昇一　1958『5 万分の 1 地質図幅説明書　静内』北海道開発庁

和田信彦・高橋功二・渡辺　順・蟹江康光　1992『5 万分の 1 地質図幅説明書　三石』北海道立地下資源調査所

表 1　平成 26 年度調査で出土した石器資料

石材/器種	剥片石器			礫石器・礫	総計
	Rフレイク	フレイク	剥片石器集計	礫	
黒曜石		54	54		54
頁岩	1	7	8		8
不明			0	11	11
総計	1	61	62	11	73

表 2　平成 27 年度調査で出土した石器資料

石材/器種	剥片石器								礫石器・礫	総計
	石鏃	石槍	両面調整石器	石錐	スクレイパー	Rフレイク	フレイク	剥片石器集計	礫	
黒曜石	2	1	10	1	4	18	506	542		542
頁岩			1			2	49	52		52
砂岩							1	1	1	2
緑色片岩							1	1		1
チャート							1	1		1
総計	2	1	11	1	4	20	558	597	1	598

表 3　平成 28 年度調査で出土した石器資料

石材/器種	剥片石器													礫石器・礫				総計
	石鏃	石槍	両面調整石器	石錐	スクレイパー	Rフレイク	フレイク	石核	磨製石斧	ピエスエスキーユ	掻器	つまみ付ナイフ	剥片石器集計	礫	砥石	加工痕のある礫	礫石器・礫集計	
黒曜石	17		18	1	1	31	5452						5520				0	5520
頁岩						14	791						805				0	805
砂岩							1						1	2			2	3
メノウ							10						10	1			1	11
安山岩													0				0	0
石英													0				0	0
緑色泥岩													0				0	0
不明							1						1	12	1	1	14	15
総計	17	0	18	1	1	45	6255	0	0	0	0	0	6337	15		1	17	6354

表 4　平成 30 年度調査で出土した石器資料

石材/器種	剥片石器																礫石器・礫					総計
	石鏃	石槍	両面調整石器	石錐	スクレイパー	Rフレイク	フレイク	石核	磨製石斧	ピエスエスキーユ	掻器	つまみ付ナイフ	微細剥離剥片	石匙	棒状原石	剥片石器集計	礫	砥石	加工痕のある礫	不明	礫石器・礫集計	
黒曜石	19		28			9	5276	2			1		3		1	5339					0	5339
頁岩			2		2	2	306	2						2		316		4			4	320
砂岩					1		1									2	9				9	11
メノウ							5									5	1				1	6
安山岩							1									1	1				1	2
緑色泥岩																0	1				1	1
軽石																0	2				2	2
蛇紋岩					1											1					0	1
斑れい岩																0	1				1	1
チャート							1									1					0	1
赤鉄鉱																0	2				2	2
不明			1				1									2	21			5	26	28
総計	19	0	31	0	4	11	5591	4	0	0	1	0	3	2	1	5667	38	4	0	5	47	5714

表 5　平成 31 年度調査で出土した石器資料

石材/器種	剥片石器															礫石器・礫						総計
	石鏃	石槍	両面調整石器	石錐	スクレイパー	Rフレイク	フレイク	石核	微細剥離のある石器	磨製石斧	ピエスエスキーユ	掻器	つまみ付ナイフ	有柄ナイフ	剥片石器集計	礫	砥石	石のこ	石製品	加工痕のある礫	礫石器・礫集計	
黒曜石	106	5	77	3	11	57	8597	5	7		7	1		13	8889						0	8889
頁岩	1		5	4	5	27	2042	1	3		2	1	3	3	2097						0	2097
砂岩							17								17	21	2	5			28	45
メノウ	2		2		1	1	62								68	1					1	69
安山岩							4								4	1					1	5
石英						1	1								2						0	2
緑色泥岩							7			6					13	1			2		3	16
鉄石英			1				16	1							18	3					3	21
泥岩							20			1					21						0	21
粗粒玄武岩							1								1						0	1
粘板岩							4								4						0	4
軽石															0	7					7	7
チャート					1		25								26	2					2	28
スコリア					1										1						0	1
不明	1						20								21	13					13	34
総計	110	5	85	7	19	86	10816	7	10	7	9	2	3	16	11182	49	2	5	2	0	58	11240

表 6　令和 2 年度調査で出土した石器資料

石材/器種	剥片石器			総計
	石鏃	Rフレイク	フレイク	
黒曜石	1	1	16	18
頁岩	0	0	13	13
総計	1	1	29	31

表 7　平成 26 年～令和 2 年度調査で出土した石器資料の総計

石材/器種	剥片石器																		礫石器・礫							総計
	石鏃	石槍	両面調整石器	石錐	スクレイパー	Rフレイク	フレイク	石核	微細剥離のある石器	磨製石斧	ピエスエスキーユ	掻器	つまみ付ナイフ	有柄ナイフ	微細剥離剥片	石匙	棒状原石	剥片石器集計	礫	砥石	石のこ	石製品	加工痕のある礫	不明	礫石器・礫集計	
黒曜石	145	6	133	5	16	116	19901	7	7		7	2		13	3		1	20362							0	20362
頁岩	1		8	4	7	46	3208	3	3		2	1	3	3		2		3291		4					4	3295
砂岩					1		20											21	33	2	5				40	61
メノウ	2		2		1	1	77											83	3						3	86
安山岩							5											5	2						2	7
石英						1	1											2							0	2
緑色泥岩							7			6								13	2			2			4	17
緑色片岩							1											1							0	1
鉄石英			1				16	1										18	3						3	21
泥岩							20			1								21							0	21
粗粒玄武岩							1											1							0	1
粘板岩							4											4							0	4
軽石																		0	9						9	9
蛇紋岩					1													1							0	1
斑れい岩																		0	1						1	1
チャート					1		27											28	2						2	30
スコリア					1													1							0	1
石鉄鉱																		0	2						2	2
不明	1		1				22											24	57	1			1	5	64	88
総計	149	6	145	9	28	164	23310	11	10	7	9	3	3	16	3	2	1	23876	114	7	5	2	1	5	134	24010

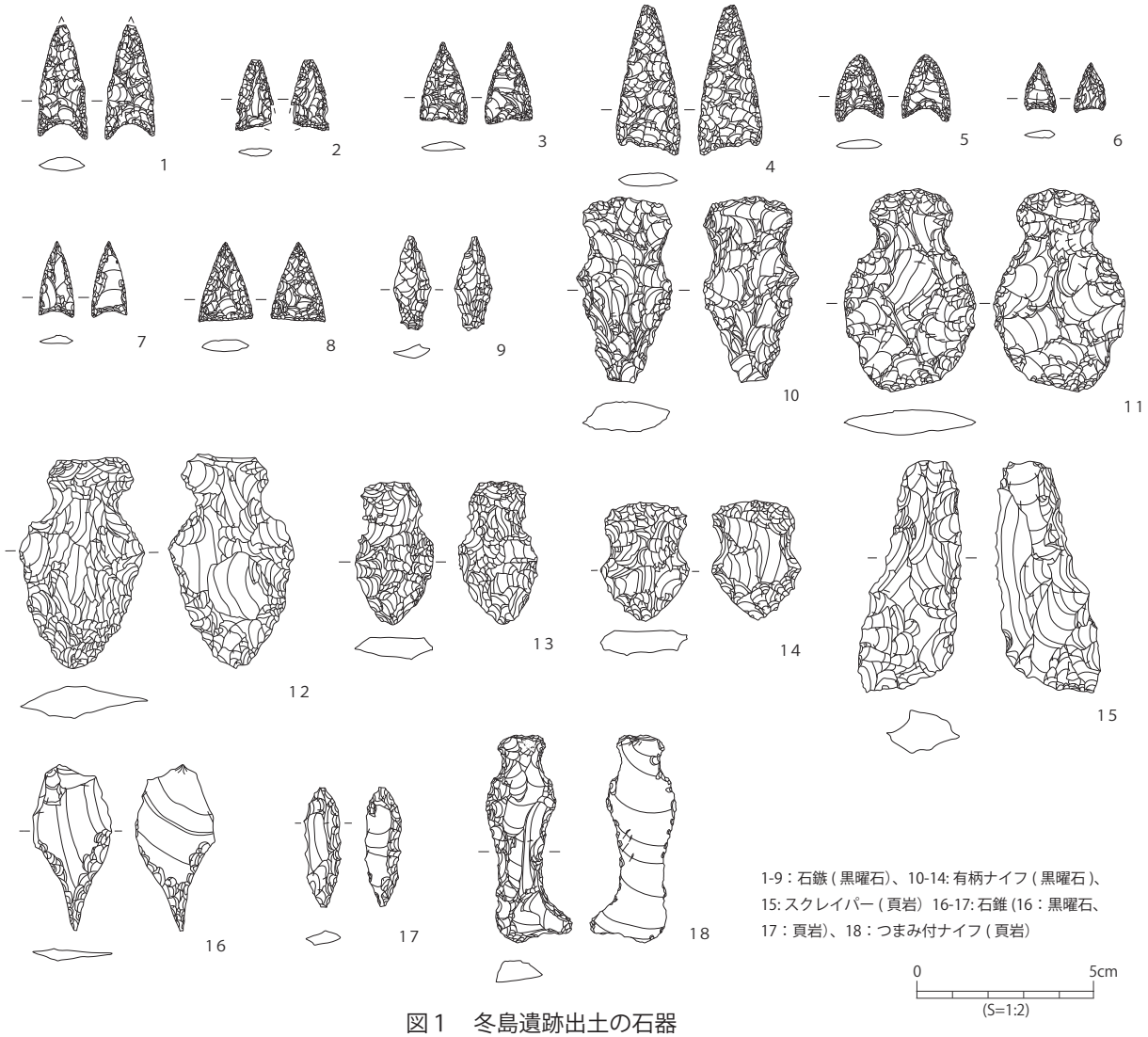


図１　冬島遺跡出土の石器

表８　掲載石器一覧

掲載番号	器種・名称	遺構・発掘区	層位	大きさ(cm)			重量(g)	石材	状態
				長さ	幅	厚さ			
1	石鏃	礫集中3	III	(3.2)	1.4	0.4	(1.5)	黒曜石	先端欠損
2	石鏃	A4	III	(0.2)	(1.1)	2	(0.5)	黒曜石	
3	石鏃	A4	III	1.8	1.4	0.3	0.5	黒曜石	
4	石鏃	A4	III	(4.2)	1.8	0.4	(2.5)	黒曜石	先端欠損
5	石鏃	A5	III	1.8	1.3	0.3	0.5	黒曜石	
6	石鏃	A5	III	1.4	0.9	0.2	0.5未満	黒曜石	
7	石鏃	A5	III	2.1	1.0	0.2	0.5	黒曜石	
8	石鏃	A4	III	2.2	1.3	0.2	0.5	黒曜石	
9	石鏃	TR1	P-4覆土	(2.6)	1.0	0.4	0.5	黒曜石	
10	有柄ナイフ	P-10	覆土	(5.1)	2.7	1.0	(12.5)	黒曜石	先端欠損
11	有柄ナイフ	A5	III	5.8	3.7	7.5	14.5	黒曜石	
12	有柄ナイフ	A5	III	6.0	3.4	0.7	14.0	黒曜石	
13	有柄ナイフ	A5	III	4.1	2.2	0.6	5.0	黒曜石	
14	有柄ナイフ	A5	III	3.3	2.5	0.7	6.0	黒曜石	
15	スクレイパー	A5	III	6.2	2.7	1.1	16.5	頁岩	
16	石錐	A4	III	4.6	2.2	0.4	3.5	黒曜石	
17	石錐	A5	III	3.3	1.0	0.5	2.0	頁岩	
18	つまみ付きナイフ	A4	III	5.8	2.3	0.7	8.5	頁岩	

冬島遺跡調査報告４

冬島遺跡から出土した骨角器について

(Bone and antler artifacts excavated from Fuyushima site)

高橋　健[1]（TAKAHASHI Ken）

1.出土資料の概要

冬島遺跡から出土した骨角器のうち21点を報告する（図1・2）。

銛頭は4点が出土している。いずれも鹿角製。1は閉窩回転式銛頭であり、尾部の右の距先端部をわずかに欠損する以外はほぼ完形である。頭部は単純に尖り、断面はやや扁平になる。索孔は横方向で上部には小さな突起を持ち、2本の平行短刻線が施される。尾部は三又に分かれ、左右腹縁側には刻みが3つずつ入れられている。2は閉窩回転式銛頭の胴中央部から尾部にかけての破片である。横方向の索孔とソケットの一部が残っている。尾部はおそらく三又に分かれていたのだろう。3・4は開窩式銛頭である。3は頭部・尾部を欠損するが、全体の形状が分かる資料である。頭部は単純に尖るものだろう。索溝の下端が突帯状に作り出されている。尾部は大部分を欠損しているが、幅広で斜めに切り落とされた「偏尾」の形状だったと思われる。4は尾部を欠損し、頭部は短めで単純に尖る。索溝の下端はやはり突帯状である。3・4はいずれも鹿角の海綿質が背面側にみられ、素材の内側に索溝、外側（緻密質側）に柄溝を設けるような素材取りである。いずれも器体の反りはほとんどみられない。

5〜8は釣針軸である。完形品はないが、いずれも単式釣針だと考えられる。5・6は頭部（チモト・糸掛け部）から軸にかけての破片であるが、頭部が内傾し、軸が長く直線的である。5のチモトは、外側に瘤状に糸掛け部がつく。このような頭部をもつ釣針は津軽海峡沿岸や噴火湾沿岸の恵山文化期の遺跡から出土することが知られている。6は残存長が9㎝を超え、一回り大きい。頭部は太くなるが、5のような明瞭なくびれをもたない。器体の表面には削りによる面を多く残し、未成品の可能性が高い。7は内側にアグを一つもつ釣針の破片である。湾曲部に横方向の短刻線による装飾が一部残っている。8は湾曲部の破片である。9・10は片側に逆鉤をもつ細身の破片であるが、結合式釣針の釣針先の破片だと考えられる。

11・12は刻みのある棒状製品で、横方向の短刻線を平行に並べている。強く火を受けて変色している。髪針の頭部破片の可能性がある。13は筒状の鹿角製品で、図の下端側に突起を持つ。縦半分に割れているが表面は丁寧に磨かれている。銛柄の末端に装着する指掛けの部品の可能性がある。14・15は陸獣骨製の刺突具破片。16はシカ尺骨製のへらである。刃部の側縁をわずかに欠損する以外は、ほぼ完形である。縦方向に削りの痕跡が顕著に残る。17は海獣骨製のへらである。上端は欠損しているがやや細くなる。下端中央が丸のみ状に凹んでいる。

18は鯨骨製品の基部破片である。図の左側で示した面の下端近くに小さな突起（段）を設け、反対側には幅広い平坦面を設けている。この平坦面を合わせる形で別の部品と結合したのだろうか。図の上側は破損しており、全体の形状は不明である。19は鹿角の未成品である。鹿角の分岐部を使い、面的に削った痕跡が残る。反対面は摩耗している。何を作ろうとしたものかは不明である。20は陸獣骨製のへら状製品である。全体に摩耗している。21は海獣骨製の板状製品。厚さ

1.横浜ユーラシア文化館

6㎜程度の板状に加工しているが、表面は摩耗しており、全体の形状は不明である。

この他に動物遺体の整理中に、骨角器や未成品・残片類が新たに検出されている（図3）。

２.銛頭の位置づけについて

冬島遺跡は貝塚遺跡ではないにも関わらず、骨角器の遺存状況が非常に良かった。これまで続縄文文化の骨角器がほとんど知られていなかった日高地方からの出土例として重要である。その内容、特に銛頭と釣針の形態は、道南部の恵山文化のものと比較して違和感のないものである。ここでは、分布や編年の研究が進んでいる銛頭の位置づけについて簡単に考察してみたい。

冬島遺跡からは、4点の鹿角製銛頭が出土した。高橋（2008）では、柄への装着方法（雄形／雌形・開窩式・閉窩式）と銛頭の抵抗機能（回転式／鉤引式）による分類基準を組み合わせて、続縄文文化の銛頭を第1種～第5種に分類した（図4）。今回出土した銛頭に当てはめると、第3種（閉窩式・回転式）が2点、第4種（開窩式・回転式）が2点である。特に平成30年度調査でP-4から出土した第3種（図1-1）はほぼ完形品で遺構から出土した点でも重要である。

第3種銛頭は、大島（1988）による茎孔式単尾に相当し、津軽海峡から噴火湾沿岸にかけて多く出土している（図5）。東北地方縄文晩期の燕形銛頭の系譜を引くとする考えが有力である。筆者による第3種銛頭の編年案（図6・表2）では、津軽海峡～噴火湾沿岸地域の資料をA1群～B3群に分類して、Ⅰ段階からⅣ段階に編年した。冬島資料は、楕円形の胴部断面形と横方向（回転面に直交）の索孔からA2群となり、Ⅱ段階に位置付けられる。筆者の編年案では、他にも刃装着方法と側面の突起にも注目していた。冬島資料は端刃を装着しないため、刃装着方法による分類はできない。側面の突起は明確な逆鉤状というよりもエラ状であり、やや新しい様相を示すといえるが、全体としては胴部断面形を重視してⅡ段階と考えておきたい。

Ⅱ段階の類例は、噴火湾沿岸から出土している（図8-1～4）。尾部腹面側の連続する刻み（2～4）や索孔上部の2本の平行短刻線（1～3）など、冬島資料と共通する装飾を施している。先端に刃溝を持つ例と単純に尖る例があるが、いずれも基本的には頭部腹面側に逆鉤をもつ。3は腹鉤をもたず、大泰司（2021）によって冬島例との類似が指摘された資料である。両者の類似については大泰司の指摘する通りだが、報告では本来存在した腹鉤を削ったものとされている。これに対して冬島資料には削りの痕跡はみられず、最初から腹鉤をもたなかったらしい。

日高地方における銛頭の出土例としては、これまではえりも町油駒遺跡出土の資料が知られていた（図7）。油駒遺跡の骨角器焼骨中から検出されたもので、晩期後半から続縄文早期の土器に伴う。逆鉤部（1～4）と索孔部（5～7）の破片は第1種（雄形・鉤引式）、索溝部（8・9）の破片は第4種の可能性が高い。12は断面楕円形で刃溝の痕跡を残し、刻線・刻点による装飾を施した破片で、第3種の可能性があると推測していたが、索孔やソケットの部分を欠くために確実ではなかった。道東部では釧路市下田ノ沢遺跡出土例（図9-2）があるが、これも尾部破片だった。三又に分かれた中央の距が細く伸びる特徴は有珠モシリ遺跡に類例があり、より新しい段階のものである可能性が高い。今回報告する冬島遺跡例は、分布の中心域以外からほぼ完形で出土した貴重な事例であり、また比較的古い時期に位置付けられる点も注目される。

第4種銛頭は北海道の縄文文化の銛頭の系譜を引く在地系の銛頭である。道北部を除いて広く分布し（図5）、特に道東部では多数を占めている。図1-3のように尾部が非対称になる偏尾の例は噴火湾沿岸にも類例があるが（図8-5）、左右対称で二股に分かれる例の方が多い（同6～8）。このような偏尾の例は道東部にも多く（図9-1・3・4）、特に幣舞遺跡では扁平でずんぐりした形

態のものが多い。冬島遺跡から出土した 2 点の第 4 種銛頭は、鹿角の海綿質が背面にみられ、素材の緻密質側に柄溝（ソケット）を設けている。同様の素材取りの例は、噴火湾沿岸や道東部の続縄文文化の銛頭にもみられる（図 8-8・図 9-4）。索溝の下端が突帯状に作り出される特徴は、やはり噴火湾沿岸に類例が多くみられるが（図 8-6～8）、その出現は縄文晩期まで遡る。

３. まとめ

冬島遺跡から完形品を含む 2 点の第 3 種（閉窩回転式）銛頭が出土したことにより、この地域に第 3 種銛頭が安定して分布していたこと、また噴火湾沿岸の編年と対比して比較的古い段階に位置付けられることが明らかになった。2 点の第 4 種銛頭は、形状や素材取りにみられる特徴が、噴火湾沿岸や道東部の資料と共通する。一方、噴火湾沿岸で半分近くを占める第 2 種（閉窩鉤引式）銛頭は全く出土していない。もちろん 4 点と限られた数であるための偏りかもしれないが、冬島遺跡の出土資料が副葬品ではない点も関連するかもしれない。

このような銛頭にみられる特徴に加え、チモトが内傾する単式釣針や結合式釣針先の存在も考えると、骨角製漁具については噴火湾沿岸との共通性が強いといえそうである。しかし、内湾である噴火湾沿岸と太平洋に面した冬島遺跡では、当然ながら海洋環境が大きく異なっている。今後の調査成果も踏まえつつ、さらに検討を行っていきたい。

参考文献
大島直行 1988「続縄文時代恵山式銛頭の系譜」『季刊考古学』25:26-30
大泰司統 2021「冬島遺跡出土の特徴的な土器」『様似町郷土館紀要』3:9-16
高橋　健 2008『日本列島における銛猟の考古学的研究』北海道出版企画センター

表１　掲載骨角器一覧

挿図	名称	遺構・発掘区	層位	素材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	旧報告
図1-1	銛頭	P-4	覆土	鹿角	6.3	1.3	1.5	3.5	H30-図版2-2-3・図5-1
図1-2	銛頭	TP10-A2	I	鹿角	4.1	(0.8)	(0.9)	1.1	H28-図版1-3-8
図1-3	銛頭	獣骨集中	III	鹿角	(4.6)	(1.5)	0.7	2.0	H31-図版3-5-2
図1-4	銛頭	TR1	III	鹿角	(3.5)	1.1	6.5	1.5	H30-図版2-1-3
図1-5	釣針	A4	III	鹿角	(6.5)	(1.8)	0.6	1.7	
図1-6	釣針	獣骨集中	III	鹿角	(9.5)	(3.3)	0.8	3.3	
図1-7	釣針	P-10		鹿角	(3.4)	(1.3)	0.6	0.9	
図1-8	釣針	A4	III	鹿角	(3.2)	(1.0)	0.7	0.8	
図1-9	釣針先	A4	III	鹿角？	(1.9)	(0.8)	(0.4)	0.3	H31-図版3-1-2
図1-10	釣針先	区内	II	鹿角？	(2.0)	(0.5)	(0.3)	0.2	H27-図版1-1-7
図1-11	髪針？	獣骨集中	III	不明	(2.0)	(0.9)	(0.5)	0.5	H31-図版3-5-3
図1-12	髪針？	TP10-A2	III	不明	(2.7)	(0.9)	0.8	1.8	H28-図版1-3-9
図1-13	指掛け？	A4	III	鹿角	(3.4)	(1.7)	(0.8)	2.0	H31-図版3-1-3
図1-14	刺突具	TP10-A2	II	陸獣骨	5.7	1.2	0.5	2.3	
図1-15	刺突具	獣骨集中	III	陸獣骨	(7.8)	0.9	0.6	2.5	H31-図版3-5-1
図1-16	へら	TR1	III	シカ尺骨	9.6	4.9	2.3	22.5	H30-図版2-1-4
図1-17	へら？	TP10-A2	II	鯨骨	(12.4)	3.5	1.0	25.3	H28-図版1-3-10
図2-18	不詳骨製品	A4	III	海獣骨	(12.3)	2.7	1.4	20.9	
図2-19	未成品	TP6	III	鹿角	10.3	4.4	1.2	20.3	H28-図版1-2-1
図2-20	へら	TP10-A2	III	海獣骨	5.3	1.6	0.6	2.7	
図2-21	板状製品	TP10-B2	III	鯨骨	(4.0)	(3.2)	0.6	3.3	

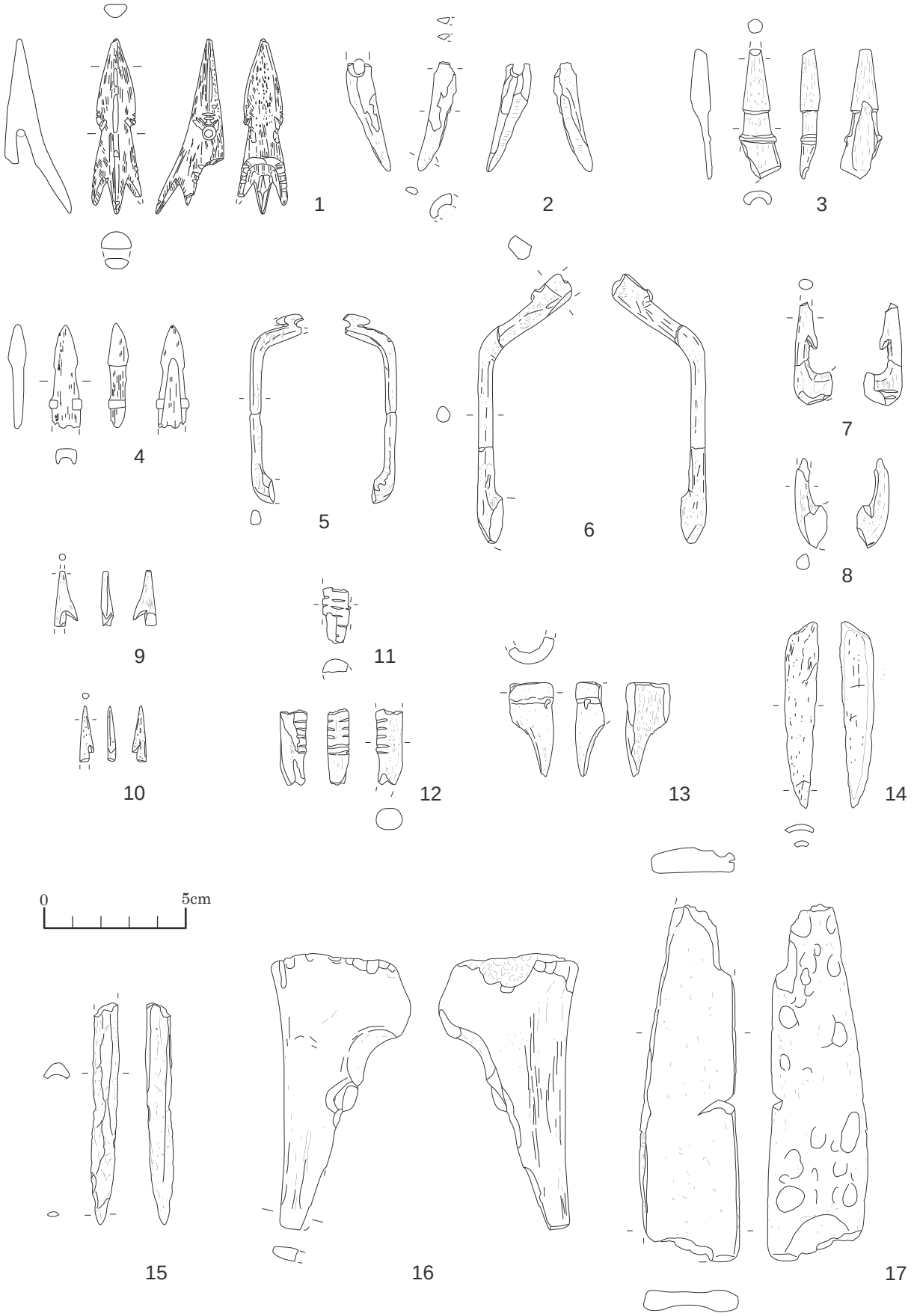


図１　冬島遺跡出土の骨角器 (1)

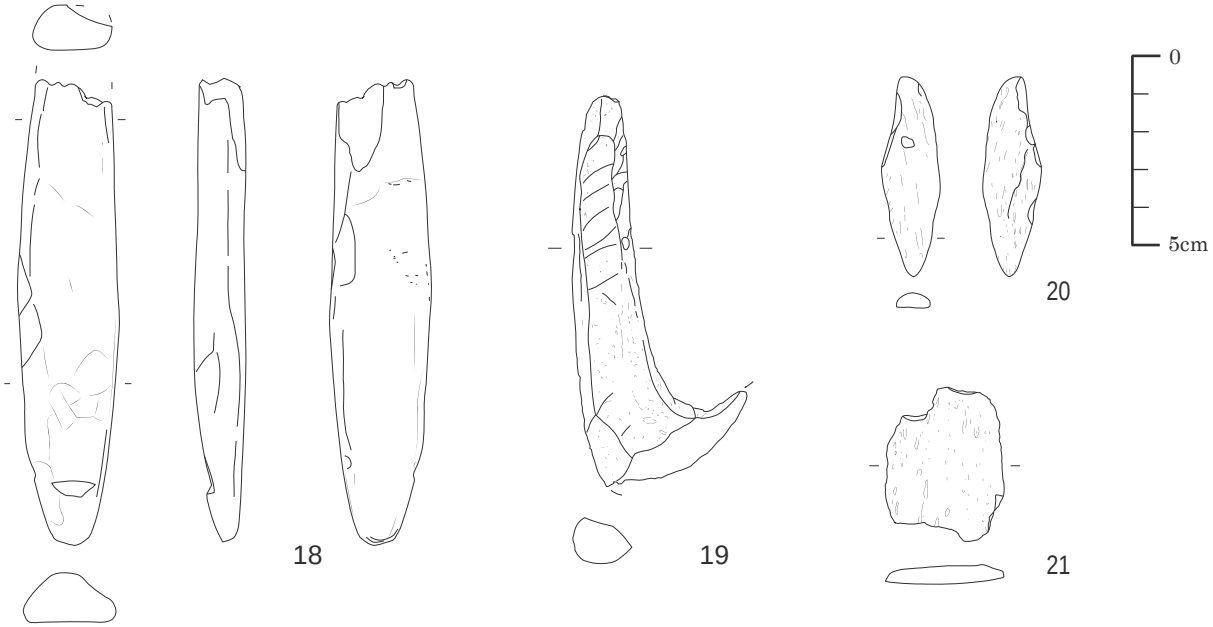
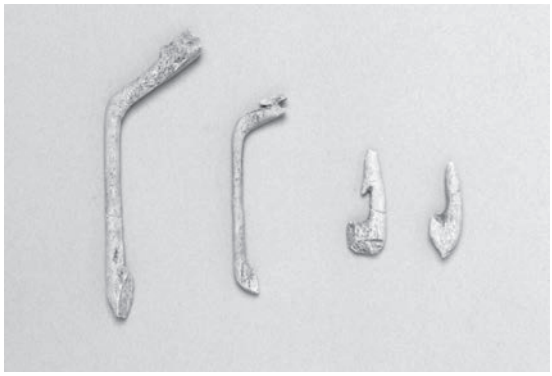


図 2　冬島遺跡出土の骨角器 (2)



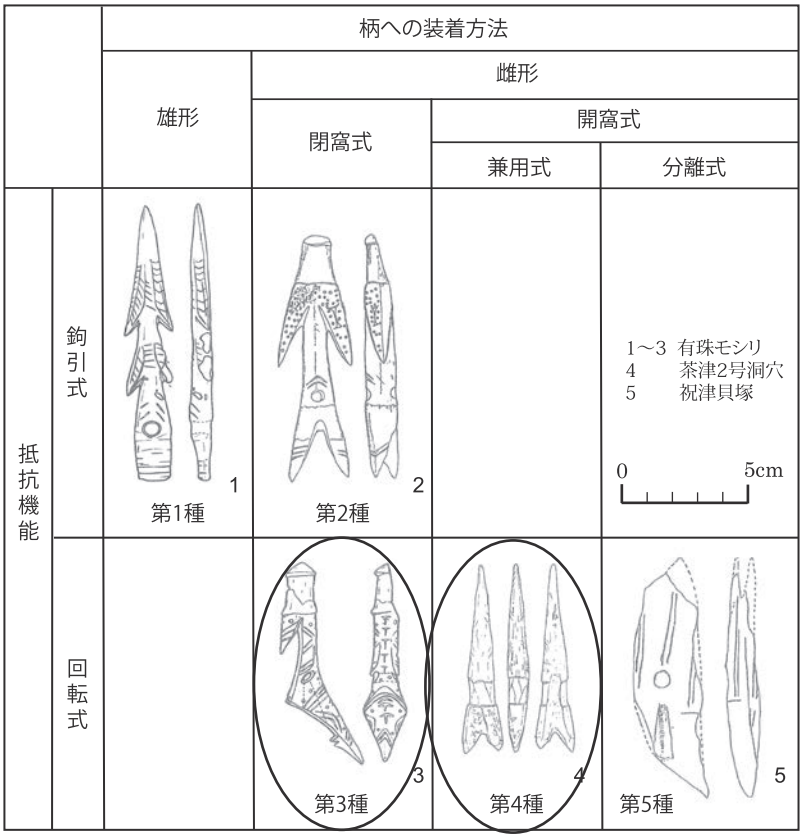
鹿角製釣針軸（裏面）

鹿角製釣針軸（表面）

動物遺存体から検出された骨角器

1・2：刺突具
3・6：棒状製品
4・5：鹿角製未成品（釣針？）
7：有孔加工品？
8・9：鹿角切断品（残片？）
10：海獣骨加工品
（1 の長さ 6.4cm）

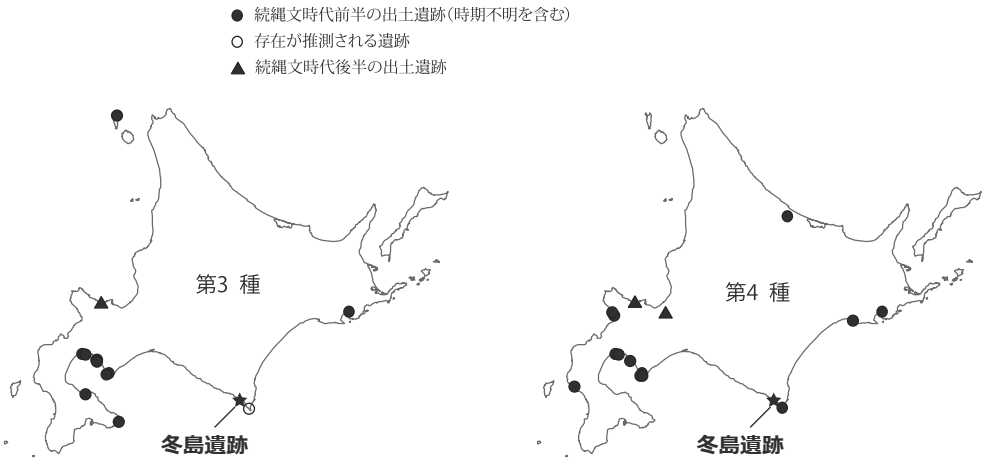
図 3　冬島遺跡出土の骨角器 (3)



（高橋2008に加筆）

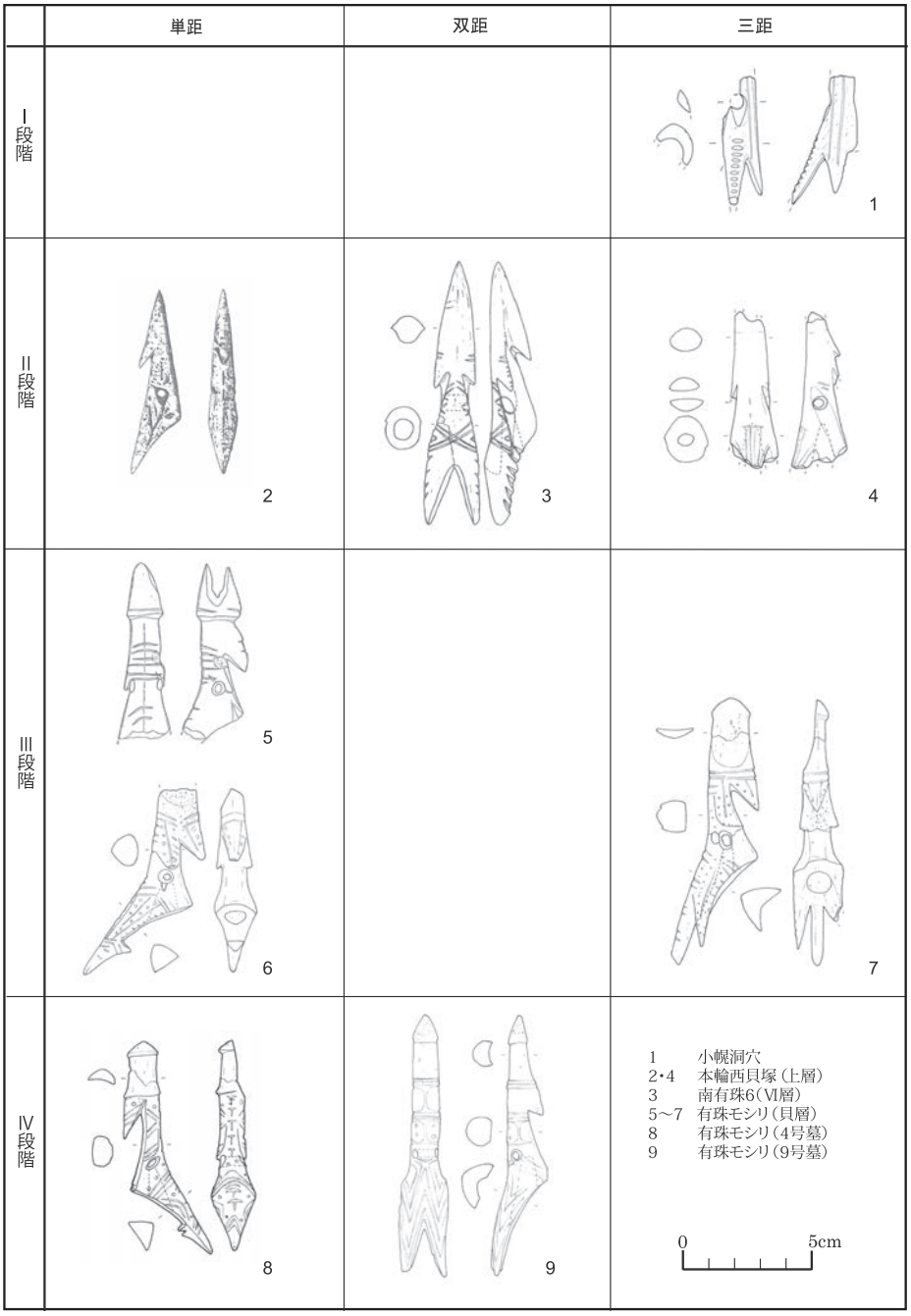
冬島遺跡で出土したタイプ

図4　続縄文時代の銛頭の分類



（高橋2008に加筆）

図5　タイプごとの銛頭の分布と冬島遺跡



冬島遺跡 P-4 出土

（高橋2008に加筆）

図6　第3種銛頭の編年（噴火湾沿岸）と冬島遺跡出土資料

		胴部断面形	刃装着方法	索孔		側面の突起
Ⅰ段階	A1群			縦方向	円形	
Ⅱ段階	A2群	円形 楕円形	刃装着溝	横方向	円形 楕円形	鉤状
Ⅲ段階	B1群	カマボコ形	刃装着溝 刃装着面	横方向	円形 楕円形	エラ状
Ⅳ段階	B2・3群	カマボコ形	刃装着面	横方向	背面寄りの円形 扁平な楕円形 アーモンド形	凸帯状

（高橋2008に加筆）

表2　第3種銛頭の属性の変化

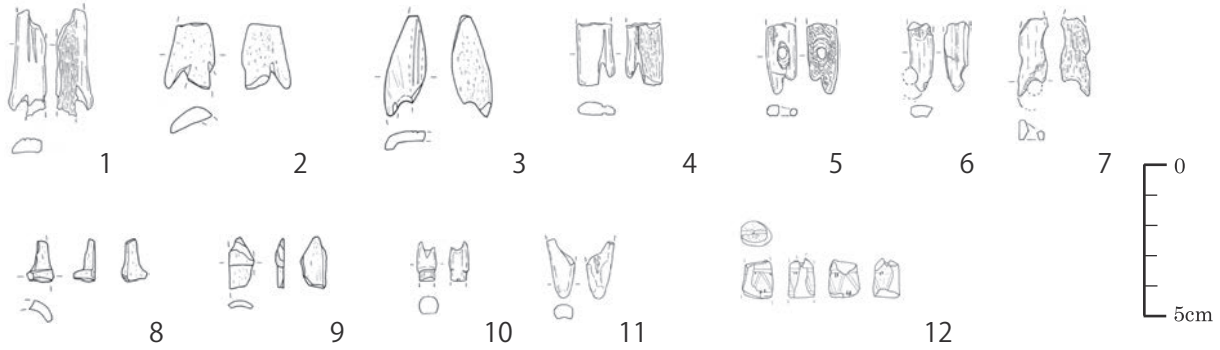


図7　えりも町油駒遺跡出土の銛頭

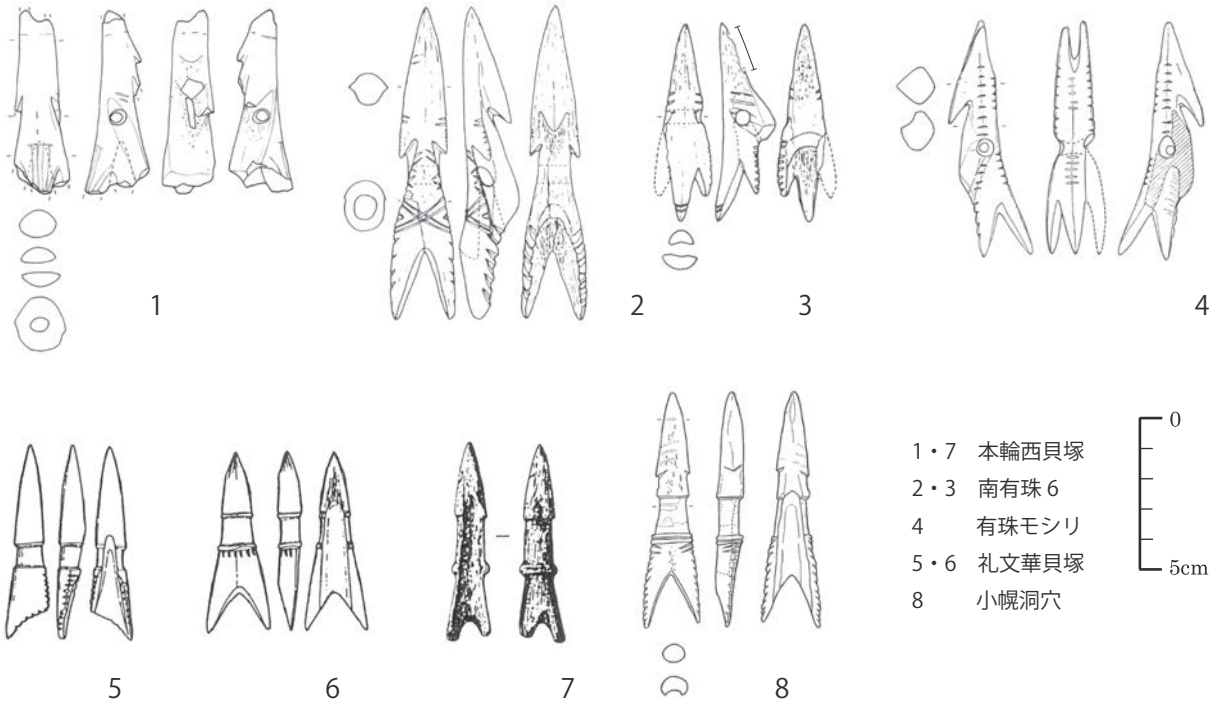
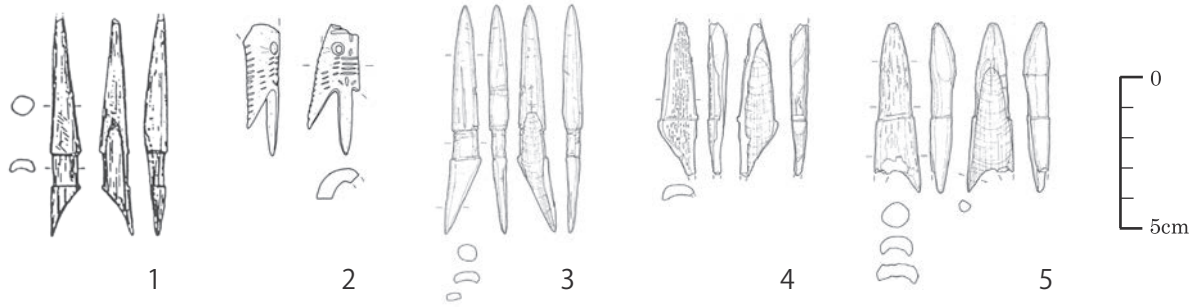


図8　噴火湾沿岸の関連資料



1・2　下田ノ沢、3～5　幣舞

図9　道東釧路地方の関連資料

冬島遺跡調査報告５

冬島遺跡令和元年度調査出土の動物遺体

(Animal remains excavated at the Fuyushima site in 2019)

新美　倫子[1]（NIIMI Michiko）

はじめに

冬島遺跡の令和元年度の調査では、動物遺体を含む遺構埋土や包含層がすべて 1mm 目のふるいを用いて水洗選別され、多くの動物遺体が採集された。動物遺体のほとんどは A4 区Ⅲ層とその中に作られた遺構（獣骨集中・礫集中・土器集中・ピット 6〜10）から出土しており、貝類・ウニ類・魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類が見られた。これらの資料の所属時期は続縄文時代前葉であり、その多くを占めるのは魚類である。もっとも、魚類と貝類・ウニ類については平成 30 年度調査の報告ですでに詳細なデータが示されているので（西本 2020）、今回は 30 年度調査で出土量が比較的少なかった爬虫類・鳥類・哺乳類について報告したい。これらの動物遺体について出土種名を表 1 に、出土内容を表 2〜6 に示した。

なお、伊達市噴火湾文化研究所の西本豊弘先生には種同定に関して御教示をいただき、様似町教育委員会の高橋美鈴氏にはこの資料を分類する機会を与えていただいた。ここに感謝いたします。

1、爬虫類

オサガメの背甲板が A4 区Ⅲ層で 7 点、礫集中で 1 点の計 8 点出土した。

2、鳥類（表 2）

128 点の資料が出土した。このうち、種を同定できたのは、アホウドリ類 19 点、ミズナギドリ類 17 点、カモメ類 11 点、ウミガラス類 3 点、ウ類 2 点、カモ類 2 点、アビ類 1 点である。アホウドリ類にはコアホウドリとほぼ同大の資料と、それよりひとまわり大きな資料が含まれていたが、ひとまわり大きなものの方が多い。ミズナギドリ類は、いずれもオオミズナギドリやハシボソミズナギドリと同程度かこれより若干大きな資料であった。

カモメ類はオオセグロカモメやセグロカモメ程度の大きさの資料が多いが、ウミネコと同程度の資料やこれより少し小さなものもあった。ウミガラス類では、上腕骨はハシブトウミガラス程度の大きさで、肩甲骨はウトウより少し大きく、烏口骨はウトウと同大であった。ウ類は肩甲骨がウミウと同大で、脛骨はよく焼けているがウミウよりかなり小さく、ヒメウと思われる。カモ類は烏口骨がオナガガモと同大で、脛骨は焼けた状態でオナガガモよりわずかに大きかった。アビ類はオオハムと同程度の大きさであった。

3、哺乳類（表 3〜6）

哺乳類とした資料には陸獣類が 1700 点、海獣類が 1428 点と、それ以外に細かく割れているために陸獣か海獣かが明らかでない骨片 775 点、焼骨片 2773 点の計 6676 点が含まれている。

a. 陸獣類（表 3・4）

陸獣類は 1700 点出土した。このうち種を同定できたのはシカ 533 点、クマ 12 点、イヌ 7 点、イノ

1. 名古屋大学博物館

シシ類5点、カワウソ2点、オオカミ2点、キツネ・ヒト各1点、ネズミ類14点である。その他に陸獣ではあるが種を同定できなかった骨片と焼骨片が1123点出土している。

種同定できた陸獣資料の大部分はシカであるが、この中では四肢骨破片や角破片・指骨などの出土点数が多く、最小個体数は右尺骨出土数から見て5個体であり、それほど多くない。角は加工のために切り取られた破片が多く、ピット10出土の頭蓋骨+角では角が切り取られ、A4区Ⅲ層出土の前頭骨+頭頂骨は角突起が基部から切り取られていた。各部位は現生シカ標本（愛知県産）と比較するとかなり大きい。また、焼けた資料がかなり多いが、これらは資料の一部が少し焼けている程度のものから全体が焼けているものまで、そして焼けた部分も黒色になったものやよく焼けて白色になったものなど、さまざまな状態の資料が混在している。

クマは成獣あるいは若獣の頭蓋骨一部・下顎骨破片・脛骨・椎骨・指骨と幼獣の寛骨が出土した。基節骨と中節骨は焼けていた。イヌは幼獣の上下顎骨・上腕骨・寛骨破片と成獣あるいは若獣の頬骨突起・大腿骨中間部が出土した。幼獣の上下顎骨の第1後臼歯は未出である。これら幼獣資料5点は同一個体のものかもしれないが、上腕骨はイノシシ類である可能性もある。イノシシ類は遊離歯と側指の中手中足骨・末節骨が見られた。歯は現生ニホンイノシシと同程度の大きさであるが、中手中足骨と末節骨はニホンイノシシよりかなり大きく、新しい時期のブタが混入したのであろう。

カワウソは頭蓋骨の一部とやや若い個体の肩甲骨が見られた。オオカミは上顎第2後臼歯と頬骨が見られたが、頬骨は現生アラスカオオカミと同程度の大きな資料であった。キツネは下顎犬歯が、ヒトは胸骨の一部が出土した。ネズミ類とした資料は形態から見てすべてドブネズミと思われる。遺跡の人々によって利用されたものではなく、あとから入り込んだのであろう。

b.海獣類（表5）

海獣類は1428点出土し、その内訳はクジラ類1230点、イルカ類30点、オットセイ2点、アシカ1点、アシカ類3点、アザラシ類2点と鰭脚類3点、種不明157点である。なお、一般にクジラ類のうち体長4m以下の小型のハクジラをイルカ類と呼ぶが、実際には体長4m以下でもクジラと呼ばれる種もあり、ここでも両グループの区別は厳密なものではない。

クジラ類は多数出土したが、その大部分は小さく割れた破片と焼破片であり、部位の判明した資料は少ない。部位が明らかな資料も頭蓋骨破片や椎骨などで、種を確定できる資料は含まれないが、椎骨・椎端板・肋骨の大きさから見て、体長5m前後のゴンドウクジラ類や10m程度のツチクジラクラスの個体とそれより大きい大型クジラ類が含まれている。礫集中から出土した椎端板は中～大型クジラのものと思われるが、人為的な傷が多数見られた。イルカ類は30点中の21点が椎骨とその破片であるが、歯や前肢の部位も見られた。A4 区Ⅲ層出土の上腕骨と礫集中出土の橈骨は同一個体と思われ、カマイルカよりも若干大きい。

オットセイは雌若獣の上腕骨と雌の頬歯が見られた。アシカは雄若獣の肩甲骨である。アシカ類とした寛骨腸骨部分は、坐骨・恥骨と癒合していない幼獣である。この段階で寛骨臼はすでにオットセイ雌成獣程度の大きさであるので、アシカかトドの幼獣であろう。椎骨もアシカ雄またはトド雌程度の大きさである。アザラシ類は後頭骨と側頭骨破片であり、種は決められなかった。

まとめ

令和元年度調査出土の動物遺体の特徴は、鳥類は海鳥が利用されていること、哺乳類はシカと海獣類が多く利用され、海獣類ではイルカ類だけでなくゴンドウクジラ類やさらに大きい体長10m以上の種も利用されていることである。これは平成30年度調査の報告と共通している（西本2020）。

また、焼けている資料が多いことも特徴である。焼けている資料は特定の種やグループに限定されておらず、鳥類にも哺乳類の陸獣にも海獣にも見られた。そして、それらの焼け方は均一ではなく、一部だけが焼けたものや全体が焼けたもの、また弱く焼けたものから全体がよく焼けて白色になったものまで、さまざまであった。

引用文献

西本豊弘 2020「冬島遺跡平成 30 年度調査出土の動物遺体」様似郷土館紀要 2、45-49 頁

表1　冬島遺跡出土爬虫類・鳥類・哺乳類種名

I.爬虫類
1 オサガメ

II.鳥類
1 ウミガラス類
2 カモメ類
3 アビ類
4 アホウドリ類
5 ミズナギドリ類
6 ウ類
7 カモ類

III.哺乳類
1 ネズミ類
2 エゾヒグマ
3 キタキツネ
4 エゾオオカミ
5 ニホンカワウソ
6 イノシシ類
7 エゾシカ
8 ニホンアシカ
9 オットセイ
10 アシカ類
11 アザラシ類
12 クジラ類
13 イルカ類
14 ヒト
15 イヌ

表2　鳥類出土内容

	A4III層	獣骨集中	礫集中	P6	P7	P10	計
アホウドリ類	中手骨左下1、烏口骨右下1、中1、脛骨左下1 中足骨右下1、第3指左上1、指骨1、上2、下2 下嘴左破片1	上腕骨右下1 橈骨左上1	尺骨右下1 指骨1、上2		上嘴破片1		19
ミズナギドリ類	上腕骨右上3、尺骨右上1、中手骨左1、右下1 烏口骨左1、右1、大腿骨右1、脛骨左下1 中足骨右1	尺骨右上1 中手骨右1	脛骨右下1			上腕骨右下1 烏口骨右下1 脛骨右上1	17
カモメ類	肩甲骨左1、上腕骨左1、中手骨右1、下2 烏口骨右1、中足骨左上1、第3指左1、右1	橈骨左上1、右上1					11
ウミガラス類	肩甲骨左1、上腕骨右上1					烏口骨右上1	3
その他	ウ類肩甲骨左1、脛骨右下焼1 アビ類中足骨左上1	カモ類烏口骨左上1 脛骨左下焼1					5
種不明	中手骨中1、烏口骨右下破片1、四肢骨中2 指骨1、下1、椎骨3、破片17、焼破片5	指骨1、1若、椎骨1 破片15、焼破片1	大腿骨右中1 指骨上1	破片1	破片2 焼破片1	椎骨2、頭蓋骨破片1 破片14	73
計	68	27	7	1	4	21	128

註　上：近位部、中：中間部、下：遠位部、上・中・下のないものは完存。焼：焼けた資料。

表3　シカ出土内容

	A4III層	獣骨集中	礫集中	土器集中	P6	P7	P9	P10	A4I層	計
頭蓋骨	前頭骨一部+頭頂骨一部左1♂ 角突起一部+角破片1、焼1、頭蓋骨破片1							前頭骨一部+角突起+角(切り取り)右1 頭蓋骨破片1		6
上顎骨 下顎骨 遊離歯	上顎骨左(×P34)、左(P2)P34 下顎骨右(M123)、関節突起右1、下顎骨破片4 下右M3、上M破片1、歯破片4				下左M破片1	歯破片1		下顎骨破片1、上右m2破片1 下右M③萌出途中 歯焼破片2	下左I①未出 下右P2 歯破片1	24
肩甲骨	右2		右破片1					右1		4
上腕骨	左下1、右中破片焼1	左下1								3
橈骨	左上1、左上半欠1	右上1			左下1					4
尺骨	右2、上2、焼1							左上1、下1		7
寛骨	左 1 、恥2				右腸破片1					4
大腿骨	左中破片1、右下破片1	右下焼1				右上骨頭のみ1若				4
脛骨	左下焼1、骨端のみ1若、右上半欠1、下焼1				右下1			右下1		6
距骨	左1、右1	右1								3
踵骨	左後ろ骨端のみ1若、右2、1若				左1					5
中手骨	右上1、半欠1、中破片5、焼4		下1			中破片焼2		右上焼1、中破片焼1		16
中足骨	上破片焼1、中破片1、焼2	中破片1	中破片焼1	中破片焼1				左上半欠焼1、中破片焼2		10
中手足骨	下半欠1、半欠焼1、骨端のみ1若、中破片5	下破片焼1、中破片1					下破片焼1	中破片1		12
基節骨	上5、焼1、下11、焼3	下1	1					1、上1若ハズレなし、下1		25
中節骨	4、焼1、上4、焼1、下3	上1	下1			1、上1		上1若ハズレなし、焼1	1	20
末節骨	1、焼2、側指1	焼1、側指3	2					焼1		11
指骨破片	2、焼3	焼2	1			3		7、焼破片2		20
角破片	45、焼8	6、焼3	8、焼1		2、焼1	2	焼1	7、焼6(うち2は落角座)	焼1	91
四肢骨破片	92、焼12	11、焼5	18、焼6		2			22、焼22	1	191
手足根骨	8、焼2	7、焼2	2			焼4		2		27
椎骨	2、1若、破片1、焼1	破片1	1若							7
肋骨片	15、焼1	3	2		4			3、焼2		30
その他	膝蓋骨右1	軸椎半欠1						胸骨1		3
計	298	54	46	1	14	15	2	97	6	533

註　表2参照。I：切歯、P：前臼歯、M：後臼歯、m：乳臼歯、I・P・M・mに伴う数字は歯の順番を示し、○のついた数字は未出あるいは萌出途中であることを示す。（　）は顎骨があることを示し、
×は歯が脱落していることを示す。腸：腸骨部分、坐：坐骨部分、恥：恥骨部分。幼：幼獣、若：若獣、幼・若のないものは成獣。ハズレなし：成長途中のため骨端が分離して、かつ残存

表4　その他の陸獣出土内容

	A4III層	獣骨集中	礫集中	土器集中	P6	P7	P9	P10	A4I層	計
クマ	下顎骨左破片1、脛骨左上骨端のみ半欠1若 基節骨上焼1、末節骨1	上顎骨右(M12) 寛骨左坐1幼			頭蓋骨破片3 椎骨1			中手足骨破片1 中節骨下焼1		12
イヌ	上顎骨左(×m34)幼 側頭骨頬骨突起右1、下顎関節突起左1幼 寛骨左坐破片1幼、大腿骨左中1	下顎骨右(m34M①)幼M1未出 上腕骨左1幼上下ハズレなし								7
イノシシ類	下I2？、下右M③未出 下前臼歯破片1、末節骨 (側指？)1					中手足骨 (側指)上1				5
カワウソ	側頭骨頬骨突起右+鼓室部左右 肩甲骨左1若									2
オオカミ	上左M2							頬骨左1		2
その他	キツネ下左C、ヒト胸骨破片1									2
ネズミ類	下顎骨左1、右1、椎骨2	寛骨左1 大腿骨左1若、右1若 仙骨1	大腿骨 左上1若		上右I1			上左I1 大腿骨左下骨端のみ1若 脛骨左1若、右1若		14
種不明	破片235 焼破片196	破片64 焼破片46	破片37 焼破片19	焼破片1	破片21 焼破片20	破片16 焼破片152	焼破片49	破片86 焼破片172	破片4 焼破片5	1123
計	453	118	57	1	46	169	49	265	9	1167

註　表2・3参照。C：犬歯。

表5　海獣類出土内容

	A4III層	獣骨集中	礫集中	土器集中	P6	P7	P10	A4I層	計
クジラ類	頭蓋骨破片5、肋骨片2 椎端板破片3 破片248、焼破片329	頭蓋骨破片1 椎端板破片1 破片50、焼破片58	椎骨1、椎端板1 0 焼破片24	破片12 焼破片1	焼破片6	肋骨片1 破片23 焼破片138	破片63 焼破片183	椎骨1 破片8 焼破片6	1230
イルカ類	頭蓋骨破片1、歯3、上腕骨左下1 指骨1若、椎骨5若、焼1若、椎骨破片3	椎骨2、1若	橈骨左上1 椎骨1、3若		歯1	歯1 椎骨1若	椎骨1若 焼3若		30
オットセイ	♀上腕骨左上～中1若					♀頬歯1			2
アシカ							♂肩甲骨右1若		1
アシカ類	寛骨左腸1幼		椎骨1、胸骨1						3
アザラシ類	後頭骨1	側頭骨右破片1							2
鰭脚類	頭蓋骨破片2、指骨1								3
海獣肋骨片	14	6		3			7		30
海獣破片	49	16	5	2	2	6	7	1	88
海獣焼破片	18				1	7	13		39
計	689	136	103	18	10	178	278	16	1428

註　表2・3参照。

表6　不明破片出土量

	A4III層	獣骨集中	礫集中	土器集中	P6	P7	P9	P10	A4I層	計
不明破片	138	213	17		12	282		112	1	775
不明焼破片	956	145	4	3	13	1466	32	154		2773
計	1094	358	21	3	25	1748	32	266	1	3548

【資料紹介】

冬島遺跡出土の特徴的な土器２

(Characteristic earthenware excavated from the Fuyushima site)

大泰司　統[1](OHTAISHI　Osamu)

はじめに

2021 年、様似郷土館紀要３号に冬島遺跡出土土器資料を紹介する機会(大泰司　2021)を頂いた。だが、全てを紹介しきれなかった。再度機会を頂けたので、今回新たに３個体を冬 12～14 として紹介する。図３・表１・2 に示した。残存率の低い冬 12・14 の断面図は正中線の断面である。そして前回紹介した冬 11 について昭和 56 年(1981 年)の調査記録を読み直して判明した事を補足する。

遺物解説

冬 11・12：昭和 56 年調査出土土器である。昨年度、冬 11 は 21 年刊行様似郷土館紀要３号に図２④前回(大泰司　2021)で図 1-ｃ「土器集中凹穴」と考えていた。埋設土器が無文とされ、ミガキの強い冬 11 を連想したためである。だが、遺物台帳図２a ではこれが「墓址状凹穴」別称を持ち、注記が B0 とわかった。また冬 11 壺の注記 Z(表 1)は図２⑤「中央部貯蔵穴」とわかった。そして層位としたⅡ 6 の 6 は Section6 という調査区グリッドとわかった。前回の冬 11 表にも誤りがあり、訂正した結果を今回、表 1 に記す。同じ図２⑤中央部貯蔵穴から出土した冬 12 を新たに紹介する。注記に Z とあるが冬 11 とは別個体である。むしろ注記 B0 の「無文土器」に、冬 11 に関連する可文性が残った。墓址状凹穴 B0 に本来あった冬 11 上半分が近現代の作業攪乱で、Section6 に散乱し、加えて南隣の図２⑤中央部貯蔵穴や北東隣 Section3 に混在した可能性もある(表 1)。

冬 13：平成 28 年度・2016 年調査テストピット 6 の P-1 から出土した(図１・図４a)。平面的な位置は畑跡のテストピットという記録のみであったため、空中写真と郷土館紀要創刊号掲載の図５から類推した。出土状況写真が残っており、おおよその位置を断面図におとした。耕作土Ⅰ層より下で、貝・魚・獣骨を密に含む土ｂ層を切って P-1 が構築される。Ｐ-1 の覆土１層から冬 13 が出土した。Ｐ-1 覆土 1 は連続性が高いと調査者は言う。冬 13 底部際の内面調整には成形痕跡が顕著に残る。

冬 14：2019 年調査 TR１の P-4a から出土した(図１・図４b～d)。P-4a とｂは別で、上位のｂは自然か人為か不明だが、骨層のⅢ層より新しい。P-4a 覆土 2 層はⅢ層と同じで、魚骨を密に含む。冬 14 は２層出土とされ、銛先はこの土層からの出土である。冬 14 口縁部に四単位の突起を推測する。

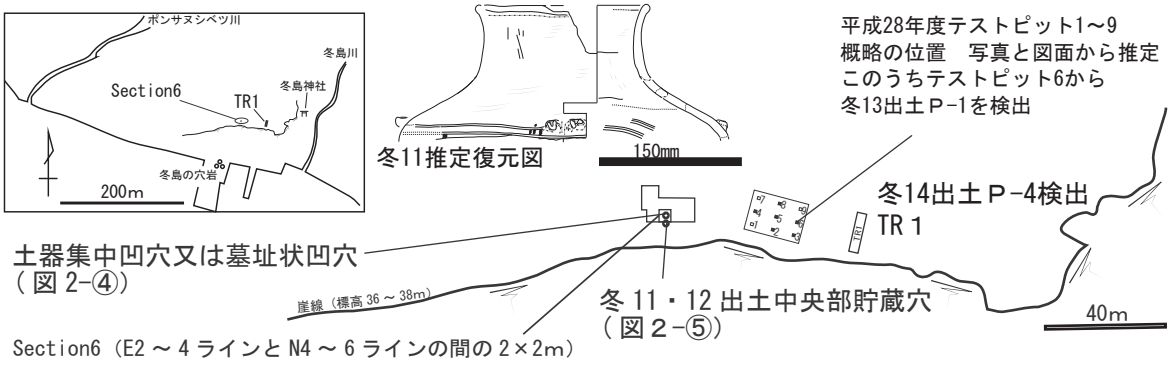
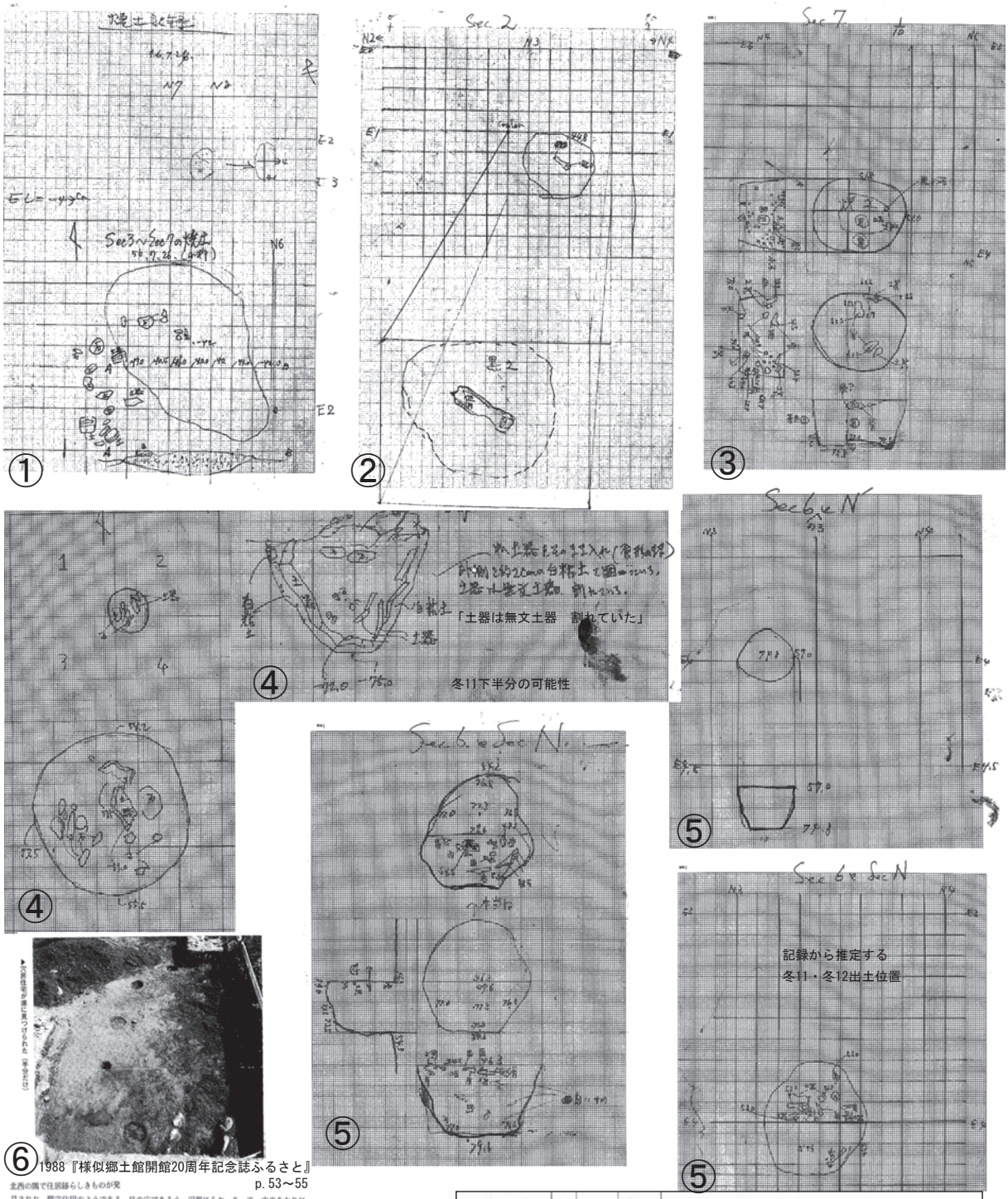


図１　冬島遺跡 冬11・冬12・冬13・冬14出土位置

1．公益財団法人北海道埋蔵文化財センター



⑥ 1988『様似郷土館開館20周年記念誌ふるさと』
p. 53～55

北西の隅で住居跡らしきものが発見された。竪穴住居のようである。柱の穴であろう、円型に5ケ あって、中央あたりに焚火跡のように砂が焼け、両側に石を立てゝある。大収穫である。小樋教諭は「こんな端くれに住居跡があるのだから、この平一面は大集落を形成しており、墓地もある筈で、凄い大発見があると信ずるネーと心臓をときめかし、眼も輝いていた。

⑥	House床面	56FHY FHY柱	20+55+81 8
③	骨塚状凹穴	56FT	45
④	墓址状凹穴	56FBQ	2+6
⑤	中央部貯蔵穴	56FZ	36
①	焼土内遺物	56FS	38
②	鹿骨	56FII2	

a
昭和56年
調査
遺構出土
遺物台帳
と該当すると
思われる遺構

b 昭和56年調査調査区グリッド(Sectionと呼称)設定図に遺構位置を推定

図2　昭和56年冬島遺跡調査

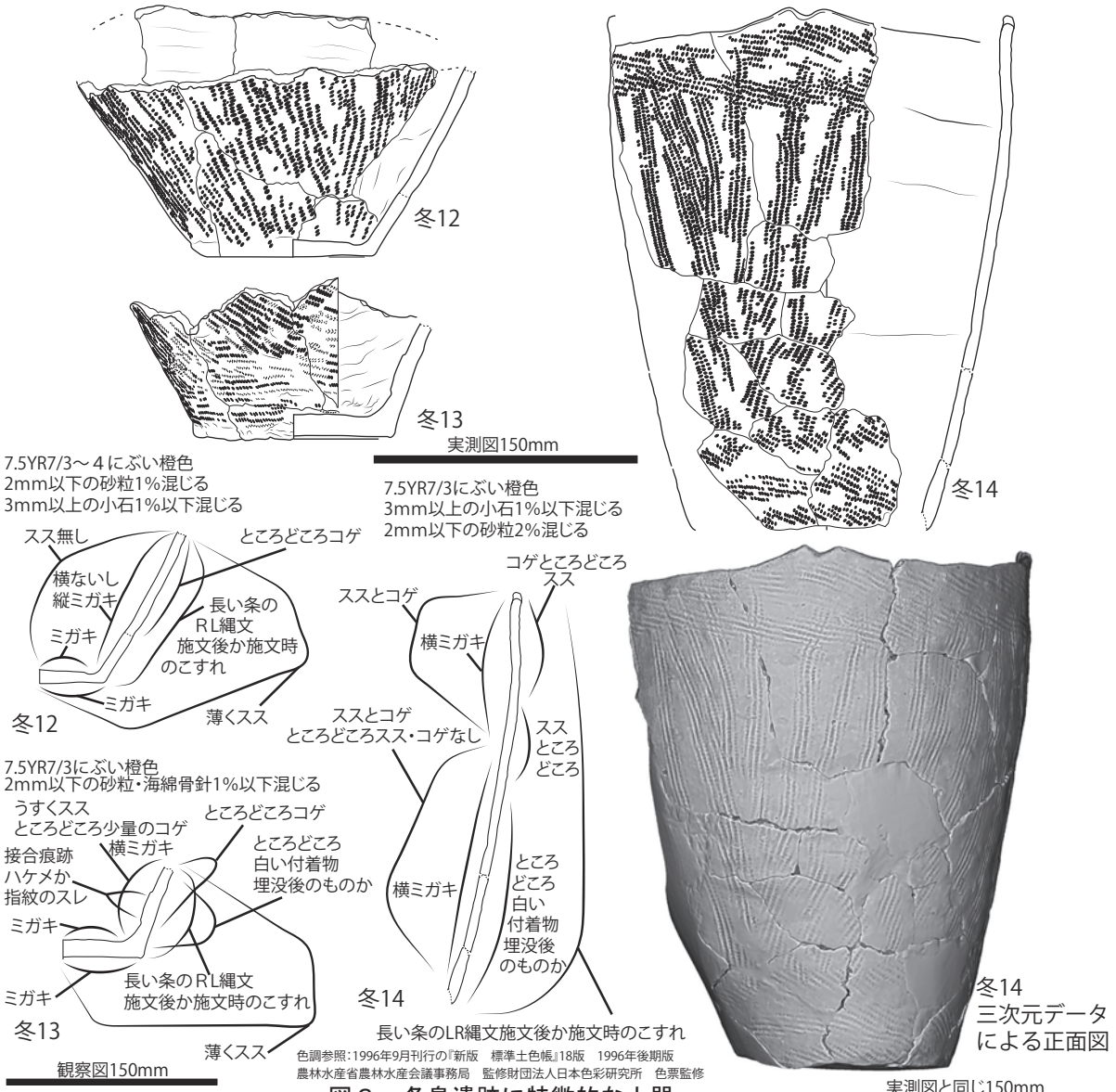


図３　冬島遺跡に特徴的な土器

表１　冬 11・冬 12・冬 13・冬 14 観察表

番号	掲載	出土位置	層位等	番号	点数	備考
冬11・口縁	紀要3号	Section6	Ⅱ6		1	訂正　土器集中凹穴ではなかった
冬11・口縁	紀要3号	Section3	Ⅰ3		1	訂正　土器集中凹穴ではなかった
冬11・肩	紀要3号	Section6	Ⅱ6		8	訂正　土器集中凹穴ではなかった
冬11・肩	紀要3号	中央部貯蔵穴＝Z	Z		1	訂正　中央部貯蔵穴(Z)出土
冬12	未掲載	中央部貯蔵穴＝Z	Z		13	中央部貯蔵穴(Z)出土
冬13	紀要創刊号図版3-1	TP6　P-1	覆土	5357	7	平成28年調査　P-1
冬14	未掲載	TR1　P-4	覆土中	6428	19	平成30年調査　P-4

表２　冬 12 ～ 14 計測表

	大きさ(cm)			残存率（%）	
番号	口径	底径	器高	口縁部	底縁部
冬12	―	10.4	―	―	85
冬13	―	11.5	―	―	100
冬14	24.0	13.3	29.0	48	45

冬 14 は残存率が低く歪なため計測値は目安である

結語

冬 12～14 は、いずれも長い節の縄文地紋である。冬 14 のみ撚りが異なる。冬 12 は他と比べて縄文の節が大きく、冬 13・14 は底部際と胴部で施文の向きを変える。冬 12 の器形は他と比べて胴部から底部にかけてすぼまる形状である。冬 12・14 の胎土に小石が混じる。施文原体と成形の精粗のみで判断するならば、冬 12 が古く、冬 13・14 は比較的新しい可能性がある。前回（大泰司 2021）も出土土器を連続性が高いとしながらもおおよそ二つにわけた。興津式から宇津内Ⅱa 式の古い頃の古段階と、軽川式・東歌別式･宇津内Ⅱa 式の新しい頃の新段階である。今後の検討を要する。

様似郷土館学芸員・髙橋美鈴係長には様々な便宜を図って頂いた。調査を補助した坂本尚史氏からは調査状況を教えて頂いた。記して感謝致します。

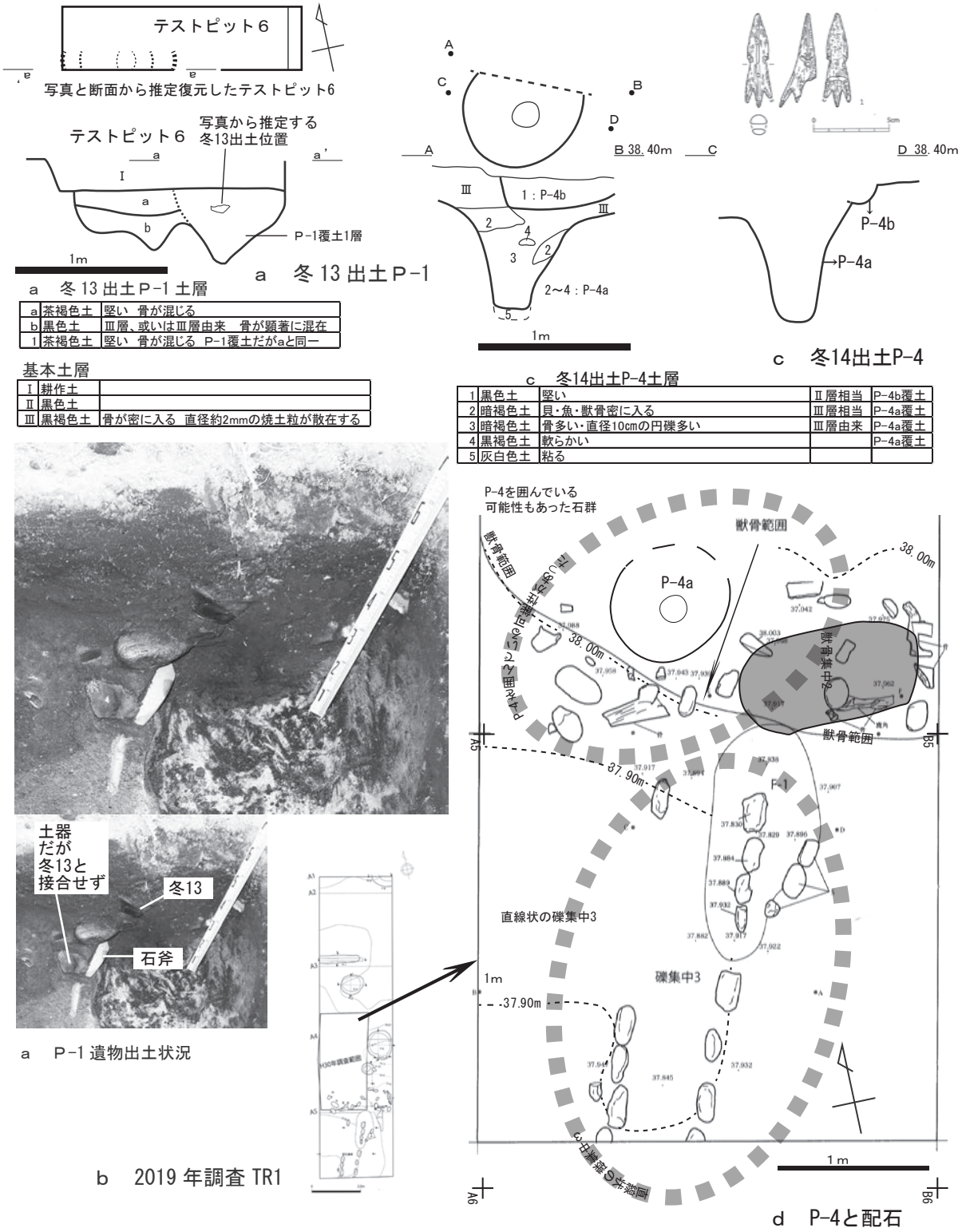


図４　冬島遺跡位置図および調査範囲

引用・参考文献

大泰司　統 2021「冬島遺跡に特徴的な土器」『様似郷土館紀要』３号 pp 17～24

大沼忠春編 2004『考古資料大観 11　続縄文・オホーツク・擦文文化』pp 42～43 ほか

様似郷土館 1988『様似郷土館開館 20 周年記念誌ふるさと№9』pp 53～55

様似郷土館 2018・2020・2021「様似町冬島遺跡発掘調査報告」『様似郷土館紀要』創刊号～３号

【調査報告】

矢本家文書調査報告１

矢本家文書について

（About Yamoto family documents）

髙　橋　美　鈴[1]（TAKAHASHI Misuzu）

はじめに

様似町は、太平洋沿岸の日高管内東部に位置し、近世には東蝦夷地と呼ばれる地域に属する。町内には、1799 年に江戸幕府によって開削された国指定史跡・様似山道や 1806 年建立の国指定重要文化財・蝦夷三官寺等澍院関係資料を有する蝦夷三官寺の１つである等澍院が所在し蝦夷地において早くから幕府直轄事業が導入された町でもある。

しかし、様似町における先住民アイヌ民族と和人の関係史に関する記録も少なく、その様相は不明な部分も多い。近世において、『協和使役』にみられるような和人文化の民間信仰に基づく儀礼が行われる事例や等澍院の落慶法要時の記述など断片的な資料しかなく、両者の関係を読み解くことは難しい。そのため、華夷観念に基づく異民族軽視が基になっている社会構造であった中で、盲目的に町内においてアイヌ民族と和人文化が良好な形で緩やかに接触した文化形成が定説化している部分がある。

このことから、町指定文化財であり幕末～明治期において会所・駅逓業務を請け負った矢本蔵五郎が残した『矢本家文書』から、今一度町内におけるアイヌ民族と和人の関係史について調査を行い、華夷観念の中で町内における両者の関係史を再精査し、様似町におけるアイヌ文化について再考することを目的とした。

１．矢本家文書調査検討会の経緯について

本検討会は、アイヌ施策推進事業の一環として、矢本家文書に記されている様似町のアイヌ民族に関する記述から様似におけるアイヌ文化と和人文化の様相について調査検討し、その成果を様似郷土館のアイヌ展示の拡充に繋げる目的のため、アイヌ政策推進交付金を受けて実施したものである。検討委員及び検討会の開催については、下記のとおりである。

検討委員：瀧澤　正 氏、谷本　晃久 氏（北海道大学大学院文学研究院）、浅倉　有子 氏（上越教育大学）、三浦　泰之 氏（北海道博物館）

検討会開催日：令和２年度　令和２年 10 月 30 日（金）～10 月 31 日（土）
令和３年度　令和３年 10 月 28 日（木）、令和４年３月 22 日（火）

２．『矢本家文書』の収集及び整理の経過ついて

『矢本家文書』は、様似町会所町にて明治以降会所を引き継ぎ、駅逓業務や商いを行なっていた様似矢本家が所蔵していた蔵書を抜いた文書 38 冊で、明治８年から明治 41 年までの期間に書かれた帳簿類や開拓使等に提出した文書控えなど明治期における当町の商店経

1.様似町教育委員会

営やアイヌ民族との関係をうかがい知る貴重な資料である。文書 38 冊のうち 34 点については、平成 26 年に町の文化財に指定されている。

寄贈の経緯と整理方法については、これまで昭和 42 年、平成 17、21、24 年の４回に分けて郷土館への寄贈の申し出があり、様似郷土館で受け入れている。

整理にあたっては、資料の状態確認ののちに受け入れ台帳に記載、ナンバリングを行なっている。また、平成 17 年から平成 19 年の３カ年にわたり、北海道史研究協議会の指導の下、他の所蔵文書資料とともに目録を作成している。

整理後は、館内展示にまわした資料以外は、薄葉紙に包んだ後に中性紙箱に収納し、収蔵庫で保管している。

調査研究については、瀧澤正氏によって調査がおこなわれており、瀧澤正（2009）において、アイヌ民族が矢本から米などの生活必需品と自己の生産物である昆布を「物々交換」する前時代の遺制の形式を取り、負債だけが貨幣として計算される制度でありながら、自己の生産物でその生活を賄おうとするアイヌ民族の様相を「経営」と位置づけて当町におけるアイヌ民族の生業形態を整理している。

３．矢本蔵五郎について

様似における矢本家の初代当主となる矢本蔵五郎（図１）は、文政８年[i]に下北郡大畑村字関根（現むつ市）で生まれたとされる。様似に来た時期は不明であるが、入植当初は冬島地区で昆布漁に従事していた（様似町 1955）。

会所内での役職については、不明の部分が多いが、明治元年のシャマニ場所の引き継ぎ書[ii]や等澍院に残されていた 10 世広道の代に行われた等澍院護摩堂の棟上札に矢本蔵五郎の名が帳役として記されていることから、会所廃止時には帳役だったことがわかる。

図１　矢本蔵五郎肖像画

蔵五郎は、明治２年に会所が廃止されると、様似駅逓所の業務取扱人を任命され、会所の残務処理をおこなった。

明治７年には昆布浜拝借及び鹿角皮の買入免許の交付を願い出ている[iii]。明治８年には、旧会所の払い下げを出願し、同年に初代郵便取扱役、様似郡土人取締に命じられたとのことである。また、この頃の宿業務に関する肩書に「旅籠舎渡世」との名前を使用していたようである（様似町教育委員会　2017）。

また、駅逓業務と共に道の維持管理業務も積極的に行っており、明治 11 年には国指定史跡・様似山道の補修維持管理も行なっていたことが矢本家文書からうかがえる。

役職としては、不明な点も多いが、明治９年から明治 12 年頃まで副総代を務め[iv]、明治 13 年に戸長に就任[v]、明治 15 年に眼病により郵便取扱役を三上幸助に譲っている[vi]。

商業については、明治 13 年には、新たに西洋形の船（弘済丸）を導入して海運業に力を

いれている[vii]。役員引退後も精力的に商いを続けており、明治 16 年には函館に拠点を移しつつ、さらなる船の購入[viii]や水産博覧会に三上幸助とともに塩鮭を出品し賞状を授与されるなど海運業・漁業に注力していた様相がうかがえる。

晩年になると、明治 21 年に退隠し[ix]、様似の店舗は長男の貞吉に譲って自身は函館の仲浜町に函館矢本出張所を設けた。店舗は、その後函館の富岡町に移転している。そして、明治 27 年に函館にて病没、享年 70 歳であった。

おわりに

調査の詳細な分析については、各先生の報告を参考いただきたい。本事業により、様似町における明治期のアイヌ民族と和人の様相を窺い知ることができ、様似町のアイヌ民族と和人の関係史について新たな知見を得ることができた。しかし、近世から近代に続くアイヌ民族に対する政策が常に背景にあり、現在に続くまでのアイヌ民族に対して蔑如たる思考が常だったことに留意する必要がある。

謝　辞

文末になりますが、本事業にあたり多忙な中、検討委員をご快諾いただきました浅倉有子氏、瀧澤正氏、谷本晃久氏、三浦泰之氏に深謝いたします（五十音順）。

i　道立文書館「矢本蔵五郎」『履歴短冊　乙　明治十四年六月』の中に文政 10 年生まれの記載もみられるが間違いの可能性が高い。

ii　道立文書館「シャマニ場所支配人通詞帳役番人稼方名前書」『三石・浦河・様似引継書類明治元年』

iii　道立文書館「昆布浜拝借並ニ鹿角皮買入免許、願出ノ件」『開拓使公文録　地方・会計　明治七年』

iv　道立文書館「矢本蔵五郎」『履歴短冊　乙　明治十四年六月』

v「様似郡各村戸長欠員ノ処同郡平民矢本蔵五郎戸長ニ採用方ノ件」『戸長進退録　明治十三年第一月』、『改訂様似町史』には、明治 14 年との記載がある。

vi「様似郵便取扱役矢本蔵五郎病気退職願出ニ付跡三上幸助へ申付ノ件」『官省院庁文移録　往　明治十五年』なお、『改訂様似町史』に明治 18 年ころに郵便局を友人の三上兼太郎に譲ったとの記述があるが、明治 15 年とするのが妥当だろう。また、後任についても、三上幸助の可能性が高い。

vii「様似村矢本蔵五郎所有西洋形弘済丸定繋替ノ件 」『本庁文移録　明治十三年一月』

viii「函館区寄留矢本蔵五郎、青森県ニテ清福丸外購入帰港届出ノ上船籍編入ニ付仮鑑札引上焼却ノ件」『府県往文移録　自第四〇一号至第六〇〇号　明治十六年』

『様似町史』によると明治 19 年に函館矢本出張所を設けたとされるが、明治 11 年や明治 16 年など定期的に函館を行き来していたことがうかがえる。

ix　『様似町史』には、明治 19 年に貞吉に店舗を譲ったとの記載がある。様似町に残る記録には、明治 21 年に退隠の記載がみられる。

参考文献

様似町 1955『様似町町政だより』第 32 号

様似町町史編さん委員会 1992『改訂　様似町史』

様似町教育委員会 2017『様似山道―歴史の道活用整備事業報告書―』

瀧澤正 2009「明治初年アイヌ昆布漁家の『経営』と『家計』―様似郡の例にみる」『北海道・東北史研究』第 5 号 PP3-22

凡例

（1）「整理番号」

・本目録の通し番号である。

（2）「収蔵番号」

・様似郷土館での資料の登録番号である。矢本家関係資料には、303～344、538、3892 の番号を割り当てられている。本目録では、矢本家文書としている 37 点及び矢本商店関係資料 1 点を記している。

（3）「文書番号」

・平成 21 年度に作成した様似郷土館所蔵文書目録の番号である。矢本家文書は、Y-1～Y37 の番号が割り当てられている。

（5）「資料名」

・原則として原題主義（資料の表紙や冒頭などに墨書されている題材をそのまま）を採用した。・資料に原題がなく、その内容から適宜、資料名を付した場合は〔　〕で記した。

（6）「数量」

・その資料の点数を示した。

（7）「形態」

・冊子状のものは「竪帳」「横帳」、一枚物は「竪紙」「切紙」とした。

（8）「年代」

・制作された年月日を記した。また、複数年にまたがる資料については、一番古い作成年月日を記した。

（9）「法量」

・資料の寸法（縦・横）をｃｍで記した。

(10)「丁数」

・冊子形態(帳)の場合に丁数を記した。・表紙が綴られている物は、表紙・見返などを除く本文部分の丁数である。

(11)「作成者・著者」

・資料自体に作成や著者、差出人の記載があるものについて示した。また、差出人と宛所の両方が記載されていれば、「○○→○○」の形で記した。

(12)「備考」

・資料の状態については、備考欄に記した。

整理番号	収蔵番号	文書番号	資料名	数量	形態	年代	法量(cm)		丁数	作成者・著者 差出→宛所	備考
							縦	横			
1	303	Y1	一号大福帳	1	横帳	明治16年	34.0	13.0	602	矢本蔵五郎	
2	304	Y2	一号大福帳	1	横帳	明治22年	38.0	13.5	764	矢本貞吉	
3	305	Y3	二号大福帳	1	横帳	明治23年1月	38.0	13.5	－	矢本	資料全体にフケあり。破損あり。
4	306	Y4	一号大福帳	1	横帳	明治37年1月	38.0	13.0	661	矢本店	
5	307	Y5	土人勘定帳	1	横帳	明治10年	34.0	12.3	○	矢本蔵五郎	
6	308	Y6	土人勘定帳	1	横帳	明治12年1月	34.0	12.3	344	矢本蔵五郎	
7	309	Y7	当座帳	1	横帳	明治13年	44.0	15.0	○	矢本蔵五郎	
8	310	Y8	当座帳	1	横帳	明治17年1月	31.0	14.0	2670	矢本蔵五郎	
9	311	Y9	当座帳	1	横帳	明治21年子第1月	23.0	13.0	2389	矢本店	
10	312	Y10	仕入元帳	1	横帳	明治24年第1月	13.0	19.0	385	矢本貞吉	
11	313	Y11	正金貸附込仮帳	1	横帳	明治19年第5月	34.5	12.3	37	矢本店	
12	314	Y12	正金貸附帳	1	横帳	明治23年寅第9月	38.0	13.2	163	矢本貞吉	
13	315	Y13	出産物送状留帳	1	横帳	明治8年5月	34.0	12.3	67	矢本蔵五郎	
14	316	Y14	産物仕訳帳	1	横帳	明治17年	38.0	13.5	133	矢本蔵五郎	表紙なし。破損あり。
15	317	Y15	諸産物買入帳	1	竪帳	明治25年第1月	24.0	17.0	49	矢本店	
16	318	Y16	奉公人過上金調	1	竪帳	明治18年～41年	24.0	17.0	186	矢本店	
17	319	Y17	四番與路志゛控留	1	竪帳	明治11年7月以降	24.0	17.0	94	－	
18	320	Y18	六番與路じ控留	1	竪帳	明治12年5月以降	24.0	17.0	157	矢本帳場扱	
19	321	Y19	七番與與路じ控留	1	竪帳	明治13年1月以降	24.0	17.0	222	矢本帳場扱	
20	322	Y20	八番萬日嘉恵	1	竪帳	明治14年7月以降	24.0	17.0	○	矢本帳場	
21	323	Y21	十号萬用記	1	竪帳	明治16年2月以降	24.0	17.0	○	矢本店	
22	324	Y22	御触書諸願書留	1	竪帳	明治８年	24.0	17.0	○	矢本蔵五郎	
23	325	Y23	初學調法算法稽古宝	1	竪帳	明治30年	21.0	16.0	164	－	
24	326	Y24	算法記　全	1	竪帳	明治20年	22.0	16.0	170	矢本	
25	327	Y25	経典餘師	1	竪紙	－	23.0	16.0		－	
26	328	Y26	証	1	切紙	明治12年12月27日	24.2	34.2		須藤力太郎	
27	329	Y27	課税通知書	1	切紙	明治12年12月30日	16.3	12.5		浦河郡出張租税課→矢本蔵五郎	
28	330	Y28	課税通知書	1	切紙	明治17年1月	16.3	12.5		浦河郡出張租税課→矢本蔵五郎	
29	331	Y29	課税通知書	1	切紙	－	16.3	12.5		浦河郡出張租税課→矢本蔵五郎	
30	332	Y30	仮約定書	1	竪紙	明治16年6月1日	27.6	29.7		萱場祐節→矢本蔵五郎	
31	333	Y31	仮約定書	1	竪紙	明治16年6月1日	24.7	34.3		矢本蔵五郎→萱場祐節	
32	334	Y32	預証	1	竪紙	明治16年9月4日	24.3	34.7		矢本蔵五郎→功得丸幸助	
33	335	Y33	税品領収書	1	竪紙	明治16年12月4日	24.7	34.2		矢本蔵五郎→樋口九等属	
34	336	Y34	御税品払受代金上納目録	1	竪紙	明治16年12月4日	27.3	39.2		矢本蔵五郎	
35	538	Y35	鮭年々水揚帳	1	横帳	明治9年9月以降	35.0	13.0		－	
36	338	Y36	大福帳	1	横帳	明治34年	13.5	39.5	○		表紙なし。
37	339	Y37	大福帳	1	横帳	明治34年	13.7	39.5	○		表紙なし。
38	3892	―	明治37年略暦	1	枚	明治37年1月	51.0	37.5			破損あり。

[1]　一号大福帳（303）

[2]　一号大福帳（304）

[3]　二号大福帳（305）

[4]　一号大福帳（306）

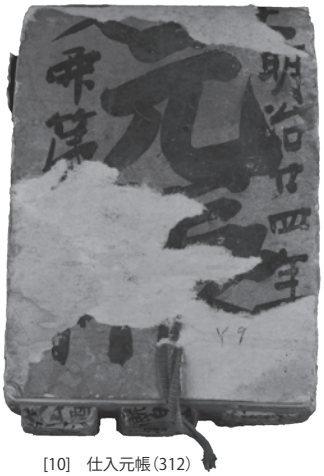
[5]　土人勘定帳（307）

[6]　土人勘定帳（308）

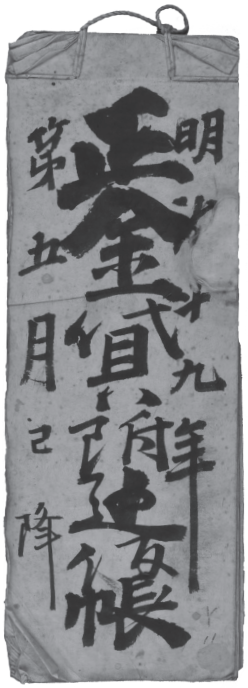
[7]　当座帳（309）

[8]　当座帳（310）

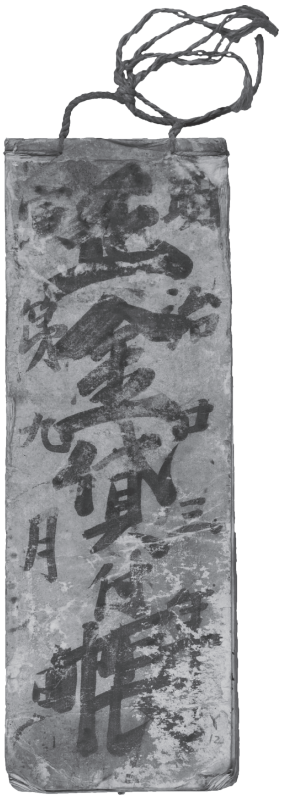
[9]　当座帳（311）



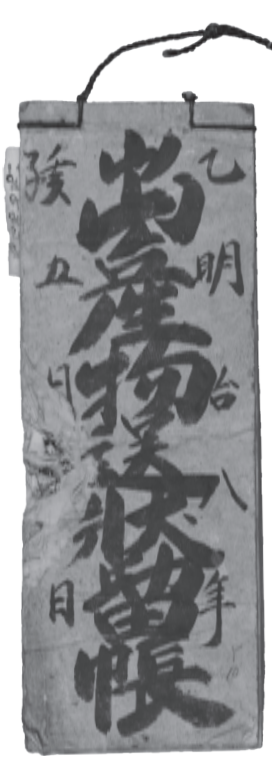
[10]　仕入元帳（312）



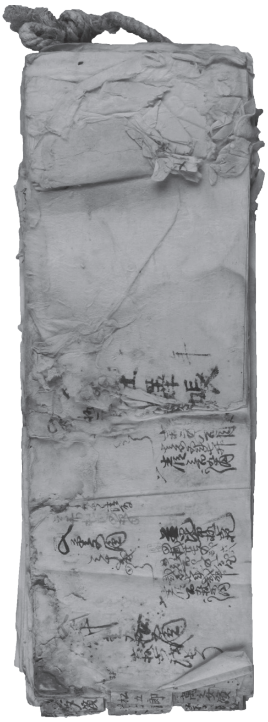
[11]　正金貸附込仮帳（313）



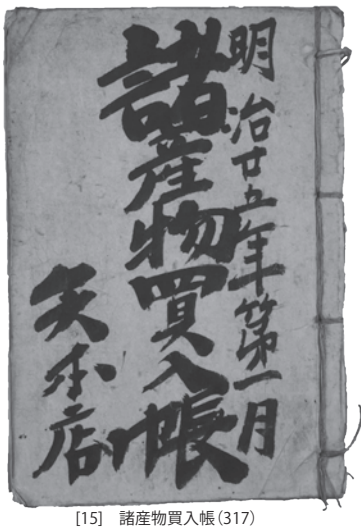
[12]　正金貸附帳（314）



[13]　出産物送状留帳（315）

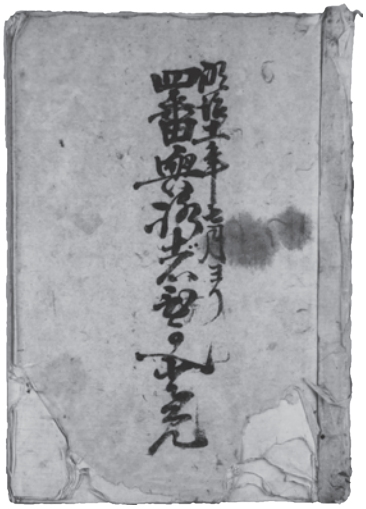


[14]　産物仕訳帳（316）

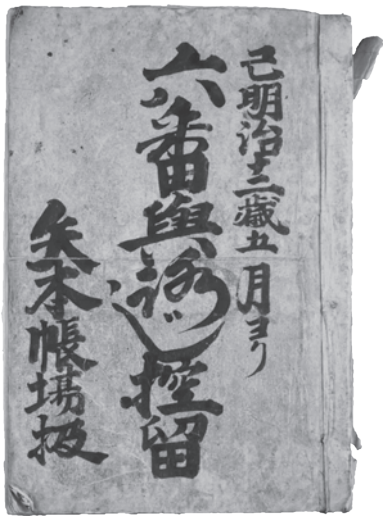


[15]　諸産物買入帳（317）

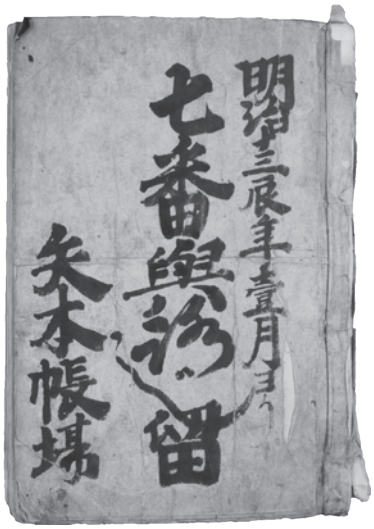
[16]　奉公人過上金調（318）



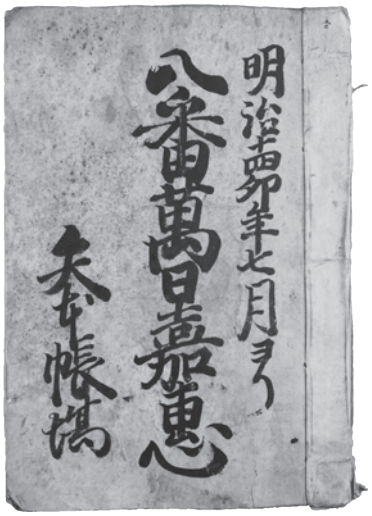
[17]　四番與路志〝控留（319）



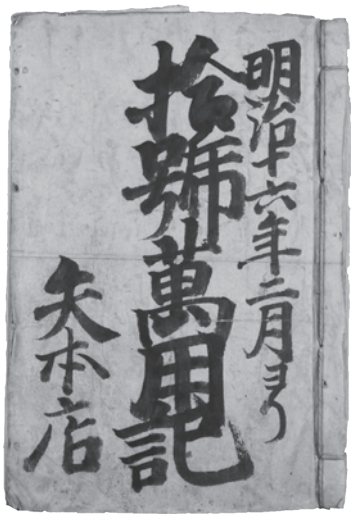
[18]　六番與路じ控留（320）



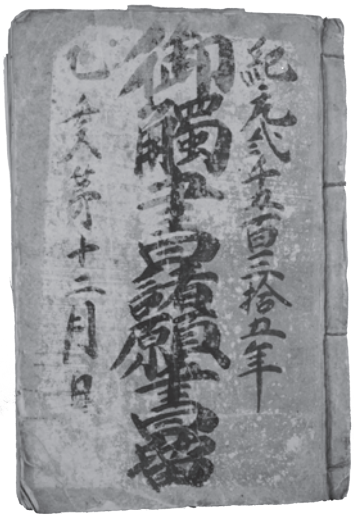
[19]　七番與路じ控留（321）



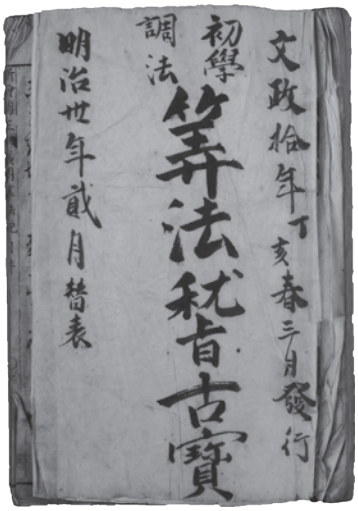
[20]　八番萬日嘉恵（322）



[21]　十号萬用記（323）

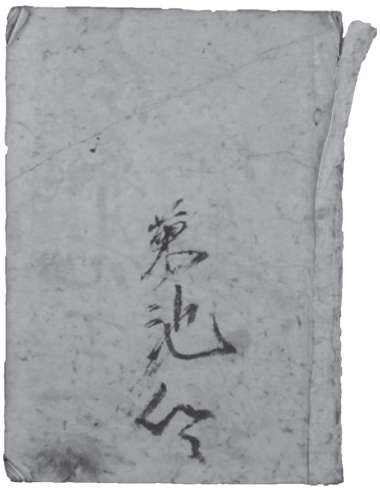


[22]　御触書諸願書留（324）

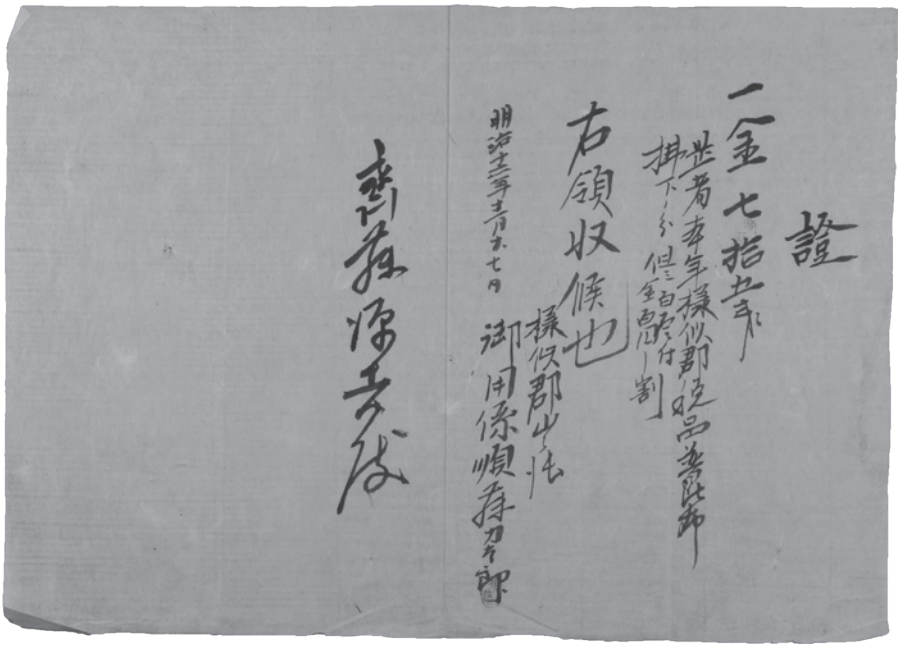


[23]　初學調法算法稽古宝（325）

[24]　算法記　全（326）



[25]　経典餘師（327）

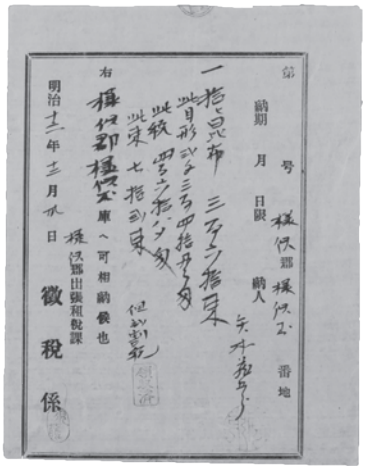


證

一金七拾五円

右領収候也

[26]　証(328)



第　号

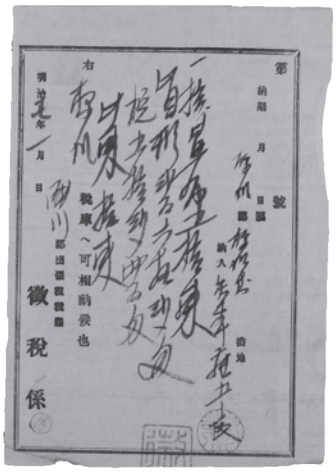
納期　月　日限　納人　番地

一金七拾五円

右

明治十一年十二月廿八日　徴税係

[27]　課税通知書(329)



第　号

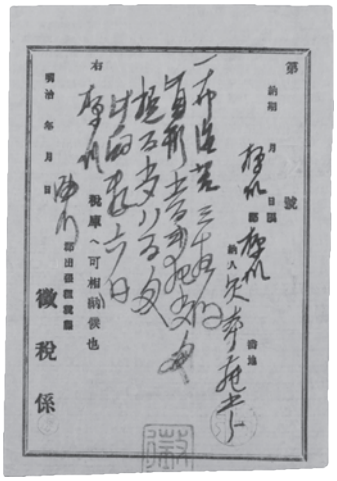
納期　月　日限　納人　番地

一金七拾五円

右

明治十年一月　日　徴税係

[28]　課税通知書(330)



第　号

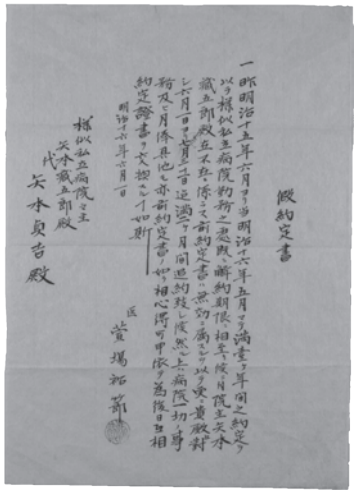
納期　月　日限　納人　番地

一金七拾五円

右

明治十年一月　日　徴税係

[29]　課税通知書(331)

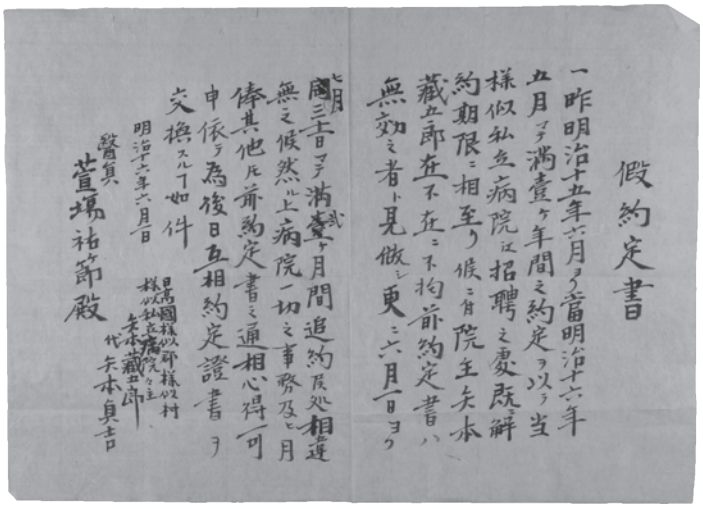


假約定書

一昨明治十五年六月廿五日

明治十年六月廿日

[30]　仮約定書(332)



假約定書

一昨明治十五年六月廿五日當明治十六年

五月廿五日滿壹ヶ年間之約定ヲ以テ当

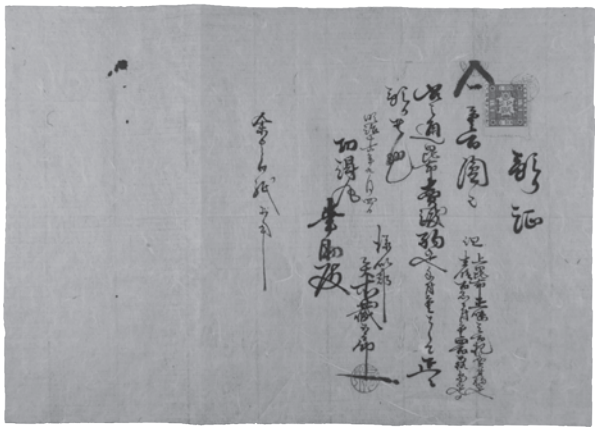
様似私立病院江招聘之婦医解

約期限ニ相至リ候ニ付院主矢木

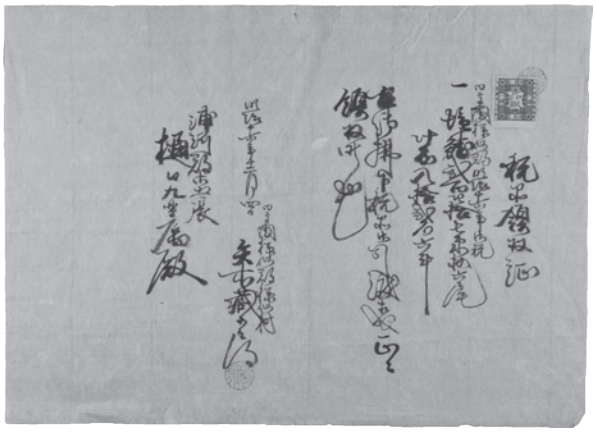
藏五郎在不在ニ不拘前約定書ハ

無効ニ者ト見做シ更ニ六月一日ヨリ

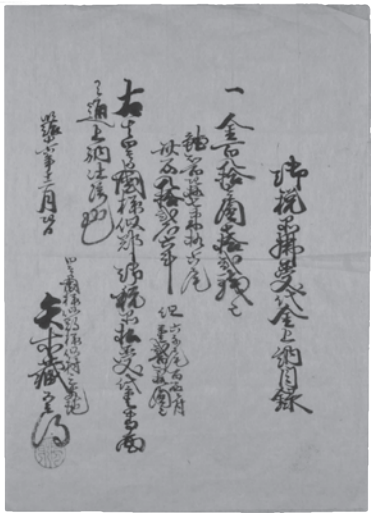
[31]　仮約定書(333)



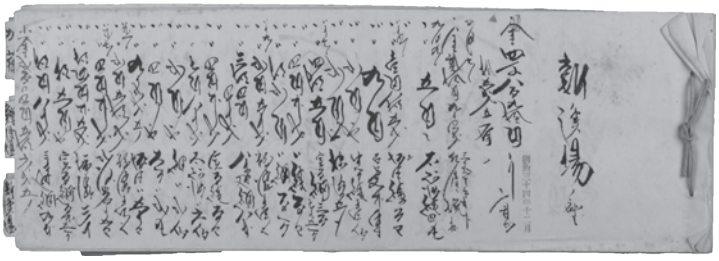
[32]　預証（334）



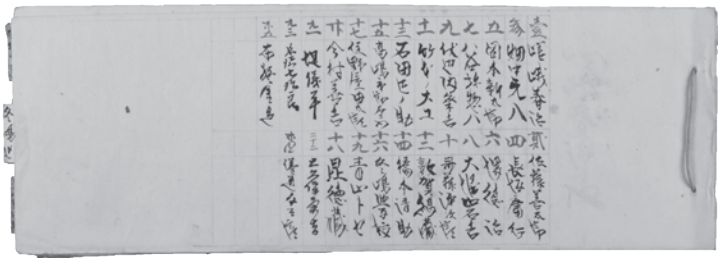
[33]　税品領収書（335）



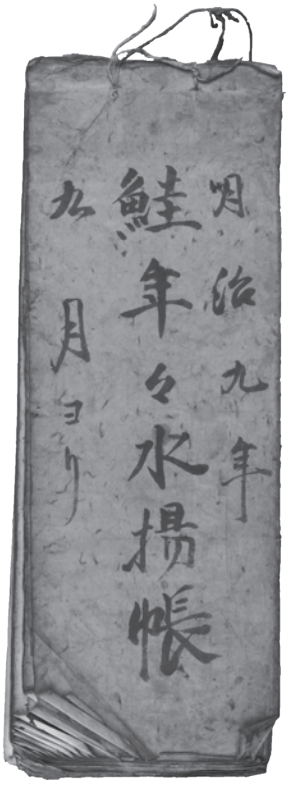
[34]　御税品払受代金上納目録（336）



[36]　大福帳（338）



[37]　大福帳（339）



[35]　鮭年々水揚帳（538）

[38]　明治三十七年略暦（3892）

矢本家文書調査報告２

東蝦夷地シャマニ場所から日高国様似郡へ

～アイヌ史的観点から矢本家文書をよむために～

（Is it Possible to Contribute the *YAMOTO*《矢本》Documents to the Ainu History？）

谷本　晃久[1]（TANIMOTO Akihisa）

はじめに

矢本家文書調査検討会では、様似町教育委員会の所蔵する「矢本家文書」の調査分析を実施した。矢本家文書の年代は、いわゆる幕末維新期に該当し、つまり近世から近代への移行期にあたっている。

矢本家文書は、おもに近代初頭の様似郡にかかる一次史料が豊富に含まれる文書群である。瀧澤正が詳細に検討するように[1]、そこからは、アイヌ民族にかかる微細で豊かな情報が鏤められている点で、大変貴重な内容を含んでいる。それは、本誌所載の三浦論考や浅倉論考が明らかにするように、個人単位の売買記録をも含んでおり、当該期の社会経済のみならず、生活文化を考えるうえで、得難い資料と評価することができる。

本稿では、こうした価値を有する矢本家文書をよむための前提として、当該期当該地域の概要を、なるべく一次史料に即しつつ、お示ししてみたい。これにより、豊富で微細な情報を考える補助線となればと考えるからである。

さらに、矢本家文書から近現代移行期におけるアイヌ史的観点から重要と思われる文書を抽出し、紹介・考察を加えてみたい。これは、アイヌ史の視座からの個別具体的な歴史叙述が可能であるということの実例として取り上げるもので、いわば考古学におけるトレンチ調査としての試みである。これにより、矢本家文書のアイヌ史的価値を具体的にお示しできれば、と考えるものである。

１．シャマニ場所・様似郡と矢本家文書

明治２年（1869）、政府は「蝦夷地」の名称を廃して五畿七道に加え新たに「北海道」を設け、11 か国 69 郡を置いた。郡には、村落が配置されることとなる。これにより、東蝦夷地シャマニ場所は、北海道日高国様似郡となったわけであり、そこに 23 ヶ村が定められた。明治７年頃の統計によると、様似郡の人口構成は 81 戸 353 人で、うちアイヌ 245 人（69.4%）、和人 108 人（30.6%）となっており、近代初頭にあってもアイヌ人口が優位であった（「日高国地誌提要」／ただし、これに寄留和人 53 人が加わる）。

東蝦夷地シャマニ場所は、明治２年までは場所請負制度の下にあった。場所請負制度とは、蝦夷地を沙汰した領主権力（松前藩。幕領期には幕府箱館〔松前〕奉行）から特許を得た商人（場所請負商人）が、巨額の運上金を納めるかわりに、場所の出入荷を独占したシステムをいう。「場所」に先住したアイヌ民族からみれば、産物の販売と和製品の購入は、場所請負人に限定され、いわば押し買い・押し売りが強いられる構造が設定されたことになる。19 世紀以降は交易に加え、次第にアイヌ民族が場所請負人に雇用される形態が常態化し、それらが前貸精算制によっていたため、そこに隷属性を帯びる構造を孕むのが一般的であった。

シャマニ場所は幕末には、箱館の万屋佐野専左衛門が場所請負商人として、隣接するウラカワ場所・シツナイ場所とともに差配していた。運上金は 3 場所合わせて 1048 両余。場所請負制度廃止時点では、仕向金・増運上金と併せ 3882 両余を上納していた[2]。万屋は交易もしくは漁業経営により、これらの上納を回収し、さらに収益を上げる必要があったということになる。

1　北海道大学大学院文学研究院

なお、場所請負制最末期の明治元年（1868）8月における、シャマニ場所の出産物と平均出荷高は、以下の通りであった。昆布が主産物であり、イワシ・サケ・ナマコ・フノリ・鹿皮の出荷があったことが見て取れる。このうちイワシ（鰯粕・魚油）は会所による大網を用いた漁業、すなわち雇用がメインの漁業によるものであったが、そのほかはアイヌからの相対交易（自分稼）による集荷が一定程度見込まれる漁業・狩猟であった点は、矢本家文書をよむ際にも注目しておくべきであろう。

【シヤマニ場所産物年分取揚凡見込高調書】[3]

煎海鼠	150 斤
鮭	300 石
鰯　粕	400 石
昆　布	2000 石
鹿　皮	700 枚
布海苔	30 石
魚　油	70 挺

右之通御座候、以上、

場所請負商人は通常請負場所に下らず、手代や番人・稼方を派遣し交易・経営の実務にあたらせた。手代のうち、場所の責任者を支配人といい、それに会計を預かる帳役、対アイヌ交易を差配する通詞（蝦夷通詞）が副えられた（場所三役）。番人は漁業の現場監督、稼方は漁業労働者で、いずれも場所請負人の雇人である。場所経営の拠点は西蝦夷地では運上家、シャマニを含む東蝦夷地では会所と呼ばれた。場所内部における会所のブランチは番家などと呼ばれた[4]。

矢本家文書の作成主体である矢本蔵五郎は、このうちの「帳役」を幕末に、明治初年には「支配人代」を務めた人物である。つまり、場所請負商人万屋佐野家の手代として、場所の経営に従事した経歴を有していたことになるだろう。

場所請負制度の廃止は、場所請負商人に特許されていた権益が否定されたことを意味する。アイヌ民族の視点から、これを場所緊縛制度からの「解放」と評価することもできるが、実際には生活に不可欠な和製品入手のための交易相手が、すぐさま場所へ殺到することは考えられず、場所請負商人が「漁場持」として交易・経営を維持するのが一般的であった[5]。

そのうえで、旧場所請負人が支配人など場所三役に漁場の権益を委譲する、という例があった[6]。また、開拓使当局は、旧会所・運上家の交通機関としての機能を旧場所請負人へ委託せしめたが[7]、それを場所現地に残った旧場所三役が引き受ける、という例もあった[8]。翻って矢本蔵五郎の経歴をみると、会所廃止後に駅逓所を預かり、また「様似郡土人取締」に任じられていることが注目される[9]。「土人取締」とは、通詞（蝦夷通詞）を改称して置かれた近代初頭の役職だからである[10]。矢本家文書に、様似郡内のアイヌ民族との取引文書が豊富に含まれるのは、矢本蔵五郎を介した近世以来の会所における対アイヌ交易・雇用の継続の側面を見て取るべきなのだろう。

一方で矢本蔵五郎は、交易や雇用のみならず、自ら昆布漁業や海運業を経営したり、鹿角や鹿皮の集荷に乗り出したりもしている。これは、近世には制度上あり得なかった業態であり、場所請負制度廃止によってこそ成り立ち得た、新たな近代的経営者としてのすがたである。駅逓所や郵便局の運営、水産博覧会への産物出展、また難破船の救助などの例をみると、いわゆる地方名望家としての振る舞いを果たしているようにもみえる。

このようにみてくると、矢本家文書の分析は、近世近代移行期の北海道における地方名望家[11]の成立を考えるうえで、ひとつのモデルケースとしての価値を帯びる可能性に満ちていることに気づく。そして、そのなかに豊かに含まれるアイヌ民族に関する文書・記録の存在は、北海道の旧東蝦夷地地域（とりわけ漁村地域）における近代社会の形成過程のなかで、アイヌ社会がどのように組み込まれていったのか、という側面につき、個別具体的なレベルで、いわばミクロストーリアの視点から考える手がかりとしての価値を有しているものと考えられるだろう。

２．明治維新期シャマニ場所におけるアイヌの取引記録

ここでは、これも場所請負制度最末期、明治元年（1868）8 月における会所によるアイヌとの取引値段（公定価格）につき、お示ししたい。開拓使への引継文書のうちに収められた「シヤマニ場所土人撫育品調書」に基づいたリストである[12]。「土人撫育品」と記されているが、実態はアイヌよりの「買上直段」・「売渡直段」とあるから、交易価格のリストである。場所請負制度の下では、アイヌと会所との交易は、幕末の蝦夷地第 2 次幕領期にあっては場所請負人を通じて幕府箱館奉行の恩恵を施す行為という建前があったため、「撫育」と表現されているが[13]、そこには構造的に搾取の構造が伏在していたことは、前述のとおりである。

リストには、公定価格が「代銭」として銭価が示されているが、幕末にあっても箱館通宝の流通はみられたもののアイヌとの取引に通貨が用いられることは一般的ではなかったと評価され[14]、また、会所との取引の差引勘定は相対の場合を除けば漁期仕舞の際に前貸清算のかたちで行われることが通例であったから[15]、ここで示される「代銭」価格は清算に際しての計算上の数値とみてよいだろう。

そうではあっても、以下のリスト A・B からは、雇用給料[16]のほかに、アイヌの出荷し得た商品の品目をうかがうことができる。そして、その背景には、雇用によらない商品生産のかたち、すなわちシャマニ・アイヌによる「自分稼」の実態[17]を透かしてみることができそうだ。

リスト A は、アイヌからの「熊胆・熊皮其外小皮類」の「買上直段」のリストであり、いずれも狩猟により生産される品目である。

【西蝦夷地シャマニ場所アイヌより買入値段書：1868 年（8 月）①】

A：シヤマニ場所熊胆皮其外小皮類土人ゟ買上直段書付

熊胆上	目方１匁に付	代銭	350 文
熊胆中	目方１匁に付	代銭	250 文
熊胆下	目方１匁に付	代銭	100 文
熊皮大	1 枚に付	代銭	1 貫 000 文
熊皮中	1 枚に付	代銭	800 文
熊皮小	1 枚に付	代銭	500 文
狐皮大	1 枚に付	代銭	200 文
狐皮中	1 枚に付	代銭	150 文
狐皮小	1 枚に付	代銭	100 文
獺皮大	1 枚に付	代銭	400 文
獺皮中	1 枚に付	代銭	300 文
獺皮小	1 枚に付	代銭	200 文

右之通御座候、以上、

ヒグマ・キツネ・カワウソが書きあげられており、キツネとカワウソは「小皮類」とされている。「小皮類」とは、山丹交易品（1868 年停止）として集荷された獣皮で、この時期にはイシカリで集約され北蝦夷地シラヌシへ送致されたことが知られている。一方熊胆と熊皮は、「軽物」とみなされた領主の専買品で、日本市場向け商品として集荷された。最幕末のシャマニ・アイヌにとって、ヒグマ・キツネ・カワウソが、和製品入手の手段となる商品価値を帯びた獣類であったということになる。

こうした秩序は、山丹交易の停止により「小皮類」という枠組みが機能しなくなるなど、近代には変容することになる。矢本家文書にみえるアイヌとの毛皮取引の記録から、近世・近代移行期の連続面と断絶面を、具体的によんでいくことができそうである。

リストＢは、アイヌからの「場所産物」の「買上直段」のリストであり、漁獲により得られる水産品と、狩猟により得られる鹿製品がある。

【西蝦夷地シャマニ場所アイヌより買入値段書：1868 年（8 月）②】
B：シヤマニ場所産物土人ゟ買上直段書

生布海苔	1 貫目に付	代銭	010 文
昆　布	1 把に付	代銭	070 文
海　鼠	1 粒に付	代銭	002 文
鹿皮大	1 枚に付	代銭	500 文
鹿皮中	1 枚に付	代銭	400 文
鹿皮小	1 枚に付	代銭	150～300 文
鹿　角	1 間に付	代銭	014 文

右之通御座候、以上、

フノリ・コンブ・ナマコ・エゾシカが書きあげられており、エゾシカは皮と角が品目として分けられている。このうち鹿製品は、A に書きあげられた領主の専買品たる「軽物」「小皮類」に含まれていないため、「産物」に含まれたものとみなされる。また、このうちナマコに関しては、近世には長崎における対中国貿易物資であった「俵物」のひとつとして幕府の専買品目であり、幕末の開国後には専買制度は廃止されていたものの、商品価値は高いものであった。コンブは「俵物」には含まれないが、「諸色」として中国向け貿易品の需要が高く、あわせて国内需要も大きい産物であった。フノリ・エゾシカは、いずれも国内市場向け産物である。

気になるのは、サケの書き上げのない点である。安政 4 年（1857）の記録には、「干鮭」が「干鱈」「魚油」「鯨油」とともに買入産物として書き上げられており、フノリは「干布海苔」となっており、一方、エゾシカには「鹿角」がなく、ナマコもない。サケは 1868 年の記録でも、先述した通り、300 石の出荷があるから、漁獲がないわけではない。

三浦論考【表３－２】によると、矢本家文書にみえる 1877 年・79 年のアイヌによる出荷には、産物出荷数記載と雇用日数記載がある。産物出荷はコンブ、エゾシカ（皮・角）、フノリ、ナマコ（煎海鼠）、薪であり、サケ・イワシについてはいずれも雇用日数記載である。サケ漁（タラ漁も含め）につき、自分稼による出荷がどの段階で、どのようなファクターで行われなくなったのか、考える必要があるように考える。いわば、シャマニ・アイヌの生業変容の問題である。

一方、シャマニ場所＝様似郡のアイヌにとって、商品となる出荷産物が、最幕末の 1868 年と近代初頭の 1877 年・78 年とでは、そう大きく変容していないという点も指摘されるべきだろう。矢本家文書の分析は、ここでもやはり、アイヌ史における近世・近代移行期の連続面と断絶面とを個別具体的に考える素材として有用であるものと捉えられそうだ。

リストＣは、アイヌへの「売渡品」にかかる「直段」（ねだん）のリストであり、当然のことながらいずれも和製品である。

【西蝦夷地シャマニ場所アイヌへ売渡値段書：1868 年 8 月】

Ｃ：シヤマニ場所土人江売渡品直段書

01	玄　米	1 升に付	代銭　056 文
02	清　酒	1 升に付	代銭　200 文
03	地廻り莨	1 把に付	代銭　090 文
04	白木綿	1 反に付	代銭　1 貫 000 文
05	紺木綿	1 反に付	代銭　1 貫 200 文
06	中形染木綿	1 反に付	代銭　1 貫 700 文
07	古手着物	1 枚に付	代銭　4 貫 500 文 ～6 貫 000 文
08	股　引	1 足に付	代銭　1 貫 700 文
09	烟　管	1 本に付	代銭　100 文
10	木綿糸	1 繰に付	代銭　003 文
11	間切大	1 枚に付	代銭　100 文
12	間切小	1 枚に付	代銭　050 文
13	草　鞋	1 足に付	代銭　015 文
14	木綿針	1 本に付	代銭　004 文
15	比　提	1 ツに付	代銭　250 文
16	かもかも	1 ツに付	代銭　350 文
17	台　盃	1 組に付	代銭　2 貫 500 文
18	田代上	1 枚に付	代銭　700 文
19	田代下	1 枚に付	代銭　450 文

右之通御座候、以上、

19 品目が書き上げられている。ここに示される「代銭」は、給与や買入産物の「代銭」と比較してよむと、アイヌ個人の会所との取引についての構造的環境が浮かび上がる。たとえば、№17 台盃（漆椀と天目台のセット）2 貫 500 文を入手するためには、シャマニのアイヌはナマコ 1250 粒、あるいはキツネ皮（小）25 枚、もしくは雇用 1 か月分（上土人）＋クマ皮（中）1 枚の出荷が必要、などといった計算になる。

こうした価格構造が、近代に入りどのように変化したかという点については、矢本家文書に見える 1880-81 年の様似郡アイヌとの取引を示した労作である三浦論考【表１－１】と対照することにより、微細に検討することができるだろう。また、取引品目の多様化という傾向も、同表により具体的に検討することが可能である。翻って 1869 年の静内郡における「蝦夷人江漁場持ゟ諸品売渡直段定書」には、92 件の取引和製品の品目が書き上げられており、前年のシャマニと比べ、大幅に品目が多い[18]。

一方、三浦論考【表１－１】（1880-81 年）には、1868 年とは比べ物にならないほど多彩な取引品目の世界が示されている。たとえば本誌浅倉論考が具体的に指摘するように、味噌や醤油といった調味料、砂糖や菓子、医薬品等は、近世にはみえない新しい商品であると判断される。様似において、こうした変化はどのようなプロセスで齎され、定着し、それがアイヌ社会にどのような影響を与えたか。

瀧澤正は、矢本家文書を素材に、近代初頭の様似郡アイヌの「家計」につき、個別具体性を伴って鮮やかに描き出した[19]。こうした構造を踏まえ、アイヌ社会の近代化を考えるうえで、近世の取引品目と比較し、多様化を増す物質的環境につき、文化史的に考える途をも、矢本家文書は開いているものと考える。

３. アイヌ史の素材としての矢本家文書
—明治 8 年漁場改正と様似アイヌの浦河郡幌別川出漁慣行をめぐって—

最後に、矢本家文書から 4 件の文書（【史料①】～【史料④】）をピックアップし、そのアイヌ史の素材としての可能性を個別具体的に例示してみたい[20]。テーマとするのは、明治 8 年 4 月におこなわれた浦河・様似・静内三郡の「漁場改正」[21]に伴う、『様似町史』（様似町、1962 年）pp. 264-266、『改訂様似町史』（様似町、1992 年）pp. 295-297 にも紹介されている浦河郡幌別川（日高幌別川）の鮭漁に関する約定についてである。

浦河・様似・静内三郡の「漁場改正」については、瀧澤正が次のように整理している。

> 明治八年開拓使は、当場所の用達を勤めてきた函館商人杉浦嘉七を、様似・浦河両郡の漁場持として指名しようとした。これに対して杉浦は昆布業の不振を理由に、同年三月これを断っている。杉浦の断りを受けて、開拓使は様似・浦河両郡に静内郡を加えて、「漁場改革」と称してこれら三郡の漁場割渡を実施することになる[22]。

瀧澤はこれにより、様似郡内の鮭漁場 3 か所は全て和人に割渡され、昆布浜はアイヌ 50 浜、和人 128 浜が割渡されたことを明らかにしている[23]。

この「漁場改正」の際に、日高幌別川の鮭漁の慣行が問題となった。幌別川流域は当時、下流左岸（東岸）が浦河郡富菜村、同右岸（西岸）が同郡塘沸村、上流左岸が同郡杵臼村、同右岸が同郡西舎村となっていた。【史料②】によると、「本年漁場御改正」により、「当郡土人共」（＝様似郡のアイヌ）は「幌別川筋」で「一切鮭漁不相成（一切鮭漁相成らず）」とされた。その理由は、【史料①】によれば、幌別川での「鮭買入」の権益が西舎・杵臼両村に「免許」となったから、というのである。つまり、日高幌別川における鮭漁場は、川筋に位置する西舎・杵臼両村の村持となった、と解釈できそう

である。

では、なぜ隣郡である様似郡のアイヌの鮭漁が問題となるのか。【史料①】には当時の実情として、「浜漁民幷様似郡土人共、右川筋ニ立入、漁獲之鮭駄送り之もの数多有之」とある。浦河郡の「浜漁民」（富菜村・塘沸村の漁民か）とともに様似郡のアイヌが幌別川で鮭漁を行い、産物として出荷していた実態がある、というのである。そして、【史料③】によると、こうした実態、すなわち様似郡のアイヌが浦河郡の幌別川へ鮭漁に赴くのは、「旧年より」の慣行、すなわち近世以来の慣行であったことが示唆されていることになる。

近世にあって、「場所」の境界を超えてアイヌが漁猟・狩猟に赴く例は、場所請負商人間でそれが出漁場所の権益として認識される限りにおいて、少なからず確認できる[24]。また、それが場所境論を惹起することもあったわけである[25]。それでは、幌別川については、どうか。このことにつき松浦武四郎は、安政６年（1859）頃の成立とされる「東西蝦夷場所境調書」において、次のように書いている。

ウラカワ／シヤマニ領分境

（前略）境目之儀は、シヤマニ場所より申候は、往古はホロヘツを境として此川東より我領分にして有、依てホロヘツ川東には我等の方土人共も住居を致し来り候由、申居候（中略、ウラカワの方による反論）、此論一切不相定候間、度々も和解有之候て、文化六巳九月書面取かわし、ウトマン別と境界相定り申候（シヤマニ・エミカト、ウラカワ・ヌカルワノ申口也）[26]。

すなわち、1859 年当時ウトマン別（鵜苫川）が両場所の境界となっているが、当時シャマニ場所のアイヌが幌別川東岸（左岸）に居住している実態があり、境界については文化６年（1809）になって定まったもの、というのである。実際、文化７年に記された「シヤマニ場所大概書」には、次のような記載がある。

ウトマンベツ

（前略）シヤマニ・ウラカワ境也。夷人共、場所境の儀に付混雑不絶、依之、双方へ再応御談有之。文化六巳年九月、ウトマン別に境杭御取極御座候得共、ホロヘツ川迄はシヤマニ場所にて永々取扱候積、双方会所より書面為取替、相定り申候[27]。

つまり、文化６年の場所境取極では、鵜苫に境界杭を据えたものの、幌別川岸まではシャマニ場所の「永々取扱」とする旨を、双方の会所で確認した、というのである。さらに「シヤマニ場所様子大概書」によれば、「夷人業、男春者海浜江出釣をなし、夏ハ昆布を刈、秋ハホロベツ川入会ニて鮭を取喰料に貯、冬ハ山家へ帰り漁舩亦ハ網を拵へ…」（p. 562）とあり、シャマニ場所のアイヌ男性の生業のなかに幌別川での自家消費用（「喰料」）鮭の入会漁業が組み込まれていた様子がうかがえる。

幌別川をめぐるこうした経緯を踏まえて【史料③】をよむと、そこに記された「旧年より」という記述の含意が理解できる。幌別川の鮭漁にシャマニ場所（＝様似郡）のアイヌが参入する慣行・権益は、両会所の承認を得て機能していた近世的秩序だったとみなされるのである。その秩序が、明治 8 年の「漁場改正」により問題となった格好である。

改めて【史料①】を確認してみよう。

【史料①】

緩別川鮭買入之儀ニ付奉伺書

一、縄別川鮭買入之儀、本年ゟ西舎・杵臼両村江御免許相成、難有仕合奉存候、然ニ、浜漁民幷様似郡土人共、右川筋ニ立入、漁獲之鮭駄送り之もの数多有之、右之侭御差許相成候而者、冨菜川番家ニおゐて買入之鮭相減シ、且、御収税現品ニ拘り可申、依之、取締方法以書付奉伺候、以上、

（明治八年）第十一月十四日

――浦川郡西舎・杵臼村

―――――――――――――― ○

――――

―――――――――――――― ○

――――

―――――――――――――― ○

――――

―――――――――――――― ○

浦川郡

御出張所

様似郡のアイヌの視点からみると、従来おこなってきた幌別川での鮭漁が禁じられる可能性を孕んだ伺書となっている。西舎・杵臼両村の主張からは、様似郡のアイヌによる鮭漁は、「駄送り」＝出荷を含んだものであり（おそらく地元の「冨菜川番家」ではなく、様似方面への出荷）、両村が割渡された権益を損なうファクターであると認識されていることになる。近世以来の権益継承の有無が、問題となっているのである。

【史料②】は、このことに関する様似郡側からの開拓使浦河（浦川）出張所宛の届書である。おそらく、西舎・杵臼両村からの伺書を受け、浦河出張所が示談（内済）を働きかけたのであろう。

【史料②】

鮭漁之儀ニ付御届書

本年漁場御改正ニ付、夫々御割渡ニ相成候ニ付而者、当郡土人共者不申及、都而幌別川筋ニおゐて、一切鮭漁不相成事ニ被申断、一統食用ニ差支、難渋罷在候ニ付、今般双方熟談之上、別紙之通約定書為替候間相添、此段御届奉申上候、以上、

（明治）八年第十一月廿四日　　様似郡土人扱

矢本蔵五郎／代理

伊藤嘉兵衛

様似郡永住人／代

嵯峨　龍八

浦川郡／御出張所

すなわち、西舎・杵臼両村から様似郡のアイヌを含む人民による一切の鮭漁を禁ずるという主張に対し、そうなると「一統食用ニ差支、難渋罷在」ことを理由に、「双方熟談」が行われた、というのである。ここで注目すべきは、【史料①】で問題にされていた様似のアイヌによる幌別鮭の出荷は議論とならず、「食用」の鮭漁のみが「双方熟談」の議題に上っているということである。文化７年に「夷人共喰料の外、干鮭として荷物に成る」と書かれた近世以来の慣行のうち、様似のアイヌの「喰料」の

みが問題とされた、ということである。

「双方熟談」の結果交わされた「定約（証）書」は、次の通りである。【史料③】が様似側の提出した文書、【史料④】が西舎・杵臼両村側の提出した文書であり、前者は控え、後者は捺印を伴う正本である。

【史料③】

取換定約書

当郡民共、旧年より御当所川筋ニおゐて雑用鮭取揚居候義者、先前之通熟談仕、尤脇方へ者決而売買抔不仕、仍而一札差入置候也、

様似郡土人扱
矢本蔵五郎／代理
伊藤嘉兵衛
様似郡永住人／惣代
嵯峨　龍八

明治八年
第十一月廿四日

浦川郡／杵臼・西舎両村／惣代
田崎　萬蔵　殿

【史料④】

取換定約証書

一、其郡民縄別川川筋ニおゐて、菜用之鮭取揚ヶ度段相談ニ依テ、旧来之通り漁事為致可申候、乍然、右菜用之名目ヲ以漁獲之鮭、他ニ売買等仕もの有之ニおゐて者、屹度懸ヶ合可仕候、為後日、定約証書取換ハシ置申候処、仍而如件、

浦川郡西舎・杵臼両村惣代
田崎　萬三㊞

明治八年十一月二十四日

様似郡永住人惣代
嵯峨　龍八　殿

同郡土人扱
矢本蔵五郎　殿

これによると、様似郡民が従来おこなってきた幌別川における「雑用鮭取揚」（【史料③】）・「菜用之鮭取揚ヶ」（【史料④】）が認められている結果となっている。ただし、漁獲した鮭を「脇方」へ「売買」（【史料③】）・「他ニ売買」（【史料④】）することは、固く禁じられている。つまり、認められているのは近世において「喰料」「飯料」などと記され、この「定約証書」では「雑用」「菜用」と記される、自家消費用に限られ、売却用（出荷用）の漁獲は認められていないことになる。

「当郡民共」（【史料③】）と記される漁獲者は、民族的属性を帯びておらず、それは様似郡側の当事者が「様似郡土人扱」と「様似郡永住人惣代」であることにも反映されている。すなわち、明治８年時点で「旧来」から幌別川筋で鮭漁に従事していたのは、アイヌ・和人双方を含んでいた、ということになる。

これは、さきにみたシャマニ場所・様似郡における鮭出荷の推移を念頭において考えると示唆的である。安政４年にはアイヌの自分稼による出荷があったが、明治２年・同13･14年にはそれがみえな

かったからである。明治８年段階での幌別川での鮭漁は、様似郡民の出漁が既得権化していた一方、様似郡のアイヌの漁獲は自家消費用に限定されていた可能性も指摘できそうだ。また、近世におけるアイヌの慣行による権益が、近代にいたり「郡民」による権益として読み替えられていく過程のあったことも、想定できるのである。[28]

おわりに

以上、矢本家文書をアイヌ史的観点からよむにあたって、若干の前提と、ひとつの試験的検討を、雑駁ながらおこなってみた。三浦・浅倉論考で素材とされた「土人勘定帳」や「当座帳」といった、近代初頭のアイヌ各戸の取引記録の分析が叶う史料が、大変貴重であることは論をまたない。それと同時に、当該期の矢本蔵五郎が開拓使浦河出張所から任じられた「様似郡土人取締」としての活動を示す文書を、個別に検討する価値も少なくないとの印象を持つ。

いずれにせよ、このように矢本家文書には、近世・近代移行期のアイヌ社会の姿を微細かつ具体的に知ることのできる史料が豊富に鏤められているといってよい。明治８年時点に公的に認められた自家消費用鮭漁獲の慣行など、先住のアイヌ民族の権利を考えていくうえで、大切に踏まえておくべき情報も少なくないものと思われる。今後、アイヌ史的観点から検討が深められることを期待したい。

なお、本報告の母体となったプロジェクトは、国のアイヌ政策推進交付金による事業の一環として様似町により進められたものである。本報告が、様似町をはじめとするアイヌ民族の歴史・文化の理解に、いささかなりとも貢献することができれば、幸いである。

[1] 瀧澤正『明治初年開拓使漁場政策とアイヌ民族』(北海道大学授与博士学位論文、甲第 8884 号、2008 年)、同「明治初年におけるアイヌの昆布漁―日高地方様似郡の例にみる―」(『北大史学』48、2008 年)、同「明治初年アイヌ昆布漁家の「経営」と「家計」―様似郡の例にみる」(『北海道・東北史研究』5、2009 年)。

[2] 白山友正『増訂松前蝦夷地場所請負制度の研究』(巌南堂書店、1971 年) p. 441、473。

[3] 『明治元年　三石・浦川・様似引継書類』合綴「シヤマニ場所産物年分取揚凡見込高調書」(北海道立文書館所蔵開拓使文書、簿書 113№㊵)。

[4] 谷本晃久「蝦夷地「場所」三役―支配を請け負う商人手代―」(斎藤善之編『身分的周縁と近世社会 2　海と川に生きる』吉川弘文館、2007 年)。

[5] 高倉新一郎『新版アイヌ政策史』(三一書房、1972 年) p. 386。

[6] たとえば、北見国斜里郡における旧支配人川畑 (川端) 又三郎家の例が知られる。

[7] 高倉、注 5 前掲『新版アイヌ政策史』p. 387。

[8] 注 6 に同じ。

[9] たとえば、明治 8 年 10 月 24 日浦川郡出張所宛矢本蔵五郎ほか鮭漁之儀ニ付届書は「様似郡土人扱」を、同年 11 月様似郡戸長宛矢本蔵五郎請書は「土人取扱方」を、それぞれ肩書としている (いずれも、『紀元弐千五百三拾五年乙亥第十二月日　御触書諸願書留』矢本家文書 Y-22 所収)。また、この簿冊には、蔵五郎が「様似郡土人取締」に任じられた際の請書 (明治 8 年 12 月 13 日付) とともに、給与請求に関する次の文書がファイルされている。

記

一、金　五拾弐銭　　様似郡土人取締
　　矢本蔵五郎

是ハ十二月十三日、土人取締拝命ニ付、同日ゟ三十一日迄日数十九日之分、合如斯、

右之通御下渡ニ被成候様、奉願上候、以上、

(明治) 八年第十二月十七日

様似郡土人取締
矢本蔵五郎

浦川郡／御出張所

これによると、「様似郡土人取締」は、開拓使浦川 (浦河) 郡出張所により任命され、給与を伴うものであったことがわかる。これを根拠として、蔵五郎が「矢本仕入制」というべき対アイヌ出入荷を独占する体制を構築したことについては、瀧澤、注 1 前掲「明治初年におけるアイヌの昆布業―日高地方様似郡の例に見る―」に詳しい。

[10] 開拓使札幌本庁『部類抄録　三十　明治五年雑部　博覧・雑』(北海道立文書館所蔵開拓使文書、A4/379) 所収明治 5 年 7 月 10 日付文書に「…土人追々開化ノ御世話有之、付テハ通辞ノ名称ヲ存シ候テハ自カラ旧慣難去候、／其御管内通辞名称ヲ廃シ、更ニ土人取締ノ御申付ノ趣、委詳則次官殿ヘモ申達置候…」とある。谷本晃久「蝦夷通詞とアイヌ語地名」(北海道博物館編『北海道博物館第 5 回特別展「アイヌ語地名と北海道」連続講座・特別フォーラム 講演記録』同館、2021 年) p. 71 参照。

なお、高倉、注 2 前掲『新版アイヌ政策史』では明治 6 年 8 月に「小樽郡土人取締役」を廃止し副戸長に兼任せしめた例を挙げ、それを「土人取締」の廃止として一般化させて叙述するが (p. 393、399)、様似郡ではここで示したように明治 8 年 12 月に「様似郡土人取締」が任用されている。「土人取締」の含意の変容も考慮に入れて解釈する必要もあるが、地域的に時間差があったということであろう。

[11] 地方名望家については、丑木幸男『地方名望家の成長』(柏書房、2000 年) などを参照。資本のみならず、近世に蓄積された特権や知識をベースとして展開した地方名望家のあったことについては、甲斐国富士山御師の事例を指摘したことがある (谷本晃久「近代初頭における川口御師の生業変容

をめぐって：それは「退化の百年」だったか」甲州史料調査会編『富士山御師の歴史的研究』山川出版社、2009 年)。なお、北海道における地方名望家の生成については最近、上田哲司「移住型植民地・北海道における名望家の登場：阿部仁太郎、豊平村移住までの軌跡」(『北方人文研究』15、2022 年)に、それを主題とした考察がある。

[12] いずれも、『明治元年　三石・浦川・様似引継書類』合綴「シヤマニ場所土人撫育品調書」(北海道立文書館所蔵開拓使文書、簿書 113№㊴)。

[13] 高倉、注 5 前掲『新版アイヌ政策史』、pp. 352-353。

[14] 高倉、注 5 前掲『新版アイヌ政策史』、p. 334。

[15] 東俊佑「幕末蝦夷地の経営帳簿「土人勘定差引帳」」(『東京大学史料編纂所研究紀要』20、2010 年)、谷本晃久「ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所サハリンアイヌ交易帳簿の研究概報 ： 一九世紀初頭アニワ湾岸地域における交易のすがた」(『東京大学史料編纂所研究紀要』24、2014 年) など参照。

[16] 安政 4 年 (1857) 9 月の記録によると、シャマニ場所アイヌの「一ヶ月」の給料は「上土人」1 貫 700 匁 (文)、「中土人」1 貫 500 文、「下土人」900 文とある (玉虫左太夫/稲葉一郎解読『入北記』北海道出版企画センター、1992 年、p. 231)。

[17] アイヌの「自分稼」の評価については、谷本晃久『近世蝦夷地在地社会の研究』(山川出版社、2020 年) 第Ⅱ部を参照。

[18] 谷本晃久「場所請負制下のアイヌ交易の姿―幕末・維新期を事例にして―」(本田優子編『アイヌの交易世界』札幌大学ペリフェリア・文化学研究所、2008 年) pp. 32-33 所収【表２】。

[19] 瀧澤、注 1 前掲論文。

[20] いずれも、『紀元弐千五百三拾五年乙亥第十二月日　御触書諸願書留』(矢本家文書 Y-22) 所収。

[21] 明治 8 年 4 月 10 日「浦河外 2 郡漁場改正ノ件」(開拓使東京出張所会計課『略輯旧開拓使会計書類　第四号第二百七十八冊　札幌往復弐』北海道立文書館所蔵開拓使文書、簿書 6401)。

[22] 瀧澤、注１前掲論文「明治初年におけるアイヌの昆布漁―日高地方様似郡の例にみる―」、pp. 41-42。

[23]同上論文、p. 43。

[24] 谷本、注 17 前掲『近世蝦夷地在地社会の研究』、pp. 286-287 にいくつかの事例を整理している。日高地方の事例としては、近世後期にトカチ (十勝) 場所のアイヌによるホロイツミ (幌泉) 場所への昆布出漁の慣行が認められることが、菅原慶郎「トカチにおける昆布生産」(『北海道史研究協議会会報』96、2015 年) で紹介されている。

[25] 高倉新一郎「アイヌの漁猟権について」(同『アイヌ研究』北海道大学生活協同組合、1966 年)。

[26] 松浦武四郎「東西蝦夷場所境調書」(秋葉實編『松浦武四郎選集』１、北海道出版企画センター、1996 年) p. 197。本記述に見えるインフォーマント (申口の話者) であるシャマニのエミカトは、注 16 前掲史料『入北記』にみえるシヤマニ場所並小使イメカトと思われるから、ここに記された情報の安政年間における同時代性がうかがえる。

[27] 「東蝦夷地各場所様子大概書」(『新北海道史』第 7 巻史料 1、北海道、1969 年) p. 559。本史料の底本 (国立国会図書館本) は松浦武四郎の蔵書印を伴うというから、これは武四郎による「東西蝦夷場所境調書」の情報源のひとつと捉えてよいだろう。

[28] なお、『新浦河町史』上巻第 5 編第 4 章漁業「幌別川サケ漁の確執」によると、明治 15 年頃の日高幌別川の鮭漁の権益は、下流の「トメナ・ニシチャ」が浦河郡杵臼・西舎両村組合、中流の「セニバコ」が同郡「向別・鱗別・幌別 (浜方か：谷本注) の移住人とアイヌの共有」、上流の「ヲロマップとハッタリカ」が「様似郡側の三村の漁場」として認可されていたという (pp. 568-571)。近世以来のアイヌの出漁慣行に基づいた幌別川における様似郡の漁業権益が、限定されつつもこの時期まで維持されたことの窺える事例であり、検討を深めていきたい。

矢本家文書からみる様似アイヌの生活の諸相

浅倉　有子[1]（ASAKURA Yuko）

はじめに

本報告では、『矢本家文書』からみえる明治10年代の様似アイヌの生活の諸相について、紹介していきたい。『矢本家文書』には、「土人勘定帳」[i]（以下、「勘定帳」とする）という明治10年と同12年の帳簿２冊が含まれている。この帳簿は、様似のアイヌの人々が、矢本家から「購入」した物品を記し、彼らが漁撈・狩猟等で獲得した昆布や鹿皮等と相殺する過程を記したものである。瀧澤正氏[ii]は、この過程を、様似アイヌらから昆布等を独占的に買い付ける権限を有した矢本家による「矢本仕込制」とよんでいる。

以下本稿では、「勘定帳」を中心に紹介していくが、瀧澤氏と異なる視点で、様似アイヌが入手した物品の一部について紹介していく。この作業は、必ずしも実態が分かっていない明治前半のアイヌの歴史、とりわけ生活史を解明する一助となり、意義のあるものと考えている。

前述のように、「勘定帳」には明治10年と同12年があるが、本稿ではより記述の詳細な明治12年の帳簿を中心に紹介していく。管見の限りでは、同史料には99名の記録がある（三浦泰之氏は96名としているが、本稿では99名として論を進める）。

１．明治12年「ヤヤシパ」の場合

明治10年「勘定帳」では３番目に記されていた「ヤヤシハ」が、おおよそイロハ順に記された同12年「勘定帳」では「ヤヤシパ」として37番目に掲載されている。まず、その記述の一部を見よう。

〔史料１〕
ヤヤシパ
四月二日　一、金七拾五銭　　塩壱俵
同　　一、四銭　　濁酒五合
三月中　一、壱厘壱毛　　半紙割合苗字届ニ付
四月十三日　一、三銭二厘　　同拾六枚　材（林カ）木届ニ付
同廿三日　一、五円也　　正金かし
同廿五日　一、二銭也　　濁酒一杯
同　　一、五拾四銭五厘　伐木代かし
同廿九日　一、拾七銭三厘　　同正金かし
五十四日　一、三円拾五銭　越後米一俵
同　　一、十二銭五厘　　金引五拾目
同廿五日　一、廿四銭　茶わん三つ
同　　一、十九銭五厘　皿三枚
同　　一、二銭　濁酒壱杯
同　　一、六銭八厘　手拭壱本
（朱書）「小以金拾円〇卅五銭九厘」（以下略）

[1] 上越教育大学

前ページに示したように、基本的に日を追って購入した商品と価格が記されて、一定期間ごとに合計が記されていく。最後に年間の購入総額52円22銭が計上され、産物の昆布・布海苔等の買取額54円94銭余が差引かれ、2円72銭5厘が「過上」として「ヤヤシパ」に「直渡」しされた（文末の表１・表２を参照)。史料１からも「ヤヤシパ」が「越後米」１俵3円15銭や「塩」1俵75銭、「濁酒」など多様な物品を、矢本家を通して入手していることがわかる。同年１年間で米６俵を購入しているが、１俵は3円50銭である。同10年に「玄米」2斗を91銭で購入していることから、１俵は４斗入りと想定される。また「塩」１俵は家庭内で消費するには大量であり、生業に用いたのであろうか。「茶わん」「皿」も購入されているが、「わん」は「碗」と表記されることもあり、陶器製と想定される。「皿」も同様で、木製の漆器ではなく陶器製の食器が、アイヌの生活に入り込んでいる様相が知られる。漆器への嗜好が強いアイヌ文化が変化している状況が窺える。

「ヤヤシパ」の明治12年の購入記録は文末の表１に、相殺の記録を同じく表２として掲げている。次に文末の表１から気づいた点をいくつかあげよう。まずあげたいのは、衣料品である。「白木綿」１丈２尺28銭8厘（6月10日）のようないわゆる端切れのみならず、「紺木綿」２反2円16銭（9月18日）や、雲州木綿と思われる「雲洲」１反1円80銭（9月18日）といった反物、「古手」（古着）2枚4円30銭（8月29日）、「股引」１足75銭（11月20日）、さらに「風呂敷」１枚25銭（8月21日）が購入されるなど、衣料文化の様相がみてとれる。同様に「みそ」１貫（6月13日）などの調味料、「玉砂糖」１斤17銭（8月2日）、「落雁」１つ6銭（8月17日）といった菓子類も購入されるなど食文化の変化が窺えるが、この点については後述したい。また「糀」３升25銭5厘（6月24日）が購入されているが、濁酒作りに用いたのであろうか。さらに「紫金錠」２服8銭8厘（8月29日）、「万金丹」２服6銭（同日）といった医薬品が見える。『改訂 様似町史』[iii]によれば、江戸時代後期の寛政11年（1799）から明治2年（1869）まで、御雇医師が配置されていたという。

２．様似アイヌの生活文化

表３から表13は、「勘定帳」から特徴的な品目を抽出したものである。まず⑴食品関係として、前述の①落雁購入表（表３）や②砂糖購入表（表４）、さらに③「ぱん」購入表（表５）、④調味料等購入表（表６）として醤油・味噌等をそれぞれ示した。次に⑵生業関係として、⑤塩・糀・魚油購入表（表７）と⑥狩猟関係表（表８）を、また⑶生活関係として⑦食器関係表（表９）と、⑧医薬品購入表（表10）を掲げた。さらに⑷行政との関わりを示すデータである⑨諸届・諸願関係表（表11)、⑩筆・墨・紙購入表（表12）を掲げた。⑤塩・糀・魚油購入表は、生業ではなく、食品に含まれる可能性があるが、便宜的に⑵とした。今後さらに検討を加えていきたいと考える。

⑴ 食品関係

まず表３落雁購入表と、表４砂糖購入表を見よう。表３には、同じ菓子類である「飴」も含めている。１番「イタカネ」が６銭から 7 銭の価格の「落雁」を７度購入している。単位は「つ」、または「袋」で、おそらく袋入りで販売していたものと考えられる。購入者は66名に及び、アイヌの人々が好んで購入した品目であるとわかる。表４砂糖購入表には、ザラメ状の「玉砂糖」と「白砂糖」があるが、より安価な「玉砂糖」が購入されることが多い。砂糖類の購入者も38名にのぼり、様似アイヌの人々が甘い物好きであったことがわかるが、明治12年段階において、「落雁」、「飴」、砂糖類が様似のアイヌ社会に広く受け入れられていた事実は極めて興味深い。明治元年の史料「シャマニ場所土人撫育品調書」[iv]では、玄米や木綿類、漆器類のアイヌへの売渡値段が記されているが、菓子類や砂糖は記述されてない。

次に表５「ぱん」について検討しよう。「ぱん」も大勢から好まれる商品で、74 回購入されている。「ぱん」は、現代の我々が思い描くものとはずいぶん異なっていると考えられる。兵糧としてのパンは、幕末に幕府代官江川英龍が考案したといわれ、明治維新後にホテルなどでも焼かれるようになったという[v]。あんパンで著名な木村屋が銀座に開店したのが明治２年、道内では箱館戦争の際に共和国軍の兵糧としても用いられたという。一般にはいまだ入手しにくいであろう「ぱん」を、様似アイヌは用いていた。

『矢本家文書』の明治 16 年『拾號萬用記』[vi]には、「弘済丸西浦氏より買入」として、「一、ぱんくわし（菓子）　拾貫五百目　内風袋壱貫八百目引　正ミ八貫七百目」の記述が見える。「ぱんくわし」10 貫 500 匁のうち容器等（風袋）の重さを差し引いた重量が 8 貫 700 匁とする。同様に、明治 16 年の『壱号大福帳』[vii]にも、「うらかわ清香庵殿」勘定として、1 月 8 日分の「はん　四拾斤」7 円 20 銭と、1 月 21 日「はんかし」7 円 20 銭、9 月 3 日に「ぱん卅三斤」が見える。勘定の一部は、「幌泉ニ而請取来り」と、幌泉（現えりも町）で支払っている。これらが同一の取引を示しているのかは、今後検討する必要がある。また「西浦氏」と「うらかわ清香庵殿」も現時点では残念ながら不詳であるが、船で運送されていたことを考えても、「ぱん」は保存がきく商品であったと思われる。「ぱん」は様似で製造されたわけではなく、恐らく道内で最も近代化が早かった函館で製造され、船で様似へ輸送されたものと考えられる。明治 12 年の様似アイヌには、極めてモダンな食生活を取り入れる人々も存在していたのである。

次に表６から、「味噌」や「醤油」等の購入状況を見よう。「梅干」は便宜上表６に含めた商品である。「味噌」は 500 匁から１貫匁買が主であるが、58 番の「セフトカ」のように樽買するものもいる。「醤油」は杯（１杯が２合５勺）買が主であるが、11 番「保や之也牟無」が樽買である。「味噌」１貫匁が 20 銭から 25 銭、「醤油」3 杯が 15 銭から 17 銭５厘であり、グレードがあったことがわかる。「味噌」の購入者は 25 名、「醤油」が５名で、「味噌」の方がより受け入れられたようである。しかしながら、アイヌの伝統的な調味料が塩と魚油などを基本とすること[viii]を考えると、和人伝来の調味料の「味噌」や「醤油」、「梅干」等が少なからず受容されていた点は興味深い。

⑵　生業関係

表７に示したように、「塩」の多くは１升から５升の購入である。自家用の調味料としてはかなり大量ではある。価格をみると、１升は基本的に４銭程度であるが、５銭５厘の商品もあり、グレードが存在した。中には、１番「イタカネ」が 6 月 27 日に１俵を 75 銭で購入するなど、大量に購入する事例がある。計算すると、１俵は２斗５升になる。俵で購入する事例は４例であるが、11 月 6 日に「えんからま」が購入した塩は極めて高価で、１俵 1 円 70 銭である。「浦河地方の食―浦川タレさんの暮らしと食べもの」[ix]によると、塩は基本的に海水を利用していて、お汁などはもっぱら海水で作ったという。そうすると、塩を購入する層は、相対的に裕福な人々となろうか。

「魚油」は多くても１升５合であるので、やはり食事に用いたのであろうか。アイヌの伝統的な調味料である「魚油」を購入することは興味深いが、灯りとして利用されていた可能性もあろう[x]。「糀」も少なからず購入されている。濁酒作りに用いられたものと想定される。

さらに、表８として狩猟関係と考えられる商品を示した。「ホタコロアン」が購入した「合薬」は、火薬のことである。様似アイヌは、昆布漁等の漁労のみではなく、鹿猟も行っていた[xi]。「とうらん」も弾丸を入れる容器「胴乱」であろう。

⑶　生活関係

表９食器等購入表を掲げたのは、アイヌが受容した漆器について、筆者が近年調査を継続している

ためである。食器等は、節を改めて検討したい。

ついで⑧医薬品購入の表 10 を検討したい。「目薬」の購入事例が５例、飲薬としては、宇治山田の東方にある朝熊山で製造され胃腸・解毒・気付け等に効果があるという「万金丹」が３例、酒酔・船酔・気付けに用いた「紫金錠」、血行を良くし、自律神経を安定させるという「安神散」、胃腸・消化不良・下痢等に効き目のある「感応丸」がそれぞれ１例購入されている。

⑷ 行政との関わり

表 11 として、諸届・諸願関係を掲げた。最も目につくのは、「半紙割合苗字届ニ付」という改姓届に関する届書である。伝統的に個人名のみで姓を持たなかったアイヌが、明治政府の政策によって、平民籍に編入され、官主導で「改姓名」が推し進められた[xii]。表 11 から、様似アイヌには、明治 12 年 3 月に「苗字届」が一斉に実施されたことが知られる。他にも、子供の出生届の事例（「チヨクノアン」、「シコラム」）があり、様似アイヌが戸籍制度に取り込まれていく過程が窺える。また「区入費金かし」といった地域行政や、「地価代金」という土地制度の関わるもの、「材木届」「丸木舟願」「造船免除札」といった生業に関する届書・願書が認められる。これらについては、瀧澤氏による前述の論稿を参照されたい。

表 12 は、筆・墨・紙の購入に関する表である。表中の「半紙代かし」は、表 11 の諸届に関する可能性があるが、使途がわからないので、表 12 に含めた。「能舞久数」が、3 月に半紙を 20 枚と 15 枚を購入しているように、半紙等紙類を購入する人々が「半紙代かし」を除いて 16 名、購入回数 18 回を確認できる。価格は、「半紙」６枚で 1.2 銭、８枚で 1.6 銭、15 枚で３銭、また１丁が 3.2 銭から４銭、３丁で 9.6 銭とされており、複数の商品があったことが知られる。筆については、75 番の「イタケトク」が２度「水毛筆」を購入し、他に 19 番の「ツタヌ」ら４名が購入している。商品名の「水毛筆」は、動物の外毛の先端部分で作られた墨汁に馴染む先の細い筆を指すと考えられる[xiii]。墨は、8 番「春松」ら５名が６回購入し、価格は 5.5 銭から 7.5 銭である。

アイヌの人々が、前述の「苗字届」「材木届」「丸木舟願」「造船免除札」など、行政を通じて文字文化を受容していく過程を窺うことができる。

３．様似アイヌと漆器

前述の表９食器等購入表には、漆器の可能性がある商品も掲げた。表９を見ると、総体として、陶器類が思いの外入り込んでいる印象である。「かん徳利」「皿」「茶碗」等が購入されている。このうち 38「バテキヌ」が購入した品目には「茶椀」と「椀」の字が当てられているが、価格が他の「碗」と同様に８銭であるので、同一の商品と考えておく。「バテキヌ」は、「御神酒徳利」も購入している。

では、様似アイヌのようの漆器文化は、消滅したのであろうか。様似郷土館には、近代と想定される漆器が複数収蔵されている（文末の写真１・２参照）。いずれも様似アイヌ由来のものである。また『矢本家文書』中の『明治廿四年　仕入元帳』[xiv]には、「土人杯　拾七個／直段　七銭　かし／代金　壱拾九銭／廿弐個／代金　壱円卅弐銭弐厘」等の記述が見える。「土人杯」は、近世で「夷杯」と称されたアイヌ向けの商品であり、最も汎用的な漆器であると想定される[xv]。まず、同史料の一部を以下に示そう。また、同史料を漆器関係表として表 13 に示した。

〔史料２〕

寅年残り

一、女膳　　青・黒　　弐枚

直段　卅壱銭八厘　かし
代　金　六拾三銭六厘
〃
寅年残り
一、汁わん　拾弐
直段　壱銭一厘　かし
代金　拾三銭弐厘
〃
一、土人杯　拾七個
直段　七銭　かし
代金　壱円拾九銭
〃
廿弐個
代金　壱円卅弐銭弐厘

七月弘済丸積来り
一、青光七寸　重箱　三組
直段　九十銭　かし
代金　弐円七拾銭
〃
七月弘済丸積来り
一、内朱汁わん　百個
直段　弐銭四厘　かし
代金　弐円四十銭
〃
一、木地同　百五拾個
直段　壱銭弐厘　かし
代　金　壱円八十銭
〃　弐百五拾個
代金　四円廿銭

七月弘済丸積来り
一、黒内朱膳　三拾枚
直段　拾四銭　かし
代金　四円廿銭
〃
七月弘済丸積来り
一、青内朱
三ツ組総輪　三組
直段　四十銭　かし

代金　壱円廿銭
〆（以下、省略）

引用史料でわかるように、前年の売れ残りの「土人杯」が一つ７銭、「汁わん」が１銭１厘、明治 24 年７月に弘済丸が積込んできた「内朱汁わん」（内側が朱の椀）が２銭４厘、「木地」の汁椀が１銭 2 厘、１枚 14 銭の「黒内朱膳」（外面が黒で内側が朱の膳）等を、矢本家が仕入れている。これらの漆器は和人向けのみではなく、アイヌの需要を含むと考えられる。「内朱汁わん」も恐らく漆器であり、両者の需要が考えられる。他方、史料中の「青内朱　三ツ組総輪　三組」（三つ組盃）は、省略した部分の「五ツ組」も含め、和人の儀礼用の漆器と考えられる。なお弘済丸は、前述のように、「ぱん」を運送してきた船である。恐らく、これらの漆器や「ぱん」は、函館から運送されてきたものであろう。

『函館市史』統計編[xvi]によれば、他府県から函館に移入した漆器類は、明治 11 年に 1,337 個・3,841 円、同 12 年が 1,741 個・3,883 円、同 13 年で 1,377 個・6,366 円である。同 20 年には、2,530 個・12,650 円に、同 21 年に 3,478 個・20,632 円に増加し、同 24 年には 3,008 個・14,185 円となる。函館から道内各地への移出高を見ると、同 26 年 872 個・4,360 円、同 27 年が 772 個・4014 円と記録されている。

次に表９と、前述の〔史料２〕を併せて検討しよう。アイヌ向けに特化した漆器「土人杯」７銭、漆器と思われる「内朱汁わん」が２銭４厘、「汁わん」が１銭１厘、「木地」の「汁わん」が１銭２厘である。他方、陶器と想定される「茶わん」が８銭であるので、壊れやすく重い陶器の碗が、より高価であったことがわかる。表９中「バテキヌ」が購入した「汁わん」は 10 個で 80 銭なので１個８銭である。他に７銭のものも見える。価格からいって漆器と思われるが、今後より丁寧に「矢本家文書」を検討して、解答を導き出したい。

おわりに

以上、雑駁であるが、「矢本家文書」中の明治 12 年「勘定帳」を中心に、様似アイヌの生活の一端を紹介してきた。この作業を継続していくことで、明治前期の様似アイヌの生活の実態をより明らかにすることができると考えている。

〔注〕

i　明治 10 年「土人勘定帳」（『矢本家文書』Y5）、同 12 年「土人勘定帳」（『矢本家文書』Y6）

ii　瀧澤正「明治初年におけるアイヌの昆布業―日高地方様似郡の例にみる―」（『北大史学』48 号、2008 年）、同「明治初年アイヌ昆布漁家の『経営』と『家計』―様似郡の例にみる―」、『北海道・東北史研究』2009［通巻第５号］、2009 年）

iii　様似町史編さん委員会編『改訂 様似町史』（様似町、1992 年）

iv　『明治元年　三石・浦川・様似引継書類』（北海道立文書館所蔵開拓使文書簿書 113）に合綴。谷本晃久氏のご教示による。

v　日本のパン四百年史刊行會編『日本のパン四百年史』（1956 年）

vi　『拾號萬用記』（「矢本家文書」Y21）

vii　『壱号大福帳』（「矢本家文書」Y4）

viii　様似町教育委員会の大野徹人氏のご教示による。

ix　萩中美枝他『聞き書　アイヌの食事』（農山漁村文化協会、1992 年）

x　大野徹人氏のご教示による。

xi　山田伸一『近代北海道とアイヌ民族―狩猟規制と土地問題』（北海道大学出版会、2011 年）

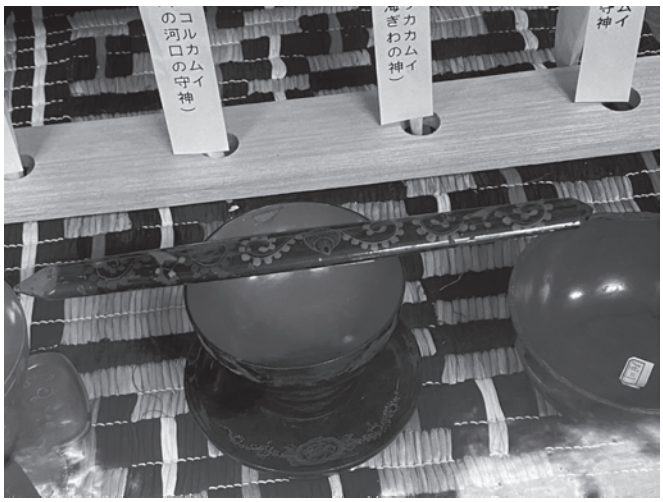
xii　大坂拓「近代の対アイヌ政策と人びとの暮らし―改姓名・土地届―」（北海道博物館他編『アイヌのくらし―時代・地域・さまざまな姿』、一般財団法人北海道歴史文化財団、2021 年）『様似町史』には、明治 19 年に貞吉に店舗を譲ったとの記載がある。様似町に残る記録には、明治 21 年に退隠の記載がみられる。

xiii　「第２節 熊野筆の生産と流通」、town.kumano.hiroshima.jp/kyoudo/pdf

xiv　『明治廿四年　仕入元帳』（『矢本家文書』Y10）

xv　浅倉有子「蝦夷地における漆器の流通と使途―浄法寺から平取へ―」（矢田俊文編『年と城館の中世』、高志書院、2010 年）、同「蝦夷地における漆器の流通と使途―椀（盃）・盃台・「台盃」―、『北海道・東北史研究』６号、2010 年」

xvi　函館市史編さん室編『函館市史』統計資料編（函館市、1987 年）



上：写真１中央　様似郷土館に展示されている台盃、捧酒箸

下：写真２　様似郷土館に展示されている耳盥

表１　ヤヤシパ明治 12 年購入商品一覧

	年代	月日	購入品名	購入額（円）	備　　考	計算値
1	明治12年	4月 2日	塩1表	0.75		
2	明治12年	4月 2日	濁酒5合	0.04		
3	明治12年	3月中	半紙割合、苗字届ニ付	0.001		
4	明治12年	4月13日	半紙16枚、材木願ニ付	0.032		
5	明治12年	4月23日	正金かし	5.		
6	明治12年	4月25日	濁酒1杯	0.02		
7	明治12年	4月25日	伐木代かし	0.545		
8	明治12年	4月29日	同正金かし	0.173		
9	明治12年	5月 4日	越後米1俵	3.15		
10	明治12年	5月 4日	金引150目	0.125		
11	明治12年	5月25日	茶わん3つ	0.24		
12	明治12年	5月25日	皿3枚	0.195		
13	明治12年	5月25日	濁酒1杯	0.02		
14	明治12年	5月25日	手拭1本	0.068	(朱書)「金10円35銭9厘」	10.3591
15	明治12年	6月 2日	中刃鑢1枚	0.12		
16	明治12年	6月 2日	同大刃1枚	0.15		
17	明治12年	6月 4日	濁酒1杯	0.02		
18	明治12年	6月10日	白木綿1丈2尺	0.288		
19	明治12年	6月10日	箸箱1つ	0.14		
20	明治12年	6月12日	柿7串代	0.175		
21	明治12年	6月20日	造船免除札願ニ付かし	0.008		
22	明治12年	6月13日	みそ1貫	0.2		
23	明治12年	6月13日	大板附1つ	0.05		
24	明治12年	6月13日	新酒五合	0.11		
25	明治12年	6月21日	鞍蓙1枚	0.15		
26	明治12年	6月21日	越後米1俵	3.15		
27	明治12年	6月24日	糀3升	0.255		
28	明治12年	6月24日	清酒5合	0.11		
29	明治12年	7月14日	濁酒1升	0.08	(朱書)「右金5円00銭6厘」	5.006
30	明治12年	7月14日	す？酒5合	0.04		
31	明治12年	7月23日	清酒1升5合	0.375		
32	明治12年	7月23日	摺鉢1枚	0.1		
33	明治12年	7月23日	みそ1貫	0.2		
34	明治12年	7月25日	越後米2俵	7.		
35	明治12年	7月25日	越後酒半樽	1.		
36	明治12年	7月？日	地価代かし 請取	0.68		
37	明治12年	7月？日	地価代かし レツカレ浜	0.266	(朱書)「右金8円98銭1厘」？	9.661
38	明治12年	8月 2日	焼酎1本	0.2		
39	明治12年	8月 2日	玉砂糖1斤	0.17		
40	明治12年	8月 2日	宝来豆1箱	0.45		
41	明治12年	8月 9日	大山酒1杯	0.063		
42	明治12年	8月17日	落雁1つ	0.06		
43	明治12年	8月17日	手拭1本	0.05		
44	明治12年	8月17日	濁酒5合	0.125		
45	明治12年	8月21日	風呂敷1枚	0.25		
46	明治12年	8月21日	焼酎1本	0.25		
47	明治12年	8月21日	清酒1杯	0.063		
48	明治12年	8月21日	正金かし	3.5		
49	明治12年	8月24日	清酒1杯	0.063		
50	明治12年	8月27日	越後米1俵	3.5		
51	明治12年	8月27日	清酒1升1杯	0.313		
52	明治12年	8月29日	清酒1杯	0.063		
53	明治12年	8月29日	紫金錠2服	0.088		
54	明治12年	8月29日	万金丹2服	0.06		
55	明治12年	8月29日	古手2枚	4.3		
56	明治12年	8月29日	鳴海2反	1.5	(朱書)「右金15円06銭5厘」	15.0655
57	明治12年	9月10日	清酒1升3杯	0.49		
58	明治12年	9月10日	鞍蓙3枚	0.99		
59	明治12年	9月18日	河内白1反	0.8		
60	明治12年	9月18日	雲洲1反	1.8		
61	明治12年	9月18日	紺木綿2反	2.16		
62	明治12年	9月19日	清酒1升	0.28		
63	明治12年	9月22日	清酒3杯	0.21		
64	明治12年	9月22日	焼酎1本	0.3		
65	明治12年	9月22日	みそ1貫	0.2		
66	明治12年	9月22日	越後米1俵	3.5		
67	明治12年	9月22日	清酒1升	0.28		
68	明治12年	10月 1日	清酒1杯	0.07	〔朱書〕「小以11円08銭」	11.08
69	明治12年	10月 3日	清酒1升	0.28		
70	明治12年	10月10日	清酒1升	0.28		
71	明治12年	10月22日	濁酒5合	0.08		
72	明治12年	10月22日	焼酎1本	0.25		
73	明治12年	10月28日	濁酒5合	0.08		
74	明治12年	11月20日	股引1足	0.75	〔朱書〕「小以11円72銭」	1.72
75	明治12年	11月21日改	目薬1つ	0.015	惣〆金52円22銭	

表２　ヤヤシパ明治 12 年産物相殺表

NO		入金額（円）	明　　細
1	6月17日積出シ	1.	棹前昆布2把、目方16貫、此石4斗目、直段250、(朱書)「懸りなし」
2	4月27日一番弘済丸積出シ	0.891	干布のり10貫700目、直段金1円ニ付12貫かへ、(朱書)「懸りなし」
3	6月17日二番弘済丸積出シ	0.65	干布のり7貫800目、直段金1円ニ付12貫也、(朱書)「懸りなし」
4	8月15日産神丸積出シ、(朱書)「高40把内税8把引」	30.406	新上昆布32把3品掛24貫600目、262貫400目、6石5斗6升、直段515之1割下、合463円50銭、(朱書)「諸掛りなし」
5	9月19日弘済丸渡ス、(朱書)「高20把内4把引」	15.3	上昆布16把2把掛17貫、136貫、3石4斗、450、(朱書)「手取也」
6	9月19日、(朱書)「高10把内2把引」	5.355	中昆布8把、2掛17貫、68貫文、1石7斗、45也、3割下、金3150、(朱書)「手取也」
		0.75	4月中　並薪3間
		0.6	4月中　並薪2間
		54.952	史料では〆合54円94銭6厘6毛？
		52.221	諸品代〆高かし
		2.725	差引過上、11月13日直渡

表３　落雁購入表

No	氏名	年	月日	購入品名	購入額（円）
1	イタカネ	明治12年	5月 3日	落雁２つ	0.12
1	イタカネ	明治12年	5月 5日	落雁１つ	0.06
1	イタカネ	明治12年	5月 9日	落雁１つ	0.06
1	イタカネ	明治12年	6月26日	落雁１つ	0.06
1	イタカネ	明治12年	7月21日	落雁２つ	0.12
1	イタカネ	明治12年	8月 3日	飴１つ	0.2
1	イタカネ	明治12年	9月28日	落雁１つ	0.06
1	イタカネ	明治12年	10月 7日	落雁１つ	0.07
2	伊多吉保呂	明治12年	5月 5日	落雁１つ	0.06
4	インカルエ	明治12年	3月24日	落雁１つ	0.07
4	インカルエ	明治12年	4月21日	落雁１つ	0.07
4	インカルエ	明治12年	4月22日	落雁１つ	0.07
5	イカシルテ	明治12年	3月24日	落雁１つ	0.07
6	イタカマ	明治12年	6月18日	落雁１つ	0.06
7	ロク	明治12年	7月19日	落雁１つ	0.06
8	春松	明治12年	5月10日	落雁２つ	0.12
8	春松	明治12年	6月23日	落雁２つ	0.12
8	春松	明治12年	7月11日	落雁１つ	0.06
8	春松	明治12年	7月15日	落雁１つ	0.06
8	春松	明治12年	7月17日	落雁１つ	0.06
8	春松	明治12年	8月13日	落雁１袋	0.06
8	春松	明治12年	10月28日	落雁１つ	0.07

9	ホタコロアン	明治12年	9月12日	落雁１つ	0.06
11	保や之也牟無	明治12年	7月17日	落雁２袋	0.12
11	保や之也牟無	明治12年	9月 5日	落雁３つ	0.18
11	保や之也牟無	明治12年	9月28日	落雁１つ	0.06
12	とんか	明治12年	7月18日	落雁１袋	0.06
13	トタヌ	明治12年	5月 1日	落雁１つ	0.06
13	トタヌ	明治12年	5月27日	落雁１つ	0.06
13	トタヌ	明治12年	7月 9日	落雁１つ	0.06
13	トタヌ	明治12年	8月 3日	落雁１つ	0.06
13	トタヌ	明治12年	8月21日	落雁１つ	0.06
13	トタヌ	明治12年	8月22日	落雁１つ	0.06
13	トタヌ	明治12年	9月18日	落雁１つ	0.06
13	トタヌ	明治12年	9月21日	落雁１つ	0.06
13	トタヌ	明治12年	10月18日	落雁２つ	0.14
19	トタヌ	明治12年	10月24日	飴１つ	0.2
13	トタヌ	明治12年	10月31日	落雁１つ	0.07
14	トリ相の	明治12年	6月18日	落雁１つ	0.06
14	トリ相の	明治12年	7月8日	落雁１つ	0.06
14	トリ相の	明治12年	7月23日	落雁１袋	0.06
14	トリ相の	明治12年	7月24日	落雁１袋	0.06
14	トリ相の	明治12年	7月31日	落雁１袋	0.06
14	トリ相の	明治12年	8月 3日	落雁２袋	0.12
14	トリ相の	明治12年	8月 4日	落雁２袋	0.12
14	トリ相の	明治12年	8月 9日	落雁２袋	0.12
14	トリ相の	明治12年	9月 9日	落雁２袋	0.12
14	トリ相の	明治12年	10月20日	落雁１つ	0.07
14	トリ相の	明治12年	10月28日	落雁１つ	0.07
17	チヨクノアン	明治12年	6月 5日	落雁１つ	0.06
18	チヤウクテ	明治12年	6月23日	落雁１つ	0.06
18	チヤウクテ	明治12年	6月24日	落雁１つ	0.06
19	ツタヌ	明治12年	7月16日	落雁１袋	0.06
19	ツタヌ	明治12年	9月17日	落雁１つ	0.06

19	ツタヌ	明治12年	10月14日	落雁１つ	0.07
19	ツタヌ	明治12年	10月26日	落雁１つ	0.07
19	ツタヌ	明治12年	10月30日	落雁１つ	0.07
19	ツタヌ	明治12年	11月 4日	落雁１つ	0.07
19	ツタヌ	明治12年	11月10日	落雁１つ	0.07
19	ツタヌ	明治12年	11月11日	落雁１つ	0.07
19	ツタヌ	明治12年	11月14日	落雁１つ	0.07
19	ツタヌ	明治12年	12月15日	落雁１つ	0.07
20	イカシアステ	明治12年	6月29日	落雁１つ	0.06
21	ヲヒタサンケ	明治12年	4月25日	落雁２つ	0.12
21	ヲヒタサンケ	明治12年	5月 2日	落雁１つ	0.06
21	ヲヒタサンケ	明治12年	6月 8日	落雁１つ	0.06
21	ヲヒタサンケ	明治12年	6月22日	落雁１袋	0.06
21	ヲヒタサンケ	明治12年	7月 7日	落雁１つ	0.06
21	ヲヒタサンケ	明治12年	7月16日	落雁１つ	0.06
24	ハテキヨコ	明治12年	8月 9日	落雁１つ	0.06
24	ハテキヨコ	明治12年	8月12日	落雁２袋	0.12
25	ヨタヌンテ	明治12年	4月18日	落雁１つ	0.07
25	ヨタヌンテ	明治12年	5月11日	落雁１つ	0.06
25	ヨタヌンテ	明治12年	6月 6日	落雁１つ	0.06
26	カハフセ	明治12年	5月 5日	落雁１つ	0.06
26	カハフセ	明治12年	5月31日	落雁１つ	0.06
26	カハフセ	明治12年	7月 2日	落雁１つ	0.06
27	かぷけり	明治12年	7月12日	落雁１つ	0.06
28	カナシ	明治12年	7月19日	落雁１袋	0.06
28	カナシ	明治12年	7月31日	落雁２つ	0.12
28	カナシ	明治12年	8月30日	落雁１袋	0.06
30	ラウシユウク	明治12年	4月 2日	落雁１つ	0.07
30	ラウシユウク	明治12年	4月12日	落雁１つ	0.07
30	ラウシユウク	明治12年	5月 6日	落雁２つ	0.12
30	ラウシユウク	明治12年	5月14日	落雁１つ	0.06
30	ラウシユウク	明治12年	7月 5日	落雁１つ	0.06

30	ラウシユウク	明治12年	7月10日	落雁２袋	0.12
30	ラウシユウク	明治12年	7月14日	落雁１袋	0.06
30	ラウシユウク	明治12年	9月 7日	落雁２つ	0.12
31	ランケシユウ	明治12年	6月 8日	落雁２つ	0.12
31	ランケシユウ	明治12年	7月10日?	落雁１袋	0.06
31	ランケシユウ	明治12年	11月16日	落雁２つ	0.14
34	礼宇恵牟	明治12年	8月21日	落雁２つ	0.12
34	礼宇恵牟	明治12年	8月24日	落雁１つ	0.06
34	礼宇恵牟	明治12年	8月24日	落雁１つ	0.06
34	礼宇恵牟	明治12年	9月 3日	落雁２つ	0.12
35	レマカ	明治12年	6月 6日	落雁１つ	0.06
36	くちやらんで	明治12年	4月 5日	落雁１つ	0.06
37	ヤヤシパ	明治12年	8月17日	落雁１つ	0.06
38	バテキヌ	明治12年	8月17日	落雁４つ	0.24
38	バテキヌ	明治12年	8月30日	落雁１袋	0.06
40	ソユワイ	明治12年	7月 5日	落雁１袋	0.06
41	古保きん多	明治12年	8月29日	落雁１つ	0.06
42	ヤヲクテリ事五郎	明治12年	10月11日	落雁２つ	0.14
42	ヤヲクテリ事五郎	明治12年	11月 1日	落雁１つ	0.07
43	ヤカンデ	明治12年	10月 4日	落雁１つ	0.06
43	ヤカンデ	明治12年	10月12日	落雁１つ	0.07
45	荒四郎	明治12年	4月18日	落雁１つ	0.07
45	荒四郎	明治12年	4月19日	落雁１つ	0.07
45	荒四郎	明治12年	4月26日	落雁１つ	0.06
45	荒四郎	明治12年	4月28日	落雁１つ	0.06
45	荒四郎	明治12年	7月24日	落雁１袋	0.06
45	荒四郎	明治12年	8月 2日	落雁３袋	0.18
45	荒四郎	明治12年	8月12日	落雁２袋	0.12
45	荒四郎	明治12年	8月13日	落雁１袋	0.06
45	荒四郎	明治12年	8月18日	落雁１つ	0.06
45	荒四郎	明治12年	8月25日	落雁１つ	0.06
45	荒四郎	明治12年	8月27日	落雁１袋	0.06

45	荒四郎	明治12年	11月14日	落雁１つ	0.07
45	荒四郎	明治12年	11月28日	落雁１つ	0.07
46	あぶかし	明治12年	4月28日	落雁１つ	0.06
46	あぶかし	明治12年	5月20日	落雁１つ	0.06
46	あぶかし	明治12年	5月30日	落雁１つ	0.06
46	あぶかし	明治12年	6月 6日	落雁１袋	0.06
46	あぶかし	明治12年	7月22日	落雁１袋	0.06
46	あぶかし	明治12年	7月24日	落雁２袋	0.12
46	あぶかし	明治12年	9月 3日	落雁１つ	0.06
46	あぶかし	明治12年	9月 4日	落雁１つ	0.06
46	あぶかし	明治12年	9月 8日	落雁１つ	0.06
46	あぶかし	明治12年	9月13日	落雁１つ	0.06
46	あぶかし	明治12年	9月17日	落雁１つ	0.06
46	あぶかし	明治12年	10月13日	落雁１つ	0.07
46	あぶかし	明治12年	11月14日	落雁１つ	0.07
47	さな牟盤	明治12年	8月22日	落雁１袋	0.06
47	さな牟盤	明治12年	9月10日	落雁１袋	0.06
48	サウナタラ	明治12年	6月21日	落雁１袋	0.06
48	サウナタラ	明治12年	6月25日	落雁１袋	0.06
49	キモラン	明治12年	7月 6日	落雁１つ	0.06
50	エトフセ	明治12年	5月 9日	落雁１つ	0.06
50	エトフセ	明治12年	7月11日	落雁１つ	0.06
50	エトフセ	明治12年	7月19日	落雁１つ	0.06
50	エトフセ	明治12年	7月24日	落雁２袋	0.12
50	エトフセ	明治12年	8月 1日	落雁２袋	0.12
50	エトフセ	明治12年	8月 4日	落雁１つ	0.06
50	エトフセ	明治12年	8月13日	落雁１つ	0.06
51	えんからま	明治12年	3月28日	落雁１つ	0.07
52	エサカノク	明治12年	4月17日	落雁１つ	0.07
52	エサカノク	明治12年	4月23日	落雁１つ	0.07
52	エサカノク	明治12年	4月24日	落雁１つ	0.06
52	エサカノク	明治12年	4月27日	落雁１つ	0.06

52	エサカノク	明治12年	4月28日	落雁１つ	0.06
52	エサカノク	明治12年	6月 6日	落雁１袋	0.06
52	エサカノク	明治12年	7月14日	落雁１袋	0.06
52	エサカノク	明治12年	7月17日	落雁１袋	0.06
52	エサカノク	明治12年	11月 2日	落雁１つ	0.07
53	澤田之安之牟	明治12年	7月 9日	落雁１つ	0.06
54	シコケ	明治12年	3月28日	落雁１つ	0.07
55	シコラム	明治12年	4月23日	落雁１つ	0.07
56	しらむて	明治12年	3月25日	落雁２つ	0.14
56	しらむて	明治12年	4月22日	落雁１つ	0.07
57	シユマカワ	明治12年	6月6日	落雁１つ	0.06
57	シユマカワ	明治12年	7月19日	落雁２つ	0.12
57	シユマカワ	明治12年	7月15日	落雁１つ	0.06
57	シユマカワ	明治12年	7月16日	落雁２つ	0.12
57	シユマカワ	明治12年	7月23日	落雁２袋	0.12
58	セフトカ	明治12年	5月 5日	落雁１つ	0.06
58	セフトカ	明治12年	5月 6日	落雁１つ	0.06
58	セフトカ	明治12年	5月10日	落雁１つ	0.06
58	セフトカ	明治12年	5月10日	落雁１つ	0.06
58	セフトカ	明治12年	6月 8日	落雁１袋	0.06
58	セフトカ	明治12年	5月30日	落雁１つ	0.06
58	セフトカ	明治12年	6月22日	落雁１つ	0.06
58	セフトカ	明治12年	7月 4日	落雁１つ	0.06
58	セフトカ	明治12年	7月20日	落雁１つ	0.06
59	古海彦次郎	明治12年	6月21日	落雁１つ	0.06
59	古海彦次郎	明治12年	7月 6日	落雁２つ	0.12
59	古海彦次郎	明治12年	8月28日	落雁２袋	0.12
59	古海彦次郎	明治12年	9月19日	落雁１つ	0.06
60	シトンマ	明治12年	5月14日	落雁１つ	0.06
60	シトンマ	明治12年	5月28日	落雁１つ	0.06
60	シトンマ	明治12年	7月 8日	落雁１つ	0.06
61	クエラ	明治12年	6月23日	落雁１袋	0.06

66	エサエ子	明治12年	5月30日	落雁１つ	0.06
69	マカラム	明治12年	5月 8日	落雁１つ	0.07
69	マカラム	明治12年	5月31日	落雁１つ	0.06
69	マカラム	明治12年	6月 4日	落雁１袋	0.06
69	マカラム	明治12年	6月26日	落雁１袋	0.06
69	マカラム	明治12年	6月27日	落雁１つ	0.06
69	マカラム	明治12年	6月29日	落雁１袋	0.06
69	マカラム	明治12年	7月 3日	落雁１つ	0.06
69	マカラム	明治12年	7月 9日	落雁１袋	0.06
69	マカラム	明治12年	7月10日	落雁１つ	0.06
69	マカラム	明治12年	7月12日	落雁１つ	0.06
69	マカラム	明治12年	9月 3日	落雁１袋	0.06
69	マカラム	明治12年	11月10日	落雁１つ	0.07
69	マカラム	明治12年	11月12日	落雁２つ	0.14
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	6月23日	落雁１袋	0.06
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	6月30日	落雁１袋	0.06
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	7月 9日	落雁１つ	0.06
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	7月11日	落雁１つ	0.06
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	7月19日	落雁１つ	0.06
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	9月29日	落雁１つ	0.06
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	10月19日	飴１つ	0.2
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	11月16日	落雁１つ	0.07
72	トハテキ	明治12年	7月12日	落雁１袋	0.06
75	イタケトク	明治12年	5月 6日	落雁１つ	0.06
75	イタケトク	明治12年	5月 6日	落雁２袋	0.12
75	イタケトク	明治12年	5月 8日	落雁１つ	0.07
75	イタケトク	明治12年	5月11日	落雁１つ	0.06
75	イタケトク	明治12年	5月19日	落雁２袋	0.12
75	イタケトク	明治12年	6月 2日	落雁１つ	0.06
75	イタケトク	明治12年	6月23日	落雁１袋	0.06
75	イタケトク	明治12年	6月26日	落雁１袋	0.06
75	イタケトク	明治12年	7月 5日	落雁１袋	0.06

75	イタケトク	明治12年	7月22日	落雁２袋	0.12
75	イタケトク	明治12年	7月29日	落雁２袋	0.12
75	イタケトク	明治12年	10月22日	飴１つ	0.2
75	イタケトク	明治12年	10月26日	落雁１つ	0.07
76	ヒシヤンテ	明治12年	7月 6日	落雁１つ	0.06
77	トモツハ	明治12年	5月14日	落雁１袋	0.06
77	トモツハ	明治12年	5月26日	落雁１つ	0.06
77	トモツハ	明治12年	6?月14日	落雁１袋	0.06
77	トモツハ	明治12年	7月17日	落雁１つ	0.06
78	タサベサン	明治12年	5月12日	落雁１袋	0.06
78	タサベサン	明治12年	5月19日	落雁１袋	0.06
78	タサベサン	明治12年	5月22日	落雁１袋	0.06
78	タサベサン	明治12年	9月16日	落雁１つ	0.06
80	チヤケアンテ	明治12年	6月 5日	落雁１つ	0.06
80	チヤケアンテ	明治12年	?月15日	落雁１つ	0.06
83	ヲシワテ　スノアン	明治12年	6月27日	落雁１袋	0.06
83	ヲシワテ　スノアン	明治12年	6月30日	落雁１つ	0.06
85	ヤカンテ倅エカンヌ	明治12年	6月30日	落雁１つ	0.06
85	ヤカンテ倅エカンヌ	明治12年	7月 5日	落雁１つ	0.06
86	ウロクテ倅トク	明治12年	7月 4日	落雁１袋	0.06
86	ウロクテ倅トク	明治12年	7月 8日	落雁１つ	0.06
86	ウロクテ倅トク	明治12年	8月17日	落雁１つ	0.06
86	ウロクテ倅トク	明治12年	10月19日	落雁１つ	0.07
90	ソンノマツ	明治12年	11月 2日	落雁１つ	0.07
93	カチヤマン	明治12年	7月12日	落雁１つ	0.06
93	カチヤマン	明治12年	7月19日	落雁１つ	0.06
95	アカ子	明治12年	7月19日	落雁２つ	0.12
95	アカ子	明治12年	8月13日	落雁１つ	0.06
98	サンケマツ	明治12年	7月11日	落雁１つ	0.06
98	サンケマツ	明治12年	7月15日	落雁１つ	0.06

表４　砂糖購入表

No	人名	年	月日	購入品名	購入額（円）
1	イタカネ	明治12年	9月 2日	玉砂糖半斤	0.125
4	インカルエ	明治12年	7月 4日	玉砂糖半斤	0.1
8	春松	明治12年	7月14日	玉砂糖半斤	0.1
8	春松	明治12年	7月28日	玉砂糖１斤	0.17
9	ホタコロアン	明治12年	5月 5日	玉砂糖半斤	0.1
9	ホタコロアン	明治12年	9月 6日	玉砂糖半斤	0.085
9	ホタコロアン	明治12年	10月 7日	玉砂糖３０匁	0.05
10	ホ子ラン	明治12年	10月16日	玉砂糖６０目	0.05
11	保や之也牟無	明治12年	9月 5日	玉砂糖１斤	0.17
14	トリ相の	明治12年	7月29日	玉砂糖半斤	0.085
14	トリ相の	明治12年	8月11日	玉砂糖１斤	0.17
18	チヤウクテ	明治12年	5月16日	玉砂糖４０目	0.063
18	チヤウクテ	明治12年	6月25日	玉砂糖半斤	0.125
19	ツタヌ	明治12年	7月26日	玉砂糖１斤	0.17
21	ヲヒタサンケ	明治12年	6月22日	玉砂糖半斤	0.1
21	ヲヒタサンケ	明治12年	7月22日	玉砂糖１斤	0.2
25	ヨタヌンテ	明治12年	5月24日	玉砂糖１斤	0.2
28	カナシ	明治12年	7月17日	玉砂糖５０目	0.05
28	カナシ	明治12年	7月29日	玉砂糖１斤	0.17
28	カナシ	明治12年	8月12日	玉砂糖１斤	0.17
28	カナシ	明治12年	9月 2日	玉砂糖１斤	0.17
30	ラウシユウク	明治12年	6月11日	玉砂糖半斤	0.1
30	ラウシユウク	明治12年	7月30日	玉砂糖１斤	0.17
34	礼宇恵牟	明治12年	8月 7日	玉砂糖１斤	0.17
34	礼宇恵牟	明治12年	9月 1日	玉砂糖半斤	0.085
37	ヤヤシパ	明治12年	8月 2日	玉砂糖１斤	0.17
38	バテキヌ	明治12年	4月30日	玉砂糖１斤	0.2
38	バテキヌ	明治12年	8月 2日	玉砂糖１斤	0.17
38	バテキヌ	明治12年	9月10日	玉砂糖１斤	0.17
38	バテキヌ	明治12年	9月21日	玉砂糖１斤	0.17
38	バテキヌ	明治12年	10月30日	白砂糖１斤	0.25
41	古保きん多	明治12年	7月29日	玉砂糖１斤	0.17
41	古保きん多	明治12年	9月 4日	玉砂糖１斤	0.17
43	ヤカンデ	明治12年	10月 4日	白砂糖１斤	0.25
43	ヤカンデ	明治12年	10月 4日	玉砂糖１斤	0.17
45	荒四郎	明治12年	9月18日	玉砂糖１金	0.25

46	あぷかし	明治12年	5月25日	白砂糖１斤	0.25
46	あぷかし	明治12年	7月29日	玉砂糖１斤	0.17
46	あぷかし	明治12年	8月26日	玉砂糖１斤	0.17
49	キモラン	明治12年	5月30日	玉砂糖５０目	0.05
52	エサカノク	明治12年	7月20日	玉砂糖半斤	0.1
52	エサカノク	明治12年	7月25日	玉砂糖１斤	0.17
52	エサカノク	明治12年	8月 1日	玉砂糖１斤	0.17
53	澤田之安之牟	明治12年	7月24日	玉砂糖１斤	0.2
57	シユマカワ	明治12年	6月25日	玉砂糖半斤	0.1
57	シユマカワ	明治12年	8月 3日	玉砂糖１斤	0.17
60	シトンマ	明治12年	7月10日	玉砂糖５０目	0.05
60	シトンマ	明治12年	7月12日	玉砂糖５０目	0.05
64	エサエ子倅カトナシ	明治12年	7月12日	玉砂糖半斤	0.1
69	マカラム	明治12年	5月19日	玉砂糖５０目	0.05
69	マカラム	明治12年	11月19日	玉砂糖５５匁	0.05
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	6月24日	玉砂糖半斤	0.125
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	6月25日	玉砂糖１斤	0.1
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	6月30日	玉砂糖半斤	0.125
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	7月17日	玉砂糖４０目	0.063
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	7月20日	玉砂糖５０目	0.05
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	7月21日	玉砂糖４０目	0.063
75	イタケトク	明治12年	7月17日	玉砂糖半斤	0.125
77	トモツハ	明治12年	7月10日	玉砂糖５０目	0.05
77	トモツハ	明治12年	7月13日	玉砂糖半斤	0.1
77	トモツハ	明治12年	7月17日	玉砂糖５０目	0.05
78	タサベサン	明治12年	5月17日	玉砂糖５０目	0.05
80	チヤケアンテ	明治12年	6月19日	玉砂糖５０目	0.05
82	お子ラン娘チウコサヲ口	明治12年	7月22日	玉砂糖８０目	0.08
83	ヲシワテ　スノアン	明治12年	7月13日	玉砂糖半斤	0.1
85	ヤカンテ倅エカンヌ	明治12年	7月 7日	玉砂糖半斤	0.1
88	カリワ	明治12年	7月10日	玉砂糖４０目	0.063
88	カリワ	明治12年	7月12日	玉砂糖５０匁	0.05
88	カリワ	明治12年	7月19日	玉砂糖５０匁	0.05
90	ソンノマツ	明治12年	7月12日	玉砂糖５０匁	0.05
90	ソンノマツ	明治12年	7月19日	玉砂糖５０目	0.05
98	サンケマツ	明治12年	7月10日	玉砂糖４０目	0.063
98	サンケマツ	明治12年	7月23日	玉砂糖６０目	0.06
99	タラエマツ	明治12年	11月14日	玉砂糖６０匁	0.06

表５　「ぱん」購入表

No	人名	年	月日	購入品名	購入額（円）
1	イタカネ	明治12年	6月 8日	ぱん半斤	0.24
4	インカルエ	明治12年	4月21日	ぱん半斤	0.12
4	インカルエ	明治12年	5月16日	ぱん半斤	0.12
5	イカシルテ	明治12年	5月28日	ぱん半斤	0.12
8	春松	明治12年	4月18日	ぱん１斤	0.24
8	春松	明治12年	6月20日	ぱん半斤	0.12
9	ホタコロアン	明治12年	4月 9日	はん半斤	0.12
9	ホタコロアン	明治12年	4月20日	はん半斤	0.12
9	ホタコロアン	明治12年	5月25日	ぱん半斤	0.12
9	ホタコロアン	明治12年	6月11日	ぱん半斤	0.12
9	ホタコロアン	明治12年	6月26日	ぱん半斤	0.12
11	保や之也牟無	明治12年	3月25日	ぱん菓子半斤	0.2
11	保や之也牟無	明治12年	9月15日	ぱん半斤	0.12
12	とんか	明治12年	4月20日	ぱん半斤	0.12
12	とんか	明治12年	4月19日	ぱん半斤	0.12
13	トタヌ	明治12年	4月20日	ぱん半斤	0.12
13	トタヌ	明治12年	6月22日	ぱん半斤	0.12
13	トタヌ	明治12年	9月 8日	ぱん半斤	0.12
18	チヤウクテ	明治12年	5月19日	ぱん半斤	0.12
18	チヤウクテ	明治12年	5月25日	ぱん半斤	0.12
18	チヤウクテ	明治12年	6月11日	ぱん半斤	0.12
18	チヤウクテ	明治12年	6月22日	ぱん半斤	0.12
18	チヤウクテ	明治12年	6月30日	ぱん半斤	0.12
19	ツタヌ	明治12年	5月18日	ぱん半斤	0.12
19	ツタヌ	明治12年	8月 9日	ぱん半斤	0.12
19	ツタヌ	明治12年	9月30日	ぱん半斤	0.12
20	イカシアステ	明治12年	5月28日	ぱん１斤	0.24
25	ヨタヌンテ	明治12年	4月18日	ぱん半斤	0.12
26	カハフセ	明治12年	3月 1日	ぱん菓子半斤	0.12

26	カハフセ	明治12年	3月28日	ハン半斤	0.12
26	カハフセ	明治12年	5月 5日	ハン半斤	0.12
27	かぷけり	明治12年	2月16日	ぱん菓子半斤	0.12
27	かぷけり	明治12年	5月25日	ぱん半斤	0.12
27	かぷけり	明治12年	5月28日	ぱん半斤	0.12
27	かぷけり	明治12年	6月 8日	ぱん半斤	0.12
27	かぷけり	明治12年	6月 9日	ぱん半斤	0.12
31	ランケシユウ	明治12年	4月20日	ぱん半斤	0.12
38	バテキヌ	明治12年	6月26日	はん半斤	0.12
38	バテキヌ	明治12年	9月17日	はん１斤	0.24
43	ヤカンデ	明治12年	5月16日	ぱん半斤	0.12
43	ヤカンデ	明治12年	5月20日	ぱん半斤	0.12
44	アシレコロ	明治12年	1月11日	ぱん半斤	0.12
44	アシレコロ	明治12年	5月17日	ぱん半斤	0.12
45	荒四郎	明治12年	4月11日	ぱん半斤	0.12
45	荒四郎	明治12年	6月13日	ぱん半斤	0.12
46	あぷかし	明治12年	4月18日	ぱん半斤	0.12
52	エサカノク	明治12年	4月23日	ぱん半斤	0.12
58	セフトカ	明治12年	8月 2日	ぱん半斤	0.12
60	シトンマ	明治12年	5月21日	ぱん半斤	0.12
69	マカラム	明治12年	5月25日	ぱん半斤	0.12
69	マカラム	明治12年	6月11日	ぱん半斤	0.12
69	マカラム	明治12年	6月15日	ぱん半斤	0.12
69	マカラム	明治12年	6月22日	ぱん半斤	0.12
69	マカラム	明治12年	9月30日	ぱん半斤	0.12
69	マカラム	明治12年	10月 4日	ぱん半斤	0.12
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	12月21日	ぱん半斤	0.11
75	イタケトク	明治12年	3月23日	ぱん半斤	0.12
75	イタケトク	明治12年	3月28日	ぱん半斤	0.12
75	イタケトク	明治12年	5月16日	ぱん半斤	0.12
75	イタケトク	明治12年	5月19日	ぱん半斤	0.12
75	イタケトク	明治12年	5月22日	ぱん半斤	0.12

75	イタケトク	明治12年	6月 8日	ぱん半斤	0.12
75	イタケトク	明治12年	6月11日	ぱん半斤	0.12
75	イタケトク	明治12年	6月19日	ぱん半斤	0.12
75	イタケトク	明治12年	6月22日	ぱん半斤	0.12
75	イタケトク	明治12年	6月26日	ぱん半斤	0.12
75	イタケトク	明治12年	6月29日	ぱん半斤	0.12
75	イタケトク	明治12年	8月 3日	ぱん半斤	0.12
75	イタケトク	明治12年	8月17日	ぱん半斤	0.12
75	イタケトク	明治12年	9月27日	ぱん半斤	0.12
75	イタケトク	明治12年	9月29日	ぱん１斤	0.24
75	イタケトク	明治12年	10月 5日	ぱん半斤	0.12
77	トモツハ	明治12年	5月21日	ぱん半斤	0.12
80	チヤケアンテ	明治12年	9月22日	ぱん半斤	0.12

表６　調味料等購入表

No	人名	年	月日	購入品名	購入額（円）
1	イタカネ	明治12年	4月19日	みそ１貫匁	0.25
1	イタカネ	明治12年	5月13日	みそ１貫匁	0.25
1	イタカネ	明治12年	6月22日	みそ１貫匁	0.25
1	イタカネ	明治12年	8月 3日	みそ２貫匁	0.2
2	伊多吉保呂	明治12年	2月 7日	みそ５００匁	0.125
2	伊多吉保呂	明治12年	5月 5日	みそ１貫匁	0.2
4	インカルエ	明治12年	4月13日	みそ１貫匁	0.25
5	イカシルテ	明治12年	4月23日	みそ１貫匁	0.25
8	春松	明治12年	5月12日	みそ５００匁	0.12
8	春松	明治12年	5月24日	味噌１貫匁	0.2
8	春松	明治12年	7月20日	みそ１貫匁	0.2
8	春松	明治12年	8月19日	みそ１貫匁	0.2
8	春松	明治12年	8月21日	みそ１貫匁	0.2
8	春松	明治12年	9月13日	みそ１貫匁	0.2
9	ホタコロアン	明治12年	4月 2日	みそ１貫匁	0.25
9	ホタコロアン	明治12年	7月26日	梅干１樽	0.45

9	ホタコロアン	明治12年	8月 4日	みそ１貫匁	0.2
9	ホタコロアン	明治12年	9月 2日	みそ１貫匁	0.2
9	ホタコロアン	明治12年	9月13日	みそ１貫匁	0.2
9	ホタコロアン	明治12年	9月23日	みそ１貫匁	0.2
11	保や之也牟無	明治12年	5月17日	みそ１貫匁	0.2
11	保や之也牟無	明治12年	7月26日	梅干１樽	0.45
11	保や之也牟無	明治12年	8月13日	みそ１貫匁	0.2
11	保や之也牟無	明治12年	8月29日	みそ２貫匁	0.4
11	保や之也牟無	明治12年	8月17日	醤油１樽	1.1
12	とんか	明治12年	7月14日	みそ２貫匁	0.4
12	とんか	明治12年	9月 3日	味噌１貫匁	0.2
19	ツタヌ	明治12年	7月23日	みそ１貫匁	0.2
21	ヲヒタサンケ	明治12年	7月22日	みそ１貫匁	0.2
24	ハテキヨコ	明治12年	8月 9日	みそ１貫匁	0.2
24	ハテキヨコ	明治12年	9月 2日	みそ１貫匁	0.2
25	ヨタヌンテ	明治12年	5月24日	モロミ１升	0.15
28	カナシ	明治12年	8月 4日	みそ１貫匁	0.2
28	カナシ	明治12年	8月11日	みそ１貫匁	0.2
28	カナシ	明治12年	9月 2日	みそ１貫匁	0.2
30	ラウシユウク	明治12年	7月12日	味噌１貫匁	0.2
30	ラウシユウク	明治12年	7月23日	味噌１貫匁	0.2
30	ラウシユウク	明治12年	8月 1日	味噌１貫匁	0.2
30	ラウシユウク	明治12年	9月 3日	味噌１貫匁	0.2
31	ランケシユウ	明治12年	6月28日	味噌５００匁	0.1
37	ヤヤシパ	明治12年	6月13日	みそ１貫匁	0.2
37	ヤヤシパ	明治12年	7月23日	みそ１貫匁	0.2
37	ヤヤシパ	明治12年	9月22日	みそ１貫匁	0.2
38	バテキヌ	明治12年	6月26日	醤油３杯	0.15
38	バテキヌ	明治12年	7月24日	醤油３杯	0.15
38	バテキヌ	明治12年	8月15日	醤油３杯	0.15
38	バテキヌ	明治12年	9月 9日	みそ１貫匁	0.2
38	バテキヌ	明治12年	10月3日	みそ１貫匁	0.2

41	古保きん多	明治12年	6月 4日	酢半杯	0.02
41	古保きん多	明治12年	7月25日	醤油１樽	1.1
41	古保きん多	明治12年	7月25日	みそ１貫匁	0.2
45	荒四郎	明治12年	6月23日	醤油５合	0.1
45	荒四郎	明治12年	7月28日	みそ１貫匁	0.2
45	荒四郎	明治12年	9月18日	みそ１貫匁	0.2
46	あぷかし	明治12年	7月22日	みそ１貫匁	0.2
46	あぷかし	明治12年	8月 6日	みそ１貫匁	0.2
50	エトフセ	明治12年	7月26日	みそ１貫匁	0.2
51	えんからま	明治12年	4月25日	みそ１貫匁	0.25
52	エサカノク	明治12年	7月23日	みそ１貫匁	0.2
53	澤田之安之牟	明治12年	7月 6日	酢半杯	0.025
57	シユマカワ	明治12年	6月 4日	みそ１貫匁	0.2
57	シユマカワ	明治12年	6月19日	みそ１貫匁	0.2
57	シユマカワ	明治12年	6月25日	みそ１貫匁	0.2
57	シユマカワ	明治12年	7月12日	みそ１貫匁	0.2
57	シユマカワ	明治12年	8月 4日	みそ２貫匁	0.4
57	シユマカワ	明治12年	9月 5日	みそ１貫匁	0.2
58	セフトカ	明治12年	7月25日	みそ１貫匁	0.2
58	セフトカ	明治12年	8月 2日	みそ１樽	1.2
59	古海彦次郎	明治12年	7月23日	醤油３杯	0.175
59	古海彦次郎	明治12年	8月25日	みそ１貫匁	0.2
78	タサベサン	明治12年	5月22日	みそ１貫匁	0.2

表７　塩・糀・魚油購入表

No	氏名	年	月日	購入品目	購入額（円）
1	イタカネ	明治12年	1月20日	塩４升	0.12
1	イタカネ	明治12年	3月20日	塩４升	0.12
1	イタカネ	明治12年	6月 1日	塩３升	0.12
1	イタカネ	明治12年	6月 1日	糀１升	0.085
1	イタカネ	明治12年	6月26日	糀２升	0.17

1	イタカネ	明治12年	6月27日	塩１俵	0.75
1	イタカネ	明治12年	11月 8日	塩５升	0.4
2	伊多吉保呂	明治12年	5月 5日	糀２升	0.17
4	インカルエ	明治12年	6月18日	塩５升	0.2
5	イカシルテ	明治12年	5月 2日	糀５升	0.425
8	春松	明治12年	5月 2日	塩１升	0.04
8	春松	明治12年	5月 2日	塩１升	0.04
8	春松	明治12年	6月 6日	塩３升	0.12
8	春松	明治12年	7月 5日	塩３升	0.12
8	春松	明治12年	7月 9日	塩３升	0.12
8	春松	明治12年	8月21日	塩２升	0.11
8	春松	明治12年	10月28日	魚油１升５合	0.15
9	ホタコロアン	明治12年	4月16日	塩２升	0.08
9	ホタコロアン	明治12年	5月19日	塩２升	0.08
9	ホタコロアン	明治12年	6月 1日	糀３升	0.17
9	ホタコロアン	明治12年	6月10日	塩２升	0.08
11	保や之也牟無	明治12年	9月 5日	魚油１升５合	0.12
19	ツタヌ	明治12年	7月20日	塩１升５合	0.06
19	ツタヌ	明治12年	7月21日	塩１升	0.04
21	ヲヒタサンケ	明治12年	7月22日	塩３升	0.12
24	ハテキヨコ	明治12年	9月19日	塩１升	0.055
25	ヨタヌンテ	明治12年	6月23日	塩２升	0.08
28	カナシ	明治12年	7月21日	塩１升５合	0.06
28	カナシ	明治12年	9月14日	塩２升	0.11
30	ラウシユウク	明治12年	7月 5日	塩２升	0.16
31	ランケシユウ	明治12年	7月5日?	塩５合	0.04
32	ウナフト	明治12年	5月10日	糀４升	0.4
36	くちやらんで	明治12年	4月22日	糀２升	0.2
37	ヤヤシパ	明治12年	4月2日	塩１表	0.75
38	バテキヌ	明治12年	8月29日	魚油１升５合	0.15
38	バテキヌ	明治12年	10月29日	魚油１升５合	0.15
40	ソユワイ	明治12年	5月29日	糀３升	0.255
43	ヤカンデ	明治12年	5月26日	塩３升	0.12
43	ヤカンデ	明治12年	8月14日	魚油５合	0.04

45	荒四郎	明治12年	6月18日	糀４升	0.34
45	荒四郎	明治12年	6月18日	塩５升	0.2
45	荒四郎	明治12年	11月16日	塩２升	0.16
46	あぷかし	明治12年	5月12日	糀４升	0.4
46	あぷかし	明治12年	7月 7日	塩３升	0.12
48	サウナタラ	明治12年	6月20日	塩３升	0.12
51	えんからま	明治12年	6月24日	糀２升	0.17
51	えんからま	明治12年	6月24日	塩２升	0.08
51	えんからま	明治12年	11月 6日	塩１俵	1.7
53	澤田之安之牟	明治12年	5月 2日	糀３枚？	0.42
53	澤田之安之牟	明治12年	6月23日	糀１升	0.085
53	澤田之安之牟	明治12年	6月23日	塩１升	0.04
57	シユマカワ	明治12年	7月22日	塩３升	0.12
59	古海彦次郎	明治12年	6月 2日	三ツ切塩２俵	0.56
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	6月23日	塩２升	0.08
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	7月21日	塩１升	0.055
80	チヤケアンテ	明治12年	5月25日	塩２升	0.06
86	ウロクテ倅　トク	明治12年	7月 9日	糀５合	0.043

表８　狩猟関係表

No	人名	年	月日	購入品名	購入額（円）	備　考
9	ホタコロアン	明治12年	4月14日	合薬１斤	1.1	火薬
38	バテキヌ	明治12年	9月 1日	筒乱１つ	0.25	
46	あぷかし	明治12年	8月 7日	山刀１丁	0.4	
59	古海彦次郎	明治12年	8月 7日	山刀１丁	0.4	
61	クエラ	明治12年	11月25日	とうらん１つ	0.25	

表９　食器等購入表

No	人名	年	月日	購入品名	購入額（円）
1	イタカネ	明治12年	6月 8日	かん徳利２本	0.2
4	インカルエ	明治12年	5月 8日	徳利１本	0.08
7	ロク	明治12年	7月 8日	茶碗１つ	0.08
8	春松	明治12年	4月29日	皿１枚	0.01
8	春松	明治12年	5月 8日	茶わん１つ	0.08

8	春松	明治12年	6月25日	箸箱１つ	0.14
8	春松	明治12年	7月 7日	かん徳り１本	0.1
8	春松	明治12年	7月20日	手水タラエ１つ	0.13
8	春松	明治12年	7月22日	茶碗１つ	0.08
8	春松	明治12年	7月28日	茶碗１つ	0.05
8	春松	明治12年	7月28日	造皿１枚	0.06
9	ホタコロアン	明治12年	6月21日	箸函１つ	0.14
9	ホタコロアン	明治12年	8月 4日	上皿２枚	0.2
10	ホ子ラン	明治12年	6月13日	並皿１枚	0.075
10	ホ子ラン	明治12年	7月10日	茶碗１つ	0.08
11	保や之也牟無	明治12年	8月26日	かん徳利1本	0.1
12	とんか	明治12年	6月23日	茶わん３つ	0.24
12	とんか	明治12年	6月23日	並皿３枚	0.21
12	とんか	明治12年	7月14日	柄杓１本	0.032
13	トタヌ	明治12年	7月10日	箸箱１つ	0.14
13	トタヌ	明治12年	7月24日	１升鍋１枚	0.3
14	トリ相の	明治12年	8月 3日	皿１枚	0.06
14	トリ相の	明治12年	8月 3日	茶わん２つ	0.1
19	ツタヌ	明治12年	7月25日	上茶碗１つ	0.11
20	イカシアステ	明治12年	7月 9日	茶碗１つ	0.08
21	ヲヒタサンケ	明治12年	4月28日	丼１つ	0.15
21	ヲヒタサンケ	明治12年	7月12日	茶碗３つ	0.24
21	ヲヒタサンケ	明治12年	7月12日	並皿３枚	0.195
21	ヲヒタサンケ	明治12年	7月22日	皿２枚	0.13
21	ヲヒタサンケ	明治12年	7月22日	柄杓１本	0.032
24	ハテキヨコ	明治12年	7月24日	茶碗２つ	0.16
25	ヨタヌンテ	明治12年	5月11日	かん徳利１本	0.1
26	カハフセ	明治12年	6月26日	並皿１枚	0.065
28	カナシ	明治12年	7月 9日	茶碗１つ	0.08
28	カナシ	明治12年	7月14日	並皿１枚	0.075
30	ラウシユウク	明治12年	6月11日	かん徳利１本	0.1
31	ランケシユウ	明治12年	4月 5日	茶わん１つ	0.08
37	ヤヤシパ	明治12年	5月25日	茶わん３つ	0.24
37	ヤヤシパ	明治12年	5月25日	皿３枚	0.195
37	ヤヤシパ	明治12年	6月10日	箸箱１つ	0.14
38	バテキヌ	明治12年	4月25日	茶わん２つ	0.16

38	バテキヌ	明治12年	4月22日	皿２枚	0.13
38	バテキヌ	明治12年	6月17日	茶椀３つ	0.24
38	バテキヌ	明治12年	6月17日	皿３枚	0.24
38	バテキヌ	明治12年	9月20日	かん徳利２本	0.2
38	バテキヌ	明治12年	9月21日	御神酒徳り１組	0.125
38	バテキヌ	明治12年	9月21日	汁わん１０	0.8
39	ヤイセ	明治12年	8月15日	かん徳り１本	0.1
41	古保きん多	明治12年	6月 4日	かん徳り１本	0.1
43	ヤカンデ	明治12年	7月 7日	茶碗１つ	0.1
43	ヤカンデ	明治12年	7月 8日	茶碗１つ	0.08
49	キモラシ	明治12年	7月19日	汁わん１つ	0.07
50	エトフセ	明治12年	7月29日	並皿１枚	0.065
51	えんからま	明治12年	8月16日	茶碗２つ	0.1
51	えんからま	明治12年	11月 4日	かん徳り１本	0.1
52	エサカノク	明治12年	4月23日	汁わん１つ	0.07
52	エサカノク	明治12年	7月23日	茶碗１つ	0.08
52	エサカノク	明治12年	7月23日	並皿１枚	0.075
58	セフトカ	明治12年	5月10日	かん徳利１本	0.1
61	クエラ	明治12年	6月30日	茶わん１つ	0.1
69	マカラム	明治12年	5月 9日	茶呑茶わん１つ	0.018
69	マカラム	明治12年	5月15日	茶わん１つ	0.08
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	7月 8日	皿１枚	0.065
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	7月 8日	茶碗１つ	0.08
71	ホネラン倅アニホカイ	明治12年	7月11日	箸箱１つ	0.14
75	イタケトク	明治12年	3月22日	茶わん１つ	0.08
76	ヒシヤンテ	明治12年	7月 9日	茶碗１つ	0.08
76	ヒシヤンテ	明治12年	7月21日	並皿１枚	0.075
77	トモツハ	明治12年	7月 8日	茶碗１つ	0.08
77	トモツハ	明治12年	7月 8日	並皿１枚	0.065
77	トモツハ	明治12年	7月11日	箸箱１つ	0.14
88	カリワ	明治12年	7月 9日	茶碗１つ	0.1
90	ソンノマツ	明治12年	7月 9日	茶碗１つ	0.1
93	カチヤマン	明治12年	7月10日	茶碗１つ	0.08
93	カチヤマン	明治12年	7月20日	茶碗１つ	0.08
94	アンテマツ	明治12年	7月 9日	茶碗１つ	0.1

表 10　医薬品購入表

No	人名	年	月日	購入品名	購入額（円）
1	イタカネ	明治12年	7月14日	目薬１つ	0.015
8	春松	明治12年	8月 3日	目薬１つ	0.015
8	春松	明治12年	8月19日	目薬２つ	0.03
37	ヤヤシパ	明治12年	11月21日改	目薬	0.015
37	ヤヤシパ	明治12年	8月29日	紫金錠２服	0.088
37	ヤヤシパ	明治12年	8月29日	万金丹２服	0.06
38	バテキヌ	明治12年	8月16日	万金丹４服	0.12
46	あぷかし	明治12年	6月13日	万金丹１服	0.03
51	えんからま	明治12年	8月16日	安神散７服	0.161
57	シユマカワ	明治12年	6月19日	目薬２服	0.04
61	クエラ	明治12年	3月19日	感応丸１服	0.125

表 11　諸届・諸願関係表

No	人名	年	月日	購入品名	購入額（円）
1	イタカネ	明治12年	9月 6日分	区入費金かし	1.303
2	伊多吉保呂	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
2	伊多吉保呂	明治12年	4月 5日	半紙１５枚丸木舟願ニ付	0.03
3	イテキシマ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
3	イテキシマ	明治12年	4月17日	半紙６枚米願ニ付	0.012
4	インカルエ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
5	イカシルテ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
5	イカシルテ	明治12年	4月中	半紙１６枚材木願ニ付	0.033
6	イタカマ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
7	ロク	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
8	春松	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
9	ホタコロアン	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
9	ホタコロアン	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
10	ホ子ラン	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
11	保や之也牟無	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
11	保や之也牟無	明治12年	4月14日	半紙１６枚薪願ニ付	0.032
12	とんか	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001

12	とんか	明治12年	6月20日	是ハ造船免除札願ニ付かし	0.008
13	トタヌ	明治12年	3月27日	半紙割合苗字届ニ付	0.24
15	ニタヌカル	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
16	保農遠加恵	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
17	チヨクノアン	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
17	チヨクノアン	明治12年	4月 5日	半紙１５枚材木願ニ付	0.03
17	チヨクノアン	明治12年	4月10日	子出生ニ付半紙３枚	0.006
17	チヨクノアン	明治12年	6月20日	造船免除札願ニ付かし	0.008
18	チヤウクテ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
18	チヤウクテ	明治12年	6月20日	造船免除札願ニ付かし	0.008
20	イカシアステ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
20	イカシアステ	明治12年	4月10日	半紙３枚出生届ニ付	0.006
21	ヲヒタサンケ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
22	ヲシワ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
23	ヲツカエタ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
24	ハテキヨコ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
25	ヨタヌンテ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
26	カハフセ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
27	かぷけり	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
28	カナシ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
28	カナシ	明治12年	9月6日分	区入費金建替払	1.303
29	カユク	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
30	ラウシユウク	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
30	ラウシユウク	明治12年	4月中	半紙１６枚材木願ニ付	0.032
30	ラウシユウク	明治12年	9月 6日	区入費金かし	1.303
30	ラウシユウク	明治12年	10月 5日	１２年分地価代払分	0.363
31	ランケシユウ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
32	ウナフト	明治12年	3月中4月中	半紙１０枚届書ニ入用	0.019
33	能舞久数	明治12年	4月 2日	半紙割合苗字届ニ付	0.001
34	礼宇恵牟	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
35	レマカ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
36	くちやらんで	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001

37	ヤヤシパ	明治12年	３月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
37	ヤヤシパ	明治12年	4月13日	半紙１６枚材木願ニ付	0.032
37	ヤヤシパ	明治12年	6月20日	造船免除札願ニ付かし	0.008
37	ヤヤシパ	明治12年	7月？日	地価代かし 請取	0.68
37	ヤヤシパ	明治12年	7月？日	地価代かし レツカレ浜	0.266
38	バラキヌ	明治12年	３月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
38	バラキヌ	明治12年	9月 1日	区入費金かし	0.133
39	ヤイセ	明治12年		半紙割合苗字届ニ付	0.001
40	ソユワイ	明治12年	３月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
41	古保きん多	明治12年	３月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
43	ヤカンデ	明治12年	３月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
44	アシレコロ	明治12年	３月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
45	荒四郎	明治12年	３月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
46	あぷかし	明治12年	4月 3日	半紙１６枚材木願ニ付	0.032
48	サウナタラ	明治12年	３月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
51	えんからま	明治12年	３月中	半紙割合	0.001
53	澤田之安之牟	明治12年	3月24日	半紙割合苗字届ニ付	0.003
53	澤田之安之牟	明治12年	4月20日	半紙１６枚材木届ニ付	0.032
53	澤田之安之牟	明治12年	6月20日	是ハ造船免除札願ニ付かし	0.009
54	シコケ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
55	シコラム	明治12年	4月 5日	半紙１６枚材木届ニ付	0.032
55	シコラム	明治12年	4月10日	半紙３枚出生届ニ付	0.06
56	しらむて	明治12年	4月より3月中	半紙１６枚苗字并材木願ニ付	0.032
57	シユマカワ	明治12年	3月中	半紙割合	0.001
58	セフトカ	明治12年	3月中	半紙割合	0.001
59	古海彦次郎	明治12年	3月中	半紙割合	0.001
62	エレコ	明治12年	3月中	半紙割合苗字届ニ付	0.001
65	マトラフ	明治12年	5月30日	半紙割合苗字届ニ付	0.006

表 12　筆・墨・紙購入表

No	氏名	年	月日	購入品目	金額（円）
2	伊多吉保呂	明治12年	2月24日	半紙６枚	0.012

7	ロク	明治12年	5月 6日	半紙代かし	0.015
8	春松	明治12年	7月17日	墨１丁	0.055
8	春松	明治12年	7月17日	半紙１丁	0.04
9	ホタコロアン	明治12年	7月21日	墨１丁	0.075
11	保や之也牟無	明治12年	3月24日	半紙１５枚	0.03
12	とんか	明治12年	5月 3日	半紙代かし	0.024
18	チヤウクテ	明治12年	5月 6日	半紙代かし	0.14
19	ツタヌ	明治12年	7月20日	水毛筆１本	0.03
19	ツタヌ	明治12年	7月20日	芸紙１丁	0.024
19	ツタヌ	明治12年	9月25日	半紙１丁	0.032
25	ヨタヌンテ	明治12年	5月 6日	半紙代かし	0.02
27	かぷけり	明治12年	5月 6日	半紙代かし	0.024
30	ラウシユウク	明治12年	3月24日	半紙１５枚	0.03
33	能舞久数	明治12年	3月17日	半し２０	0.08
33	能舞久数	明治12年	3月20日	半紙１５枚	0.03
34	礼宇恵牟	明治12年	3月 6日	半紙代かし	0.024
38	バテキヌ	明治12年	9月20日	半紙３丁	0.096
51	えんからま	明治12年	3月24日	半紙１５枚	0.03
53	澤田之安之牟	明治12年	3月24日	半紙８枚	0.016
59	古海彦次郎	明治12年	3月24日	半紙１５枚	0.03
67	イタケサアン	明治12年	7月19日	墨１丁	0.075
67	イタケサアン	明治12年	7月20日	水毛筆１本	0.03
69	マカラム	明治12年	7月14日	半紙１丁	0.04
69	マカラム	明治12年	7月14日	墨１丁	0.07
69	マカラム	明治12年	7月20日	水毛筆１本	0.03
69	マカラム	明治12年	7月20日	芸紙１丁	0.024
69	マカラム	明治12年	10月11日	墨１丁	0.075
75	イタケトク	明治12年	7月19日	半紙１丁	0.04
75	イタケトク	明治12年	7月19日	墨１丁	0.075
75	イタケトク	明治12年	7月19日	水毛筆１本	0.03
75	イタケトク	明治12年	7月21日	水毛筆１本	0.03
75	イタケトク	明治12年	10月22日	半紙１丁	0.032

79	クチヤランテ倅シタクヌ	明治12年	7月 8日	半紙１丁	0.04
80	チヤケアンテ	明治12年	6月25日	半紙１丁	0.032
80	チヤケアンテ	明治12年	6月25日	筆１本	0.03

表 13　漆器等仕入表

No	品　名	数量	単価（円）	総額（円）	備　考
1	女膳（青・黒）	2枚	0.318	0.636	寅年残り
2	汁わん	12個	0.011	0.132	寅年残り
3	土人杯	17個	0.07	1.19	寅年残り
4	青光七寸　重箱	3組	0.9	2.7	７月弘済丸積来り
5	内朱汁わん	100個	0.024	2.4	７月弘済丸積来り
6	木地汁わん	150個	0.012	1.8	７月弘済丸積来り
7	黒内朱膳	30枚	0.14	4.2	７月弘済丸積来り
8	青内朱三ツ組総輪	3組	0.4	1.2	７月弘済丸積来り
9	青内朱五ツ組総輪	1組	1.4	1.4	8月21日弘済丸積来り
10	青内朱五ツ組総輪	2組	1.35	2.7	9月20日弘済丸積来り
11	蓋ナシ茶わん	61個	0.01	0.61	寅年残り
12	茶呑茶わん	23個	0.006	0.138	寅年残り
13	なら茶わん	10個	0.035	0.35	寅年残り
14	蓋ナシ茶わん	200個	0.0106	2.12	７月弘済丸積来り
15	平茶わん	200個	平均 0.0262	5.24	７月弘済丸積来り
16	平茶わん	200個	0.01	2.	9月20日弘済丸積来り
17	並皿	236枚	0.017	4.01	寅年残り
18	並皿	240枚	平均 0.022	5.22	７月弘済丸積来り
19	瀬戸下皿	3枚	0.037	0.111	寅年残り
20	徳利	75本	平均 0.0216	1.08	７月弘済丸積来り
21	湯呑	109個	平均	2.232	７月弘済丸積来り

矢本家文書「当座帳」及び「土人勘定帳」について

三浦　泰之[1](MIURA Yasuyuki)

はじめに

本稿では、矢本家文書の中にある３冊の経営帳簿、すなわち、明治13年～14年(1880～1881)の「当座帳」(Y7)、明治10年(1877)及び明治12年(1879)の「土人勘定帳」(Y5・Y6)について、その概要を紹介する。

以上の３冊については、既に瀧澤正氏によって詳細な分析が行われ、「明治初年におけるアイヌの昆布業―日高地方様似郡の例にみる―」[i]及び「明治初年アイヌ昆布漁家の「経営」と「家計」」[ii]という２本の論考がまとめられている。そして、明治８年(1875)に静内・浦河・様似の三郡を対象として開拓使が行った「漁場改革」の結果、昆布浜と昆布取船を所有し移住和人と「区別」なく昆布漁を自営することになったという、全道的にも特異な歴史的経過をたどった様似郡アイヌ集団の、明治初年における「経営」と「家計」の状況が明らかにされている。その意味では、本稿の記述は瀧澤氏の論考に負う部分が大きい。

ただ、それでも、これらの資料は、明治初年の矢本家が旧会所で担われていた行政的な役割を引き継ぎ、様似郡内における昆布製品の生産と流通、生活必要品の仕入れと販売などに大きな影響力を有していたことを鑑みれば、様似郡アイヌ集団はもちろん、移住和人も含め、様似郡内で活動した人びとの動向全般を知る上で極めて重要であり、矢本家文書の「調査報告書」という場で改めてその概要を紹介し、ごく一部に過ぎないが、記載内容の翻刻紹介を行うことに意味があると考え、あえて本稿で取り上げた次第である。

１．明治13年～14年(1880～1881)の「当座帳」(Y7)について

矢本家文書には、「当座帳」と題された帳簿が３冊現存している。

①Y7「当座帳」(表紙寸：44.0×15.0cm、厚さ：11.0cm)
- 裏表紙の墨書「様似郡矢本蔵五郎」
- 記載期間：明治13年(1880)８月５日～明治14年(1881)２月18日

②Y8「当座帳」(表紙寸：31.0×14.0cm、厚さ：24.6cm)
- 裏表紙の墨書「矢本蔵五郎」
- 記載期間：明治17年(1884)１月２日～12月29日

③Y9「当座帳」(表紙寸：23.0×13.0cm、厚さ：36.0cm)
- 裏表紙の墨書「矢本店」
- 記載期間：明治21年(1888)１月４日～11月20日

『日本国語大辞典』の「当座帳」の項に「商家で、仕分けをしないで、売り上げの順に仮に記録しておく帳簿」(第14巻、小学館、1975年）とあるように、矢本家文書の「当座帳」も、基本的には、矢本店における日々の商品（大半は米や酒などの生活必要品）の売り上げ内容が時系列に沿った形で書き継がれている帳簿である。まず、人名（購入者名）が記され、それに続けて、一つ書ごとに品名（購入物品名）と数量、代金が列挙されている。購入者は、和人やアイヌの別なく、また、「内入用」、つまり矢本家の家内消費分や、「冬しま番屋」のように矢本家が経営していた漁場に回された分なども含んでいる。まさに、矢本店における商品販売、及び矢本店からの商品流通の全体像を、時系列に沿っ

[2] *北海道博物館*

た形で示す史料と言える。本来は、連年、途切れることなく作成され続けたものと考えられるが、現存しているのは、上記の３冊に限られる。

なお、これらの帳簿に現れる商品販売はその都度の現金取引ではなく、前借り精算（後日の一括精算）が基本であった。購入物品それぞれに「帳入」の印が押されており、仮に「当座帳」に記録された後、別の帳簿に購入者ごとに転記されて集計され、年に１回程度、精算が行われたと考えられる。その別帳簿のアイヌ関係が後述する「土人勘定帳」である。本稿では、以上の３冊の内、「当座帳」①について取り上げる。

表１－１は、「当座帳」①の内容を、表の形式で翻刻紹介したものである。ただ、紙幅の都合上、すべての項目を列挙したのは明治 13 年(1880) ８月分のみで、９月以降は、アイヌ関係すべてと、祭礼や年中行事関係など、一部の和人関係に限定せざるを得なかった。以下では、表１－１に即して、いくつかのトピックを紹介する。

（１）「当座帳」①には、明治 13 年(1880) ８月から翌年２月まで、約７か月間における商品販売等の内容が記されている。一つ書ベースで 7,211 件に及ぶ。その内訳を見ると、８月は 1,358 件、９月は 1,299 件、10 月は 1,244 件、11 月は 1,165 件、12 月は 1,130 件、１月は 629 件、２月は 386 件である。冬場は少ない傾向にあるが、昆布漁の盛期にあたる８月には、１日平均で約 50 件の商品販売等が行われていることがわかる。

（２）「当座帳」①に登場する様似郡のアイヌの人名を表１－２としてまとめた。矢本店からの商品購入が確認出来るのは 31 名である。開拓使の統計によれば明治 13 年(1880)の様似郡のアイヌは 56 戸 217 名であるが[iii]、人口比で約 14%、31 名全員を戸主と仮定すると戸数比で約 55%のアイヌが矢本店から何らかの物品を購入していることになる。それぞれの購入件数を見ると、１件から 153 件まで大きな差が見られる。購入件数が多いアイヌは、後述する表３－１との対照で言えば、政府御用達広業商会が様似郡内の昆布集荷に進出してきた後もまとまった数量の昆布を矢本店へ出荷している人物（瀧澤氏の言葉によれば、「矢本仕込制」から「離脱」しなかったアイヌ）[No.2 のアラスロ、No.25 のホタコラン、No.3 のイタカ子など]や、矢本家が担っていた駅逓取扱の中で馬追を務めた人物[No.18 のトタヌ、No.1 のアニホカイなど] といったように、矢本家との関係性が深かった人物と言える。

（３）明治 13 年(1880) ８月５日から９月 27 日まで、矢本の帳場から「賄」として沙流・新冠・勇払のアイヌへ米の支給が見られる。その数は最大で、沙流アイヌ６名、新冠アイヌ４名、勇払アイヌ５名に及び、一人あたりの支給は７合前後である。９月 27 日に「砂留土人引払ニ付遣し候也」として清酒３升を支給した（表１－１No.1599）のを最後に記載が見られなくなることから、この日、最後まで残っていたアイヌが帰郷したと思われる。この関連では、矢本家文書 Y19「七番與路じ留」に、９月 10 日付で沙流アイヌなど 29 名に対して生活必要品の前貸し購入額と給金とを精算した文書、９月 27 日付で６名に過上金を精算した文書などが綴られている。それによれば、人によっては、５月３日から 128 日間も雇われていることがわかる。労働内容は不明であるが、時期的なことをふまえると、主に矢本家が経営する昆布漁や鰯漁に従事したのかもしれない。様似郡アイヌ集団は基本的には昆布漁を自営していたので、労働力という点で他郡のアイヌを雇用したのであろうか[iv]。

（４）資料原文の品名の左脇に特記事項が記されている場合がある（表１－１「備考 1」欄に示した)。

それらの記載からは、例えば、９月 29 日から 10 月１日にかけて「稲荷様御祭礼」の関係で白木綿や針金などが自家消費されていること（アイヌにも清酒１樽が振る舞われている）、「大漁」があると（時期的におそらく鮭漁）矢本店から各番家へ頻繁に振る舞い酒が行われていること、１月 11 日には矢本家で「船玉祝」が挙行されていること、１月 29 日には様似郡の郷社で「幸明天皇〔孝明天皇〕遙拝」が執り行われていることなど、年中行事や漁労慣習など、生活文化的な情報も読み解くことが出来る。

２．明治 10 年(1877)及び明治 12 年(1879)の「土人勘定帳」（Y5・Y6）について

矢本家文書には、「土人勘定帳」と題された帳簿が２冊現存している。

①Y5「土人勘定帳」（表紙寸：34.0×12.3cm、厚さ：7.1cm）

・裏表紙の墨書「矢本蔵五郎」

・対象年代：明治 10 年(1877)

②Y6「土人勘定帳」（表紙寸：34.0×12.3、厚さ：6.8cm）

・裏表紙の墨書「矢本蔵五郎」

・対象年代：明治 12 年(1879)

いずれも体裁は同じで、基本的には、様似郡のアイヌ個々人ごとに章立てされ、まず前半に矢本店から前借りで購入した生活必要品等の品名と金額が列挙され、その総額が計算されている。そして、後半に矢本店に対して出荷した昆布などの産物の販売額や、矢本店への雇用に係る給金額が列挙され、やはりその総額が計算された上で、最終的に収支が精算されている。精算は、おおむね年１回程度、12 月から翌年１月にかけて行われた。また、アイヌ個々人ごとの章の最初の丁の端には、個々人の名前を記したインデックスラベルが貼られ、検索の便が図られている。矢本店において「土人勘定帳」が作成されるようになった時期について、瀧澤氏は、開拓使による「漁場改革」で様似郡アイヌ集団の昆布漁自営が始まり、同時に矢本店による生活必要品等の前貸しと昆布等の一手集荷（「矢本仕込制」）も始まった明治８年(1875)からではないかと推定している。なお、いつ頃まで「土人勘定帳」が作成されたのか、その終期については定かではない。

記載内容の一例として、２冊の「土人勘定帳」の内、①では２番目、②では１番目に登場するイタカ子について、表２として翻刻紹介した。

これによると、イタカ子は、①の明治 10 年(1877)を例に取れば、まず同年２月 15 日から翌年１月８日まで、計 35 円 93 銭５毛分の生活必要品等を矢本家から前借り購入している。そして、収入として、矢本家に出荷した昆布 122 把分（税額分含む）の代金 50 円 47 銭４厘８毛と鹿皮 22 枚の代金６円 39 銭２厘４毛に、鮭漁雇い６日分の給金 90 銭を加えた総額、計 57 円 76 銭 7 厘 2 毛が書き上げられている。その上で、明治 11 年(1878) 1 月 20 日に、年間収支として、21 円 83 銭 6 厘 7 毛の「過上」（黒字）と精算されている。

次に、表３－１として、２冊の「土人勘定帳」に登場する人名と収入項目、収支の金額をまとめ、表３－２として、収入項目の詳細をまとめた。①には 80 名、②には 96 名のアイヌが登場し、その内 68 名が重複している。昆布という点に注目すると、①では 50 名のアイヌが矢本店に対して昆布を出荷している。瀧澤氏が指摘するように、昆布出荷者を家族筆頭者と仮定すれば、総戸数 56 戸の内、50 戸が昆布漁を営んでいることになり、様似郡のアイヌは昆布漁家の組成が極めて高いと言える[v]。なお、②では矢本店に昆布を出荷したアイヌが 27 名に減少しているが、これは、やはり瀧澤氏が指摘するように、政府御用達広業商会の進出で資本金を広業商会から受け取り生活必要品等も広業商会から購入するようになったアイヌ、つまり、いわゆる「矢本仕込制」から「離脱」したアイヌが相当数存

在したことを意味していると考えられる（表３－１の明治 12 年の「収支」欄に「精算」とあるアイヌは前貸し額を年度途中で精算していることを示している。瀧澤氏は、このようなアイヌを「離脱」組と考えられている）[vi]。

加えて、表３－２からは、昆布出荷のほかにも、鹿皮や鹿角、煎海鼠や布海苔といった産物を出荷するアイヌ、矢本店が営む鮭漁や鰯漁、材木流送に係る雇用労働に従事するアイヌ、矢本家が担った駅逓取扱の中で専業的に馬追に従事するアイヌなど、矢本家との関係性において収入を得ていた、さまざまなアイヌの姿もうかがうことが出来る。

本稿では、２冊の「土人勘定帳」について、そのアウトラインを示すことに主眼を置いたために、これ以上は踏み込まない。これらの帳簿から導き出される様似郡アイヌ集団の「経営」と「家計」に関する詳細は、瀧澤氏の論考をご参照いただきたい。

おわりに

本稿では、矢本家文書にある３冊の経営帳簿、すなわち、明治 13 年～14 年(1880～1881)の「当座帳」(Y7)、明治 10 年(1877)及び明治 12 年(1879)の「土人勘定帳」(Y5・6) について、その概要を紹介し、ごく一部に過ぎないが、翻刻紹介も行った。

矢本家文書には、これらの資料以外にも、いくつかの経営帳簿が現存している。

本稿ではその目録情報だけを示した明治 17 年(1884)及び明治 21 年(1888)の「当座帳」、そして、「土人勘定帳」とほぼ同様の体裁で、様似郡や浦河郡などの和人個々人ごとに収支が精算されている、明治 16 年(1883)、明治 22 年(1889)、明治 23 年(1890)、明治 37 年(1904)の「大福帳」４冊 (Y1～Y4) などである。かつて矢本店で作成された帳簿の全体が残存しているわけではなく、年代的にも、帳簿同士の関係性的にも断片的な形ではあるが、それぞれの内容を詳細に検討し、かつ比較検討していくことで、明治期における様似郡の社会・経済的な状況、また、当該期の様似郡内で活動したアイヌや和人の動向などについて、より詳細に明らかに出来るのではないかと考えられる。今後の研究の進展に期待したい。

注

i 瀧澤正「明治初年におけるアイヌの昆布業―日高地方様似郡の例にみる―」(『北大史学』第 48 号、2008 年)

ii 瀧澤正「明治初年アイヌ昆布漁家の「経営」と「家計」」(『北海道・東北史研究 2009』[通巻第５号]、北海道・東北史研究会、2009 年)

iii 『開拓使事業報告』第一編（大蔵省、1885 年［北海道出版企画センター、1981 年復刻］）

iv 矢本家文書 Y22「御触書諸願書留」に、明治８年(1875) ５月付で、様似郡惣代鵜苫村小頭・様似村小頭・誓内村小頭・様似郡組頭の連印で、開拓使浦河出張所に提出された「土人傭入之義ニ付奉願書」という願書控が綴られている。それによれば、様似郡の「永住民」に鰯漁場が下渡されたが「人夫」不足であることから、「静内郡并砂留郡之内ニて土人相対を以」30 名ほど雇い入れたい旨が記されている。このような動きと何らか関係があるのかもしれないが、本稿ではこれ以上は踏み込めない。

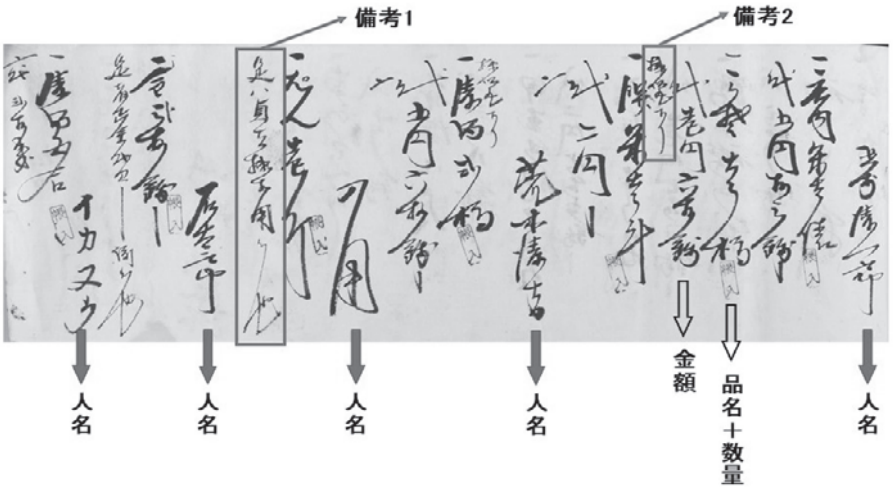
v 前掲瀧澤 2009 年、６頁。

vi 前掲瀧澤 2008 年、62 頁。

表1－1　矢本家文書Y7「当座帳」[明治13年～14年(1880～1881)]　記載内容（抜粋）

凡例

・本表は、矢本家文書Y7「当座帳」[明治13年～14年(1880～1881)]の記載内容をまとめたものである。
・明治13年(1880)8月分は全項目を掲載したが(【1】)、9月以降については、紙幅の都合上、アイヌ関係のみを抽出した(【2】)。ただし、祭礼や年中行事関係など、一部の和人関係項目で抽出したものもある。後者の抽出項目には、行全体に灰色の網掛けをほどこした。
・表中の表記は、基本的には原文記載のママである。ただ、読解の便を図るために、原則、旧字は新字に改め、「数量」欄や「金額」欄の数字、「備考1」欄及び「備考2」欄中の年号・数量記載は、漢数字をアラビア数字に改めた。
・原文中、判読出来なかった文字は、「■」もしくは「[　]」で示した。また、筆者による注記は「〔　〕」で示した。
・「当座帳」という資料の性格上、「人名」欄と「品名」「数量」「金額」欄の関係性は、多くの場合、「人名」欄の人物が、「品名」欄のモノを「数量」欄の数だけ、「金額」欄の金額で、矢本店から提供を受けた(購入した)ことを意味している(かつ、基本的には、前借りでの購入(後日の一括清算)である)。ただ、一部、矢本店が購入した物品や矢本店が提供を受けた労働なども含まれており、それについては「品名」欄に「【入】」を付して区別した(原文でも、一つ書の上部に「入」と記載され、区別されている)。
・「金額」欄の単位は円。例えば、「1.2345」とあれば、1円23銭4厘5毛である。また、「―」は、金額記載がないことを意味している。
・「備考1」欄には、基本的には、資料原文中の「品名」記載の左側に記載されている特記事項の内容を示した。
・「備考2」欄には、基本的には、資料原文中の「品名」記載の一つ書の右端に記載されている特記事項の内容を示した。



【1】明治13年(1880)8月分（全項目を掲載）

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1	8月5日	重太郎	花染	7尺	0.245		様似丸下り
2	8月5日	☆〔カク七〕	塚の井印清酒	10樽	―	是ハ昆布廻スニ相渡し候也	同船下り
3	8月5日	漁方入用	秋田白米	1俵	―	是ハツカナイ行昆布廻ス遣候也	
4	8月5日	店ノ利三郎	繻子襟	1掛	―		
5	8月5日	店ノ利三郎	紺木綿	2尺5寸	―		
6	8月5日	栄介	庄内米	2俵	10.26		
7	8月5日	鵜坂	草鞋	5足	0.175		
8	8月5日	鵜坂	草り	3足	0.105		
9	8月5日	内入用	巻真岡	1反	1.25		
10	8月5日	内入用	晒白	7尺5寸	―	是ハ貞吉様相渡し候也	
11	8月5日	幸三郎	清酒	1杯	0.1		
12	8月5日	清治郎	清酒	1升	―		
13	8月5日	塩釜ノ金治郎	龍印莨	3玉	0.225		
14	8月5日	幸三郎	清酒	1杯	0.1		
15	8月5日	土人賄	越後米	5升2合5勺	―	是ハ8人前相渡し候也	
16	8月5日	中村留吉	紺木綿	5尺	0.17		
17	8月5日	中村留吉	金龍莨	3玉	0.225		
18	8月5日	玉川藤太郎	花染	1丈8尺	0.63		
19	8月5日	中野寅吉	紺先織	1枚	1.2		
20	8月5日	中野寅吉	金龍莨	1ツ	0.075		
21	8月5日	中野寅吉	紺切糸	3ツ	0.048		
22	8月5日	清治郎・幸三郎	清酒	5合宛	0.4		
23	8月5日	トンカ	龍印莨	5玉	0.375		
24	8月5日	トンカ	清酒	2升	0.8		
25	8月5日	バデキヌ	清酒	1升	0.4		
26	8月5日	金介	清酒	2合5勺	0.1		
27	8月5日	金介	金龍	3玉	0.225		
28	8月5日	トタヌ	清酒	2合5勺	0.1		
29	8月5日	トタヌ	龍印莨	1ツ	0.075		
30	8月5日	ヱカヌク	晒白	4尺5寸	0.09		
31	8月5日	店ノ利三郎	晒白	8尺	―		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
32	8月5日	入用	清酒	2合5勺	—	是ハ金助へ手当遣し候也	
33	8月6日	ヱカヌク	金引苧	20匁	0.07		
34	8月6日	鵜坂氏	手拭	2本	0.1		
35	8月6日	ヒコ	清酒	1升	0.4		
36	8月6日	ボヤ	ミそ	1貫目	0.25		
37	8月6日	ウトマ番家	晒白	1反	0.5		
38	8月6日	ウトマ番家	紺木綿	1反	—		
39	8月6日	ウトマ番家	花染	1反	0.75		
40	8月6日	ウトマ番家	醤油	7合5勺	0.21		
41	8月6日	三沢岸五郎	新莚	5束	—		様似丸下り
42	8月6日	三沢岸五郎	若清水酒	1樽	—		様似丸下り
43	8月6日	三沢岸五郎	山田ぜん	3ぜん	0.6		様似丸下り
44	8月6日	三沢岸五郎	巻真岡	1反	1.18		様似丸下り
45	8月6日	三沢岸五郎	庄内米	3俵	—		様似丸下り
46	8月6日	三沢岸五郎	半紙	5丁	0.2		
47	8月6日	三沢岸五郎	若清水酒	5合	0.2		
48	8月6日	三沢岸五郎	檜皮	1把500目	0.05		
49	8月6日	三沢岸五郎	金引	正ニ500目	1.75		
50	8月6日	三沢岸五郎	龍玉莨	5玉	0.375		
51	8月6日	大の元吉	番綿	2枚	0.07		
52	8月6日	三国長治郎	庄内米	1俵	5.13		
53	8月6日	鳴海印　小三郎	若清水酒	2合5勺	0.1		
54	8月6日	鳴海印　小三郎	金龍印	1玉	0.075		
55	8月6日	バデキヌ	庄内米	1俵	5.13		
56	8月6日	バデキヌ	草鞋	10足	0.4		
57	8月6日	バデキヌ	ミそ	1貫目	0.25		
58	8月6日	レウエン	山田ぜん	2枚	0.4		
59	8月6日	レウエン	草鞋	10足	0.4		
60	8月6日	土人賄	米	5升7合5勺	—	是ハ10人分相渡し候也	
61	8月6日	土人賄	越後米	2升5合	—	是ハ4人分相渡し候也	
62	8月6日	バデギヌ	四五匁掛蝋	2丁	0.03		
63	8月6日	バデギヌ	ミそ漉	1ツ	0.1		
64	8月6日	畑ノ由造	清酒	2合5勺	0.1		
65	8月6日	畑ノ入用	同酒	5合	—	是ハ2人分御神酒ニ遣し候也	
66	8月6日	清治郎	清酒	5合	0.2		
67	8月6日	岸五郎	白米	2升	0.24		
68	8月6日	岸五郎	清酒	1升	0.4		
69	8月6日	岸五郎	同酒	1升	0.4		
70	8月6日	市嶋留太郎	白砂糖	32匁	0.1		
71	8月6日	留吉	紺切糸	2ツ	0.032		
72	8月6日	留吉	白砂糖	34匁	0.1		
73	8月6日	松造	同砂糖	34匁	0.1		
74	8月6日	寅吉	紺木綿	3尺	0.105		
75	8月6日	中堤松五郎	紺切糸	1ツ	0.016		
76	8月6日	橋本勘七	七戸蓙	1枚	—		
77	8月6日	三沢岸五郎	清酒	5合	0.2		
78	8月6日	イカヌク	清酒	2合5勺	0.1		
79	8月6日	入用	清酒	1合5勺	—	是は御家内玉子取替	
80	8月6日	入用	同酒	6合	—	是は宇南山え遣候也	
81	8月6日	内ノ六助	清酒	5合	0.2		
82	8月6日	幸三郎	清酒	1升	0.4		
83	8月7日	重太郎	手拭	1本	0.07		
84	8月7日	善三	塚の井印	1樽	2.8		
85	8月7日	三澤岸五郎	醤油	5合	0.14		
86	8月7日	万之助	庄内米	1俵	5.13		
87	8月7日	大の寅吉	白砂糖	10斤	—	目形1貫600匁	
88	8月7日	大の寅吉	餅白米	2斗5升	—		
89	8月7日	鵜坂	白弁慶嶋	2反	1.7		
90	8月7日	鵜坂	巻絣	1反	1.75		
91	8月7日	鵜坂	さらし白	1丈5尺	0.3		
92	8月7日	玉川藤太郎	白砂糖	1斤	—		
93	8月7日	イタカ子	龍印莨	1ツ	0.075		
94	8月7日	イタカ子	清酒	2合5勺	0.1		
95	8月7日	市太郎浜ノ森之助	草鞋	20足	0.8		
96	8月7日	市太郎浜ノ森之助	塩	1升	0.08		
97	8月7日	中野寅吉	白砂糖	64匁	0.1		
98	8月7日	市嶋留太郎	白砂糖	半斤	0.125		
99	8月7日	重太郎	金龍	1ツ	0.075		
100	8月7日	亀治郎	越後米	5升	0.65		
101	8月7日	入用	扇印茶	半斤	—	是ハ主人へ相渡し候也	様似丸下り

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
102	8月7日	漁方入用	丸弐寸四分釘	90匁	—		
103	8月7日	納家ニテ長右衛門	鏑	1本	0.12		
104	8月7日	砂留土人賄	越後米	3升	—	是ハ6人分相渡し候也	
105	8月7日	堺徳治	草鞋	50足	2		
106	8月7日	堺徳治	青嶋	1枚	1.2		
107	8月7日	堺徳治	白木綿	1枚	0.8		
108	8月7日	堺徳治	白砂糖	1斤	0.25		
109	8月7日	幸三郎	手拭	1本	0.07		
110	8月7日	加藤岩吉	龍印莨	3玉	0.225		
111	8月7日	加藤岩吉	山田ぜん	2枚	0.4		
112	8月7日	勇払土人賄	越後米	2升7合5勺	—	是は4人分相渡し候也	
113	8月7日	加藤岩吉	清酒	7合5勺	0.3		
114	8月7日	イカヌク	白砂糖	正ニ64匁	0.1		
115	8月7日	清治郎	花染	6尺	0.215		
116	8月7日	新冠土人賄	越後米	2升5合	—	是ハ4人分相渡し候也	
117	8月7日	内金助	判綿	10枚	0.35		
118	8月7日	内金助	紺木綿	9尺	0.304		
119	8月7日	内金助	真綿	め3匁	0.1		
120	8月7日	内金助	紺切糸	2ツ	0.032		
121	8月7日	箱館下り　桜場与之吉	清酒	7合5勺	0.3		
122	8月7日	幸三郎・金助	同酒	1杯宛	0.2		
123	8月8日	今村清九郎	嶋木綿	1反	0.9		アシかし
124	8月8日	内入用	白〆油	2合	—	是は奥え相渡し候也	
125	8月8日	内入用	飯茶碗	1ツ	—	是は姉さまえ相渡し候也	
126	8月8日	内入用	胡麻	3合	—		
127	8月8日	内入用	麻浦草履	1足	—	是は御家内え相渡し候也	
128	8月8日	内入用	内朱汁わん	4ツ	—	是は台所え相渡し候也	
129	8月8日	アラシロ	庄内米	1俵	5.13	升3865入	様似丸下り
130	8月8日	浦河郡ニテ　北村精一郎	庄内米	1俵	5.13		
131	8月8日	浦河郡ニテ　北村精一郎	若清水酒	1樽	2.8		
132	8月8日	浦河郡ニテ　北村精一郎	龍印莨	10玉	0.75		
133	8月8日	浦河郡ニテ　北村精一郎	紺巻絣	1反	1.88		
134	8月8日	納谷ニテ　重太郎	金龍莨	4玉	0.3		
135	8月8日	納谷ニテ　石太郎	金龍印莨	1玉	0.075		
136	8月8日	内入用	晒木綿	5尺	—	是は姉さまえ相渡し候也	
137	8月8日	勇払土人賄	越後米	2升7合5勺	—	是は4人分相渡し候也	
138	8月8日	沙留土人賄	越後米	3升	—	是は6人分相渡し候也	
139	8月8日	(新冠土人賄)	同米	2升5合	—	是は新冠土人4人分相渡し候也	
140	8月8日	浦河郡ニテ　清香庵	皆朱レモス	1わん	0.45		
141	8月8日	入用	炭	1本	—	是ハ様似丸ニ遣し候也	
142	8月8日	要之助	河内白	1反	0.8		
143	8月8日	トンカ	青嶋	1反分	1.2		
144	8月8日	トンカ	紺木綿	1反	1		
145	8月8日	トンカ	清酒	1升3杯	0.7		
146	8月8日	トンカ	草鞋	10足	0.4		
147	8月8日	漁方入用	秋田米	1俵	—		
148	8月8日	漁方入用	清酒	1斗1升	—	是ハ様似丸荷役酒遣し候也	
149	8月8日	内入用	巻絣	1反	—	是ハ御内室さまニ相渡し候也、但ス井口娘ニ相遣し	
150	8月8日	沢田福松	花染	8尺	0.28		
151	8月8日	原亀造	金龍	3玉	0.225		
152	8月8日	内入用	清酒	4合	—	是ハ浦川郡清香あん遣し	
153	8月8日	幸三郎	ぱん	半斤	0.12		
154	8月8日	与之吉	白砂糖	半斤	—		
155	8月8日	与之吉	同砂糖	半斤	0.25		
156	8月8日	漁方入用	清酒	3升7合5勺	—	是ハ土人へ荷役酒遣し候也	
157	8月9日	馬家入用	中間縄	7把	—	是は馬谷え相渡し候也	
158	8月9日	井口兼吉	庄内米	1俵	5.13	升3斗8升6合5勺入	様似丸下り
159	8月9日	伊藤久吉	庄内米	2俵	10.26		
160	8月9日	伊藤久吉	清酒	5升	2		
161	8月9日	鵜坂氏	竹原塩	2升	0.16		
162	8月9日	鵜坂氏	草鞋	5足	0.2		
163	8月9日	伊藤久吉	四五匁掛	10丁	0.15		
164	8月9日	伊藤久吉	龍玉莨	4玉	0.3		
165	8月9日	伊藤久吉	草鞋	20足	0.8		
166	8月9日	伊藤久吉	白砂糖	1斤半	0.375		
167	8月9日	鵜坂	ぱん	半斤	0.12		
168	8月9日	善三	灯すん	2わ	0.05		
169	8月9日	善三	附木	5把	0.1		
170	8月9日	幸治郎	唐紐	2わ	0.32		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
171	8月9日	幸治郎	附木	2わ	0.04		
172	8月9日	幸治郎	四五匁掛蝋	10丁	0.15		
173	8月9日	古原松蔵	半紙	1丁	0.04		
174	8月9日	北村清一郎	庄内米	1俵	5.13		
175	8月9日	北村清一郎	ミそ	1樽	1.6		
176	8月9日	北村清一郎	餅米	1斗	2		様似丸下り
177	8月9日	荒木清吉	清酒	2樽	5.6		様似丸下り
178	8月9日	入用	ぱん	1斤	—	是ハ貞吉様相用候也	
179	8月9日	石太郎	金	20銭	—	是は正金貸し渡し候也	
180	8月9日	イカヌク	清酒	5合	0.2		
181	8月9日	入用	レモンス	1ツ	—	是ハ主人ニ相渡し石山ニ遣し候也	
182	8月9日	冬しま番家	上茶わん	1ツ	0.11		
183	8月9日	冬しま番家	南部わん	2ツ	0.1		
184	8月9日	冬しま番家	花染	8尺	0.28		
185	8月9日	冬しま番家	甲玉木綿	1反	2.75		
186	8月9日	冬しま番家	嶋絣	1反	1.75		
187	8月9日	冬しま番家	繻子襟	2掛	0.3		
188	8月9日	冬しま番家	袖口	1掛	0.09		
189	8月9日	冬しま番家	庄内米	3俵	15.39		
190	8月9日	冬しま番家	ラウ竹	2本	0.02		
191	8月9日	冬しま番家	白伝甫	4ツ	0.1		
192	8月9日	冬しま番家	鏑	1本	0.12		
193	8月9日	冬しま番家	清酒	5合	0.2		
194	8月9日	冬しま番家	さらし白	8尺5寸	0.17		
195	8月9日	冬しま番家	紺足袋	1足	0.24		
196	8月9日	留岡喜内	〔欠〕	〔欠〕	〔欠〕		
197	8月9日	〔欠〕(留岡喜内か)	〔欠〕	〔欠〕	0.5		
198	8月9日	〔欠〕(留岡喜内か)	唐更砂	2尺5寸	0.375		
199	8月9日	〔欠〕(留岡喜内か)	唐白縮緬	1丈	1.2		
200	8月9日	柳原千代松	庄内米	2俵	10.26	升3斗8升6合5勺入	様似丸下り
201	8月9日	柳原千代松	四五匁掛ケ	20丁	0.3		
202	8月9日	柳原千代松	晒木綿	1反	0.5		
203	8月9日	柳原千代松	半紙	1丁	0.04		
204	8月9日	入用	手拭	1本	0.07	是ハ貞吉様へ相渡し候也	
205	8月9日	清治郎	清酒	5合	0.2		
206	8月9日	土人賄米也	越後米	8升2合5勺	—		
207	8月9日	布施要之助	庄内米	2俵	10.26	3斗8升6合5勺入	様似丸下り
208	8月9日	イタブヌ	庄内米	1俵	5.13		
209	8月9日	イタブヌ	清酒	2升	0.8		
210	8月9日	イタブヌ	手拭	1本	0.05		
211	8月9日	千代松	清酒	5合	0.2		
212	8月9日	喜内	紺足袋	1足	—		
213	8月9日	入用	吉の葛	1斤	—	是ハ御内室さまへ相渡し候也	
214	8月9日	堺徳治	晒白木綿	1反	0.5		
215	8月9日	善三	清酒	5合	0.2	是ハ砂留土人ヱカハコロへ遣し候也	
216	8月9日	加藤岩吉	草鞋	20足	0.7		
217	8月9日	加藤岩吉	晒白木綿	1丈	0.2		
218	8月9日	加藤岩吉	紺木綿	1丈	0.35		
219	8月9日	加藤岩吉	白伝甫	2ツ	0.05		
220	8月9日	加藤岩吉	清酒	5合	—		
221	8月9日	大坂専之助	白砂糖	1斤	0.25		
222	8月9日	大坂専之助	紺切糸	1ツ	0.016		
223	8月9日	留太郎	白砂糖	1斤	0.25		
224	8月9日	勇吉	同砂糖	64匁	0.1		
225	8月9日	松蔵	大松の花	1函	0.38		
226	8月9日	馬屋入用	中間縄	24わ	—		
227	8月9日	馬屋入用	同縄	2丸	—		
228	8月9日	金助	清酒	2合5勺	0.1		
229	8月9日	イタプヌ	同酒	5合	0.2		
230	8月10日	佐々木栄助	白砂糖	1斤	0.25		
231	8月10日	鵜坂	手拭	1本	0.05		
232	8月10日	菊地兼吉	ツゝみ	1反	1.2		
233	8月10日	菊地兼吉	巻絣	1本	2.2		
234	8月10日	菊地兼吉	花染	1疋	1.5		
235	8月10日	馬家入用	清酒	2合5勺	—	是は草買入ニ付正月え遣し候也	
236	8月10日	馬家入用	中間縄	1丸ト5把	—		
237	8月10日	漁方入用	秋田米	1俵	—	是は納家え相渡し候也	
238	8月10日	内入用	ちじみ	1反	—	是は御家内え相渡し候也	12年残り物

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
239	8月10日	石太郎	清酒	5合	0.2		
240	8月10日	長右衛門	ぱん	半斤	0.12		
241	8月10日	清治郎	清酒	5合	0.2		
242	8月10日	内入用	清酒	5合	—	是は浦河内海え遣し候也	
243	8月10日	加藤岩吉	庄内米	1俵	5.13	升3斗8升6合5勺	
244	8月10日	加藤岩吉	ミそ	1貫目	0.25		
245	8月10日	加藤岩吉	白砂糖	1斤	0.25		
246	8月10日	加藤岩吉	山田ぜん	1枚	0.2		
247	8月10日	加藤岩吉	醤油	7合5勺	0.21		
248	8月10日	砂留土人賄	越後米	3升	—	是は6人分相渡し候也	
249	8月10日	新冠土人賄	越後米	2升5合	—	是は4人分相渡し候也	
250	8月10日	勇払土人賄	越後米	2升7合5勺	—	是は4人分相渡し候也	
251	8月10日	内入用	加賀米	2俵	—	是は内飯米え蔵出し候也	
252	8月10日	加藤岩吉	清酒	1升	0.4		
253	8月10日	加藤岩吉	龍玉莨	1玉	0.075		
254	8月10日	イタカ子	清酒	1升	0.4		
255	8月10日	ゴンポキンタ	ミそ	1貫目	0.25		
256	8月10日	ゴンポキンタ	清酒	2合5勺	0.1		
257	8月10日	納家ニテ　石太郎	清酒	5合	0.2	使政吉参り	
258	8月10日	レウエン	清酒	1升2合5勺	0.5		
259	8月10日	畑由造	清酒	2合5勺	0.1		
260	8月10日	内入用	清酒	5合	—	是はヤカンテえ遣し候也	
261	8月10日	元八	清酒	2合5勺	0.1		
262	8月10日	イカヌク	白サト	32匁	0.05		
263	8月10日	トタヌ	ぱん	半斤	0.12		
264	8月10日	トタヌ	清酒	2合5勺	0.1		
265	8月10日	福松	唐茜	4尺	0.24		
266	8月10日	アラシロ	清酒	2合5勺	0.1		
267	8月10日	幸三郎	同酒	5合	0.2		
268	8月10日	金助	同酒	1杯	0.1		
269	8月10日	藤太郎	同酒	7合5勺	0.3		
270	8月10日	石太郎	清酒	5合	0.2		
271	8月10日	トタヌ	同酒	5合	0.1		
272	8月10日	入用	ぱん	半斤	—	是ハ貞吉様へ遣し候也	
273	8月11日	エカヌク	越後米	5升	0.65		
274	8月11日	エカヌク	手造ミそ	1貫目	0.25		
275	8月11日	入用	唐縮緬	3尺	—	是ハ御内室さまへ相渡し候也	
276	8月11日	幸太郎	巻真岡	2反	2.35		
277	8月11日	幸太郎	青嶋	1枚分	1.2		
278	8月11日	原亀造	清酒	2合5勺	0.1		
279	8月11日	吉太郎	白砂糖	32匁	0.05		
280	8月11日	弥七	餅米	2升	0.4		
281	8月11日	弥七	醤油	7合5勺	0.21		
282	8月11日	弥七	半紙	2丁	0.08		
283	8月11日	阿部市助	庄内米	2俵	10.26		
284	8月11日	阿部市助	清酒	1樽	2.8		
285	8月11日	阿部市助	醤油	7合5勺	0.21		
286	8月11日	阿部市助	手拭	4本	0.24		
287	8月11日	阿部市助	四五匁掛蝋	20丁	0.3		
288	8月11日	和田庄之助	嶋絣	1反	1.75		
289	8月11日	和田庄之助	四五匁掛蝋	10丁	0.15		
290	8月11日	和田庄之助	晒白	半反	0.525		
291	8月11日	和田庄之助	白唐縮緬	4尺3寸	0.516		
292	8月11日	和田庄之助	しら玉粉	3本	—		幸丸下り
293	8月11日	和田庄之助	灯籠	1ツ	0.22		
294	8月11日	阿部市助	紅粉鉢	1ツ	0.25		弐番上り
295	8月11日	阿部市助	灯籠	1ツ	0.22		
296	8月11日	阿部市助	白砂糖	1斤	0.25		
297	8月11日	阿部市助	鰹節	28匁	0.14		
298	8月11日	附田勇吉	草鞋	30足	1.05		
299	8月11日	ウトマ番家	皆折釘	33匁	—		
300	8月11日	ウトマ番家	通り釘	75匁	—		
301	8月11日	ウトマ番家	巻絣	1本	1.56		
302	8月11日	徳治	中皿	3枚	0.24		
303	8月11日	徳治	なら茶わん	1ツ	0.1		
304	8月11日	エンカラマ	清酒	1升	0.4		
305	8月11日	内入用	花染	8尺	—	是は御家内さまえ相渡し候也	
306	8月11日	阿部市助	清酒	1升1杯	0.5		
307	8月11日	ウトマ番家	函鉄	1向	—		
308	8月11日	阿部市助	農両面染	2反	1.64		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
309	8月11日	阿部市助	繻子襟	2本	0.3		
310	8月11日	阿部市助	同袖口	2本	0.19		
311	8月11日	阿部市助	晒木綿	6尺	0.12		
312	8月11日	新冠土人賄	越後米	2升5合	—	是は4人分相渡し候也	
313	8月11日	沙留土人賄	越後米	3升	—	是は6人分相渡し候也	
314	8月11日	勇払土人賄	越後米	2升7合5勺	—	是は4人分相渡し候也	
315	8月11日	鵜苫番家	若清水酒	2合5勺	0.1		
316	8月11日	佐々木栄助	落かん	1袋	—		
317	8月11日	坂本藤七	清酒	1升	0.4	使竹松え相渡し候也	
318	8月11日	金治郎	河内白	半反	0.4		
319	8月11日	金治郎	落雁	2ツ	—		
320	8月11日	川嶋幸吉	ミそ	1貫目	0.25		
321	8月11日	川嶋幸吉	庄内米	1俵	5.13		
322	8月11日	バデキヌ	手拭	6本	0.34		
323	8月11日	バデキヌ	落雁	5ツ	—		
324	8月11日	川嶋幸吉	新鎌	1枚	0.125		
325	8月11日	金治郎	清酒	7合5勺	0.3		
326	8月11日	バデキヌ	金水納	1ツ	0.15		
327	8月11日	ウトマ村ノ初太郎	落雁	7ツ	—		幸丸下り
328	8月11日	ウトマ村ノ初太郎	灯籠	1ツ	0.22		
329	8月11日	ホヤシヤモン	落雁	5ツ	—		
330	8月11日	納家ニテ　嘉吉	白砂糖	64匁	0.1		
331	8月11日	内入用	手造酢	3升	—	是は台所え相渡し候也	
332	8月11日	ホヤ	清酒	2升	0.8		
333	8月11日	小野寅吉	醤油	2樽	—		
334	8月11日	小野寅吉	落かん	1箱	—	太数80入	幸丸下り
335	8月11日	小野寅吉	龍玉莨	1箱	—	数144玉入	幸丸下り
336	8月11日	小野寅吉	落かん	2ツ	—		外ニ
337	8月11日	内入用	落かん	1ツ	—	是は主人え相渡し候也	
338	8月11日	坂本弥七	白サト	64匁	0.1		
339	8月11日	内ノ細川六助	白唐縮緬	3尺5寸	0.875		
340	8月11日	幸吉	庄内米	1俵	5.13	升3斗8升6合5勺入	
341	8月11日	幸吉	清酒	5合	0.2		
342	8月11日	幸吉	落かん	1ツ	—		
343	8月11日	箱館下り雇イ　中村留吉	焼酎	1本	—		幸丸下り
344	8月11日	小三郎	清酒	5合	0.2	使福松参り	
345	8月11日	覚太郎	清酒	5合	0.2		
346	8月11日	納家ニテ　重太郎	清酒	5合	0.2		
347	8月11日	石太郎	同酒	5合	0.2		
348	8月11日	小三郎	清酒	2合5勺	0.1		
349	8月11日	阿部市助	唐紹	1把	0.16		
350	8月11日	トタヌ	清酒	7合5勺	0.3		
351	8月11日	アラシロ	清酒	2合5勺	0.1		
352	8月11日	アラシロ	龍玉莨	1玉	0.075		
353	8月11日	沢田福松	清酒	5合	0.2		
354	8月11日	気仙兼松	清酒	2合5勺	0.1		
355	8月11日	ウトマ番家	清酒	5合	0.2		
356	8月11日	入用	落雁	2ツ	—	是ハ御内室さまニ相渡し候也	
357	8月12日	鵜坂	庄内白米	1俵	—		様似丸
358	8月12日	鵜坂	正喜セん茶	半斤	0.5		
359	8月12日	☆〔カク七〕出店	落雁	2函	—		禧丸下り
360	8月12日	入用	切素麺	30わ	—		
361	8月12日	入用	鰹節	20匁	—		
362	8月12日	入用	白縮緬	2寸	—		
363	8月12日	入用	赤同	2寸	—	是ハ御内室ニ相渡し候也	
364	8月12日	亀治郎	越後米	5升	0.65		
365	8月12日	亀治郎	龍印莨	2ツ	0.15		
366	8月12日	幸三郎	切素麺	2わ	0.04		
367	8月12日	清治郎	同素麺	3わ	—		
368	8月12日	内入用	切素麺	15把	—	是ハ治之吉様着ニ付相用候也	
369	8月12日	漁方入用	秋田白米	1俵	—	是迄蔵出し支也	
370	8月12日	馬家入用	中間縄	5把	—		
371	8月12日	原亀造	清酒	2合5勺	0.1		
372	8月12日	ホタコラン	庄内米	1俵	5.13		升3865入
373	8月12日	漁方入用	皆折	80匁	—		
374	8月12日	小野寅吉	焼酎	10箇	—		
375	8月12日	小野寅吉	☆〔ヤマテ〕印醤油	3樽	—		
376	8月12日	小野寅吉	切素麺	100把	—		
377	8月12日	沢口弥助	庄内米	3俵	15.39		
378	8月12日	沢口弥助	塚の井酒	1樽	2.8		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
379	8月12日	沢口弥助	龍王莨	3玉	0.225		
380	8月12日	沢口弥助	草鞋	20足	0.8		
381	8月12日	金造	庄内米	2俵	10.26		
382	8月12日	金造	新莚	5束	3.625		
383	8月12日	金造	龍印莨	5ツ	0.375		
384	8月12日	金造	塚の井酒	1樽	2.8		
385	8月12日	金造	醤油	半樽	—		幸丸下り
386	8月12日	要之助	醤油	半樽	—		幸丸下り
387	8月12日	原田安太郎	庄内米	3俵	15.39		
388	8月12日	原田安太郎	草鞋	1箇	—		幸丸下り
389	8月12日	原田安太郎	清酒	1樽	2.8		
390	8月12日	原田安太郎	切素麺	50わ	1		
391	8月12日	原田安太郎	小土瓶	1ツ	0.1		
392	8月12日	佐々木新吉	庄内米	3俵	15.39		
393	8月12日	佐々木新吉	塚の井酒	1樽	2.8		
394	8月12日	佐々木新吉	新莚	5束	3.625		
395	8月12日	原田安太郎	落雁	5ツ	—		
396	8月12日	龍八	草鞋	50足	—		
397	8月12日	原田安太郎	清酒	5合	0.2		
398	8月12日	原田安太郎	鰹節	32匁	0.175		
399	8月12日	中堤松五郎	清酒	5合	0.2		
400	8月12日	清治郎	同酒	5合	0.2		
401	8月12日	柳田千代松	塚の井酒	1樽	2.8		
402	8月12日	柳田千代松	切素麺	20把	—		
403	8月12日	柳田千代松	醤酎	2本	—		
404	8月12日	塩釜ニテ　川嶋幸吉	塚の井酒	1樽	2.8		
405	8月12日	塩釜ニテ　川嶋幸吉	切素麺	20把	0.4		
406	8月12日	塩釜ニテ　佐藤金治郎	塚の井酒	1樽	2.8		
407	8月12日	沙留土人賄	越後米	3升	—	是は6人分相渡し候也	
408	8月12日	沙留土人賄	同米	2升	—	是は新冠土人3人分相渡し候也	
409	8月12日	沙留土人賄	同米	2升7合5勺	—	是は勇払土人4人分相渡し候也	
410	8月12日	マカラム	はんかし	半斤	0.12		
411	8月12日	冬しま番家	紺先織	1枚分	1.25		
412	8月12日	冬しま番家	繻子襟	1掛	0.15		
413	8月12日	冬しま番家	鏹	1本	0.12		
414	8月12日	冬しま番家	晒白	6尺	0.12		
415	8月12日	ウトマ村ノ森安太郎	焼酎	10箇	—		
416	8月12日	ウトマ村ノ森安太郎	落雁	1箱	—		
417	8月12日	ウトマ村ノ森安太郎	切素麺	1函	—		
418	8月12日	ウトマ村ノ森安太郎	実子箒	30本	—		
419	8月12日	ウトマ村ノ森安太郎	壱升入白〆油	5ツ	—		
420	8月12日	ウトマ村ノ森安太郎	☆〔ヤマテ〕印醤油	3樽	—		
421	8月12日	ウトマ村ノ森安太郎	松鷹莨	1函	—		
422	8月12日	冬しま番家	唐茜	8尺	0.52		
423	8月12日	亀造・福松・松五郎	髪附	1本宛	—		
424	8月12日	留吉	ぱん	半斤	0.12		
425	8月12日	ヒコ	ぱん	半斤	0.12		
426	8月12日	福松	白砂糖	半斤	—		
427	8月12日	藤井弟造	ぱん	半斤	0.12		
428	8月12日	藤井弟造	焼酎	1本	—		
429	8月12日	畑ノ由造	焼酎	1本	—		
430	8月12日	畑ノ由造	清酒	半杯	0.05		
431	8月12日	加藤岩吉	焼酎	3本	—		
432	8月12日	加藤岩吉	草鞋	10足	0.35		
433	8月12日	加藤岩吉	セんコ	1把	0.016		
434	8月12日	加藤岩吉	なら茶わん	1ツ	0.1		
435	8月12日	原亀造	金	2円	—	是ハ正金貸し	
436	8月12日	馬追　六助	晒木綿	7尺5寸	0.15		
437	8月12日	清治郎	晒木綿	7尺5寸	0.15	是は喜代治え相渡し候也	
438	8月12日	納家ニテ　留太郎・松蔵	落かん	1ツツヽ	—		
439	8月12日	納家ニテ　寅吉	焼酎	1本	—		
440	8月12日	藤太郎	同	1本	—		
441	8月13日	冬しま番家	焼酎	1箇	—		
442	8月13日	冬しま番家	四五匁掛	20丁	0.3		
443	8月13日	冬しまノ金太郎	落雁	1ツ	—		
444	8月13日	冬しまノ金太郎	清酒	7合5勺	0.3		
445	8月13日	市嶋留太郎	落かん	1袋	—		
446	8月13日	市嶋留太郎	手拭	1本	0.05		
447	8月13日	玉川藤太郎	落かん	2ツ	—	使松蔵え相渡ス	
448	8月13日	内入用	かつふし	1本	—	め20匁	

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
449	8月13日	寅吉・藤太郎	清酒	1杯半宛	0.3		
450	8月13日	漁方入用	秋田白米	1俵	—		様似丸下り
451	8月13日	金太郎	巻木綿	1本	0.85		残モの也
452	8月13日	嘉吉・松蔵・藤太郎・寅吉・勇吉・与之吉・留吉	薄縁	1枚宛	2.45		
453	8月13日	留太郎	薄縁	1枚	0.35		
454	8月13日	納家ニテ　市嶋留太郎	落かん	1袋	—		
455	8月13日	納家ニテ　寅吉	焼酎	1本	—		
456	8月13日	沙留土人賄	越後米	3升	—	是は6人分相渡し候也	
457	8月13日	沙留土人賄	越後米	2升	—	是は新冠土人3人分相渡ス	
458	8月13日	沙留土人賄	越後米	2升7合5勺	—	是は4人勇払土人え渡ス	
459	8月13日	釜印　長右衛門	清酒	1合2勺5才	0.05		
460	8月13日	釜印　長右衛門	清酒	1合2勺5才	0.05		
461	8月13日	釜印　長右衛門	落かん	1ツ	—		
462	8月13日	勇払土人賄	越後米	7合5勺	—	是はアシリイタキ今日入	
463	8月13日	畑ノ三造	清酒	1升	0.4		
464	8月13日	佐々木栄助	庄内米	1俵	5.13		
465	8月13日	佐々木栄助	塚印清酒	1樽	2.8		
466	8月13日	佐々木栄助	切素麺	20わ	0.4		
467	8月13日	鵜坂	龍印莨	1ツ	0.075		
468	8月13日	長右衛門	清酒	半杯	0.05		
469	8月13日	専之助	髪附	1本	—		
470	8月13日	長右衛門	ぱん	半斤	0.12		
471	8月13日	喜内	ぱん	半斤	0.12		
472	8月13日	与之吉	焼酎	1本	—		
473	8月13日	留太郎	落雁	1ツ	—		
474	8月13日	入用	花菓子	1函	—	是ハ御内室さまへ相渡し候也	
475	8月13日	中堤松五郎	清酒	5合	0.2		
476	8月13日	元八	清酒	半杯	0.05		
477	8月13日	内入用	四五匁掛	10丁	—		
478	8月14日	善三	塚印酒	1樽	2.8		
479	8月14日	入用	秋田米	1俵	—	是ハ畑ノ三造ニ遣し候也	
480	8月14日	井口兼吉	草り	1足	—		
481	8月14日	内入用	大松附	1把	—		
482	8月14日	内入用	清酒	5合	—		
483	8月14日	内入用	竹原塩	2合5勺	—		
484	8月14日	内入用	賀加白米	5合	—	是ハ鵜坂へ相渡し候也	
485	8月14日	内入用	巻絣	2本	—	是ハ御内室さまニ相渡し候也	
486	8月14日	市太郎浜ノ森之助	新莚	2束	1.45		様似丸下り
487	8月14日	市太郎浜ノ森之助	落雁	3ツ	—		様似丸下り
488	8月14日	高橋元吉	ぱん	1斤	—		
489	8月14日	ハテキヌ	龍玉莨	10玉	0.75		
490	8月14日	ハテキヌ	和附木	4把	0.08		
491	8月14日	ボヤ	庄内米	1俵	5.13		
492	8月14日	レウエン	棒木豆	1箱	—		
493	8月14日	レウエン	ぱん	半斤	—		
494	8月14日	杉本熊太郎	四五匁掛蝋	10丁	0.15		
495	8月14日	杉本熊太郎	半紙	1丁	0.04		
496	8月14日	杉本熊太郎	醤油	5合	0.14		
497	8月14日	熊太郎	清酒	6升	2.4		
498	8月14日	熊太郎	玉砂糖	1斤	0.2		
499	8月14日	熊太郎	切素麺	15把	0.3		
500	8月14日	高橋元吉	醤油	3杯	0.21		
501	8月14日	高橋元吉	半紙	1丁	0.04		
502	8月14日	高橋元吉	龍印莨	2玉	0.15		
503	8月14日	高橋元吉	切素麺	15把	0.3		
504	8月14日	高橋元吉	白砂糖	1斤	—		
505	8月14日	杉本熊太郎	魚油	7合5勺	0.075		
506	8月14日	鵜坂	醤油	7合5勺	0.21		
507	8月14日	高橋元吉	新莚	5束	3.625		様似丸下り
508	8月14日	ボヤ	清酒	5合	0.2		
509	8月14日	高橋元吉	落雁	1ツ	—		
510	8月14日	高橋元吉	金	70銭	—	是ハエハヲエ迄ノ賃セん貸し	
511	8月14日	ポヤ・レウエン	塚印ノ清酒	半杯宛	1.4		
512	8月14日	ポヤ・レウエン	清酒	7合5勺	0.3		
513	8月14日	六兵衛浜ニテ　阿部市助	清酒	2合5勺	0.1		
514	8月14日	六兵衛浜ニテ　阿部市助	焼酎	1本	—		
515	8月14日	塩釜ニテ　佐藤金治郎	紺木綿	半反	0.5		
516	8月14日	塩釜ニテ　佐藤金治郎	花染	半反	0.375		
517	8月14日	塩釜ニテ　佐藤金治郎	唐縮緬	1尺2寸	0.232		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
518	8月14日	塩釜ニテ　佐藤金治郎	唐天	5寸	0.11		
519	8月14日	塩釜ニテ　佐藤金治郎	落雁	1ツ	—		
520	8月14日	塩釜ニテ　佐藤金治郎	半紙	1丁	0.04		
521	8月14日	和田庄之助	ミそ	3貫目	0.75		
522	8月14日	亀治郎	竹原塩	1升	0.16		
523	8月14日	亀治郎	ミそ	1貫目	0.25		
524	8月14日	沙留土人賄	越後米	3升	—	是は6人分相渡し候也	
525	8月14日	沙留土人賄	同米	3升5合	—	是は5人分相渡し候也	
526	8月14日	沙留土人賄	同米	2升	—	是は3人分相渡し候也	
527	8月14日	漁方入用	秋田白米	1俵	—	是は納家え相渡し候也	
528	8月14日	古川松五郎	庄内米	1俵	5.13		
529	8月14日	古川松五郎	手拭	2本	0.14		
530	8月14日	古川松五郎	落かん	1ツ	—		
531	8月14日	幸三郎・元吉	切素麺	4わ宛	0.16		
532	8月14日	中野寅吉	草履	1足	0.035		
533	8月14日	兼松	草履	1足	0.035		
534	8月14日	古川松五郎	庄内米	1俵	5.13		
535	8月14日	金助・トタヌ	清酒	1杯宛	0.2		
536	8月14日	中村留吉	花菓子	1函	—		
537	8月14日	与之吉・トタヌ	清酒	1杯宛	—		
538	8月14日	重太郎	紺切糸	2ツ	—		
539	8月14日	井口兼吉	半紙	6状	0.24		
540	8月14日	留太郎	落雁	1ツ	—		
541	8月14日	留太郎	半紙	2丁	0.08		
542	8月14日	与之助	焼酎	1本	—		
543	8月15日	ケリ々	庄内米	1俵	5.13		
544	8月15日	ケリ々	ミそ	1貫目	0.25		
545	8月15日	与之吉	草り	1足	0.035		
546	8月15日	店ノ利三郎	さらし白	2尺	—		
547	8月15日	店ノ利三郎	伸千草	2尺	—		
548	8月15日	ヱカヌク	草り	1足	0.035		
549	8月15日	亀治郎	焼酎	1本	—		
550	8月15日	亀治郎	唐紐	1把	0.15		
551	8月15日	嵯峨長松	塚印清酒	1樽	2.8		
552	8月15日	嵯峨長松	☆〔ヤマテ〕印醤油	1樽	—		幸丸下り
553	8月15日	井口兼吉	醤油	1升	0.28		
554	8月15日	井口兼吉	上々酢	5合	—		
555	8月15日	井口兼吉	センコ	2把	—		
556	8月15日	井口兼吉	ぱん	半斤	0.12		
557	8月15日	嵯峨長松	草鞋	20足	0.7		
558	8月15日	嵯峨長松	龍印莨	5ツ	0.375		
559	8月15日	嵯峨長松	切素麺	20把	0.4		
560	8月15日	幸治郎	庄内米	2俵	10.26		
561	8月15日	幸治郎	醤油	7合5勺	0.21		
562	8月15日	幸治郎	玉砂糖	2斤	0.4		
563	8月15日	幸治郎	センコ	2把	—		
564	8月15日	幸治郎	龍印莨	5玉	0.375		
565	8月15日	内ノ入用	☆〔ヤマテ〕印醤油	1樽	—	是ハ台処へ相渡し候也	幸丸下り
566	8月15日	与之吉	清酒	2合5勺	0.1		
567	8月15日	鵜坂	落雁	1ツ	—		
568	8月15日	村上藤吉	両面染	1反	0.88		
569	8月15日	イタカ子	庄内米	1俵	5.13		
570	8月15日	内入用	しら玉粉	4本	—	是ハ台処ニ相渡し候也	
571	8月15日	鵜坂	ミそ	1貫目	0.25		
572	8月15日	鵜坂	さらし白	8尺	0.16		
573	8月15日	ウトマ番家	正喜セん茶	1斤	1		
574	8月15日	ウトマ番家	髪附	5本	—		
575	8月15日	ウトマ番家	センコ	2把	—		
576	8月15日	冬嶋番家	焼酎	1箇	1.76		
577	8月15日	冬嶋番家	醤油	7合5勺	0.21		
578	8月15日	トンカ	庄内米	2俵	10.26		
579	8月15日	与之助	清酒	3杯半	0.35		
580	8月15日	松五郎	白砂糖	32匁	0.05		
581	8月15日	留太郎	花菓子	1函	—		
582	8月15日	亀造	清酒	5合	0.2		
583	8月15日	幸三郎	同酒	3杯	0.3		
584	8月15日	幸太郎	清酒	1杯	0.1		
585	8月15日	藤太郎	ぱん	1斤半	0.36	政吉渡し	
586	8月15日	入用	清酒	1升1合	—	是ハ幌泉ノ駅逓大将ニ遣し候也	
587	8月15日	漁方入用	秋田米	1俵	—		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
588	8月16日	ヱカヌク・トタヌ	ぱん	半斤	0.12	〔全体抹消〕	
589	8月16日	内入用	胡麻	5合	—		
590	8月16日	内入用	玉サト	1斤	—	是は御家内え相渡し候也	
591	8月16日	沙留土人賄	越後米	3升	—	是は6人分相渡し候也	15日分
592	8月16日	沙留土人賄	同米	2升	—	是は3人分相渡し候也	
593	8月16日	沙留土人賄	同米	3升5合	—	是は5人分相渡し候也	
594	8月16日	阿部市助	新莚	1束半	1.087		
595	8月16日	阿部市助	玉砂糖	2斤	0.4		
596	8月16日	阿部市助	センコ	1わ	—		
597	8月16日	阿部市助	餅白米	2升	0.4		
598	8月16日	阿部市助	竹原塩	2升	0.16		
599	8月16日	阿部市助	酢	2合5勺	—		
600	8月16日	市助	五合入徳り	1本	0.08		
601	8月16日	市助	小豆	1升	0.08		
602	8月16日	市助	落雁	10袋	—		
603	8月16日	市助	荒砥石	1丁	—		
604	8月16日	忠左衛門	青嶋	1枚分	1.2		
605	8月16日	忠左衛門	紺木綿	1反	1		
606	8月16日	久之助行	小豆	1升	0.08		
607	8月16日	久之助行	六朱蝋	1袋	—		
608	8月16日	久之助行	切素麺	20把	0.4		
609	8月16日	久之助行	餅白米	2升	0.4		
610	8月16日	木村久之助	六朱蝋	1袋	—		
611	8月16日	木村久之助	魚油	1升	0.1		
612	8月16日	入用	縁り布	1疋	—		
613	8月16日	入用	七戸蓙	16枚	—		
614	8月16日	入用	畳糸	200目	—		
615	8月16日	土人賄也	米	3升	—	是6人分相渡し候也	
616	8月16日	坂本弥七	庄内米	2俵	10.26		
617	8月16日	坂本弥七	髪附	3本	—		
618	8月16日	坂本弥七	元結	2わ	—		
619	8月16日	坂本弥七	六朱蝋	1袋	—		
620	8月16日	佐々木善三	阿羽縄	15間	—		
621	8月16日	浦河郡ニテ　清香庵	草履	1足	0.035		
622	8月16日	沙留土人賄	越後米	3升	—	是は6人分相渡し候也	
623	8月16日	沙留土人賄	同米	2升7合5勺	—	是は4人分相渡し候也。但しトハウ今日入	
624	8月16日	沙留土人賄	越後米	3升5合	—	是は勇払土人4人分相渡し候也	
625	8月16日	入用	清酒	5合	—	是ハ浦川郡清香庵遣候也	
626	8月16日	村上藤吉	庄内米	1俵	5.13		
627	8月16日	村上藤吉	清酒	2合5勺	0.1		
628	8月16日	ポヤ	棒豆	1函	—		弘済丸下り
629	8月16日	ゴボ	清酒	1杯	0.1		
630	8月16日	ゴボ	落雁	1ツ	—		
631	8月16日	ゴボ	龍印莨	1ツ	—		
632	8月16日	亀治郎	越後米	5升	0.65		
633	8月16日	ヱカヌク	ぱん	半斤	0.12		
634	8月16日	幸三郎	清酒	1杯	0.1		
635	8月16日	石太郎	巻真岡染	1反	1.2		
636	8月16日	石太郎	花染	半反	0.375		
637	8月16日	石太郎	唐天襟	1掛	0.22		
638	8月16日	石太郎	同巾	4寸	0.092		
639	8月16日	石太郎	紺切糸	2ツ	0.032		
640	8月16日	気仙兼松・留岡喜内	落雁	1ツ宛	—		
641	8月16日	石太郎	清酒	7合5勺	0.3	使与之吉渡し也	
642	8月16日	漁方入用	秋田白米	1俵	—		
643	8月17日	金助	棒豆	1函	—		
644	8月17日	畑ノ由造	金	5円	—	是ハ正金貸直渡し	
645	8月17日	梶ノ万之助	小豆	2升	0.16		
646	8月17日	梶ノ万之助	醤油	7合5勺	0.21		
647	8月17日	万之助	切素麺	20把	0.4		
648	8月17日	万之助	河内白	半反	0.4		
649	8月17日	万之助	白伝甫	15わ	0.375		
650	8月17日	万之助	餅白米	2升	0.4		
651	8月17日	市嶋留太郎	花菓子	1箱	—		
652	8月17日	吉原松造	玉砂糖	50匁	0.05		
653	8月17日	玉川藤太郎	手拭	1本	0.07		
654	8月17日	玉川藤太郎	髪附	1本	—		
655	8月17日	ヒコ	庄内米	1俵	5.13		
656	8月17日	ヒコ	落かん	5ツ	—		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
657	8月17日	ヒコ	ぱんかし	半斤	0.12		
658	8月17日	藤井弟三	ぱんかし	半斤	0.12		
659	8月17日	古川松五郎	餅米	2升	0.4		
660	8月17日	古川松五郎	醤油	7合5勺	0.21		
661	8月17日	古川松五郎	和附木	3把	0.06		
662	8月17日	古川松五郎	魚油	7合5勺	0.07		
663	8月17日	古川松五郎	清酒	1升	0.4		
664	8月17日	古川松五郎	小豆	1升	0.08		
665	8月17日	浦川郡ノ荒木清吉	塚の井印酒	2樽	5.6		
666	8月17日	浦川郡ノ荒木清吉	庄内米	2俵	10.26		
667	8月17日	浦川郡ノ荒木清吉	白砂糖	3斤	0.75		
668	8月17日	古川松五郎	切素麺	10わ	0.2		
669	8月17日	佐々木佐之八	☆〔ヤマテ〕印醤油	1樽	—		
670	8月17日	済藤源治郎	塚の井印酒	1樽	2.8		
671	8月17日	済藤源治郎	☆〔ヤマテ〕印醤油	1樽	—		
672	8月17日	済藤源治郎	餅米	3升	0.6		
673	8月17日	済藤源治郎	草履	50足	—		
674	8月17日	済藤源治郎	鳴海中形	1反	0.78		
675	8月17日	済藤源治郎	龍印莨	10玉	0.75		
676	8月17日	済藤源治郎	ぱん	半斤	0.12		
677	8月17日	済藤源治郎	さらし白	8尺	0.16		
678	8月17日	済藤源治郎	三朱蝋	1袋	—		
679	8月17日	石太郎	ぱん	半斤	0.12		
680	8月17日	鵜苫番家	☆〔ヤマテ〕印醤油	1樽	—		
681	8月17日	鵜苫番家	上々酢	1升	0.25		
682	8月17日	鵜苫番家	塚の井印酒	1樽	2.8		
683	8月17日	鵜苫番家	小豆	2升	0.16		
684	8月17日	鵜苫番家	餅白米	2升	0.4		
685	8月17日	鵜苫番家	三朱蝋	1袋	—		
686	8月17日	鵜苫番家	切素麺	20把	0.4		
687	8月17日	和田庄之助	清酒	2升	0.8		
688	8月17日	ウトマ番家	白唐縮緬	4尺5寸	0.54		
689	8月17日	三沢岸五郎	餅米	4升	0.8		
690	8月17日	三沢岸五郎	七八匁掛	20丁	0.4		
691	8月17日	三沢岸五郎	丸弐寸四分釘	1わ	0.12		
692	8月17日	源治郎	清酒	3杯	0.3		
693	8月17日	善三	餅米	2升	0.4		
694	8月17日	原田安太郎	七八匁掛蝋	10丁	0.2		
695	8月17日	原田安太郎	髪附	2本	—		
696	8月17日	原田安太郎	玉砂糖	2斤	0.4		
697	8月17日	原田安太郎	三朱蝋	1袋	—		
698	8月17日	市太郎浜ノ森之助	庄内米	1俵	5.13		
699	8月17日	市太郎浜ノ森之助	龍印莨	2玉	0.15		
700	8月17日	市太郎浜ノ森之助	落雁	1ツ	0.08		
701	8月17日	市太郎浜ノ森之助	餅米	2升	0.4		
702	8月17日	市太郎浜ノ森之助	焼酎	1本	0.29		
703	8月17日	市太郎浜ノ森之助	白砂糖	1斤	0.25		
704	8月17日	ウトマ　覚太郎	庄内米	1俵	5.13		
705	8月17日	ウトマ　覚太郎	魚油	7合5勺	0.075		
706	8月17日	伊藤久吉	切素麺	20把	0.4		
707	8月17日	ウトマノ覚太郎	切素麺	20把	0.4		
708	8月17日	源治郎	清酒	5合	0.2		
709	8月17日	浦川郡　森野惣造	六朱蝋	1袋	—		
710	8月17日	浦川郡　森野惣造	和大板附	10わ	0.8		
711	8月17日	浦川郡　森野惣造	同小板附	10わ	0.7		
712	8月17日	浦川郡　森野惣造	塚の井酒	2樽	5.6		
713	8月17日	浦川郡　森野惣造	餅白米	1斗	2		
714	8月17日	浦川郡　森野惣造	中障子	2間分	—		弘済丸下り
715	8月17日	浦川郡　森野惣造	丸弐寸四分釘	6わ	0.72	此目形540匁	
716	8月17日	源治郎	清酒	5合	0.2		
717	8月17日	森安太郎	嶋絣	1反	1.75		
718	8月17日	伊藤久吉	醤油	7合5勺	0.21		
719	8月17日	佐々木栄助	餅米	3升	0.6		
720	8月17日	佐々木栄助	白砂糖	1斤	0.25		
721	8月17日	佐々木栄助	玉砂糖	1斤	0.2		
722	8月17日	佐々木栄助	醤油	7合5勺	0.21		
723	8月17日	佐々木栄助	酢	1杯	0.063		
724	8月17日	佐々木栄助	落雁	2ツ	0.16		
725	8月17日	ウトマ　覚太郎	金引苧	40匁	0.14		
726	8月17日	若松小太郎	醤油	7合5勺	0.21		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
727	8月17日	若松小太郎	先香	5把	—		
728	8月17日	若松小太郎	三朱蝋	2袋	—		
729	8月17日	若松小太郎	酢	2合5勺	—		
730	8月17日	若松小太郎	餅米	1升	0.2		
731	8月17日	若松小太郎	髪附	3本	—		
732	8月17日	佐々木栄助	髪附	3本	—		
733	8月17日	伊藤久吉	清酒	1樽	2.8		
734	8月17日	佐々木新吉	庄内米	1俵	—		
735	8月17日	佐々木新吉	筵■塩	1俵	—		
736	8月17日	佐々木新吉	玉砂糖	1斤	0.2		
737	8月17日	与之吉	龍印莨	1玉	0.075		
738	8月17日	入用	餅米	25升	—	是ハ台処ニ相渡し候也	
739	8月17日	幸三郎	焼酎	1本	0.29		
740	8月17日	与之吉	焼酎	1本	0.29		
741	8月17日	玉川藤太郎	焼酎	1本	0.29		
742	8月17日	元吉	焼酎	1本	0.29		
743	8月17日	仙之助	同	1本	0.29		
744	8月17日	入用	坪糸	1掛	—		
745	8月17日	入用	手拭	1本	—	是ハ貞吉様相渡し候也	
746	8月18日	尾田忠兵衛	金水印酒	1樽	2.8		
747	8月18日	尾田忠兵衛	庄内米	1俵	5.13		
748	8月18日	尾田忠兵衛	壱升入白〆	1樽	0.65		
749	8月18日	佐々木善三	酢	5合	0.125		
750	8月18日	塩釜ニテ　川嶋幸吉	餅米	2升	0.4		
751	8月18日	塩釜ニテ　川嶋幸吉	酢	5合	0.125		
752	8月18日	塩釜ニテ　川嶋幸吉	玉サト	1斤	0.2		
753	8月18日	入用	さらし白	2尺	—	是ハ御内室さまへ相渡し候也	
754	8月18日	佐藤金治郎	切素麺	10把	0.2		
755	8月18日	佐藤金治郎	醤油	5合	—		
756	8月18日	加藤岩吉	庄内米	2俵	10.26		
757	8月18日	加藤岩吉	餅米	2升	0.4		
758	8月18日	加藤岩吉	附木	1丸	0.02	8わ分也	
759	8月18日	加藤岩吉	小豆	1升	0.08		
760	8月18日	加藤岩吉	焼酎	1本	0.29		
761	8月18日	加藤岩吉	清酒	2升	0.8		
762	8月18日	加藤岩吉	新莚	2束	1.45		
763	8月18日	加藤岩吉	しら玉粉	1本	0.07		
764	8月18日	加藤岩吉	切素麺	15わ	0.3		
765	8月18日	加藤岩吉	白砂糖	半斤	0.125		
766	8月18日	加藤岩吉	草鞋	20足	0.7		
767	8月18日	加藤岩吉	三朱蝋	半袋	0.135		
768	8月18日	大野寅吉	上々酢	2樽	—		
769	8月18日	布施要之助	持米	3升	0.6		
770	8月18日	布施要之助	玉サト	1斤	0.2		
771	8月18日	附田勇吉	持米	3升	0.6		
772	8月18日	漁方入用	醤油	1升	—	是ハ漁方相渡し候也	
773	8月18日	冬嶋村番家	金水酒	1樽	2.8		
774	8月18日	冬嶋村番家	草鞋	100足	3.5		
775	8月18日	冬嶋村番家	持米	3升	0.6		
776	8月18日	冬嶋村番家	焼酎	1箇	1.76		
777	8月18日	ゴンボキンタ	庄内米	1俵	5.13		
778	8月18日	ゴンボキンタ	ぱん	半斤	0.12		
779	8月18日	ホヤシヤモン	庄内米	1俵	5.13		
780	8月18日	ホヤシヤモン	河内白	6尺5寸	0.175		
781	8月18日	井口兼吉	切素麺	7把	0.14		
782	8月18日	井口兼吉	玉砂糖	半斤	0.1		
783	8月18日	漁方入用	ミそ	3貫目	—	是ハ政吉ニ相渡し候也	
784	8月18日	忠兵衛	【入】大麦	2俵	—	升4斗入	
785	8月18日	ゴボ	清酒	半杯	0.05		
786	8月18日	内元吉	しら玉粉	1本	—		
787	8月18日	漁方入用	榀皮	正ニ7貫目	—	是は納家え相渡し候也	
788	8月18日	佐々木善三	金水印酒	1樽	2.8		
789	8月18日	ヱンカラマ	庄内米	1俵	5.13		
790	8月18日	バデギヌ	同米	2俵	10.26		
791	8月18日	バデギヌ	棒豆	1函	0.7		
792	8月18日	入用	セン香	1把	—	是ハ娘さん相渡し候也	
793	8月18日	ヱンカラマ	切素麺	15把	0.3		
794	8月18日	沙留土人賄	越後米	3升	—	是は6人分相渡し候也	同17日分
795	8月18日	沙留土人賄	同米	2升7合5勺	—	是は4人分相渡し候也	
796	8月18日	沙留土人賄	同米	3升5合	—	是は5人分相渡し候也	

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
797	8月18日	沙留土人・勇払・新冠賄	越後米	9升2合5勺	—	是は15人分相渡し候也	同18日
798	8月18日	内入用	六朱蝋	1袋	—		
799	8月18日	内入用	加賀米	1俵	—	是は内飯米蔵出し候也	
800	8月18日	箱館下り　与之吉	清酒	2合5勺	0.1		
801	8月18日	細川六助	白唐縮緬	3尺	0.36		
802	8月18日	内入用	焼酎	2本	—		
803	8月18日	内入用	切素麺	20把	—	是は坂本弥七え差遣し候也	
804	8月18日	坂本弥七	金水酒	1樽	2.8		
805	8月18日	坂本弥七	小豆	1升	0.08		
806	8月18日	坂本弥七	玉サト	1斤	0.2		
807	8月18日	イタカ子	清酒	2升	0.8		
808	8月18日	イタカ子	晒木綿	6尺5寸	0.13		
809	8月18日	イタカ子	落かん	1ツ	0.08		
810	8月18日	坂本弥七	酢	7合5勺	0.188		
811	8月18日	ホタクラン	手拭	1本	0.07		
812	8月18日	入用	清酒	2合5勺	0.1	是はイタカ子え遣し候也	
813	8月18日	井口	蜜柑漬	1本	—	是ハ池田ニ相渡し候也	
814	8月18日	入用	センコ	2わ	—		
815	8月18日	ヱカヌク	越後米	5升	0.65		
816	8月18日	徳治	白砂糖	1斤	0.25		
817	8月18日	徳治	醤油	7合5勺	0.21		
818	8月18日	徳治	焼酎	1本	0.29		
819	8月18日	井口兼吉	清酒	1升	0.4		
820	8月18日	小三郎	焼酎	1本	0.29		
821	8月18日	馬追ノ トタヌ	清酒	5合	0.2		
822	8月18日	納家ニテ　石太郎	焼酎	1本	0.25		
823	8月18日	金助	清酒	1杯	0.1		
824	8月18日	金助	同	1杯	0.1		
825	8月18日	幸三郎	同酒	5合	0.2		
826	8月19日	漁方入用	秋田白米	1俵	—		
827	8月19日	中野寅吉	手拭	1本	0.07		
828	8月19日	冬しま番家	三朱蝋	1袋	—		
829	8月19日	冬しま番家	庄内米	7俵	35.91		
830	8月19日	冬しま番家	餅米	7升	1.4		
831	8月19日	冬しま番家	小豆	3升	0.24		
832	8月19日	冬しま番家	清酒	1樽	2.8		
833	8月19日	冬しま番家	醤油	3升	0.84		
834	8月19日	冬しま番家	上々酢	3杯	0.24		
835	8月19日	冬しま番家	大板附	3わ	0.24		
836	8月19日	冬しま番家	小板附	3わ	0.21		
837	8月19日	冬しま番家	四五匁掛	20丁	0.3		
838	8月19日	冬しま番家	半紙	5丁	0.2		
839	8月19日	冬しま番家	鏹	2本	0.24		
840	8月19日	冬しま番家	清酒	5合	0.2		
841	8月19日	冬しま番家	さらし白	1丈5寸	0.21		
842	8月19日	冬しま番家	白唐縮緬	8尺5寸	1.02		
843	8月19日	冬しま番家	繻子	1尺8寸	0.36		
844	8月19日	冬しま番家	花染	3尺5寸	0.15		
845	8月19日	金助	金	40銭	—	是ハ正金貸し	
846	8月19日	幸太郎	金龍	1ツ	0.075		
847	8月19日	住岡幸吉	清酒	1升5合	0.6		
848	8月19日	住岡幸吉	切素麺	5わ	0.1		
849	8月19日	住岡幸吉	醤油	7合5勺	0.21		
850	8月19日	冬しま番家	判綿	6枚	0.21		
851	8月19日	冬しま番家	鏹	1本	0.12		
852	8月19日	漁方入用	皿	6枚	—		弘済丸下り
853	8月19日	漁方入用	ミそ	3貫目	—		
854	8月19日	漁方入用	皿	2枚	—		
855	8月19日	幸三郎	清酒	5合	0.2		
856	8月19日	留太郎	手拭	1本	0.05		
857	8月19日	福松	同	1本	0.07		
858	8月19日	丸山栄吉	清酒	5合	0.2		
859	8月19日	納家ニテ　長右衛門	清酒	5合	0.2		
860	8月19日	小野寅吉	清酒	7合5勺	0.3		
861	8月19日	桜場与之吉	清酒	3合5勺	0.15		
862	8月19日	玉川藤太郎	清酒	3合5勺	0.15		
863	8月19日	沢田政吉	ぱんかし	半斤	0.12		
864	8月19日	石太郎	清酒	5合	0.2		
865	8月19日	内　金助	清酒	2合5勺	0.1		
866	8月19日	元吉	清酒	1杯	0.1		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
867	8月19日	小三郎	清酒	2升	0.8		
868	8月19日	土人賄	越後米	9升2合5勺	—	是ハ15人分相渡し候也	
869	8月20日	鵜苫番家	龍印莨	7玉	0.525		
870	8月20日	鵜苫番家	平カスカヱ	4枚	—	目形正ニ	
871	8月20日	大野寅吉	三六朱	4袋	—		
872	8月20日	大野寅吉	早附木	2ダス	—		
873	8月20日	大野寅吉	センコ	5把	—		
874	8月20日	幸太郎	ぱん	半斤	0.12		
875	8月20日	鵜坂	棒豆	1函	0.7		
876	8月20日	元八	ラウ竹	1本	0.01		
877	8月20日	内入用	正喜仙	1斤	—	是は長増え相渡し候也	
878	8月20日	橋本覚太郎	六朱蝋	1袋	0.27		
879	8月20日	橋本覚太郎	早附木	3箱	0.06		
880	8月20日	橋本覚太郎	金水酒	2樽	5.6		
881	8月20日	橋本覚太郎	ちり紙	3丁	0.072		
882	8月20日	橋本覚太郎	金龍莨	4玉	0.3		
883	8月20日	橋本覚太郎	手拭	1本	0.07		
884	8月20日	高橋元吉	六朱蝋	1袋	0.27	是は覚太郎とのえ相渡し候也	
885	8月20日	若松小太郎	ぱんかし	半斤	0.12		
886	8月20日	佐々木新吉	金龍莨	4玉	0.3		
887	8月20日	佐々木新吉	切素麺	5把	0.1		
888	8月20日	納家ニテ　市嶋留太郎	花菓子	1箱	0.35		
889	8月20日	納家ニテ　重太郎	鏹	1本	0.12		
890	8月20日	気仙兼松	落かん	1ツ	0.08		
891	8月20日	沙留土人賄	越後米	3升	—	是は6人分相渡し候也	
892	8月20日	沙留土人賄	同米	2升7合5勺	—	是は新冠土人4人分相渡し候也	
893	8月20日	沙留土人賄	同米	3升5合	—	是は勇払土人賄5人分相渡し候也	
894	8月20日	龍八	金水酒	2樽	5.6		
895	8月20日	龍八	新鎌	2枚	—		
896	8月20日	覚太郎	大刃鈩	1枚	—		
897	8月20日	龍八	ぱんかし	1斤	0.24		
898	8月20日	龍八	正喜仙	半斤	—		
899	8月20日	納家ニテ　沢田政吉	清酒	1升	0.4		
900	8月20日	納家ニテ　沢田政吉	金	60銭	—	正金貸	
901	8月20日	覚太郎	落雁	1ツ	0.08		
902	8月20日	レウエン	落雁	1ツ	0.08		
903	8月20日	レウエン	手拭	2本	0.12		
904	8月20日	井口兼吉	龍印莨	2玉	0.15		
905	8月20日	内入用	金引	70匁	—	是ハ金助ニ相渡し候也	
906	8月20日	納家ニテ　松蔵	半紙	1丁	0.04		
907	8月20日	中村留吉	棒豆	1函	0.7		
908	8月20日	玉川藤太郎	草り	1足	0.035		
909	8月20日	納家ニテ　重太郎	ぱんかし	半斤	0.12		
910	8月20日	アラシロ	清酒	7合5勺	0.3		
911	8月20日	アラシロ	同酒	2合5勺	0.1		
912	8月20日	鳴海印　小三郎	清酒	2升	0.8		
913	8月20日	トタヌ	清酒	2合5勺	—		
914	8月20日	内入用	金水酒	1樽	—	是は納家え盆御酒遣候	
915	8月20日	内入用	同酒	1升5合	—	内手廻り遣し候也	外ニ
916	8月20日	内入用	同酒	5合	—	是は畑外ニ1人え	
917	8月20日	イカヌク	清酒	1合2勺5才	0.05		
918	8月20日	玉川藤太郎	麻浦草り	1足	0.08		
919	8月20日	玉川藤太郎	落かん	1ツ	0.08		
920	8月20日	長右衛門	清酒	2合5勺	0.1		
921	8月20日	佐々木善三	☆〔ヤマテ〕印醤油	1樽	—		幸丸下り
922	8月21日	政吉	万金丹	1服	0.03		
923	8月21日	ボヤ	清酒	1升	0.4		
924	8月21日	バデギヌ	同酒	1升3杯	0.7		
925	8月21日	入用	小豆	3升	—		
926	8月21日	入用	清酒	1升	—	是ハ畑ノ由蔵ニ遣し候也	
927	8月21日	バデギヌ	紺木綿	1反	1		
928	8月21日	亀治郎	越後米	5升	0.65		
929	8月21日	エンカラマ	金龍	5玉	0.375		
930	8月21日	エンカラマ	ミそ	1貫目	0.25		
931	8月21日	エンカラマ	焼酎	3本	0.87		
932	8月21日	エンカラマ	清酒	2合5勺	0.1		
933	8月21日	三沢岸五郎	切素麺	20わ	0.4		
934	8月21日	三沢岸五郎	焼酎	1本	—		
935	8月21日	三沢岸五郎	金水納	1ツ	0.15		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
936	8月21日	入用	餅米	5升	—	是ハ台処ニ相渡し候也	
937	8月21日	古川松五郎	半紙	2丁	0.08		
938	8月21日	古川松五郎	落かん	2ツ	0.16		
939	8月21日	ヒコ	ぱんかし	1ツ	0.12		
940	8月21日	沙留土人賄	越後米	3升	—	是は6人分相渡し候也	
941	8月21日	沙留土人賄	同米	2升7合5勺	—	是は4人分相渡し候也	
942	8月21日	沙留土人賄	同米	3升5合	—	是は5人分相渡し候也	
943	8月21日	内入用	米通し	1ツ	—		
944	8月21日	井口兼吉	清酒	3杯	0.3		
945	8月21日	ケリ々	ぱん	1斤	0.24		
946	8月21日	アラスロ	ぱん	1斤	0.24		
947	8月21日	アラスロ	手拭	1本	0.07		
948	8月21日	桜場与之吉	手拭	1本	0.07		
949	8月21日	アラスロ	清酒	5合	0.2		
950	8月21日	入用	落雁	1ツ	—	是ハ御内室様へ相渡し候也	
951	8月21日	清治郎	清酒	5合	0.2		
952	8月21日	亀治郎	清酒	1杯	0.1		
953	8月21日	玉川藤太郎	切素麺	5把	0.1		
954	8月21日	留太郎	同素麺	5わ	0.1		
955	8月21日	トタヌ	清酒	5合	0.2		
956	8月21日	元八	切素麺	4把	—		
957	8月21日	仙之助	同	4把	—		
958	8月21日	長右衛門	同	4把	—		
959	8月21日	井口兼吉	早附木	3箱	—		
960	8月21日	重太郎	切素麺	5把	0.1		
961	8月21日	石太郎	同素麺	5わ	0.1		
962	8月21日	店ノ利三郎	下駄	1足	—		
963	8月22日	店ノ岩吉	手拭	1本	0.05		
964	8月22日	漁方入用	榀皮	目形13貫500匁	—	是は納家え相渡し候也	
965	8月22日	漁方入用	秋田白米	1俵	—		
966	8月22日	内入用	本庄米	3俵	—	是は内飯米蔵出し候也	幸丸下り
967	8月22日	内入用	白砂糖	半斤	—		
968	8月22日	市嶋留太郎	唐天	1丈2尺	2.66		
969	8月22日	久保田嘉吉	髪附	1本	—		
970	8月22日	沢田政吉	玉砂糖	50匁	0.05		
971	8月22日	入用	清酒	1杯半	—	是ハ和田武治郎遣し候也	21日分
972	8月22日	桜場与之吉	落雁	4ツ	0.32		
973	8月22日	阿部市助	草鞋	10足	0.35		
974	8月22日	阿部市助	早火口	2匁	0.02		
975	8月22日	幸三郎	清酒	5合	0.2		
976	8月22日	入用	ぱん	半斤	—	是ハ貞造様相渡し候也	
977	8月22日	入用	胡摩	2合5勺	—	是ハ台処ニ相渡し候也	
978	8月22日	元八	清酒	7合5勺	0.3		
979	8月22日	与之吉	同酒	3杯	0.3		
980	8月22日	トタヌ	同酒	1杯	0.1		
981	8月22日	トタヌ	同酒	1杯	0.1		
982	8月22日	丸山栄吉	清酒	3杯	0.3		
983	8月22日	市嶋留太郎	落雁	8ツ	0.64		
984	8月22日	専之助	ぱん	半斤	0.12		
985	8月22日	覚太郎	ミそ	4貫目	—		
986	8月22日	覚太郎	焼酎	1本	—		
987	8月22日	金助	さらし白	8尺	0.16		
988	8月23日	弘済丸	津軽莚	2束半	—		
989	8月23日	漁方入用	四合鮭袋網	100間	—	2寸7分掛	
990	8月23日	漁方入用	弐合網	125間	—	3寸5分掛。是ハ漁方ノ元吉ニ相渡し候也	
991	8月23日	漁方入用	四合足掛苧	400匁	—	重太郎ニ相渡し候也	
992	8月23日	橋本勘七	龍印莨	3玉	0.225		
993	8月23日	佐々木新吉	金龍	6玉	0.45		
994	8月23日	小野寅吉	ハエフギ	10組	1.265		
995	8月23日	アラスロ	清酒	2合5勺	0.1		
996	8月23日	ホタコラン	金引苧	150匁	0.525		
997	8月23日	兼松	金	2円	—	是ハ正金相渡し之事也	
998	8月23日	清治郎	清酒	5合	0.2		
999	8月23日	留太郎	麻浦草り	1足	0.08		
1000	8月23日	兼松	髪附	1本	—		
1001	8月23日	兼松	塵紙	1丁	0.025		
1002	8月23日	森ノ恵造	庄内米	4俵	20.52		
1003	8月23日	金治郎	庄内米	1俵	5.13		
1004	8月23日	金治郎	清酒	1升	0.4		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1005	8月23日	金治郎	髪附	2本	—		
1006	8月23日	入用	落雁	1ツ	—	是ハ貞三様へ相渡し候也	
1007	8月23日	☆〔カク七〕印	庄内米	15俵	—		
1008	8月23日	☆〔カク七〕印	松印あハ粉	1函	—		
1009	8月23日	☆〔カク七〕印	草鞋	100足入2箇	—		
1010	8月23日	☆〔カク七〕印	焼酎	5箇	—		
1011	8月23日	☆〔カク七〕印	☆〔ヤマテ〕印醤油	3樽	—		
1012	8月23日	☆〔カク七〕印	檜皮	5把	—	是ハ弘済丸ニ差送り候也	
1013	8月23日	鵜坂	[空白]米	4升	0.52		
1014	8月23日	レウエン	棒豆	1函	0.7		
1015	8月23日	ゴボキンタ	津軽莚	1束	0.725		
1016	8月23日	ゴボキンタ	清酒	2合5勺	0.1		
1017	8月23日	アラシロ	清酒	2合5勺	0.1		
1018	8月23日	石太郎	同酒	2合5勺	0.1		
1019	8月23日	ゴボキンタ	焼酎	1本	0.29		
1020	8月23日	専之助・政吉	切素麺	2わ宛	0.08		
1021	8月23日	亀治郎	魚油	3杯	0.075		
1022	8月23日	工藤勇吉	金龍	1ツ	0.075		
1023	8月23日	沢田福松	髪附	1本	—		
1024	8月23日	沢田福松	半紙	1丁	0.04		
1025	8月23日	佐々木善三	金水印酒	1樽	2.8		
1026	8月23日	ボヤ	清酒	5合	0.2		
1027	8月23日	アラスロ	清酒	2合5勺	0.1		
1028	8月23日	石太郎・藤太郎	同酒	1杯半宛	0.3		
1029	8月23日	(土人賄)	秋田米	9升2合5勺	—	是ハ土人賄遣し候也	
1030	8月23日	入用	さらし白	8尺	—	是ハ主人ニ直渡し之事也	
1031	8月24日	漁方入用	庄内米	1俵	—		
1032	8月24日	漁方入用	足掛苧	1玉	—	是ハ元吉ニ相渡し候也	
1033	8月24日	大野寅吉	庄内米	5俵	25.65		
1034	8月24日	大野寅吉	金水印酒	3樽	—		
1035	8月24日	大野寅吉	筵■塩	1俵	—		
1036	8月24日	大野寅吉	檜皮	1わ	—		
1037	8月24日	菊地兼吉	薄縁り	2枚	0.78		
1038	8月24日	徳治	庄内米	2俵	10.26		
1039	8月24日	徳治	清酒	3升5合	1.4		
1040	8月24日	小野寅吉	五升入手取釜	3ツ	—		弘済丸下り
1041	8月24日	幸太郎	焼酎	1本	0.29		
1042	8月24日	阿部市助	草鞋	20足	0.7		
1043	8月24日	阿部市助	龍印莨	4玉	0.3		
1044	8月24日	工藤勇吉	早附木	1ツ	0.02		
1045	8月24日	佐々木栄助	手拭	5本	0.34		
1046	8月24日	ヲホナイ浜行	四五匁掛蝋	10丁	—		
1047	8月24日	ヲホナイ浜行	大刃鉋	1枚	—	是ハ兼松ニ相渡ス候也	
1048	8月24日	沢田福松	金	10円	—	是ハ弘済丸船長ニ相渡し候也	
1049	8月24日	佐々木佐之八	庄内米	3俵	—		
1050	8月24日	佐々木佐之八	龍印莨	10玉	—		
1051	8月24日	佐々木佐之八	判綿	半〆	—		
1052	8月24日	済藤菊太郎	庄内米	1俵	—		
1053	8月24日	☆〔カク七〕印	下駄	100足	—		
1054	8月24日	中野寅吉	酢	2合5勺	0.065		
1055	8月24日	■上由造	焼酎	1本	0.29		
1056	8月24日	■上由造	清酒	半杯	0.05		
1057	8月24日	入用	花菓子	1函	—	是ハ主人ニ直渡し之事	
1058	8月24日	入用	繻子袖口	1掛	—	御内室さまへ相渡し候也	
1059	8月24日	専之助	白砂糖	半斤	0.125		
1060	8月24日	専之助	しら玉	1本	—		
1061	8月24日	ヱカヌク	清酒	1杯	0.1		
1062	8月24日	原亀造	清酒	2合5勺	0.1		
1063	8月24日	アラシロ	落雁	1ツ	0.08		
1064	8月24日	石太郎	清酒	2合5勺	0.1		
1065	8月24日	工藤勇吉	焼酎	1本	0.29		
1066	8月25日	留太郎	棒豆	1函	0.7		
1067	8月25日	藤太郎	金龍	2玉	0.15		
1068	8月25日	鵜坂	酢	5合	0.125		
1069	8月25日	鵜坂	白砂糖	半斤	0.125		
1070	8月25日	ヱカヌク	秋田米	5升	0.65		
1071	8月25日	入用	ぱん	半斤	—	是ハ御内室さまへ相渡し候也	
1072	8月25日	入用	落雁	1ツ	—	是ハ貞造様ニ相渡し候也。24日夕分	
1073	8月25日	桜場与之助	清酒	2合5勺	0.1		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1074	8月25日	納家ニテ　橋本勘七	切素麺	50把	1		
1075	8月25日	小三郎	小松乃花	1箱	0.18		
1076	8月25日	内ノ大坂金助	小松の花	1箱	0.18		
1077	8月25日	漁方ノ入用	秋田白米	1俵	—		
1078	8月25日	桜場与之吉	金龍莨	1玉	0.075		
1079	8月25日	店入用	手習墨	1丁	—		
1080	8月25日	漁方入用	小縁り	6本	—		
1081	8月25日	☆〔カク七〕御印	和附木	1000把	—		弘済丸下り
1082	8月25日	☆〔カク七〕御印	先香	1箱	—		
1083	8月25日	☆〔カク七〕御印	実子箒	50本	—		
1084	8月25日	☆〔カク七〕御印	笊取合	30枚	—		
1085	8月25日	☆〔カク七〕御印	柄杓	70本	—		
1086	8月25日	☆〔カク七〕御印	手拭	5枚	—		12年残り
1087	8月25日	☆〔カク七〕行	晒木綿	10反	—		様似丸下り
1088	8月25日	☆〔カク七〕行	白伝甫	500目	—		様似丸下り
1089	8月25日	☆〔カク七〕行	中皿	40枚	—		弘済丸下り
1090	8月25日	☆〔カク七〕行	■茶わん	50	—		同
1091	8月25日	☆〔カク七〕行	西洋釘	2貫500匁	—		同丸
1092	8月25日	☆〔カク七〕行	附子粉	300袋	—		
1093	8月25日	☆〔カク七〕行	棒木豆	3箱	—		同下り
1094	8月25日	☆〔カク七〕行	ミそ漉笊	20枚	—		同下り
1095	8月25日	☆〔カク七〕行	草鞋	40足	—		弘済丸下り
1096	8月25日	☆〔カク七〕行	中砥石	20丁	—		弘済丸下り
1097	8月25日	☆〔カク七〕行	荒砥石	20丁	—	此内16丁中砥石分箱館ゟ入間違ニ付☆〔カク七〕ゟ戻りニ相成候也	弘済丸下り
1098	8月25日	☆〔カク七〕行	小板附	10把	—		雄阿寒丸下り
1099	8月25日	☆〔カク七〕行	大板附	10把	—	右者此品☆〔カク七〕御主人え直ニ相渡し候也	雄阿寒丸下り
1100	8月25日	アラシロ	薄荷円	1ツ	0.063		
1101	8月25日	アラシロ	実母散	1服	—		
1102	8月25日	アラシロ	庄内米	1俵	5.13		
1103	8月25日	アラシロ	清酒	1升	0.4		
1104	8月25日	沙留土人賄	秋田米	3升	—	是は6人分相渡し候也	
1105	8月25日	沙留土人賄	同米	2升7合5勺	—	是は勇払土人賄3人分相渡ス	
1106	8月25日	沙留土人賄	同米	2升	—	是は静内土人分3人前相渡し候也	
1107	8月25日	幌泉　大野屋店	庄内白米	2俵	—		様似丸下り
1108	8月25日	ホヤシヤモン	ミそ	1貫目	0.25		
1109	8月25日	ホヤシヤモン	竹原塩	2升	0.16		
1110	8月25日	コンホキンタ	清酒	2合5勺	0.1		
1111	8月25日	イタカ子	清酒	1升	0.4		
1112	8月25日	イタカ子	金龍	1ツ	0.075		
1113	8月25日	土人賄	秋田米	9升2合5勺	—	是ハ14人分相渡し候也	
1114	8月25日	松蔵・嘉七	棒木豆	半箱ツヽ	0.7		
1115	8月25日	小三郎	清酒	1合2勺5才	0.05		
1116	8月25日	小三郎	早附木	1箱	0.02		
1117	8月25日	桜場与之吉	清酒	1升	0.4		
1118	8月25日	中村寅吉	清酒	1升	0.4		
1119	8月25日	玉川藤太郎	清酒	1升	0.4		
1120	8月25日	小三郎	清酒	5合	0.2		
1121	8月26日	亀治郎	秋田米	5升	0.65		
1122	8月26日	漁方入用	榀皮	8貫800匁	—	是は納家え相渡し候也	様似丸下り
1123	8月26日	内入用	手拭	1本	—	是は来月分小使■候ニ付利三郎え遣候也	
1124	8月26日	万之助	庄内米	1俵	5.13		様似丸下り
1125	8月26日	万之助	髪附	2本	—		
1126	8月26日	内　元吉	焼酎	1本	0.29		
1127	8月26日	専之助	清酒	2合5勺	0.2		
1128	8月26日	幸三郎	同酒	5合	—		
1129	8月26日	金助	鰹ふし	20匁	0.1		
1130	8月26日	入用	落雁	1ツ	—	是ハ貞造様ニ遣し候也	
1131	8月26日	漁方ノ入用	庄内白米	1俵	—		
1132	8月26日	ホタコラン	清酒	5合	0.2		
1133	8月26日	入用	同	5合	—	是ハ肴代ニ相払候也	
1134	8月26日	鵜坂	清酒	7合5勺	0.3		
1135	8月26日	鵜坂	秋田米	8升2合5勺	—	是ハ土人賄ニ相渡し候也	
1136	8月26日	三国長治郎	庄内米	1俵	—		
1137	8月26日	三国長治郎	三朱蝋	1袋	—		
1138	8月26日	三国長治郎	鳴海染	1反	0.78		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1139	8月26日	幸三郎	醤油	5合	—		
1140	8月26日	ヱカヌク	五合入徳り	1本	0.09		
1141	8月26日	ホタコラン	清酒	1杯	0.1		
1142	8月26日	イタカ子	同酒	1杯	0.1		
1143	8月26日	入用	落雁	1ツ	—	是ハ御内室さまニ相渡し候也	
1144	8月26日	入用	七八匁掛	20丁	—		
1145	8月26日	入用	四五匁掛	30丁	—	是ハ勝福丸破船ニ付相用候也	
1146	8月26日	入用	清酒	1升	—	是ハ内神住吉御神酒相用候也	
1147	8月27日	伊藤久吉え貸分の昆布浜え	庄内米	6升	—		
1148	8月27日	伊藤久吉え貸分の昆布浜え	ミそ	1貫500匁	—		
1149	8月27日	伊藤久吉え貸分の昆布浜え	草鞋	20足	—		
1150	8月27日	橋本覚太郎	小豆	1升	0.08		
1151	8月27日	浦河郡ニテ　北村清一郎	庄内米	2俵	10.26		3斗8升6合5勺
1152	8月27日	トンカ	大板附	3把	0.24		
1153	8月27日	トンカ	更砂	2尺5寸	0.2		
1154	8月27日	トンカ	小豆	2升	0.16		
1155	8月27日	ヒコ	ミそ	1貫目	0.25		
1156	8月27日	トンカ	清酒	7合5勺	0.3		
1157	8月27日	イタフヌ	清酒	7合5勺	0.3		
1158	8月27日	ヒコ	ぱんかし	1袋	0.12		
1159	8月27日	マカラム	玉サト	半斤	0.1		
1160	8月27日	漁方入用	庄内白米	1俵	—	是は納家え相渡し候也	
1161	8月27日	古川松五郎	晒木綿	7尺	0.14	是はチヤムクテえ相渡し候也	
1162	8月27日	伊藤久吉え貸附昆布浜行	小板附	1把	0.07		
1163	8月27日	伊藤久吉え貸附昆布浜行	和附木	2把	0.04		
1164	8月27日	鵜苫村　小治郎	判綿	5枚	0.175		
1165	8月27日	原田安太郎	ミそ	1樽	—		
1166	8月27日	原田安太郎	草鞋	10足	—		
1167	8月27日	原田安太郎	早附木	2箱	0.04		
1168	8月27日	藤井弟三	花菓子	1函	0.35		
1169	8月27日	内入用	ぱんかし	半斤	—	是は貞吉様え相渡し候也	
1170	8月27日	鵜苫村　庄之助	落かん	2ツ	0.16		
1171	8月27日	森安太郎	金水印酒	2樽	—		
1172	8月27日	アラシロ	ぱん	半斤	0.12		
1173	8月27日	藤井弟三	焼酎	2本	0.58		
1174	8月27日	勇払土人	秋田米	7升5合	—	是ハ土人13人分相渡し候也	
1175	8月27日	弟造	清酒	2合5勺	0.1		
1176	8月27日	アラシロ	龍王	1ツ	0.075		
1177	8月27日	沙留土人賄	秋田米	3升	—	是は6人分相渡し候也	
1178	8月27日	イタヌク	白砂糖	12匁	0.02		
1179	8月27日	イタカ子	清酒	1升	0.4		
1180	8月27日	イタカ子	鳴海染	1反	0.82		
1181	8月27日	丸山栄吉	清酒	3杯	0.3		
1182	8月27日	原田安太郎	清酒	3杯	0.3		
1183	8月27日	石太郎	同酒	1杯	0.1		
1184	8月27日	ゴボキンタ	焼酎	1本	0.29		
1185	8月27日	ゴボキンタ	白砂糖	1斤	0.25		
1186	8月27日	留岡喜内	髪附	1本	0.035		
1187	8月27日	幸吉	花菓子	1ツ	0.35		
1188	8月27日	石太郎	清酒	5合	0.2		
1189	8月27日	入用	清酒	5合	—	是ハ馬追ニ遣し候也	
1190	8月27日	トタヌ	清酒	5合	0.2		
1191	8月27日	澤田福松	落雁	2ツ	0.16		
1192	8月27日	ヱカヌク	清酒	3杯	0.3		
1193	8月28日	藤太郎	手拭	1本	0.07		
1194	8月28日	鵜坂	塵紙	5丁	0.12		
1195	8月28日	イタカ子	焼酎	1本	0.29		
1196	8月28日	入用	清酒	9升	—	是ハ鵜苫村之手伝人手当ニ遣し候也	
1197	8月28日	入用	落雁	2ツ	—	是も同断之事	
1198	8月28日	覚太郎	判綿	30枚	1.05		
1199	8月28日	覚太郎	紺切糸	1ツ	0.016		
1200	8月28日	藤田長松	庄内米	1俵	5.13		
1201	8月28日	忠左衛門	庄内米	1俵	5.13		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1202	8月28日	忠左衛門	河内白	1反	0.8		
1203	8月28日	忠左衛門	白伝甫	20わ	0.5		
1204	8月28日	藤田長松	落雁	2ツ	0.16		
1205	8月28日	木村久之助	白砂糖	1斤	0.25		
1206	8月28日	木村久之助	しら玉	3本	0.21		
1207	8月28日	木村久之助	焼酎	1本	0.29		
1208	8月28日	松五郎	落雁	1ツ	0.08		
1209	8月28日	松五郎	白砂糖	1斤	0.25		
1210	8月28日	三国長治郎	清酒	2合5勺	0.1	勘	
1211	8月28日	三国長治郎	魚油	2升	0.2		
1212	8月28日	三国長治郎	清酒	2合5勺	0.1	勘	
1213	8月28日	三国長治郎	同酒	1杯	0.1	是ハ勘治郎行	
1214	8月28日	北村清一郎	金水印酒	2樽	5.6		
1215	8月28日	藤田長松	清酒	5合	0.2		
1216	8月28日	木村久之助	清酒	5合	0.2		
1217	8月28日	三国長治郎	落雁	1ツ	0.08	勘治郎殿相渡し	
1218	8月28日	鵜苫番家	水印酒	1樽	2.8		
1219	8月28日	鵜苫番家	庄内米	2俵	10.26		
1220	8月28日	鵜苫番家	落雁	1ツ	0.08		
1221	8月28日	三国長治郎	玉砂糖	半斤	0.1	是ハ勘治郎ニ相渡し候也	
1222	8月28日	和田庄之助	庄内米	1俵	5.13		
1223	8月28日	和田庄之助	清酒	5合	0.2		
1224	8月28日	鵜苫番家	同酒	5合	0.2		
1225	8月28日	幸治郎	清酒	5合	0.2		
1226	8月28日	幸治郎	庄内米	2俵	10.26		
1227	8月28日	庄之助	白砂糖	1斤	0.25		
1228	8月28日	ヱカヌク	ミそ	1貫目	0.25		
1229	8月28日	森安太郎	金水印	3樽	—		
1230	8月28日	扇谷初太郎	庄内米	3俵	15.36		
1231	8月28日	扇谷初太郎	金水印酒	1樽	2.8		
1232	8月28日	中野寅吉	金龍	1ツ	0.07		
1233	8月28日	森安太郎	草り	3足	—		
1234	8月28日	入用	清酒	7升5合	—	是ハ漁方内畑馬家ニ遣し候也	
1235	8月28日	入用	三朱蝋	1ツ	—		
1236	8月28日	土人賄	秋田米	8升	—	是ハ土人13人前相渡し候也	
1237	8月29日	漁方入用	金引	250目	—	是は納家え相渡し候也	
1238	8月29日	漁方入用	檜皮	1わ	—		
1239	8月29日	新吉　使ばゞ	金龍莨	3玉	—		
1240	8月29日	小太郎	清酒	5合	—		
1241	8月29日	六平浜　阿部市助	同	5合	0.2		
1242	8月29日	佐藤重二郎	味噌	1貫目	0.25		
1243	8月29日	佐藤重二郎	草り	5足	0.175		
1244	8月29日	漁方	庄内白米	1俵	—		
1245	8月29日	加藤岩吉　使通	味噌	1貫目	0.25		
1246	8月29日	加藤岩吉　使通	わらじ	10足	0.35		
1247	8月29日	加藤岩吉　使通	清酒	5合1杯	0.3		
1248	8月29日	入用	☆〔イゲタ〕印醤油	1樽	—		僖丸印
1249	8月29日	入用	切素麺	1把	—		
1250	8月29日	入用	落かん	1ツ	—		
1251	8月29日	加藤岩吉	龍王莨	3玉	—		
1252	8月29日	トタヌ	落かん	1袋	—		
1253	8月29日	アラスロ	清酒	1杯	—		
1254	8月29日	加藤岩吉	半紙	1状	—		
1255	8月29日	加藤岩吉	ちり紙	1状	—		
1256	8月29日	加藤岩吉	早付木	2箱	—		
1257	8月29日	イカヌク	清酒	1杯	0.1		
1258	8月30日	窪田嘉吉	紺木綿	2尺	—		
1259	8月30日	入用	花染	8尺	—	是は若勢え代りニ遣ス	
1260	8月30日	春日盛之介	和付木	1拼8わ也	0.02		
1261	8月30日	春日盛之介	塩	1ばん	—		
1262	8月30日	土人介抱米　漁方入用	玄米	8升2合5勺	—		29日分
1263	8月30日	中村留吉	花菓子	1ツ	0.35		30日
1264	8月30日	亀二郎	米	5升	—		30日
1265	8月30日	亀二郎	龍王莨	2玉	—		
1266	8月30日	亀二郎	熊の丸	2服	—		
1267	8月30日	栄介	庄内米	1俵	—		30日
1268	8月30日	栄介	宝来豆	1箱	0.7		
1269	8月30日	栄介	白砂糖	1斤	—		
1270	8月30日	宇三郎	越後酒	1樽	—		
1271	8月30日	宇三郎	玉砂糖	3斤	—	是ハ現金入相成	

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1272	8月30日	コホ	庄内米	1俵	—		
1273	8月30日	イタカ子	白米	1俵	—		
1274	8月30日	イタカ子	落かん	1袋	—		
1275	8月30日	イタカ子	清酒	2杯	0.2		
1276	8月30日	イタカ子	焼酎	1本	—		
1277	8月30日	加藤岩吉	清酒	5合	—		
1278	8月30日	コホ　使通	同	5合	—		
1279	8月30日	入用	同	1杯	—	馬追之幸吉ニ遣ス	
1280	8月30日	様似戸長役場	大至急■■	1人	—	是は溺死人之届ケ為浦川行	
1281	8月30日	玉川藤太郎	太白	半斤	0.125		
1282	8月30日	トタヌ	清酒	5合	—		
1283	8月30日	沙留土人賄	秋田米	3升	—	是は6人分相渡し候也	
1284	8月30日	沙留土人賄	同米	3升5合	—	是は勇払土人賄5人分相渡し候也	
1285	8月30日	沙留土人賄	同米	1升7合5勺	—	是は新冠土人賄3人分相渡し候也	
1286	8月31日	小野寅吉	晒木綿	半反	—		
1287	8月31日	納家ニテ　元八	花染	1丈	—		
1288	8月31日	店ノ入用	半紙	3丁	—	是ハ通し帳ニ相用候也	
1289	8月31日	雇　市嶋冨太郎	手拭	1本	0.07		
1290	8月31日	雇　沢田福松	手拭	1本	0.06		
1291	8月31日	漁方入用	ミそ	3貫目	—	是は納家え相渡し候也	同28日分
1292	8月31日	漁方入用	秋田白米	1俵	—		
1293	8月31日	橋本覚太郎	魚油	7合5勺	0.075		
1294	8月31日	イタフヌ	秋田米	2俵	—		弘済丸下り
1295	8月31日	附田勇吉	秋田米	3俵	—		弘済丸下り
1296	8月31日	柳原千代松　使通	紺木綿	1反	1		
1297	8月31日	柳原千代松　使通	白木綿	7尺	0.14		
1298	8月31日	六平浜　阿部市介	秋田米	2俵	—		弘済丸下り
1299	8月31日	六平浜　阿部市介	玉砂糖	1斤	—		
1300	8月31日	六平浜　阿部市介	鱒	4本	0.32		
1301	8月31日	六平浜　阿部市介	焼酎	1本	—		
1302	8月31日	宮本金蔵	秋田米	1俵	—		弘済丸下り
1303	8月31日	宮本金蔵	味噌	4貫目	—		
1304	8月31日	宮本金蔵	龍王	1ツ	0.08		
1305	8月31日	ホヤ	秋田米	1俵	—		
1306	8月31日	ホヤ	宝来豆	1箱	—		
1307	8月31日	ホヤ	清酒	1杯	—		
1308	8月31日	金蔵浜　沢口弥介	焼酎	3本	0.87		
1309	8月31日	金蔵浜　沢口弥介	宝来豆	1箱	0.75		
1310	8月31日	ハテキヌ	わらじ	10足	0.35		
1311	8月31日	ハテキヌ	上酒	1升	0.4		
1312	8月31日	ヤヽシハ	玉砂糖	1斤	—		
1313	8月31日	エンカラマ	上酒	1升2杯	—		31日
1314	8月31日	エンカラマ	鳴海染	1反	0.8		
1315	8月31日	エンカラマ	唐かんな	1ツ	—		
1316	8月31日	エンカラマ	秋田米	1俵	—		弘済丸
1317	8月31日	附田勇吉	花菓子	1箱	0.35		
1318	8月31日	ヤヽシハ	花菓子	1箱	0.35		
1319	8月31日	入用	切素麺	10把	—		
1320	8月31日	冬しま番家	越後〈三寸五分・五十目〉小下網	125間也	—		
1321	8月31日	冬しま番家	同〈二寸七分・五十目〉建上網	62間2尺	—		
1322	8月31日	冬しま番家	同足掛苧	2玉	—	め方4貫目	
1323	8月31日	冬しま番家	同四ツ合足掛	1貫300目	—		
1324	8月31日	冬しま番家	金引	300目	—		
1325	8月31日	冬しま番家	わらじ	20足	—		
1326	8月31日	冬しま番家	榀皮	10貫目	—		
1327	8月31日	冬しま番家	あは縄	10丸	—		
1328	8月31日	冬しま番家	檜皮	2わ	—		
1329	8月31日	冬しま番家	清酒	1杯	—	若勢ニ為呑	
1330	8月31日	冬しま番家	中間縄	1丸	—		
1331	8月31日	冬しま番家	紺先織	3枚	—	但し疋もの	
1332	8月31日	冬しま番家	同木綿	1反	—		
1333	8月31日	冬しま番家	正喜撰	1斤	—		
1334	8月31日	冬しま番家	鏹	1本	0.125		
1335	8月31日	冬しま番家	焼酎	2本	0.58		
1336	8月31日	レウエン	清酒	1杯	0.1		
1337	8月31日	冬しま船頭　金太郎	清酒	1升	0.4		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1338	8月31日	阿部市助	棒豆	1ツ	0.35		
1339	8月31日	エンカラマ	飯茶わん	1ツ	0.08		
1340	8月31日	畑ケ入用	庄内白米	1俵	—	是は畑ケ相渡し候也	
1341	8月31日	漁方入用	新鎌	10枚	—	是は納家え相渡し候也	
1342	8月31日	内入用	切素麺	28把	—	是は御家内え相渡し候也	
1343	8月31日	畑ケ由造	清酒	5合	0.2		
1344	8月31日	新冠土人賄	秋田米	1升7合5勺	—	是は3人分相渡し候也	
1345	8月31日	若松小太郎	紺木綿	1反	1.08		
1346	8月31日	井口兼吉	魚油	1升	—		
1347	8月31日	ヤカンテ	清酒	1杯	—		
1348	8月31日	イカヌク	同	1杯	—		
1349	8月31日	ヤカンテ	秋田米	1俵	—		弘済丸
1350	8月31日	納やの　松五郎	髪付	1本	—		
1351	8月31日	同　元吉	髪付	1本	—		
1352	8月31日	入用	吉の葛	1斤半	—		
1353	8月31日	戸長役場	至急人足	1人	—	浦川病院行	
1354	8月31日	佐藤嘉兵衛	秋田米	8俵	—		弘済丸下
1355	8月31日	小三郎	清酒	3杯	—		
1356	8月31日	入用	同	9合・4合	—	是は書院外木村房子へ遣し	
1357	8月31日	工藤勇吉	玉サト	50目	0.05		
1358	8月31日	石太郎	清酒	5合	—		

【2】明治13年(1880)9月～明治14年(1881)2月分（アイヌ関係全項目及び和人関係の一部の項目を抽出）

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1359	9月1日	土人介抱米	秋田米	3升5合	—	是ハ5人分相渡し候也	
1360	9月1日	アラシロ	清酒	2合5勺	0.1		
1361	9月2日	入用	落雁	1ツ	—	是ハホタコランニホキ代遣し	
1362	9月2日	エカヌク	清酒	1杯	0.1		
1363	9月2日	エカヌク	手拭	1本	0.05		
1364	9月2日	アラシロ	玉砂糖	1斤	0.2		
1365	9月2日	アラシロ	清酒	1杯	0.1		
1366	9月2日	ハテキヌ	落雁	1ツ	0.08		
1367	9月2日	土人賄	秋田米	8升2合5勺	—	是ハ14人分相渡し候也	
1368	9月2日	バデキヌ	清酒	1升	0.4		
1369	9月2日	ゴボ	清酒	1杯	0.1		
1370	9月2日	ゴボ	柿	1林	0.1		
1371	9月2日	イタカ子	清酒	1杯	0.1		
1372	9月2日	ケリ々	同酒〔清酒〕	3杯	0.3		
1373	9月2日	イタカ子	同酒〔清酒〕	1杯	0.1		
1374	9月3日	トタヌ	金龍	1ツ	0.075		
1375	9月3日	ケリ々	手拭	1本	0.05		
1376	9月3日	土人介抱米	庄内米	8升2合5勺	—	是ハ14人分相渡し候也	〔朱書〕「是ゟ払好〆」
1377	9月3日	レウエン	清酒	5合	0.2		
1378	9月3日	トタヌ	同酒〔清酒〕	1杯半	0.15		
1379	9月4日	イタフヌ	あハ粉	10玉	0.75		
1380	9月4日	トンカ	同〔あハ〕莨	5ツ	0.375		
1381	9月4日	トンカ	清酒	1升	0.4		
1382	9月4日	イタフヌ	清酒	1升	0.4		
1383	9月4日	トタヌ	早附木	1ツ	0.02		
1384	9月4日	トンカ	清酒	5合	0.2		
1385	9月4日	ボヤシヤモン	清酒	2升	0.8		
1386	9月4日	ボヤシヤモン	早附木	4ツ	0.08		
1387	9月4日	ボヤ	清酒	5合	0.2		
1388	9月4日	ボヤ	同酒〔清酒〕	1杯	0.1		
1389	9月4日	ヒコ	同〔秋田〕米	1俵	—		
1390	9月4日	アラシロ	切素麺	5わ	0.1		
1391	9月4日	アラシロ	清酒	1杯	0.1		
1392	9月4日	イタカ子	清酒	5合	0.2		
1393	9月4日	トタヌ	同酒	5合	0.2		
1394	9月4日	(土人賄)	庄内米	8升2合5勺	—	是ハ土人14人分賄ニ相渡し候也	
1395	9月5日	ボヤ	清酒	3杯	0.3		
1396	9月5日	ケリ々	秋田米	1俵	3.88		
1397	9月5日	ケリ々	清酒	1杯	0.1		
1398	9月5日	トタヌ	清酒	2合5勺	0.1		
1399	9月5日	トタヌ	あハ粉	1玉	0.075		
1400	9月5日	トタヌ	早附木	1ツ	0.02		
1401	9月5日	トタヌ	手拭	1本	0.07		
1402	9月5日	イカヌク	同酒〔清酒〕	2合5勺	0.1		
1403	9月5日	(土人賄)	庄内米	8升2合5勺	—	是ハ土人14人分相渡し候也	

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1404	9月5日	ホタコラン	秋田米	1俵	3.88		
1405	9月6日	ホタコラン	清酒	1升	0.4		
1406	9月6日	ホタコラン	落雁	1ツ	0.08		
1407	9月6日	土人賄	庄内米	8升2合5勺	—	是ハ14人分相渡し候也	
1408	9月6日	アラシロ	秋田米	1俵	3.88		
1409	9月6日	アラスロ・ゴボ	清酒	1杯宛	0.2		
1410	9月6日	同人〔アラスロ・ゴボ〕	竹原塩	3升	0.24		
1411	9月6日	アラシロ	清酒	1杯	0.1		
1412	9月6日	トタヌ	清酒	1杯	0.1		
1413	9月7日	アニホカエ	なら茶わん	1ツ	0.1		
1414	9月7日	アニホカエ	菊形皿	1枚	0.085		
1415	9月7日	ヒコ	花菓子	1函	0.35		
1416	9月7日	ヒコ	焼酎	2本	0.58		
1417	9月7日	エカヌク・アニホカエ	柿	半林宛	0.14		
1418	9月7日	エンカラマ	清酒	7合5勺	0.3		
1419	9月7日	トンカ	清酒	2合5勺	0.1		
1420	9月7日	サナンバ	清酒	1杯	0.1		
1421	9月7日	イタカ子	清酒	2合5勺	0.1		
1422	9月7日	イタカ子	焼酎	1本	0.29		
1423	9月7日	土人賄	庄内米	8升2合5勺	—	是ハ14人分相渡し候也	
1424	9月7日	トタヌ	清酒	2合5勺	0.1		
1425	9月8日	アラシロ	清酒	1升	0.4		
1426	9月8日	アラシロ	落雁	1ツ	0.08		
1427	9月8日	アラシロ	清酒	2合5勺	0.1		
1428	9月8日	エンカラマ	秋田米	1俵	3.88		
1429	9月8日	エンカラマ	清酒	1升1杯	0.5		
1430	9月8日	イタカ子	清酒	2合5勺	0.1		
1431	9月8日	イタフヌ	清酒	1杯	0.1		
1432	9月8日	イタフヌ	胡摩	5合	0.1		
1433	9月8日	エカヌク	清酒	1杯	0.1		
1434	9月8日	入用	同酒	5合	—	是ハエンカラマ・イタカ子遣し候也	
1435	9月8日	土人賄	秋田米	8升2合5勺	—	是ハ14人分相渡し候也	
1436	9月9日	イカヌク	清酒	2合5勺	0.1		
1437	9月9日	ウオカ	繻子半へり	2本	0.32		
1438	9月9日	土人賄	秋田米	8升2合5勺	—	是ハ14人分相渡し候也	
1439	9月9日	アニホカエ	柿	1林	0.1		
1440	9月9日	ヒコ	花菓子	2函	0.7		
1441	9月10日	土人賄米	秋田米	8升2合5勺	—	是は14人分相渡し候也	
1442	9月10日	ホタコラン	花菓子	1函	0.35		
1443	9月11日	三澤岸五郎	清酒	3升2合5勺	—	是ハ土人勘定ニ付遣し候也	
1444	9月11日	バデヌキ	焼酎	1本	0.29		
1445	9月11日	バデヌキ	柿	1林	0.1		
1446	9月11日	バデキヌ	白弁慶嶋	1反	0.85		
1447	9月11日	バデキヌ	鳴海染	1反	0.88		
1448	9月11日	バデキヌ	龍王莨	2ツ	0.15		
1449	9月11日	アラシロ	清酒	5合	0.2		
1450	9月11日	ケリ／＼	清酒	5合	0.2		
1451	9月11日	(土人賄)	庄内	4升5合	—	是ハ土人6人分相渡し候也	
1452	9月12日	エカヌク	柿	1林	0.1		
1453	9月12日	ケリ々	落雁	1ツ	0.08		
1454	9月12日	イタカ子	焼酎	1本	0.29		
1455	9月12日	エカヌク	清酒	2合5勺	0.1		
1456	9月12日	ゴボ	柿	2林	0.2		
1457	9月12日	土人賄	庄内米	4升5合	—	是ハ土人6人分	
1458	9月13日	アニボカエ	草り	1足	0.035		
1459	9月13日	バデキヌ	落雁	2ツ	0.16		
1460	9月13日	エンカラマ	清酒	5合	0.2		
1461	9月13日	イタフヌ	同酒〔清酒〕	2合5勺	0.1		
1462	9月13日	エンカラマ	花菓子	1函	0.35		
1463	9月13日	チヤケアンテ	落雁	1ツ	0.08		
1464	9月13日	ボヤ	棒豆	1函	0.7		
1465	9月13日	ボヤ	花菓子	1函	0.35		
1466	9月13日	ボヤ	秋田米	1俵	3.88		
1467	9月13日	イタカ子	清酒	1升1杯	0.5		
1468	9月13日	エカヌク	庄内米	5升	0.65		
1469	9月13日	エカヌク	棒豆	1函	0.7		
1470	9月14日	イタカ子	紺木綿	1反	1.2		
1471	9月14日	イタカ子	ミそ	1貫目	0.25		
1472	9月14日	イタカ子	清酒	2合5勺	—		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1473	9月14日	ゴボキンタ	清酒	5合	0.2		
1474	9月14日	ゴボキンタ	龍印莨	1ツ	0.075		
1475	9月14日	トンカ	清酒	1杯	0.1		
1476	9月14日	イタカ子	清酒	5合	0.2		
1477	9月14日	イタカ子	同酒〔清酒〕	5合	0.2		
1478	9月14日	土人賄	庄内米	4升5合	—	是ハ土人6人分相渡し候也	
1479	9月14日	ヱカヌク	柿	1林	0.1		
1480	9月14日	ホタコラン	ミそ	1貫目	0.25		
1481	9月14日	ヒコ	花菓子	1函	0.35		
1482	9月14日	アラスロ	清酒	1升	0.4		
1483	9月14日	アラスロ	落雁	1ツ	0.08		
1484	9月15日	ホタコラン	あハ粉	1ツ	0.075		
1485	9月15日	ホタコラン	薄縁り	1枚	0.39		
1486	9月15日	ホタコラン	柿	1林	0.1		
1487	9月15日	コホキンタ	庄内米	1斗	1.4		
1488	9月15日	ヒコ	秋田米	2俵	7.76		
1489	9月15日	ヒコ	清酒	1杯	—		
1490	9月15日	ヒコ	紺切糸	半把	0.18		
1491	9月15日	(土人賄)	庄内米	4升5合	—	是ハ土人6人分相渡し候也	
1492	9月15日	トタヌ	清酒	5合	0.2		
1493	9月15日	アニホカヱ	同酒	2合5勺	0.1		
1494	9月15日	イタカ子	清酒	7合5勺	0.3		
1495	9月16日	イカヌク	秋田米	5升	0.7		
1496	9月16日	トタヌ	手拭	1本	0.05		
1497	9月16日	内入用	清酒	2合5勺	—	是はイタカ子え遣し候也	
1498	9月16日	アラシロ	清酒	5合	0.2		
1499	9月16日	アラシロ	龍印莨	1ツ	0.075		
1500	9月16日	土人賄	庄内米	4升5合	—	是ハ6人分相渡し	
1501	9月17日	ホタコラン	清酒	5合	0.2		
1502	9月17日	アニホカヱ	清酒	1杯	0.1		
1503	9月18日	ヱカヌク・マカラム	花菓	半函宛	0.35		
1504	9月18日	ホタコラン	金	1円50銭	—	是ハ正金貸し直渡し	
1505	9月18日	土人賄	庄内米	9升	—	是ハ6人分17日・18日両日分相渡し候也	
1506	9月18日	ヱカヌク	草り	1足	0.035		
1507	9月18日	ボヤ	金	3円	—	是ハ正金貸し	
1508	9月18日	ボヤ	あハ粉	1玉	0.075		
1509	9月18日	ボヤ	清酒	1杯	0.1		
1510	9月18日	ボヤ	草鞋	5足	0.175		
1511	9月18日	アラシロ	清酒	2合5勺	0.1		
1512	9月18日	ホタコラン	同酒〔清酒〕	2合5勺	0.1		
1513	9月18日	トタヌ	同酒〔清酒〕	5合	0.2		
1514	9月18日	アラシロ	同酒〔清酒〕	1杯	0.1		
1515	9月18日	アラシロ	落雁	1ツ	0.08		
1516	9月19日	イタカ子	秋田米	1俵	3.88		
1517	9月19日	イタカ子	手拭	1本	0.05		
1518	9月19日	イタカ子	清酒	5合	0.2		
1519	9月19日	イタカ子	落雁	1ツ	—		
1520	9月19日	アラシロ・井口兼吉	清酒	5合宛	0.4		
1521	9月19日	アニボカヱ	草り	1足	0.035		
1522	9月19日	アラシロ	手拭	1本	0.07		
1523	9月19日	ゴボ	清酒	2合5勺	0.1		
1524	9月19日	ゴボ	庄内米	1斗	—		
1525	9月19日	土人賄	秋田米	2升2合5勺	—	是は3人分相渡し候也	
1526	9月19日	漁方入用	しら梅印酒	1樽	—	是ハ初漁御神ニ遣し候也	
1527	9月19日	入用	清酒	2合5勺	—	是ハイタカ子キノコ代へ遣し	
1528	9月20日	アニホカヱ	紺木綿	8尺7寸	—		
1529	9月20日	アニホカヱ	手拭	1本	0.05		
1530	9月20日	ホヤシヤモン	清酒	5合	0.2		
1531	9月20日	ホヤシヤモン	同酒〔清酒〕	2合5勺	0.1		
1532	9月20日	アラシロ	清酒	2合5勺	0.1		
1533	9月20日	アニホカヱ	柿	1林	0.1		
1534	9月20日	アニホカヱ	清酒	2合5勺	0.1		
1535	9月20日	アラシロ	清酒	5合	0.2		
1536	9月20日	ケリ々	秋田米	1斗	1.4		
1537	9月20日	ケリ々	清酒	1升	0.4		
1538	9月20日	土人賄	秋田米	2升2合5勺	—	是ハ3人分相渡し候也	
1539	9月20日	イタカ子	清酒	2合5勺	0.1		
1540	9月20日	アラシロ	同酒〔清酒〕	1杯	—		
1541	9月20日	トタヌ	清酒	1杯	0.1		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1542	9月20日	アラシロ	清酒	2合5勺	0.1		
1543	9月21日	エカヌク・アニホカエ	下駄	1足宛	0.14		
1544	9月21日	エカヌク・アニホカエ	小倉緒	1足宛	0.14		
1545	9月21日	漁方ノ入用	清酒	1樽	—	是ハ祭礼ニ付若ものニ遣し候也	様似丸下り
1546	9月21日	入用	清酒	1樽	—	是住吉祭礼ニ付郷社ニ遣し候也	同断之事
1547	9月21日	トンカ	清酒	1升	0.4		
1548	9月21日	エカヌク	秋田米	5升	0.7		
1549	9月21日	イタカ子・コホキンタ	清酒	1杯宛	0.2		
1550	9月21日	アラシロ	清酒	3杯	0.3		
1551	9月21日	アニホカエ	同酒〔清酒〕	1杯	0.1		
1552	9月22日	ホタコラン	清酒	5合	0.2		
1553	9月22日	ホタコラン	同酒〔清酒〕	3杯	0.3		
1554	9月22日	ホタコラン	竹原塩	1升	0.08		
1555	9月22日	ケリ々	同酒〔清酒〕	5合	0.2		
1556	9月22日	ゴボ	同〔清酒〕	1杯	0.1		
1557	9月22日	アラシロ	松鷹莨	1ツ	0.07		
1558	9月22日	アラシロ	清酒	5合	0.2		
1559	9月22日	ゴボ	柿	1林	0.1		
1560	9月22日	アラスロ	清酒	1杯	0.1		
1561	9月22日	トタヌ	松鷹	1ツ	0.07		
1562	9月22日	土人賄	秋田米	4升5合	—	是ハ6人分相渡し候也	
1563	9月23日	クエラ	【入】金	7円27銭8厘	—	是は橋本覚太郎ゟ鵜苫浜代受取候也	
1564	9月23日	土人賄	秋田米	9升	—	是ハ両日分相渡し候也	
1565	9月24日	イタカ子	白梅印酒	半樽	1.5		
1566	9月24日	アラスロ	清酒	2合5勺	0.1		
1567	9月24日	アニホカイ	落雁	1ツ	0.08		
1568	9月24日	アラシロウ	清酒	7合5勺	0.3		
1569	9月24日	アラシロ	清酒	1杯	0.1		
1570	9月24日	アニホカエ・エカヌク	清酒	半杯宛	0.1		
1571	9月25日	ケリ々	秋田米	1斗	1.4		
1572	9月25日	ケリ々	清酒	1杯	0.1		
1573	9月25日	ケリ々	落雁	1ツ	0.08		
1574	9月25日	ケリ々	手拭	2本	0.1		
1575	9月25日	ヤカンテ	秋田米	5升	0.7		
1576	9月25日	アラシロ	清酒	5合	0.2		
1577	9月25日	エカヌク	清酒	1杯	—		
1578	9月25日	エタフヌ	清酒	7合5勺	0.3		
1579	9月25日	エタフヌ	白伝甫	4ツ	0.1		
1580	9月25日	アラスロ	秋田米	5升	0.7		
1581	9月25日	土人賄	秋田米	9升	—	是ハ土人6人前相渡し	
1582	9月25日	イタカ子	清酒	1升5合	0.6		
1583	9月26日	アニホカエ	柿	1林	0.1		
1584	9月26日	アニホカエ	清酒	1杯	0.1		
1585	9月26日	アラシロ	同酒〔清酒〕	5合	0.2		
1586	9月26日	土人賄	秋田米	4升5合	—	是ハ6人分相渡し候也	
1587	9月27日	ホタコラン	秋田米	5升	0.7		
1588	9月27日	エカヌク	白砂糖	28匁	0.05		
1589	9月27日	イタフヌ・ラムカンナ	清酒	1杯宛	0.2		
1590	9月27日	エンカラマ	同酒〔清酒〕	1升	0.4		
1591	9月27日	エタフヌ	同酒〔清酒〕	1升	0.4	是イタカマ渡し	
1592	9月27日	アラシロ	鳴海染	2反	1.6		
1593	9月27日	アラシロ	伊千草	1反	0.8		
1594	9月27日	アラシロ	晒白	半反	0.3		
1595	9月27日	アラシロ	清酒	1杯	0.1		
1596	9月27日	ケリ々	清酒	1杯	0.1		
1597	9月27日	アラシロ	秋田米	5升	0.7		
1598	9月27日	アラシロ	玉砂糖	半斤	0.1		
1599	9月27日	入用	清酒	3升	—	是ハ砂留土人引払ニ付遣し候也	
1600	9月27日	土人賄	秋田米	4升5合	—		
1601	9月28日	イタカ子	松印莨	1玉	0.075		
1602	9月28日	イタカ子	清酒	1升	0.4		
1603	9月28日	イタカ子	清酒	5合	0.2		
1604	9月28日	コホキンタ	秋田米	5升	0.7		
1605	9月28日	ゴボキンタ	柿	1連	0.1		
1606	9月28日	ゴボキンタ	清酒	1升	0.4		
1607	9月28日	ゴボキンタ	醤油	5合	0.16		
1608	9月28日	ゴボキンタ	清酒	1升	0.4		
1609	9月28日	エカヌク	秋田米	5升	0.7		
1610	9月28日	ケリ々	鳴海染	1反	0.8		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1611	9月28日	ケリ々	嶋木綿	1反	0.9		
1612	9月28日	ボダコラン	柿	1連	0.1		
1613	9月28日	マカラム	紺足袋	1足	0.24		
1614	9月28日	アラシロウ	清酒	2合5勺	0.1		
1615	9月28日	アラシロ	清酒	1杯	0.1		
1616	9月28日	トタヌ	松鷹	1ツ	0.075		
1617	9月29日	入用	水毛筆	3本	—	是ハ稲荷社祭礼ニ付相用候也	
1618	9月29日	入用	半紙	5丁	—	是ハ稲荷社祭礼ニ付遣し候也	
1619	9月29日	ポヤ	落雁	2ツ	0.16		
1620	9月29日	ポヤ	唐紐	1ツ	0.16		
1621	9月29日	ポヤ	更砂	5尺	0.4		
1622	9月29日	ケリ／＼	秋田米	5升	0.7		
1623	9月29日	ケリ／＼	竹原塩	2升	0.16		
1624	9月29日	内入用	持白米	5升	—	是は稲荷様御祭礼ニ付	
1625	9月30日	入用	白木綿	2尺	—	是は稲荷様御祭礼ニ付	
1626	9月30日	入用	針金	130匁	—	是は稲荷様御祭礼ニ付	
1627	9月30日	内入用	大板附	1把	—	右は稲荷様御祭礼ニ付	
1628	9月30日	入用	晒木綿	1丈1尺	—	是は稲荷様御祭礼ニ付	
1629	9月30日	入用	醤油	1升	—	是は稲荷祭礼ニ付納家え遣し候也	
1630	9月30日	アラシロウ	秋田米	5升	0.7		
1631	9月30日	内入用	持白米	2斗5升	—	是は稲荷様御祭礼ニ付	
1632	9月30日	アラシロ	清酒	1杯	0.1		
1633	9月30日	アラシロ	清酒	1杯	0.1		
1634	9月30日	ゴンホキンタ	清酒	7合5勺	0.3		
1635	9月30日	源治郎・トタヌ	清酒	1杯宛	—		
1636	10月1日	ホタコラン	秋田米	5升	0.7		
1637	10月1日	ホタコラン	紺木綿	1反	1.125		
1638	10月1日	ホタコラン	白伝甫	4ツ	0.1	是ハ現金入相成候也	
1639	10月1日	トタヌ	松鷹	1ツ	0.075		
1640	10月1日	バデギヌ	秋田米	1斗	1.4		
1641	10月1日	入用	清酒	1樽	—	是ハ土人共ニ稲荷祭礼ニ遣し候也	
1642	10月1日	バデギヌ	落雁	2ツ	0.16		
1643	10月1日	長右衛門・トタヌ	清酒	1杯宛	0.2		
1644	10月1日	アニボカエ	柿	1林	0.1		
1645	10月2日	エンカラマ	清酒	5合	0.2		
1646	10月2日	ボヤ	同酒〔清酒〕	2合5勺	0.1		
1647	10月2日	エンカラマ	同〔松鷹〕莨	10玉	0.75		
1648	10月2日	イタカ子	同酒〔清酒〕	3杯	0.3		
1649	10月2日	イタフヌ	唐紐	1把	0.16		
1650	10月2日	ゴボキンタ	秋田米	1斗	1.4		
1651	10月2日	エカヌク	落雁	1ツ	0.08		
1652	10月2日	イタフヌ	焼酎	2本	0.58		
1653	10月2日	アラシロ・イタカ子	同〔焼酎〕	1本宛	—		
1654	10月2日	トタヌ	手拭	1本	0.05		
1655	10月2日	ホタコラン	焼酎	1本	0.29		
1656	10月2日	ゴボ・ヒコ	同〔焼酎〕	半本宛	0.29		
1657	10月2日	トタヌ	松鷹	1ツ	0.075		
1658	10月2日	アラシロ	秋田米	5升	0.7		
1659	10月2日	ヒコ	焼酎	1本	0.29		
1660	10月2日	トタヌ	紺先織	1枚	1.2		仕立
1661	10月2日	トタヌ	紺木綿	5尺	0.185		
1662	10月2日	トタヌ	紺切糸	1ツ	0.018		
1663	10月2日	トタヌ	落雁	2ツ	0.16		
1664	10月2日	コンホキンタ	紺木綿	1反	0.95		
1665	10月2日	馬追　アニホカイ	半紙	1丁	0.04		
1666	10月2日	馬追　アニホカイ	柿	1連	0.1		
1667	10月2日	春松	焼酎	1本	0.29		
1668	10月2日	アラシロ・トタヌ	同酒〔清酒〕	1杯宛	0.2		
1669	10月3日	ケリ々	秋田米	5升	0.7		
1670	10月3日	ケリ々	伊千草	1反	0.8		
1671	10月3日	エカヌク	秋田米	5升	0.7		
1672	10月4日	アニホカエ	白砂糖	32匁	0.05		
1673	10月4日	ゴボキンタ	清酒	5合	—		
1674	10月4日	ゴボキンタ	ミそ	500匁	0.125		
1675	10月5日	ホタコラン	柿	1連	0.1		
1676	10月5日	マカラム	手習墨	1丁	0.075		
1677	10月5日	トタヌ・アラシロ	清酒	1杯宛	—		
1678	10月6日	アニボカエ	紺足袋	1足	0.24		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1679	10月6日	エカヌク	安足袋	1足	0.15		
1680	10月6日	マカラム	清酒	5合	0.2		
1681	10月6日	アラシロウ	清酒	2合5勺	0.1		
1682	10月7日	ホタコラン	足袋	1足	0.24		
1683	10月7日	チヤムクテ	足袋	1足	0.24		
1684	10月7日	イタカ子	本庄米	1俵	4.48		升3斗1升8合入
1685	10月7日	ホタコラン	花染	6尺	0.27		上印
1686	10月7日	ホタコラン	花染	1丈	0.35		中印
1687	10月7日	ホタコラン	白伝甫	10	0.25		
1688	10月7日	ホタコラン	秋田米	5升	0.7		
1689	10月7日	イタカ子	清酒	2合5勺	0.1		
1690	10月7日	ケリ／＼	清酒	2合5勺	0.1		
1691	10月7日	ケリ／＼	秋田米	5升	0.7		
1692	10月7日	ケリ／＼	清酒	2合5勺	0.1		
1693	10月7日	イタカ子	清酒	2合5勺	0.1		
1694	10月7日	イタカ子	落雁	1ツ	0.08		
1695	10月7日	イタカ子	清酒	5合	0.2		
1696	10月7日	アラシロ・トタヌ	清酒	1杯宛	—		
1697	10月8日	ホタコラン	ミそ	1貫目	0.25		
1698	10月8日	ホタコラン	あハ粉	1ツ	0.075		
1699	10月8日	エカヌク	草履	1足	0.035		
1700	10月8日	アラシロ	秋田米	5升	0.7		
1701	10月8日	アラシロ	落雁	1ツ	0.08		
1702	10月8日	マカラム	更砂	2尺5寸	0.102		
1703	10月8日	アラシロ	清酒	5合	—		
1704	10月9日	入用	白砂糖	50匁	—	是ハシエタケ代ニ土人ニ遣し候也	
1705	10月9日	チヤウクテ	清酒	1杯	0.1		
1706	10月9日	ホタコラン・イカヌク・イタケラ	清酒	1杯宛	0.3		
1707	10月10日	アニボカエ	柿	1連	0.1		
1708	10月10日	イタカ子	竹原塩	3升	0.24		
1709	10月10日	エカヌク	鳴海中形染	1反	0.8		
1710	10月10日	エカヌク	松鷹	1ツ	0.07		
1711	10月10日	入用	焼酎	1本	—	是ハイタカ子ニシエダケ代遣し	
1712	10月10日	ツタヌ	落雁	1ツ	0.08		
1713	10月10日	トタヌ	松鷹	2ツ	0.15		
1714	10月10日	アラシロウ	清酒	2合5勺	0.1		
1715	10月11日	トンカ	紺先織	1枚分	1.25		
1716	10月11日	トンカ	同切糸	2ツ	0.032		
1717	10月11日	ケリ々	秋田米	5升	0.7		
1718	10月11日	ケリ々	玉砂糖	半斤	0.1		
1719	10月11日	イタカ子	同酒〔清酒〕	2合5勺	0.1		
1720	10月11日	幸三郎・アラシロ	清酒	1杯宛	0.2		
1721	10月12日	イタカ子	手拭	1本	0.05		
1722	10月12日	エンカラマ	本庄米	1俵	4.48		升3斗1升8合入
1723	10月12日	エンカラマ	焼酎	1本	0.29		
1724	10月12日	エンカラマ	白木綿	1反	0.75		
1725	10月12日	エンカラマ	紺先織	1反	1.2		
1726	10月12日	ゴンボ	焼酎	1本	0.29		
1727	10月12日	アラシロウ	秋田米	5升	0.7		
1728	10月12日	イタカ子	清酒	5合	0.2		
1729	10月12日	アラシロウ	紺木綿	1丈8尺6寸	0.584		
1730	10月12日	チヤムクテ・ツタヌ	同酒〔清酒〕	1杯宛	0.2		
1731	10月12日	イタケラ	同酒〔清酒〕	2合5勺	0.1		
1732	10月13日	アニホカイ	かちん	5尺	0.185		
1733	10月13日	ホタコラン	松鷹莨	1玉	0.075		
1734	10月13日	バテキヌ	秋田米	1斗	1.4		
1735	10月13日	馬追　イタケラ	同酒〔清酒〕	2合5勺	0.1		
1736	10月13日	ホタコラン	同酒〔清酒〕	2合5勺	0.1		
1737	10月13日	アラシロウ・源治郎	同酒〔清酒〕	1杯宛	0.2		
1738	10月14日	入用	しら梅酒	1樽	—	是ハ大漁ニ付冬しま番家へ遣し	
1739	10月14日	チヤムクテ	同酒〔清酒〕	5合	0.2		
1740	10月14日	マカラム	同酒〔清酒〕	2合5勺	0.1		
1741	10月15日	ホタコラン	なら茶わん	2ツ	0.18		
1742	10月15日	ホタコラン	中皿	1枚	0.08		
1743	10月15日	アラシロ	秋田米	5升	0.7		
1744	10月15日	入用	白梅印酒	1樽	—	是ハ冬しま番家ニ大漁ニ付遣し	

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1745	10月15日	ヱカヌク	落雁	1ツ	0.08		
1746	10月15日	ツタヌ	手拭	1本	0.07		
1747	10月15日	漁方入用	白梅印酒	1ツ	—	是ハ大漁ニ付遣し候也	
1748	10月15日	馬屋入用	ホし酒	4升5合	—	是ハ9人分相渡し候也	
1749	10月16日	イタカ子	濁酒	1升	0.2		
1750	10月16日	ホタコラン	下駄緒	1足	0.07		
1751	10月16日	イカヌク	小倉緒	1足	0.07		
1752	10月16日	ゴンボ	ホし酒	1升	0.2		
1753	10月16日	入用	ホし酒	1樽	—	是は冬嶋番家大漁ニ付差遣し候也	〔朱書〕「升1斗3升5合」
1754	10月16日	マカラム	さらし白	7尺	0.14		
1755	10月16日	アラシロ	濁酒	1升	0.2		
1756	10月16日	アラシロ	松鷹	1ツ	0.075		
1757	10月16日	漁方入用	ホし酒	2斗	—	是ハ大漁ニ付遣し候也	
1758	10月16日	漁方入用	ホし酒	2合5勺	—	是はアニホカイ幌泉ゟ日帰りニ付手当ニ遣し候也	先越し之分
1759	10月16日	アニホカイ	同酒〔ホし酒〕	2合5勺	0.05		先越し之分
1760	10月17日	マカラム	間切	1枚	0.13		
1761	10月17日	バデキヌ	ミそ	1貫目	0.25		
1762	10月17日	バデキヌ	竹原塩	5升	0.4		
1763	10月17日	ゴボ	ホし酒	5合	0.1		
1764	10月17日	ツタヌ	柿	1連	0.1		
1765	10月17日	アニボカエ	松鷹	1ツ	0.075		
1766	10月17日	ゴボ	秋田米	5升	0.7		
1767	10月17日	ゴボ	竹塩	5升	0.4		
1768	10月17日	ケリ／＼	竹原塩	2升	0.16		
1769	10月17日	ケリ／＼	秋田米	5升	0.7		
1770	10月17日	ケリ／＼	玉サト	50匁	0.05		
1771	10月17日	冬しま番家ノ入用	ホし酒	1斗2升	—	是ハ大漁ニ付御神ニ遣し候也	
1772	10月17日	漁方入用	諸味酒	1斗1升	—	是ハ大漁ニ付御神ニ遣し候也	
1773	10月18日	ホタコラン	竹原塩	2升5合	0.2		
1774	10月18日	ボヤ	ホし酒	5合	0.1		
1775	10月18日	バデキヌ	落雁	1ツ	0.08		
1776	10月18日	バデキヌ	中皿	3枚	0.24		
1777	10月18日	ボヤ	竹原塩	2升	0.16		
1778	10月18日	ヱカヌク	菊形皿	1枚	0.08		
1779	10月18日	アニホカイ	半紙	1丁	0.04		
1780	10月18日	泊漁方ノ入用	濁酒	2斗	—	是ハ大漁ニ付遣し候也	
1781	10月18日	イタケラ	ホし酒	5合	0.1		
1782	10月18日	幸吉・イタケラ・イカヌク	ホし酒	2合5勺宛	0.15		
1783	10月19日	トタヌ	松鷹莨	1玉	0.075		同18日分
1784	10月19日	トタヌ	手拭	1本	0.05		
1785	10月19日	ツタヌ	ホし酒	7合5勺	0.15		
1786	10月19日	漁方入用	ホし酒	2斗4升	—	是は大漁ニ付遣し候也	
1787	10月19日	トタヌ	濁酒	5合	0.1		
1788	10月20日	イタカ子	ホし酒	5合	0.1		
1789	10月20日	アラシロウ	秋田米	5升	0.7		
1790	10月20日	イタフヌ	ミそ	1貫目	0.25		
1791	10月20日	イタフヌ	三田印塩	2升	0.16		
1792	10月20日	エンカラマ	ミそ	1貫目	0.25		
1793	10月20日	イタフヌ	ホし酒	2合5勺	0.05		
1794	10月20日	入用	ホし酒	1斗2升	—	是は15日神酒若物え29人分相渡し候也	
1795	10月20日	イタカ子	同酒〔ホし酒〕	5合	0.1		
1796	10月20日	トタヌ	同酒〔ホし酒〕	1杯	0.05		
1797	10月21日	マカラム	ホし酒	5合	0.1		
1798	10月21日	内入用	落雁	1ツ	—	是は様似丸上荷役ニ付■■土人女子え手当ニ遣し候也	
1799	10月21日	チヤウクテ	ホし酒	1杯	0.05		
1800	10月21日	漁方入用	玉泉印酒	1ツ	—	是ハ先達而大漁ニ付預り分相渡し	様似丸下り
1801	10月22日	漁方入用	ホし酒	5合	—	是は様似丸積荷役ニ付コンホキンタえ手当差遣し候也	
1802	10月22日	コンボ	ホし酒	2合5勺	0.05		
1803	10月22日	内入用	玉泉印酒	1樽	—	是は鵜苫番家大漁ニ付差遣し候也	様似丸下り200樽之内
1804	10月22日	チヤウクテ	上印手拭	1本	0.09		
1805	10月22日	イタカ子	ホし酒	2合5勺	0.05		
1806	10月22日	アニホカイ・イタヌク	ホし酒	1杯宛	0.05		
1807	10月22日	ツタヌ	ホし酒	2合5勺	0.05		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1808	10月22日	チヤウクテ	ホし酒	2合5勺	0.05		
1809	10月22日	内入用	同酒〔ホし酒〕	5合	—	是はアニホカイ幌泉ゟ日帰ニ付手当に相遣し候也	
1810	10月23日	ゴボ	清酒	1升1杯	0.5		
1811	10月23日	ゴボ	ホし酒	5合	0.1		
1812	10月23日	ボヤ	ホし酒	1杯	0.05		
1813	10月23日	ボヤ	清酒	1升	0.4		
1814	10月23日	ボヤ	秋田米	1斗	1.4		
1815	10月23日	冬しま番家	本庄米	8俵	35.85	是ハトンカニ相渡し候也	升318入
1816	10月23日	トンカ	秋田米	1斗	1.4		
1817	10月23日	バデギヌ	百治湯	2服	—		
1818	10月23日	ホタコラン	草り	1足	0.035		
1819	10月24日	ケリ／＼	秋田米	5升	0.7		
1820	10月24日	ケリ／＼	花染	1丈	0.38		
1821	10月24日	アラシロウ	秋田米	5升	0.7		
1822	10月24日	ホタコラン	秋田米	5升	0.7		
1823	10月24日	ホタコラン	唐天	2尺1寸	0.504		
1824	10月25日	イタフヌ	本庄米	1俵	4.48		
1825	10月25日	イタフヌ	玉泉印酒	1升2合5勺	0.5		
1826	10月25日	エンカラマ	玉泉印酒	1升2合5勺	0.5		
1827	10月25日	アラシロ	☆〔マルー〕印間切	1枚	0.15		
1828	10月25日	ホタコラン・元吉	同酒〔ホし酒〕	2合5勺宛	0.1		
1829	10月25日	アラシロウ	同酒〔ホし酒〕	5合	0.1		
1830	10月26日	マカラム	手拭	1本	0.07		
1831	10月26日	アラシロ	ホし酒	5合	0.1		
1832	10月26日	エンカラマ・バデギヌ	本庄米	1俵宛	8.96		
1833	10月26日	ケリ々	ホし酒	1升	0.2		
1834	10月26日	ボヤ	ミそ	1貫目	0.25		
1835	10月26日	ボヤ	焼酎	1本	0.29		
1836	10月26日	アニホカイ	柿	1連	0.1		
1837	10月26日	アニホカイ	草履	1足	0.035		
1838	10月26日	チヤウクテ	同〔草履〕	1ツ1足	0.035		
1839	10月26日	チヤウクテ	ホし酒	1杯	0.05		
1840	10月26日	源治郎・トタヌ	ホし酒	5合宛	0.2		
1841	10月27日	ゴボ	秋田米	5升	0.7		
1842	10月27日	ゴボ	ホし米	5合	0.1		
1843	10月27日	入用	ホし米	1杯	—	是ハ春松ニ遣し候也	
1844	10月27日	アニホカエ	秋田米	3升	0.42		
1845	10月27日	入用	濁酒	5合	—	是ハイタカ子ニ遣し候也	
1846	10月27日	アラシロ	ホし酒	5合	0.1		
1847	10月27日	チヤムクテ・ホタコラン・イカヌク・ツタヌ	ホし酒	1杯宛	0.2		
1848	10月27日	内入用	ホし酒	2合5勺	—	是は土人幌泉ゟ日帰ニ付手当ニ差遣し候也	
1849	10月28日	アラシロ	秋田米	5升	0.7		
1850	10月28日	ヒコ	本庄米	2俵	8.96		
1851	10月28日	マカラム	秋田米	5升	0.7		
1852	10月28日	アラシロ	ホし酒	1杯	0.05		
1853	10月28日	トタヌ・イタカ子	ホし酒	1杯宛	0.1		
1854	10月28日	アニホカエ	ホし酒	1杯	0.05		
1855	10月28日	イタカ子	同酒〔ホし酒〕	5合	0.05		
1856	10月28日	トタヌ	同酒〔ホし酒〕	2合5勺	0.05		
1857	10月29日	ホタコラン	晒白	7尺	0.14		
1858	10月29日	アラシロ	ホし酒	5合	0.1		
1859	10月29日	入用	玉泉印酒	1樽	—	是ハ大漁ニ付ウトマ番家ニ遣し候也	
1860	10月29日	泊漁方入用	清酒	1樽	—	大漁ニ付御神酒ニ遣し候也	様似丸下り
1861	10月29日	幸吉・ホタコラン・チヤウクテ	ホし酒	5合宛	—		
1862	10月30日	アニボカエ	さらし白	6尺	—		
1863	10月30日	内入用	ホし酒	5合	—	是は馬追アニホカイ幌泉ゟ日帰りニ付手当ニ差遣し候也	
1864	10月30日	コンホキンタ	ホし酒	5合	0.1		
1865	10月30日	チヤウクテ	晒木綿	9尺	0.198		
1866	10月30日	イタカ子	ホし酒	5合	0.1		
1867	10月30日	イタカ子	同酒〔ホし酒〕	5合	0.2		
1868	10月30日	トタヌ	同酒〔ホし酒〕	1杯	0.05		
1869	10月30日	ツタヌ	同酒〔ホし酒〕	5合	0.1		
1870	10月30日	同人〔幸三郎〕	同酒〔清酒〕	3杯	—	是ハイタカ子ニ相渡し候也	
1871	10月31日	ツタヌ	紺木綿	6尺	0.21		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1872	10月31日	アラシロウ	秋田米	5升	—		
1873	10月31日	ケリ々	秋田米	5升	0.7		
1874	10月31日	ケリ々	ホし酒	2合5勺	0.05		
1875	10月31日	クエラ	松印莨	1玉	0.075		
1876	11月1日	ホヤシヤモン	本庄米	1俵	4.48		幸丸下り
1877	11月1日	ホヤシヤモン	金	1円		正金貸。是は女子え貞吉様ゟ相渡し候也	
1878	11月1日	ホヤシヤモン	白サト	1斤	0.28		
1879	11月1日	ツタヌ	白砂糖	28匁	0.05		
1880	11月1日	アラシロウ	清酒	5合	0.2		
1881	11月1日	イタカ子・トタヌ	清酒	2合5勺宛	0.2		
1882	11月1日	クエラ	柿	1連	0.1		
1883	11月2日	アニホカエ	手拭	1本	0.07		
1884	11月2日	ツタヌ	手拭	1本	0.07		
1885	11月2日	チヤウクテ	同酒〔ホし酒〕	3杯	0.15		
1886	11月3日	トタヌ	紺木綿	6尺	0.21		
1887	11月3日	トタヌ	晒白木綿	6尺	0.132		
1888	11月3日	トタヌ	紺切糸	2ツ	0.036		
1889	11月3日	チヤウクテ	同酒〔ホし酒〕	1杯	0.05		
1890	11月3日	ゴボ	秋田米	5升	0.7		
1891	11月3日	マカラム	玉砂糖	50匁	0.05		
1892	11月3日	石太郎	同酒〔清酒〕	5合	0.2	使トタヌ	
1893	11月3日	トタヌ	ホし酒	1合2勺5才	0.025		
1894	11月4日	アニボカエ	玉砂糖	50匁	0.05		
1895	11月4日	ケリ々	さらし白	6尺5寸	0.143		
1896	11月4日	アラシロ	晒白	7尺	0.154		
1897	11月4日	アラシロ	秋田米	5升	0.7		
1898	11月5日	イタカ子	ホし酒	5合	0.1		
1899	11月5日	巳之吉・トタヌ	同〔松鷹〕莨	1ツ宛	—		
1900	11月5日	マカラム	ホし酒	3杯	0.15		
1901	11月5日	トタヌ	同酒〔ホし酒〕	1杯	0.05		
1902	11月5日	馬追　イカヌク	飯茶碗	1ツ	0.08		
1903	11月5日	イタカ子	ホし酒	1升	0.2		
1904	11月5日	馬追　クエラ	ホし酒	5合	0.1		
1905	11月5日	イカヌク	玉サト	50匁	0.05		
1906	11月6日	チヤウクテ	手拭	1本	0.07		
1907	11月6日	クエラ	手拭	1本	0.07		
1908	11月6日	チヤウクテ	下駄	1足	0.07		
1909	11月6日	チヤウクテ	小倉緒	1足	0.07		
1910	11月6日	漁方印入用	玉泉印酒	1樽	—	是は鵜苫番家大漁ニ付遣し候也	
1911	11月6日	イタカ子	紺木綿	1丈4尺	0.5		
1912	11月7日	ホタコラン・ツタヌ	同酒〔ホし酒〕	1杯宛	0.1		
1913	11月7日	アラシロウ	秋田米	5升	0.7		
1914	11月7日	ケリ／＼	秋田米	5升	0.7		
1915	11月7日	マカラム	ホし酒	1升	0.2		
1916	11月7日	幸三郎	同酒〔ホし酒〕	3杯	—	是ハイタカ子ニ相渡候也	
1917	11月7日	源治郎	同酒〔ホし酒〕	1升	0.2	使チウコサツ渡し	
1918	11月7日	アニホカエ	同酒〔ホし酒〕	1杯	0.05		
1919	11月8日	トタヌ	同酒〔ホし酒〕	5合	0.1		
1920	11月9日	ホタコラン	秋田米	5升	0.7		
1921	11月9日	ホタコラン	判綿	7枚	0.28		
1922	11月9日	バテキヌ	竹原塩	5升	0.4		
1923	11月9日	バテキヌ	大鯛針金	100目	0.25		
1924	11月9日	ヒコ	☆〔ヤマテ〕印醤油	1升	0.32		
1925	11月9日	入用	同酒〔ホし酒〕	1升1杯	—	是ハ土人荷役手当ニ遣し候也	
1926	11月9日	アラシロウ	ホし酒	5合	0.1		
1927	11月9日	トタヌ	同酒〔ホし酒〕	2合5勺	0.05		
1928	11月9日	馬追　六助	ホし酒	1升	0.2	使クエラ	
1929	11月9日	アラシロウ	秋田米	5升	0.7		
1930	11月9日	アラシロウ	ホし酒	1升	0.2		
1931	11月9日	ホタコラン	柿	1連	0.1		
1932	11月10日	アラシロウ	ホし酒	2合5勺	0.05		
1933	11月10日	バテキヌ	ホし酒	5合	0.1		
1934	11月10日	バテキヌ	醤油	5合	0.16		
1935	11月10日	コンホキンタ	秋田米	5升	0.7		
1936	11月10日	漁方入用	白梅印酒	1樽	—	是は鵜苫番家大漁ニ付遣し候也	
1937	11月10日	ツタヌ	落雁	1ツ	0.08		
1938	11月10日	ケリ／＼	秋田米	5升	0.7		
1939	11月10日	ケリ／＼	玉サト	半斤	0.1		
1940	11月10日	コンホキンタ	竹原塩	7升5合	0.6		様似丸下り

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
1941	11月10日	コンホキンタ	【入】荷役雇	2日分	—		
1942	11月11日	イタフヌ	秋田米	5升	0.7		
1943	11月11日	エンカラマ	ホし酒	1杯	0.05		
1944	11月11日	トタヌ・ケリ／＼	ホし酒	1杯宛	0.1		
1945	11月11日	クエラ	同酒〔ホし酒〕	1升	0.2		
1946	11月12日	エンカラマ	ホし酒	1升1杯	0.25		
1947	11月12日	アニホカイ	風薬	1服	0.04		
1948	11月12日	クエラ	紺木綿	半反	0.563		
1949	11月12日	ツタヌ	木八丈嶋	1反	0.7		
1950	11月12日	ツタヌ	判綿	3枚	0.12		
1951	11月12日	ケリ／＼	ホし酒	5合	0.1		
1952	11月12日	馬家入用	同酒〔ホし酒〕	5合	—	是はマカラム幌泉ゟ日帰ニ付手当ニ相遣し候也	
1953	11月12日	マカラム	紺股引	1足	0.75		
1954	11月12日	クエラ	ホし酒	7合5勺	0.15		
1955	11月12日	イタカ子	同酒〔清酒〕	2合5勺	0.1		
1956	11月13日	アニボカエ	紺木綿	5尺	0.19		
1957	11月13日	ゴボ・ツタヌ	ホし酒	1杯宛	0.1		
1958	11月13日	チヤウクテ	手拭	1本	0.07		
1959	11月13日	マカラム・ホタコラン	白砂糖	40匁宛	0.14		
1960	11月13日	クエラ・ボダコラン	松鷹	1玉宛	0.15		
1961	11月13日	トタヌ	ホし酒	1杯	0.05		
1962	11月13日	トタヌ	ホし酒	1杯	0.05		
1963	11月14日	ホタコラン	小松の花	1函	0.18		
1964	11月14日	漁方ノ入用	ホし酒	1升	—	是ハソユワイ雇給料ニ相払	
1965	11月14日	漁方入用	落雁	1ツ	0.08	是ハセカツ荷役ニ給料ニ相払	
1966	11月14日	クエラ	唐茜	2尺5寸	0.1625		
1967	11月14日	アニボカエ	手拭	1本	0.07		
1968	11月15日	エカヌク	下駄	1足	0.07		
1969	11月15日	エカヌク	小倉緒	1足	0.07		
1970	11月15日	エンカラマ	ホし酒	1杯	0.05		
1971	11月15日	イタカ子	清酒	1杯	0.1		
1972	11月15日	イタカ子	ホし酒	3杯	0.15		
1973	11月15日	アラシロ	秋田米	5升	0.7		
1974	11月15日	バデキヨコ	ホし酒	1升1杯	0.25		
1975	11月15日	アラシロ	ホし酒	5合	0.1		
1976	11月15日	クエラ	ホし酒	1升	0.2		
1977	11月15日	ホタコラン	同酒〔ホし酒〕	5合	0.1	使クエラニ相渡し	
1978	11月16日	エカヌク	紺木綿	6尺	0.23		
1979	11月16日	クエラ	なら茶わん	1ツ	0.1		
1980	11月16日	クエラ	菊形皿	1枚	0.08		
1981	11月16日	バデキヌ	秋田米	5升	0.7		
1982	11月16日	バデキヌ	松鷹	2玉	0.15		
1983	11月16日	ホタコラン	手拭	1本	0.07		
1984	11月16日	内ノ元吉	ホし酒	3杯	0.15	チヤウクテニ相渡し	
1985	11月16日	イタカ子	ホし酒	5合	0.1		
1986	11月16日	ツタヌ	風薬	1服	0.04		
1987	11月16日	イタカ子	ホし酒	1升	0.2		
1988	11月16日	チヤウクテ	同酒〔ホし酒〕	5合	0.1		
1989	11月17日	トタヌ	鏹	1本	0.12		
1990	11月17日	エカヌク	さらし白	5尺	0.22		
1991	11月17日	ホタコラン・ツタヌ	ホし酒	1杯宛	0.1		
1992	11月17日	ツタヌ	下駄	1足	0.07		
1993	11月17日	ツタヌ	小倉緒	1足	0.07		
1994	11月18日	イタカ子	秋田米	1斗	1.5		
1995	11月18日	ホヤシヤモン	因州米	1俵	—	升3斗4升5合入	曙丸下り
1996	11月18日	イタカ子	清酒	1升	0.4		
1997	11月18日	イタカ子	ホし酒	1杯	0.05		
1998	11月18日	トタヌ・桜場与の吉	ホし酒	1杯宛	0.1		
1999	11月18日	イタカ子	ホし酒	3杯	0.15		
2000	11月19日	クエラ	手拭	1本	0.06		
2001	11月19日	イタフヌ	秋田米	5升	0.75		
2002	11月19日	ケリ々	同米	5升	0.75		
2003	11月19日	ゴボ	同米	5升	0.75		
2004	11月19日	ゴボ	ホし酒	1杯	0.05		
2005	11月19日	ツタヌ	柿	1連	0.1		
2006	11月19日	アラシロ	ホし酒	1杯	0.05		
2007	11月19日	アラシロ・トタヌ	同酒〔ホし酒〕	1杯宛	0.1		
2008	11月20日	アラシロ	秋田米	5升	0.75		
2009	11月20日	ツタヌ	紺股引	1足	0.75		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
2010	11月20日	トタヌ	松鷹莨	1ツ	0.075		
2011	11月20日	イタカ子	濁酒	3杯	0.15		
2012	11月20日	アラシロ	同酒〔濁酒〕	5合	0.1		
2013	11月20日	入用	同酒〔濁酒〕	5合	—	是ハイタカ子ニ遣し候也	
2014	11月20日	石太郎	清酒	5合	0.2	是ハイタフヌニ相渡し候也	
2015	11月21日	エンカラマ	ミそ	1貫目	0.25		
2016	11月21日	エンカラマ	ホし酒	1升	0.2		
2017	11月21日	トタヌ	ホし酒	2合5勺	0.05		
2018	11月21日	トタヌ	ホし酒	7合5勺	0.15		
2019	11月21日	ゴボ	ホし酒	1杯	—		
2020	11月22日	イタヌク	手拭	1本	0.06		
2021	11月22日	入用	ホし酒	5合	—	是ハイタカ子え差遣し候也	
2022	11月22日	アラシロ	同酒〔ホし酒〕	5合	0.1		
2023	11月22日	トタヌ	同酒〔ホし酒〕	1杯	—		
2024	11月22日	クエラ	同酒〔ホし酒〕	5合	0.1		
2025	11月22日	アラシロウ	ホし酒	2合5勺	0.05		
2026	11月23日	バデキヌ	竹原塩	5升	0.4		
2027	11月23日	アラシロウ	ホし酒	5合	0.1		
2028	11月23日	クエラ	同酒〔ホし酒〕	1升	0.2		
2029	11月24日	ヒコ	紺木綿	1反	0.88		
2030	11月24日	ヒコ	同切糸	半わ	0.18		
2031	11月24日	ゴボ	ホし酒	5合	0.1		
2032	11月24日	アラシロ	龍印莨	1玉	—		
2033	11月25日	アラシロ	秋田米	5升	0.75		
2034	11月25日	ケリ々	秋田米	5升	0.75		
2035	11月26日	イタフヌ	秋田米	5升	0.75		
2036	11月26日	イタフヌ	唐綛	1把	0.15		
2037	11月26日	イタカ子	秋田米	5升	0.75		
2038	11月26日	寅吉・トタロウ・巳之吉・石太郎	清酒	1杯宛	0.4		
2039	11月26日	クエラ	ホし酒	5合	0.1		
2040	11月26日	アラシロ・イタカ子	ホし酒	1杯宛	0.1		
2041	11月26日	エンカラマ	竹原塩	5升	0.4		
2042	11月26日	イカヌク・クエラ	ホし酒	5合宛	0.2		
2043	11月26日	エンカラマ	ホし酒	2合5勺	0.05		
2044	11月27日	アニホカイ	秋田米	3升	0.45		
2045	11月28日	クエラ	手拭	1本	0.07		
2046	11月28日	ホタコラン	秋田米	5升	0.75		
2047	11月29日	源治郎・重太郎・幸吉	同酒〔ホし酒〕	5合宛	—	是ハエカヌニ相渡し候也	
2048	11月30日	ホタコラン	紺木綿	4尺	—		
2049	11月30日	アラシロ	秋田米	5升	0.75		
2050	11月30日	元吉・重太郎・源治郎	同酒〔ホし酒〕	1升宛	0.6	是ハクエラニ相渡し候也	
2051	12月1日	クエラ	ホし酒	3杯	0.15		
2052	12月1日	ケリ／＼	クタキ米	1斗	0.75		
2053	12月1日	ゴンホキンタ	秋田米	5升	0.75		
2054	12月1日	エカヌク	白砂糖	28匁	0.05		
2055	12月2日	ホヤシヤモン	清酒	2合5勺	0.1		
2056	12月2日	ボヤ・ヒコ	清酒	5合宛	0.4		
2057	12月2日	イタカ子	清酒	2合5勺	0.1		
2058	12月2日	イタフヌ・コンホキンタ	同酒	2合5勺宛	0.2		
2059	12月2日	クエラ	同酒〔ホし酒〕	1升	0.2		
2060	12月3日	バテキヌ	秋田米	5升	0.75		
2061	12月3日	ヒコ	清酒	1杯	0.1		
2062	12月3日	ホヤ	清酒	1杯	0.1		
2063	12月4日	ゴボ	ホし酒	5合	0.1		
2064	12月4日	クエラ	ホし酒	3杯	0.15		
2065	12月4日	バデギヌ	唐綛	1わ	0.16		
2066	12月4日	バデギヌ	龍印莨	2ツ	0.16		
2067	12月4日	ケリ々	紺木綿	半反	0.575		
2068	12月4日	入用	清酒	2升	—	是ハ■〔鯨?〕切ニ付土人ニ御神遣候也	
2069	12月4日	クエラ	ホし酒	3杯	0.15	レウエンニ相渡し候也	
2070	12月4日	アラシロ	秋田米	5升	0.75		
2071	12月4日	ホタコラン	同酒〔ホし酒〕	1升	0.2	是ハ両度分也。内5合ハ1日之神酒貸也	
2072	12月5日	アニホカエ	秋田米	3升	0.45		
2073	12月5日	ホタコラン	龍玉莨	1ツ	0.08		
2074	12月5日	エンカラマ	紺木綿	半反	0.44		
2075	12月5日	エンカラマ	ホし酒	1升	0.2		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
2076	12月5日	ヒコ・ハテキヌ・ホヤシヤモン・イタフヌ・トンカ	ホし酒	1升宛	1		
2077	12月5日	イタフヌ	清酒	3杯	0.35		
2078	12月5日	エンカラマ	秋田米	1斗	1.5		
2079	12月5日	エンカラマ	清酒	1升	0.4		
2080	12月5日	ヒコ	清酒	1杯	0.1		
2081	12月5日	イタカ子・ヒコ	同酒〔清酒〕	1杯宛	0.2		
2082	12月5日	入用	白梅印酒	1樽	—	是ハ■〔鯨?〕取替ニ付遣し候也	
2083	12月5日	ゴボ・バデギヌ	同酒〔清酒〕	5合宛	0.4		
2084	12月5日	エンカラマ・ヒコ・イタプヌ・トンカ	同酒〔清酒〕	1杯宛	0.4		
2085	12月6日	トタヌ	鏹	1本	0.125		
2086	12月6日	ホヤシヤモン	ホし酒	5合	0.1		
2087	12月6日	鵜苫番家	金	320円	—	正金貸。是は雇給料相渡しニ付主人方■■〔早八?〕治え相渡し候也	
2088	12月6日	アニホカイ	同酒〔ホし酒〕	1杯	0.05		
2089	12月6日	アラシロウ	柿	1連	0.1		
2090	12月6日	アラシロウ	龍玉莨	1ツ	0.08		
2091	12月6日	漁方入用	白梅印酒	1樽	—	是は漁方雇出立ニ付相渡し候也	曙丸下り
2092	12月6日	トタヌ	龍玉莨	1ツ	0.08		
2093	12月6日	アラシロウ	ホし酒	5合	0.1		
2094	12月6日	入用	ホし酒	1升	—	是は貞吉様方アラシロウえ遣し候也	
2095	12月6日	漁方入用	白梅印酒	1ツ	—	是ハ雇人引払ニ付遣し候也	
2096	12月7日	ホタコラン	玉砂糖	1斤	0.2		
2097	12月7日	エンカラマ	同酒〔ホし酒〕	2升	0.4		
2098	12月7日	ホタコラン	秋田米	2升	0.3		
2099	12月7日	ホヤシヤモン	ホし酒	1升	0.2		
2100	12月7日	アラシロ	同酒〔清酒〕	1杯	0.1		
2101	12月7日	アラシロウ	清酒	1杯	0.1		
2102	12月8日	クエラマ	鏹	1本	0.12		
2103	12月8日	アニホカイ	更砂	2尺5寸	0.2		
2104	12月8日	トタヌ	金崎織	1枚分	1.2		
2105	12月8日	クエラ	ホし酒	7合5勺	0.15		
2106	12月8日	ケリ々	ホし酒	5合	0.1		
2107	12月9日	トタヌ	ホし酒	3杯	0.15		
2108	12月9日	トタヌ渡し　幸三郎	ホし酒	3杯	0.15		
2109	12月9日	ホヤシヤモン	秋田米	5升	0.8		
2110	12月9日	ホヤシヤモン	落雁	1ツ	0.08		
2111	12月9日	トンカ・イタフヌ	秋田米	5升宛	1.6		
2112	12月11日	バテキヌ	秋田米	5升	0.8		
2113	12月11日	バテキヌ	紺木綿	1反	0.88		
2114	12月11日	バテキヌ	濁酒	2升	0.4		
2115	12月11日	バテキヌ	龍玉莨	3ツ	0.24		
2116	12月11日	バテキヌ	濁酒	1杯	0.05		
2117	12月11日	ケリ／＼	秋田米	5升	0.8		
2118	12月11日	イタカ子	ホし酒	1杯	0.05		
2119	12月11日	クエラ	同酒〔ホし酒〕	5合	—		
2120	12月11日	イカヌク	同酒〔ホし酒〕	1杯	0.05		
2121	12月11日	クエラ	玉泉印清酒	3杯	0.3		
2122	12月11日	クエラ	龍玉莨	1ツ	0.08		
2123	12月12日	クエラ	ホし酒	1升	0.2		
2124	12月13日	アニホカエ	紺木綿	6尺	0.24		
2125	12月13日	アニホカエ	同切糸	1ツ	0.018		
2126	12月13日	ホタコラン	秋田米	5升	0.8		
2127	12月13日	ホタコラン	ホし酒	5合	0.1		
2128	12月13日	ゴボ	同酒〔ホし酒〕	1杯	0.05		
2129	12月13日	ホタコラン	あハ粉	1ツ	0.08		
2130	12月13日	ホタコラン	ホし酒	1升	0.2		
2131	12月13日	ホタコラン	清酒	1杯	0.1		
2132	12月13日	ホタコラン	あハ粉	1ツ	0.08		
2133	12月13日	ホタコラン	半紙	1丁	0.04		
2134	12月14日	アラシロ	秋田米	5升	0.8		
2135	12月14日	アラシロ	ホし酒	5合	0.1		
2136	12月14日	ヒコ	因州米	1斗	1.6		
2137	12月14日	クエラ	同酒〔ホし酒〕	5合	0.1		
2138	12月14日	トタヌ	龍印莨	1ツ	0.08		
2139	12月15日	要之助	清酒	1升	0.4	是ハヒコニ相渡し候也。是ハ現金入相成候也	

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
2140	12月15日	バデキヌ	因州米	5升	0.8		
2141	12月15日	バデキヌ	白伝甫	4ツ	0.1		
2142	12月15日	元八・トタヌ	同酒〔ホし酒〕	1杯宛	0.1		
2143	12月15日	入用	同酒〔ホし酒〕	5合	—	是ハ土人エンカマニ遣し候也	
2144	12月15日	ホヤシヤモン	龍印莨	1ツ	0.08		
2145	12月15日	クエラ	同酒〔ホし酒〕	5合	0.1		
2146	12月15日	元八	同酒〔ホし酒〕	3杯	0.15	トタヌニ相渡し	
2147	12月16日	トタヌ	同酒〔ホし酒〕	5合	0.1		
2148	12月16日	クエラ	津軽米	5升	0.8		〔朱書〕「100俵口／是ゟ升■■入」
2149	12月16日	クエラ	手拭	1本	0.07		
2150	12月16日	トタヌ	龍印莨	1ツ	0.08		
2151	12月16日	アニホカイ	ホし酒	1杯	—		
2152	12月17日	コンホキンタ	因州米	7升	1.12		
2153	12月17日	兼松・福松・松五郎・嘉吉・長右衛門・元八・トタヌ	ホし酒	1杯宛	0.35		
2154	12月18日	アニボカエ	紺足袋	1足	0.25		
2155	12月18日	ケリ／＼	秋田米	5升	0.8		
2156	12月18日	エンカラマ	津軽米	5升	0.8		
2157	12月18日	エンカラマ	龍印莨	10玉	0.8		
2158	12月18日	エンカラマ	ホし酒	1杯	0.05		
2159	12月18日	アラシロ	津軽米	5升	0.8		様似丸下り
2160	12月18日	イタカ子	津軽米	1斗	1.6		
2161	12月18日	エンカラマ	ホし酒	1杯	—		
2162	12月18日	トンカ	津軽米	5升	0.8		
2163	12月18日	イタカ子	同酒〔ホし酒〕	5合	0.1		
2164	12月19日	イタフヌ	津軽米	5升	0.8		
2165	12月19日	ポヤ・ヒコ	清酒	1杯宛	0.2		
2166	12月19日	元吉	ホし酒	1升	0.2	アニホカエニ相渡し	
2167	12月19日	ヒコ	玉泉印酒	1杯	0.1		
2168	12月20日	イタフヌ	ホし酒	3杯	0.15		
2169	12月20日	エンカラマ	同酒〔ホし酒〕	5合	0.1		
2170	12月21日	ホヤシヤモン	ホし酒	5合	0.1		
2171	12月21日	源治郎・長右衛門・菊松・トタヌ	ホし酒	1杯宛	0.2		
2172	12月21日	エンカラマ	ホし酒	1杯	0.05		
2173	12月21日	エンカラマ・ヒコ	清酒	1杯宛	0.2		
2174	12月21日	トタヌ	ホし酒	5合	0.1		
2175	12月21日	トタヌ	紺木綿	5尺	0.15		
2176	12月21日	トタヌ	さらし白	1丈	0.22		
2177	12月21日	トタヌ	紺切糸	2ツ	—		
2178	12月21日	トタヌ	あハ粉	1玉	0.08		
2179	12月21日	クエラ	かんおふ丸	2服	—		
2180	12月21日	アラシロ	ホし酒	5合	0.1		
2181	12月22日	アニポカエ	手拭	1本	0.07		
2182	12月22日	ヒコ	津軽米	1俵	5.95	升39入	様似丸下り
2183	12月22日	小三郎	玉泉印酒	1升	0.4	是はイサンレルえ相渡し候也	
2184	12月22日	ヒコ	ミそ	1貫目	0.25		
2185	12月22日	ヒコ	清酒	5合	0.2		
2186	12月22日	ヒコ	同酒	2合5勺	0.1		
2187	12月22日	バデギヌ	津軽米	5升	0.8		
2188	12月22日	ホヤシヤモン	津軽米	1俵	5.95		曙丸下り
2189	12月22日	ホヤシヤモン	手造ミそ	1貫目	0.25		
2190	12月22日	ホヤシヤモン	玉泉印酒	1杯	0.1		
2191	12月22日	エサンレル	玉泉印酒	1杯	0.1		
2192	12月22日	春松	津軽米	5升	0.8		
2193	12月22日	ホヤシヤモン	ぱんかし	半斤	0.125		
2194	12月24日	ケリ々	ホし酒	3杯	0.15		
2195	12月24日	トタヌ	あハ粉	1ツ	0.08		
2196	12月24日	店ノ入用	半紙	2束	—	是ハ和人貸方通帳ニ相成候也	
2197	12月25日	アニポカエ	津軽米	3升	0.48		
2198	12月25日	春松	津軽米	5升	0.8		
2199	12月25日	トタヌ	ホし酒	1杯	0.05		
2200	12月25日	イカヌク	ホし酒	1杯	0.05		
2201	12月26日	レテカリ分　ヤヽシハ	金	13銭3厘	—	是は13年度上半季借地料立替金貸	
2202	12月26日	レテカリ分　ヤヽシハ	金	6銭5厘	—	是は12年地租不足立替金貸	
2203	12月26日	レテカリ分　ヤヽシハ	金	37銭2厘	—	是ハ13年上半季之地租立替金貸	

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
2204	12月26日	ハテキヌ	金	3銭5厘	—	是は13年上半季借地料立替金貸	
2205	12月26日	ホタコラン	金	8銭6輪	—	是は13年上半季之借地料立替金貸	
2206	12月26日	ホタコラン	金	26銭4厘	—	是は13年3月ヨリ6月迄郡費金貸立替之分	
2207	12月26日	ホタコラン	金	80銭	—	是ハ13年7月ヨリ14年6月迄郡費金立替かし	
2208	12月26日	春松	紺木綿	1丈	0.3		
2209	12月26日	春松	唐茜	2尺	0.13		
2210	12月26日	エサンレル	玉泉印酒	1杯	0.1		
2211	12月26日	イタカ子	金	14銭	—	是ハ12年分地租不足立替金かし	
2212	12月26日	イタカ子	金	22銭4厘	—	是は13年半季之地租立替金かし	
2213	12月26日	エサンレル	金	3銭8厘	—	是ハ12年分地租不足立替金かし	
2214	12月26日	エンカラマ	金	12銭9厘	—	是は13年上半期之地租立替金かし	
2215	12月26日	ホタコラン	金	60銭6厘	—	是は13年3月ヨリ14年4月迄之協議費立替	
2216	12月26日	コンホキンタ	金	26銭4厘	—	是は13年3月ヨリ6月迄郡費立替金かし	
2217	12月26日	コンホキンタ	金	80銭	—	是は7月ヨリ14年6月迄郡費立替金かし	
2218	12月26日	コンホキンタ	金	60銭	—	是は3月ヨリ14年2月迄之協議費金立替金かし ※和人に関しても、同日、以下の面々について借地料や地租、郡費、協議費などの立替がある。市川巳之吉、冬嶋番家、梶野万之助、和田武治郎、佐々木善三、向井小三郎、若松小太郎。	
2219	12月26日	入用	清酒	5升	—	是ハ餅ツキニ付御神遣し候也	
2220	12月27日	アラシロウ	龍玉莨	1ツ	0.08		
2221	12月27日	アラシロウ	ホし酒	5合	0.08		
2222	12月27日	アラシロウ	津軽米	5升	0.8		
2223	12月27日	ケリ／＼	ホし酒	1杯	0.05		
2224	12月27日	アニボカイ	ホし酒	3杯	0.15		
2225	12月27日	クエラ	宝丹	1ツ	—		
2226	12月27日	入用	ホし酒	1杯	—	是は馬追トタヌえ手当遣し候也	
2227	12月27日	入用	ホし酒	1杯	—	是はエンカラマえ遣し候也	
2228	12月27日	アラシロウ	ホし酒	5合	0.1		
2229	12月27日	エンカラマ	津軽米	1斗	1.6		様似丸下り
2230	12月27日	エンカラマ	ホし酒	1升	0.2		
2231	12月27日	ハテキヌ	津軽米	1斗	1.6		
2232	12月27日	ハテキヌ	龍玉莨	2ツ	0.16		
2233	12月27日	コンホキンタ	ホし酒	5合	0.1		
2234	12月28日	エタプヌ	津軽米	1斗	1.6		様似丸下り
2235	12月28日	トンカ	津軽米	1斗	1.6		様似丸下り
2236	12月28日	エサンレル	玉泉印酒	1杯	0.1		
2237	12月28日	同人〔エサンレル〕	玉泉印酒	5合	0.2		
2238	12月28日	アラシロウ	玉泉印酒	5合	0.2		
2239	12月28日	エサンレル	玉泉印酒	1杯	0.1		
2240	12月30日	ヤカンテ	紺先織り	1枚	1.25		仕立
2241	12月30日	ヤカンテ	ホし酒	1升	0.16		
2242	12月30日	ヤカンテ	松鷹莨	1ツ	0.08		
2243	12月30日	ヤカンテ	白木綿	6尺5寸	0.16	是は臨時長ヨリかへ候也	
2244	12月30日	漁方入用	串柿	1連	—	是樺子え道安内ニ付土人正月え手当ニ差遣し候也	
2245	12月30日	入用	玉泉印酒	1升	—	是は土人勘定ニ付祝ひニ遣し候也	
2246	12月31日	郡社行	竹原塩	5合	—	是は12月31日大払ニ付相用ルナリ	
2247	12月31日	郡社行	晒木綿	2尺	—	是は14年除夜祭ニ付用ルナリ	
2248	12月31日	ホタコラン	津軽米	5升	0.8		
2249	12月31日	ホタコラン	ホし酒	1升	0.2		
2250	12月31日	入用	玉泉印酒	1樽	—	是は13年年取ニ付相用ルナリ	
2251	12月31日	入用	玉泉印酒	1升5合	—	是は土人勘定ニ付祝ニ差遣し候也	
2252	12月31日	入用	ホし酒	5合	—	是は馬追イカヌク幌泉ゟ日帰ニ付手当ニ差遣し候也	
2253	12月31日	入用	ホし酒	1升	—	是は土人勘定祝ひ遣し候也	
2254	1月1日	入用	納戸小紋染	3反	—	是は14年年玉ニ差遣し候也	

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
2255	1月2日	ホタコラン	ホし酒	1杯	0.05		
2256	1月2日	イカヌク	ホし酒	5合	0.1		
2257	1月2日	アラシロウ	津軽米	4升	0.64		
2258	1月2日	土人　イタカ子	津軽米	1斗	1.6		
2259	1月2日	土人　イタカ子	紺先織	1枚	1.2		仕立
2260	1月2日	土人　イタカ子	紺先織	1枚	1.2	〔朱書〕「是者先織り壱枚現金入ニ相相成候也」	
2261	1月2日	土人　イタカ子	青嶋	1枚	1.2		
2262	1月2日	土人　イタカ子	農両面染	1枚	0.85		
2263	1月2日	トタヌ	龍玉莨	1ツ	0.08		
2264	1月2日	トタヌ	ホし酒	5合	0.1		
2265	1月3日	郷社行	水引	2把	0.01	是は三日元始祭ニ相用ルナリ	
2266	1月3日	トタヌ	ホし酒	1升	0.2		
2267	1月3日	エカヌク	津軽米	5升	0.8		
2268	1月3日	バテキヌ	玉泉印酒	3杯	0.3		
2269	1月3日	エンカラマ	玉泉印酒	1升	0.4		
2270	1月4日	ホタコラン	ホし酒	1杯	0.05		
2271	1月4日	クエラ	同酒〔ホし酒〕	1升	0.2		
2272	1月4日	アニホカイ	同酒〔ホし酒〕	1升	0.2		
2273	1月4日	ホタコラン	ホし酒	1升	0.2		
2274	1月5日	入用	ホし酒	3升	—	是ハ土人え主人ゟ遣し候也	
2275	1月5日	入用	玉泉印酒	1升	—	是は土人ツタヌ・エンカラマ・エタフヌ・トンカ右4名え勘定酒差遣し候也	
2276	1月5日	アラシロ	津軽米	5升	0.8		様似丸下り
2277	1月6日	エサンル	玉泉印酒	1升1杯	0.5		
2278	1月6日	アラシロ	ホし酒	1升	0.2		
2279	1月6日	トタヌ	ホし酒	5合	0.1		
2280	1月6日	アラシロ	ホし酒	2合5勺	0.05		
2281	1月6日	アニホカイ	津軽米	3升	0.48		
2282	1月6日	エンカラマ	ホし酒	1升	0.2		
2283	1月6日	入用	玉泉印酒	1杯	—	是はアニホカイ三石ゟ日帰ニ付手当遣し候也	
2284	1月6日	エンカラマ	津軽米	1斗	1.6		
2285	1月7日	トンカ	津軽米	5升	0.8		
2286	1月7日	エタフヌ	津軽米	5升	0.8		
2287	1月7日	トンカ	ホし酒	1升	0.2		
2288	1月7日	エタフヌ	ホし酒	1升	0.2		
2289	1月7日	入用	ホし酒	5合	—	是はホヤ・イタカ子え主人ゟ遣し候也	
2290	1月7日	イカヌク	串柿	1連	0.1		
2291	1月7日	エサンレル	玉泉印酒	3杯	0.3		
2292	1月7日	エサンレル	玉泉印酒	1杯	0.1		
2293	1月8日	トタヌ	龍玉莨	3ツ	0.24		
2294	1月8日	ホヤシヤモン	ホし酒	1升1杯	0.25		
2295	1月8日	イタカ子	ホし酒	1杯	0.05		
2296	1月8日	入用	ホし酒	5合	—	是ハ主人ゟイタカ子え差遣し候也	
2297	1月8日	入用	秋田餅米	1俵	—	〔朱書〕「是は十一日船玉祝ひニ付用ルナリ」	〔朱書〕「正松丸下り」
2298	1月9日	クエラ	紺足袋	1足	0.25		
2299	1月9日	イカヌク	手拭	1本	0.05		色入
2300	1月9日	アラシロ	津軽米	5升	0.8		様似丸下り
2301	1月9日	バテキヌ	津軽米	5升	0.8		様似丸下り
2302	1月9日	バテキヌ	荒砥石	1丁	0.175		
2303	1月9日	バテキヌ	中砥石	1丁	0.175		
2304	1月9日	入用	ホし酒	1升	—	是はイタキサカンえカモ代遣し候也	
2305	1月9日	イタフヌ	ホし酒	3杯	0.15		
2306	1月10日	入用	玉泉印酒	5合	—	11日船玉祝ひニ付料理え用ルナリ	
2307	1月10日	クエラ	津軽米	5合	0.08		
2308	1月10日	バテキヌ	金龍莨	4ツ	0.32		
2309	1月10日	入用	玉泉印酒	5合	—	是は11日船玉祝ひ料理用ルナリ	
2310	1月11日	ホタコラン	金龍莨	2ツ	0.16		
2311	1月11日	コンホキンタ	津軽米	5升	0.8		様似丸下り
2312	1月11日	エンカラマ	玉泉印酒	1杯	0.1		
2313	1月11日	エンカラマ	ホし酒	1升	0.2		
2314	1月11日	エサンレル	玉泉印酒	5合	0.2		

No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
2315	1月11日	入用	塵紙	1丁	—	是は船玉祝之節料理人え相渡し候也	
2316	1月11日	エサンレル	玉泉印酒	1杯	0.1		
2317	1月11日	ホタコラン	ホし酒	5合	0.1		
2318	1月11日	クエラ	ホし酒	5合	0.1		
2319	1月11日	入用	ホし酒	5升	—	是は山神酒ニ差遣し候也	
2320	1月12日	ホタコラン	津軽米	5升	0.8		
2321	1月13日	アニホカイ	紺拾一文足袋	1足	0.27		
2322	1月13日	ホヤシヤモン	ホし酒	1杯	0.05		
2323	1月13日	ホヤシヤモン	玉泉印酒	1杯	0.1		
2324	1月13日	バテキヌ	津軽米	5升	0.8		様似丸下り
2325	1月13日	クエラ	ホし酒	3杯	0.15		
2326	1月13日	ホヤシヤモン	津軽米	5升	0.8		
2327	1月14日	イタフヌ	津軽米	5升	0.8		様似丸下り
2328	1月14日	イタフヌ	紺木綿	半反	0.45		
2329	1月14日	アラシロ	津軽米	5升	0.8		様似丸下り
2330	1月14日	春松	津軽米	5升	0.8		
2331	1月14日	春松	玉泉印酒	3杯半	0.35		
2332	1月14日	アニホカイ	紺木綿	4尺	0.12		
2333	1月14日	アラシロ	ホし酒	3杯	0.15		
2334	1月14日	入用	四五匁掛ケ	2丁	—	是は馬家年取ニ付用ルナリ	
2335	1月14日	幸吉	ホし酒	3杯	0.15	使アニホカイ	
2336	1月14日	幸吉	同酒	5合	0.1	使アニホカイ	
2337	1月14日	幸吉	ぱんかし	半斤	0.125	使アニホカイ	
2338	1月15日	ハテキヌ	手造ミそ	1貫目	0.25		
2339	1月15日	イタカ子	津軽米	5升	0.8		8日分
2340	1月15日	イタカ子	津軽米	1斗	1.6		15日
2341	1月15日	入用	玉泉印酒	6升5合	—	是ハ1月15日御神酒トシテ馬家内手廻り中え差遣し候也	
2342	1月15日	アニホカイ	ホし酒	3杯	0.15		
2343	1月16日	ホタコラン	津軽米	5升	0.8		
2344	1月16日	アニホカイ	津軽米	2升	0.32		
2345	1月16日	クエラ	金龍莨	1ツ	0.08		
2346	1月17日	コンホキンタ	玉泉印酒	1杯	0.1		
2347	1月17日	コンホキンタ	ホし酒	5合	0.1		
2348	1月17日	イカヌク	津軽米	5升	0.8		
2349	1月17日	イカヌク	紺木綿	1丈	0.3		
2350	1月19日	クエラ	金龍莨	1ツ	0.08		
2351	1月19日	アラシロ	津軽米	5升	0.8		
2352	1月19日	ホタコラン	玉泉印酒	1升	0.4		
2353	1月19日	エサンレル	玉泉印酒	1杯	0.1		
2354	1月20日	ホタコラン	ホし酒	1升	0.2		
2355	1月20日	ホタコラン	紺木綿	半反	0.475		
2356	1月21日	エサンレル	玉泉印酒	5合	0.2		
2357	1月22日	イカヌク	串柿	1連	0.1		
2358	1月22日	イカヌク	玉泉印酒	1杯半	0.15		
2359	1月22日	入用	秋田餅米	1俵	—	是ハ寒餅ニ付用ルナリ	勝福丸下り
2360	1月22日	コホキンタ	津軽米	5升	0.8		
2361	1月23日	ホタコラン	津軽米	5升	0.8		
2362	1月23日	アラシロウ	津軽米	5升	0.8		
2363	1月23日	ケリ／＼	半紙	1丁	0.04		
2364	1月23日	ケリ／＼	農両面染	1反	0.85		
2365	1月23日	ケリ／＼	津軽米	1斗	1.6		
2366	1月23日	ケリ／＼	ホし酒	1升	0.2		
2367	1月23日	ケリ／＼	紺股引	1足	0.8		
2368	1月23日	トンカ	津軽米	5升	0.8		
2369	1月23日	エンカラマ	津軽米	5升	0.8		
2370	1月23日	アニホカイ	晒木綿	7尺	0.14		
2371	1月23日	アニホカイ	津軽米	2升	—		
2372	1月24日	エサンレル	ホし酒	1斗5升	3		
2373	1月24日	エサンレル	玉泉印酒	2升	0.8		
2374	1月24日	エサンレル	晒木綿	1反	0.55		
2375	1月24日	エサンレル	天野寺〔天王寺鋸〕	1枚	1.25		13年8月様似丸下り
2376	1月24日	クエラ	津軽米	5升	0.8		
2377	1月24日	バテキヌ	津軽米	5升	0.8		
2378	1月24日	エサンレル	玉泉印酒	5合	0.2		
2379	1月24日	エサンレル	玉泉印酒	1杯	0.1		
2380	1月24日	イカヌク	津軽米	3升	0.48		
2381	1月25日	アラシロウ	ホし酒	5合	0.1		

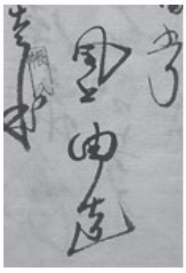
No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
2382	1月25日	アラシロウ	ホし酒	1杯	0.05		
2383	1月26日	アラシロ	白伝甫	4ツ	0.1		
2384	1月26日	アラシロ	紺木綿	半反	0.425		
2385	1月28日	ホヤシヤモン	津軽米	5升	0.8		
2386	1月28日	クエラ	津軽米	3升	0.48		
2387	1月28日	イタカ子	津軽米	1斗	1.6		
2388	1月28日	トタヌ	ホし酒	5合	0.1		
2389	1月29日	トタヌ	紺股引	1足	0.8		
2390	1月29日	入用	ホし酒	2杯	—	是は貞吉様鹿クツ買入ニ付遣し候也	
2391	1月29日	郡社	玉泉印酒	1杯	0.1		
2392	1月29日	郡社	本庄白米	1杯	0.045		
2393	1月29日	郡社	竹原塩	2合	0.016		
2394	1月29日	郡社	半紙	1丁	0.04		
2395	1月29日	郡社	源平水引	2把	—	是は本日幸明天皇遙拝ニ付相用ルナリ	
2396	1月29日	ケリ／＼	津軽米	1斗	1.6		
2397	1月29日	ケリ／＼	綾地更砂	2尺4寸	0.2		
2398	1月29日	ケリ／＼	ホし酒	5合	0.1		
2399	1月29日	トタヌ	金龍莨	1玉	0.08		
2400	1月29日	エサンレル	玉泉印酒	2杯	0.2		
2401	1月30日	エサンレル	玉泉印酒	1杯	0.1		
2402	1月30日	バテキヌ	津軽米	5升	0.8		
2403	1月30日	バテキヌ	金龍莨	4玉	0.32		
2404	1月30日	入用	ホし酒	3杯	—	是ハアフカシハエカモ取替ニ付相渡し候也	
2405	1月31日	ホヤシヤモン	ホし酒	2升	0.4		
2406	1月31日	ホヤシヤモン	玉泉印酒	1升	0.4		
2407	1月31日	ホヤシヤモン	金龍莨	2玉	0.16		
2408	1月31日	荒四郎	津軽米	5升	0.8		
2409	2月1日	クエラ	紺拾壱文足袋	1足	0.27		
2410	2月1日	イタプヌ	津軽米	5升	0.8		
2411	2月1日	トンカ	津軽米	5升	0.8		
2412	2月1日	ケリ／＼	ホし酒	1杯	0.05		
2413	2月1日	コンホキンタ	津軽米	5升	0.8		
2414	2月1日	エンカラマ	津軽米	5升	0.8		
2415	2月1日	ホタコラン	津軽米	5升	0.8		
2416	2月1日	アニホカエ	紺拾壱文足袋	1足	0.27		
2417	2月2日	アニホカエ	ホし酒	5合	0.1		
2418	2月2日	アニホカエ	ホし酒	1杯	0.05		
2419	2月3日	バテキヌ	津軽米	1斗	1.6		様似丸下り
2420	2月3日	古川松五郎	津軽米	5升	0.8	是はチヤムウクテ女子え相渡し候也	様似丸下り
2421	2月4日	荒四郎	津軽米	5升	0.8		
2422	2月5日	ケリ／＼	津軽米	1斗	1.6		様似丸下り
2423	2月6日	アニホカエ	紺木綿	6尺	0.198		
2424	2月6日	アニホカエ	判綿	1枚	0.045		
2425	2月6日	アニホカエ	紺股引	1足	0.8		
2426	2月6日	イカヌク	紺拾壱文足袋	1足	0.27		
2427	2月6日	ホタコラン	津軽米	2升	0.32		
2428	2月6日	ホタコラン	金龍莨	1ツ	0.08		
2429	2月6日	ケリ／＼	ホし酒	1升	0.2		
2430	2月6日	イカヌク	津軽米	3升	0.48		
2431	2月6日	イカヌク	金龍莨	1ツ	0.08		
2432	2月6日	アニホカエ	半紙	1丁	0.04		
2433	2月7日	アニホカエ	串柿	1連	0.1		
2434	2月7日	イカヌク	白伝甫	1ツ	0.025		
2435	2月7日	井口兼吉・重太郎・気仙兼・トタヌ・福松	同酒〔濁酒〕	5合宛	0.5		
2436	2月8日	入用	ホし酒	5合	—	是はイタカ子え遣し候也	
2437	2月8日	アラシロウ	津軽米	5升	0.8		様似丸下り
2438	2月8日	ホヤシヤモン	津軽米	1斗	1.6		様似丸下り
2439	2月8日	ホヤシヤモン	中鯛針	め100目	0.3		
2440	2月8日	ホヤシヤモン	ホし酒	1杯	0.05		
2441	2月8日	イカヌク	玉サト	半斤	0.1		
2442	2月8日	アニホカエ	手拭	1本	0.05		
2443	2月8日	イタプヌ	津軽米	5升	0.8		様似丸下り
2444	2月8日	イタプヌ	手拭	2本	0.1		
2445	2月10日	アニホカエ	津軽米	5升	0.8		様似丸下り
2446	2月10日	イカヌク	ちり紙	1丁	0.03		

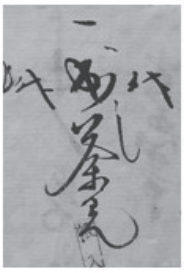
No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
2447	2月10日	入用	ホし酒	1升	—	是ハイタカ子え差遣し候也	
2448	2月11日	様似郡郡社	本庄米	2合5勺	0.045		
2449	2月11日	様似郡郡社	玉泉印酒	1杯	0.1		
2450	2月11日	様似郡郡社	半紙	1丁	0.04		
2451	2月11日	様似郡郡社	竹原塩	2合	0.016		
2452	2月11日	様似郡郡社	源平水引	2把	0.01	是は本日紀元節ニ付相用ル	
2453	2月11日	荒四郎	股引	1足	0.8		壱番印
2454	2月11日	トタヌ	ホし酒	5合	0.1		
2455	2月11日	アラシロウ	ホし酒	5合	0.1		
2456	2月11日	チヤキヤンテ	ホし酒	5合	0.1		
2457	2月12日	トタヌ	金龍莨	1玉	0.08		
2458	2月12日	荒四郎	本庄米	5升	0.8		様似丸下り
2459	2月12日	ホヤシヤモン	手造ミそ	1貫目	0.25		
2460	2月12日	ケリ／＼	本庄米	5升	0.8		様似丸下り
2461	2月12日	嘉吉・トタヌ	ホし酒	1杯宛	0.05		
2462	2月12日	イカヌク	串柿	1連	0.1		
2463	2月12日	荒四郎・トタヌ・ケリ／＼	同酒〔ホし酒〕	3杯宛	0.45		
2464	2月12日	ホヤシヤモン	ホし酒	5合	0.1		
2465	2月12日	元吉・源治郎・仁太郎・クエラ	ホし酒	5合宛	0.5		
2466	2月13日	クエラ	股引	1足	0.8		壱形印
2467	2月13日	クエラ	金	48銭9厘	—	正金貸。是は差引間違ニ付余分ニ相渡ス	
2468	2月13日	クエラ	津軽米	5升	0.8		14年様似丸壱番下り
2469	2月13日	アニホカエ	玉サト	50匁	0.05		
2470	2月13日	エンカラマ	金龍莨	5玉	0.4		
2471	2月13日	ハテキヌ	本庄米	1斗	1.6		
2472	2月13日	ハテキヌ	紺木綿	1反	1		
2473	2月13日	漁方入用	新印酒	3升7合5勺	—	是は様似丸〔左部注記〕「下」役荷ニ付土人15人え差遣し候也	
2474	2月13日	漁方入用	新印酒	6升5合	—	是は上下荷役人夫え差遣し候也	
2475	2月13日	漁方入用	新印酒	2升	—	是は漁方若物荷役酒差遣し候也	
2476	2月13日	漁方入用	ホし酒	3升	—	右同断之事	
2477	2月13日	ケリ／＼	ホし酒	1杯	0.05		
2478	2月13日	イタカ子・ホヤシヤモン	ホし酒	5合宛	0.2		
2479	2月13日	トタヌ	ホし酒	5合	0.1		
2480	2月14日	コンホキンタ	新印酒	5合	0.2		
2481	2月14日	荒四郎	ホし酒	5合	0.1		
2482	2月14日	クエラ	金龍莨	1玉	0.08		
2483	2月14日	クエラ	手拭	1本	0.09		
2484	2月14日	ホヤシヤモン	津軽米	1俵	5.95		14年様似丸下り。升3975入
2485	2月14日	イタカ子	新印酒	1杯	0.1		
2486	2月14日	イタカ子	津軽米	1斗	1.6		様似丸下り
2487	2月14日	ケリ／＼	津軽米	1斗	1.6		様似丸下り
2488	2月14日	ホタコラン	津軽米	5升	0.8		様似丸下り
2489	2月14日	ホタコラン	金龍莨	1玉	0.08		
2490	2月14日	ホタコラン	飯茶碗	2ツ	0.16		
2491	2月14日	ホタコラン	晒木綿	1丈3尺	0.26		
2492	2月14日	トタヌ	青嶋	1枚分	1.2		
2493	2月14日	トタヌ	紺木綿	5尺	0.185		
2494	2月14日	トタヌ	金龍莨	2玉	0.16		
2495	2月15日	エンカラマ	津軽米	5升	0.8		壱番様似丸下り
2496	2月15日	エンカラマ	ホし酒	1杯	0.05		
2497	2月15日	ホタコラン	ホし酒	1杯	0.05	是はス子フクえ貸渡し候也	同13日分
2498	2月15日	チヤウクテ	ホし酒	1杯	0.05		12日分
2499	2月15日	チヤウクテ	ホし酒	5合	0.1		13日分
2500	2月15日	チヤキヤンテ	ホし酒	1杯	0.05		12日分
2501	2月15日	チヤキヤンテ	ホし酒	5合	0.1		13日分
2502	2月15日	イカヌク	津軽米	3升	0.48		様似丸壱ばん
2503	2月16日	荒四郎	【入】2人	—	—	是は2月12日ゟ13日夕方迄様似丸役〔左部注記〕「下」荷	
2504	2月16日	ケリ／＼	【入】2人	—	—		
2505	2月16日	ホタコラン	【入】2人	—	—		
2506	2月16日	イタカ子	【入】2人	—	—		
2507	2月16日	チヤムウクテ	【入】2人	—	—		

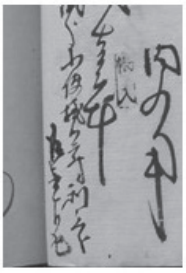
No.	日付	人名	品名	数量	金額	備考1	備考2
2508	2月16日	コンホキンタ	【入】2人	—	—		
2509	2月16日	エンカラマ	【入】1人半	—	—		
2510	2月16日	イタフヌ	【入】1人半	—	—		
2511	2月16日	トンカ	【入】1人半	—	—		
2512	2月16日	チヤキヤンテ	【入】2人	—	—	此人夫様似丸荷役参り候也	
2513	2月16日	入用	源平水引	1把	—	是は三上え安産見舞ニ付遣し候也	
2514	2月16日	入用	竹の皮	3枚	—	右同断之事ニ御座候也	
2515	2月16日	荒四郎	津軽米	5升	0.8		様似丸下り
2516	2月16日	クエラ	ホし酒	1升	0.2		
2517	2月16日	アニポカエ	ホし酒	5合	0.1		
2518	2月17日	様似郡社	本庄白米	1升	0.18		
2519	2月17日	様似郡社	新印酒	1升	0.35		
2520	2月17日	様似郡社	竹原塩	5合	0.04		
2521	2月17日	様似郡社	半紙	2状	0.08		
2522	2月17日	様似郡社	源平水引	4把	0.02	是は本日神社祈年祭奉候ニ付相用ルナリ	
2523	2月17日	エサンレル	新印酒	1升	0.35		
2524	2月17日	エサンレル	津軽米	1俵	5.95		壱番様似丸下り。升3975入
2525	2月17日	エサンレル	新印酒	5合	0.2		
2526	2月17日	エサンレル	手造ミそ	1貫目	0.25		
2527	2月17日	エサンレル	新印酒	5合	0.2		
2528	2月18日	エサンレル	新印酒	5合	0.2		

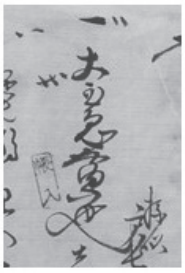
※表中で「■」とした箇所の文字図版

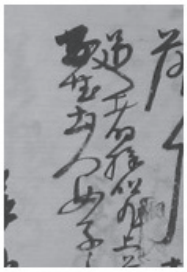
No.735

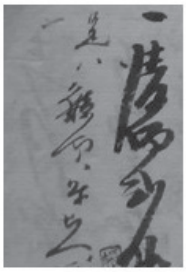

No.1055

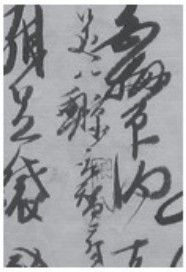

No.1090

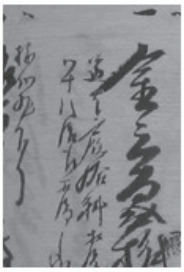

No.1123


No1280


No.1798


No.2068


No.2082


No.2087

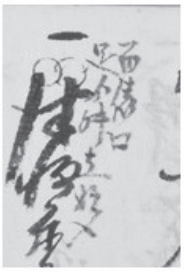

No.2148

表1－2　矢本家文書Y7「当座帳」に登場するアイヌ人名

凡例
・本表は、矢本家文書Y7「当座帳」の「人名」欄に登場するアイヌ、つまり矢本店から何らかの購入を行ったアイヌをまとめたものである。
・複数の名前表記で登場している場合、「別表記」欄に示した。同一人物かどうかの推定は筆者の判断による。
・表1－1の「品名」欄に「【入】」と付したものが含まれている場合は矢本店からの購入を意味しないが、「人名」欄に登場していることから、便宜上、「購入件数」に加え、「備考」欄にその旨を注記した。
・「表3」欄に「○」を付した人物は、後掲の表3－1及び3－2にも登場している。
・末尾の【参考付表】は、「人名」欄には登場しないが表1－1の「備考1」欄に登場するアイヌについてまとめた。

No.	人名	別表記	購入件数	備考	表3
1	アニホカイ	馬追アニホカイ、アニボカイ、アニホカエ、アニボカエ、アニポカエ	72		○
2	アラスロ	アラシロ、アラシロウ、荒四郎	153	収入1件(2/16様似丸荷役手当)含む	○
3	イタカ子		97	収入1件(2/16様似丸荷役手当)含む	○
4	イタケラ	馬追イタケラ	5		
5	イタフヌ	イタブヌ、イタプヌ、ヱタフヌ、ヱタプヌ	43	収入1件(2/16様似丸荷役手当)含む	
6	ウオカ		1		
7	ヱカヌク	馬追イカヌク、イカヌク、イタヌク	83		
8	ヱサンレル	ヱサンル	27		
9	エンカラマ		61	収入1件(2/16様似丸荷役手当)含む	○
10	クヱラ	馬追クヱラ	51	収入1件(9/23「是は橋本覚太郎ゟ鵜苫浜代受取候也」)含む	○
11	クヱラマ		1	クヱラと同一人物？	
12	ケリ々	ケリ／＼	67	収入1件(2/16様似丸荷役手当)含む	
13	コホ	ゴボ、コンボ、ゴンボ、コホキンタ、ゴボキンタ、コンホキンタ、ゴンホキンタ、ゴンボキンタ、ゴンポキンタ	77	収入2件(11/10「荷役雇」、2/16様似丸荷役手当)含む	○
14	サナンバ		1		○
15	チヤケアンテ	チヤキヤンテ	5	収入1件(2/16様似丸荷役手当)含む	○
16	チヤウクテ	チヤムウクテ、チヤムクテ	22	収入1件(2/16様似丸荷役手当)含む	○
17	ツタヌ		22		○
18	トタヌ	馬追ノトタヌ	108		○
19	トタロウ		1		
20	トンカ		30	収入1件(2/16様似丸荷役手当)含む	○
21	ハテキヌ	バテキヌ、バデキヌ、バデギヌ、バデヌキ	70		○
22	バデキヨコ		1		○
23	春松		7		○
24	ヒコ		36		○
25	ホタコラン	ボダコラン、ホタクラン	96	収入1件(2/16様似丸荷役手当)含む	○
26	ホヤ	ボヤ、ポヤ、ホヤシヤモン、ボヤシヤモン	76		○
27	マカラム		18		○
28	ヤカンテ		7		○
29	ヤヽシハ		5		○
30	ラムカンナ		1		
31	レウエン		12		○

【参考付表】

No.	人名	内容
32	アフカシハヱ	1/30(No.2404)に手当として酒を支給されている
33	イタカマ	9/27(No.1591)にイタフヌの使いとして酒を受け取っている
34	イタキサカン	1/9(No.2304)に手当として酒を支給されている
35	正月	8/10(No.235)と12/30(No.2244)に手当として酒や串柿を支給されている
36	ス子フク	2/15(No.2497)にホタコランの支出で酒を貸し渡されている
37	ソユワイ	11/14(No.1964)に漁方の雇給料を渡されている
38	チウコサツ	11/7(No.1917)に源治郎の使いとして酒を受け取っている

表2　矢本家文書Y5・Y6「土人勘定帳」[明治10年・12年(1877・1879)]　記載内容（抜粋）

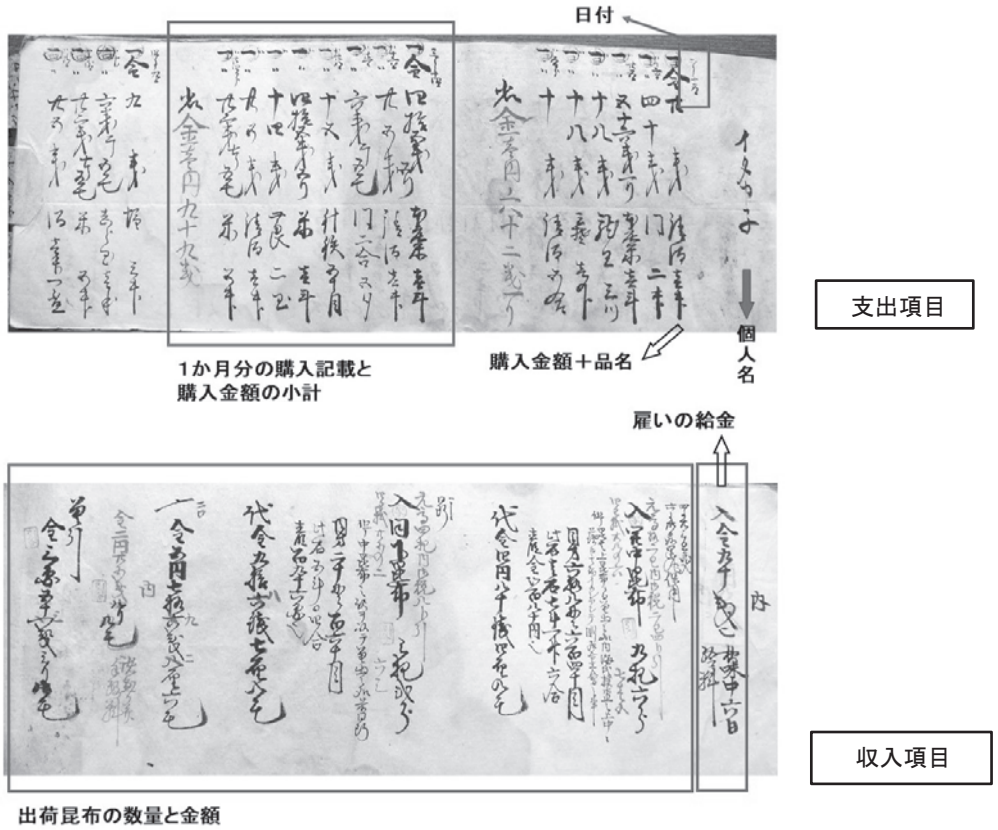
凡例

・本表は、矢本家文書Y5・Y6「土人勘定帳」[明治10年・12年(1877・1879)]に所収のアイヌの内、「イタカ子」の記載内容についてまとめたものである。

・表中の表記は、基本的には原文記載のママである。ただ、読解の便を図るために、原則、旧字は新字に改め、「数量」欄や「金額」欄、「備考」欄、総額記載部分（セルを結合させている部分）の数字記載は、漢数字をアラビア数字に改めた。

・「土人勘定帳」では、アイヌ個々人ごとにその収支が精算されている。個々人それぞれについて、まず前半部で、矢本店から前借り（後日の一括清算）の形で購入した物品とその購入金額が時系列に沿った形で列挙され、そして、後半部で、矢本店に対して出荷した昆布などの産物の販売額や、矢本店への雇用に係る給金額が列挙され、その上でその差引精算が行われている。アイヌ個々人にとって見れば、矢本店との関係性の中で、前半は支出、後半は収入の金額である。表中では、支出項目も収入項目も「品名」欄に示したが、収入項目については冒頭に「【入】」を付した。

・「金額」欄の単位は円。例えば、「1.2345」とあれば、1円23銭4厘5毛である。



イタカ子

①明治10年(1877)　矢本家文書Y5「土人勘定帳」より

	日付	品名	数量	金額	備考
1	2月15日	清酒	1升	0.2	
2	2月16日	同	2升	0.4	
3	2月25日	本庄米	1斗	0.561	
4	2月25日	龍王	3ツ	0.18	
5	2月25日	ミそ	1貫目	0.18	
6	2月5日分	清酒	5合	0.1	
7	3月14日	本庄米	1斗	0.455	
8	3月16日	清酒	1升	0.25	
9	3月21日	同	2合5勺	0.0625	
10	3月28日	針鉄	50目	0.15	
11	3月28日	米	1斗	0.455	
12	3月28日	莨	2玉	0.14	
13	3月28日	清酒	1升	0.25	
14	3月24日分	米	5升	0.2275	
15	4月9日	塩	3升	0.09	
16	4月10日	しら玉	1本	0.0625	
17	4月14日	米	5升	0.2275	
18	4月20日	酒	1升1盃	0.25	
19	4月20日	米	1斗	0.455	
20	4月24日	酒	1升3盃	0.35	
21	4月29日	米	1斗	0.455	

	日付	品名	数量	金額	備考
22	4月29日	半紙	2丁	0.064	
23	4月29日	酒	1升	0.2	
24	4月5日分	味噌	1貫目	0.18	
25	4月5日分	大刃鈩	1枚	0.15	
26	5月1日	大山酒	5合	0.125	
27	5月5日	同	1升5合	0.375	※抹消
28	5月6日	同	1升5合	0.375	
29	5月8日	同	1升	0.25	
30	5月13日	同	5合	0.125	
31	5月19日	同	1升1盃	0.3125	
32	5月21日	同	2升	0.5	
33	5月23日	同	1盃	0.0625	
34	5月23日	焼酎	1本	0.15	
35	5月28日	大坂酒	1盃	0.08	
36	5月31日	金引	50目	0.125	
37	5月28日分	莨	1玉	0.06	
38	5月28日分	大坂酒	3盃半	0.28	
39	6月14日	大坂酒	2合5勺	0.08	
40	6月16日	同	2合5勺	0.08	
41	6月16日	上合羽	1枚	1	
42	6月18日	大坂	5合5勺	0.16	
43	6月24日	串柿	1連	0.18	
44	6月24日	越後酒	1升	0.2	
45	6月24日	同	1盃	0.05	
46	6月25日	同	5合	0.1	
47	6月26日	同	1盃	0.05	
48	6月29日	同	5合	0.1	
49	6月30日	正札かし	―	2	
50	6月30日	清酒	1升	0.2	
51	6月30日	嶋	1反	0.95	
52	7月1日	清酒	5合	0.1	
53	7月8日	南京	1ツ	0.06	
54	7月8日	ミそ	1貫目	0.18	
55	7月11日	清酒	1升	0.2	
56	7月11日	海具	3枚	3	
57	7月16日	津軽米	1斗	0.54	
58	7月16日	清酒	1升	0.2	
59	7月16日	莨	1玉	0.06	
60	7月19日	津軽米	1俵	1.75	
61	7月19日	新莚	1束	0.36	
62	7月19日	酒	3盃	0.15	
63	7月19日	同	1升	0.2	
64	7月24日	同	3はへ	0.15	
65	7月24日	焼酎	1本	0.2	
66	8月2日	天長莚	2束	0.72	
67	8月4日	無二こう〔無二膏〕	1具	0.08	
68	8月6日	秋田米	1俵	1.525	
69	8月14日	味噌	1貫目	0.18	
70	8月22日	越後酒	5合	0.1	妙運丸三番下り
71	8月24日	津軽米	1俵	1.68	
72	8月24日	生賀漬	1樽	0.75	
73	8月1日分	焼酎	1本	0.2	
74	9月4日	両染	1反	0.85	
75	9月15日	酒	半樽	0.85	
76	9月19日	酒	5合	0.1	
77	9月20日	ミそ	1貫目	0.25	
78	9月23日	酒	1升	0.25	
79	9月23日	同	5合	0.125	
80	9月24日	同	2合5勺	0.0625	
81	9月30日	同	2升5合	0.5625	
82	9月30日	津軽米	1俵	1.68	
83	9月30日	落かん	1つ	0.08	
84	10月13日	越後酒	1升	0.25	
85	10月16日	同	1はへ	0.0625	
86	10月18日	大工作料代	―	3	
87	10月30日	ミそ	1貫目	0.25	
88	10月30日	酒	1はへ	0.0625	
89	10月27日	焼酎	1本	0.15	
90	10月27日	清酒	1杯	0.0625	
91	12月6日	焼酎	1本	0.15	
92	12月8日	清酒	5合	0.125	
93	12月8日	焼酎	1本	0.15	
94	12月18日	菓子	1ツ	0.08	
95	―	判	1ツ	0.15	
	【末尾記載】惣〆金35円30銭5厘5毛				

	日付	品名	数量	金額	備考
96	1月2日	酒	5合	0.125	
97	1月3日	同	5合	0.125	
98	1月4日	同	3杯	0.1875	
99	1月5日	同	5合	0.125	
100	1月8日	同	1杯	0.0625	
	【末尾記載】二口〆金35円93銭5毛				
101	―	【入】秋味中六日給料	―	0.9	
102	4月23日蔵入／6月30日妙運丸保用	【入】開中昆布	9把6分	4.8048	〔朱書〕「元高12わ内御税2わ4分引」。〔朱書〕「4わ掛28〆6」。〔朱書〕「715」。〔墨書〕「但し是は上昆布ニ而差出之処、内海氏検査之上中ニ落ル、其砌イカシアシテ測居合立会之事」。〔墨書〕「目方68貫640目／此石1石7斗1升6合／直段金280円也」
103	4月23日蔵入／6月30日妙運丸保用	【入】同下昆布	3把2分	0.9878	〔朱書〕「元高4把内御税8分引」。〔朱書〕「4わ掛25〆2」。〔朱書〕「63」。〔墨書〕「但し中昆布之訳ヲ以テ差出之処、前同断」。〔墨書〕「目方20貫160目／此石5斗4合／直段196円也」
	【末尾記載】二口〆金5円79銭2厘6毛／〔朱書〕「内／金2円25銭8厘8毛　諸懸り并手数料」／差引／金3円53銭3厘8毛				
104	6月30日同船積入	【入】棹前昆布	16把8分	6.51	〔朱書〕「元高21把内4把2分引」。〔朱書〕「31〆目」。〔朱書〕「775」。〔墨書〕「目方130貫200目／此石3石2斗5升5合／直段200円也」
105	8月1日同船積出し	【入】同	5把6分	2.188	〔朱書〕「元高7把内1把4分引」。〔朱書〕「31〆4」。〔朱書〕「785」。〔墨書〕「目方43〆760目／此石1石9升4合／直段200円也」
	【末尾記載】二口〆金8円69銭8厘／〔朱書〕「棹前斗り28わ内5わ6分引」／〔朱書〕「正味22把4分也」				
106	1月中	【入】鹿皮大	3枚	1.1688	〔朱書〕「直段38銭9厘6毛」
107	1月中	【入】中皮	9枚	3.1095	〔朱書〕「直段3455」
108	1月中	【入】下皮	10枚	2.67	
	【末尾記載】〔朱書〕「取合22枚」／〆金6円94銭8厘3毛／内／〔朱書〕「金55銭5厘9毛　箱館并爰許8分方手数料」／差引／金6円39銭2厘4毛				
109	9月12日広業社渡ス	【入】新上等昆布	46把4分	31.579	〔朱書〕「元58把内御役16把引」。〔朱書〕「3わ掛23〆目」。〔墨書〕「目方355〆700目／8石8斗9升2合5勺／直段金386円也」。〔墨書〕「代金34円32銭5厘也／〔朱書〕「内／2円74銭6厘　8分方手数料」／差引／金31円57銭9厘」
110	―	【入】中昆布	16把	6.664	〔朱書〕「元中20把内4把引」。〔朱書〕「70」。〔墨書〕「目方112〆目／此石2石8斗／直段238円也」
	【末尾記載】取合／元昆布数122把／内24わ4分御税引／〔朱書〕「正味97把6分也」／〆金50円47銭4厘8毛／惣〆金57円76銭7厘2毛／内／金35円93銭5毛　前諸品代〆高／差引残り／金21円83銭6厘7毛過上／〔朱書〕「11年1月20日勘定済」				

②明治12年(1879)　矢本家文書Y6「土人勘定帳」より

No.	月日	購入品名		購入額	備考
1	1月11日	股引	1足	0.65	
2	1月24日	清酒	3杯	0.24	
3	2月6日	米	5升	0.5	
4	2月12日	濁酒	1升1はい	0.1	
5	2月20日	八丈嶋	1反	0.75	
6	2月20日	金引	200目	0.5	
7	2月20日	濁酒	5合	0.04	
8	3月2日	同	2升	0.16	
9	3月9日	津軽米	1俵／升	3.3	
10	3月18日	紺足袋	1足	0.24	
11	3月20日	塩	4升	0.16	
12	3月22日	濁酒	1升	0.08	
13	4月6日	濁酒	5合	0.06	
14	4月6日	同	1升1杯	0.1	
15	4月6日	同	3杯	0.06	
16	4月6日	唐風呂敷	1枚	0.13	
17	4月8日	濁酒	1升	0.08	
18	4月19日	味噌	1貫目	0.25	
19	4月19日	濁酒	2升	0.16	
20	4月20日	同	1升	0.08	
21	4月22日	同	2升5合	0.2	
22	4月24日	同	1升	0.08	
23	4月25日	正金かし	―	1	
24	4月25日	濁酒	2升	0.16	
25	4月25日	真岡	1反	0.9	
26	4月28日	越後米	1俵	3.15	
27	5月3日	落かん	2ツ	0.12	
28	5月4日	濁酒	2升	0.16	
29	5月4日	正金かし	―	0.5	
30	5月5日	落かん	1ツ	0.06	
31	5月5日	濁酒	1升1杯	0.1	

	日付	品名	数量	金額	備考
32	5月6日	同	5合	0.04	
33	5月7日	紺先織	2枚	2.4	
34	5月9日	濁酒	1升	0.08	
35	5月9日	落雁	1ツ	0.06	
36	5月13日	濁酒	3杯	0.06	
37	5月13日	味噌	1貫目	0.25	
38	5月22日	濁酒	1升	0.08	
39	5月22日	手拭	1本	0.068	
40	5月22日	大の粉	1玉	0.06	
41	5月22日	濁酒	1升	0.08	
42	5月7日分	同	1升	0.08	
43	5月24日	米	5升	0.425	
44	5月26日	越後米	1俵	3.15	
45	5月27日	濁酒	1升5合	0.12	
46	5月30日	新酒	2升	0.44	
47	5月30日	濁	5合	0.04	
48	6月1日	糀	1升	0.085	
49	6月1日	塩	3升	0.12	
50	6月1日	新酒	3杯	0.165	※5厘の部分のみ抹消
51	6月2日	越後酒	1樽	1.5	※抹消
52	6月8日	小紋染	1反	0.72	
53	6月8日	ぱん	半斤	0.12	
54	6月11日	越後米	1俵	3.15	
55	6月11日	串柿	7串	0.175	
56	6月11日	草鞋	5足	0.075	
57	6月14日	かん徳り	2本	0.2	
58	6月22日	味噌	1貫目	0.2	
59	6月22日	焼酎	1箇	1.2	
60	6月25日	清酒	2升	0.44	
61	6月26日	同	1樽	1.5	
62	6月26日	柾	100把	1.25	
63	6月26日	木舞	400枚	0.6	
64	6月26日	糀	2升	0.17	
65	6月26日	濁酒	1升	0.08	
66	6月26日	落雁	1袋	0.06	
67	6月27日	清酒	3升	0.66	
68	6月27日	濁酒	1升	0.08	
69	6月27日	塩	1俵	0.75	
70	6月29日	清酒	2升	0.44	
71	6月29日	濁酒	1斗	0.8	
72	7月1日	一寸三部／丸釘	140目	0.132	
73	7月1日	三寸七部／同	180目	0.117	
74	7月2日	清酒	1升	0.22	
75	7月4日	越後米	1俵	3.36	
76	7月6日	清酒	2升	0.44	
77	7月7日	濁酒	5合	0.04	
78	7月9日	青嶋	1枚	0.65	
79	7月9日	正金かし	—	1	
80	7月13日	濁酒	1升	0.08	
81	7月14日	目薬	1ツ	0.015	
82	7月14日	薄縁	1枚	0.23	
83	7月14日	濁酒	3杯	0.06	
84	7月15日	清酒	1杯	0.0625	
85	7月15日	同	1升1杯	0.3125	
86	7月21日	落雁	2ツ	0.12	
87	7月21日	正金かし	—	0.5	
88	7月22日	越後米	2俵	6.72	
89	7月23日	桧皮	1把	0.05	
90	7月23日	清酒	1杯	0.0625	
91	7月25日	越後酒	1樽	2	
92	7月28日	焼酎	1本	0.2	
93	8月3日	飴	1ツ	0.2	
94	8月3日	ミそ	2貫目	0.4	
95	8月3日	大山酒	2升	0.5	
96	8月5日	同	1升1杯	0.3125	
97	8月9日	正金かし	—	2	
98	8月9日	手拭	2本	0.13	
99	8月9日	大山酒	1杯	0.0625	
100	8月11日	同	1升	0.25	
101	8月12日	越後米	1俵	3.5	
102	8月15日	清酒	半樽	1.2	
103	8月15日	同	1杯	0.0625	
104	8月22日	古手	2枚	4.1	
105	8月22日	清酒	1升	0.25	
106	8月22日	正金かし	—	1	

	日付	品名	数量	金額	備考
107	8月24日	清酒	5合	0.125	
108	8月24日	焼酎	1本	0.25	
109	8月25日	同	1本	0.25	
110	8月31日	紺木綿	1反	1.08	
111	8月31日	唐綛	1把	0.3	
112	8月31日	焼酎	2本	0.5	
113	7月7日分	清酒	1杯	0.0625	
114	9月2日	清酒	1升3杯半	0.4685	
115	9月2日	焼酎	6本	1.5	
116	9月2日	同	2本	0.5	
117	9月3日	清酒	5合	0.125	
118	9月3日	白砂糖	半斤	0.125	
119	9月3日	焼酎	1箇	1.5	
120	9月5日	越後米	2俵	7	
121	9月5日	焼酎	1箇	1.5	
122	9月6日	大山酒	1樽	2.5	
123	9月12日	清酒	2升	0.56	
124	9月12日	河内白	1反	0.8	
125	9月18日	清酒	1升1杯	0.35	
126	9月22日	同	5合	0.14	
127	9月26日	同	3杯	0.21	
128	9月28日	紺先織	1枚	1.2	
129	9月28日	落雁	1ツ	0.06	
130	10月5日	清酒	5合	0.14	
131	10月5日	コノア貸分	—	2.727	
	【末尾記載】惣〆金84円8銭2厘1毛／〔朱書〕「是分勘定済」				
132	9月6日分	区入費金かし	—	1.303	
133	10月10日	同断ヤイセ分かし	—	1.303	
134	10月9日	仕立／青嶋	1枚	0.65	
135	10月9日	濁酒	1升	0.15	
136	10月27日	焼酎	1本	0.25	
137	10月28日	濁酒	1升	0.15	
138	10月28日	落雁	1ツ	0.07	
139	11月1日	清酒	1杯	0.08	
140	11月2日	濁酒	1杯	0.04	
141	11月4日	同	1升	0.15	
142	11月5日	清酒	1杯	0.1	
143	11月8日	濁酒	3杯	0.12	
144	11月10日	捧豆	1函	0.6	
145	11月12日	清酒	5合	0.2	
146	11月12日	濁酒	1杯	0.04	
147	11月16日	同	3杯	0.12	
148	11月16日	塩	5升	0.4	
149	11月20日	濁酒	2升	0.32	
150	11月25日	清酒	3杯半	0.35	
151	11月25日	濁り酒		0.08	※抹消
152	12月8日	落かん	1ツ	0.07	
153	12月13日	濁り酒	1升	0.16	
154	12月20日	同	1升	0.16	
155	12月21日	同	1升1杯	0.2	
156	12月24日	同	1升	0.16	
157	12月27日	様似丸下／越後米	1俵	4.8	升425入
158	12月28日	濁り酒	1杯	0.04	
	【末尾記載】惣〆金11円98銭6厘				
159	12年第4月ヵ	【入】日雇中3日之給料　月4円割	—	0.4	
160	—	【入】新上昆布	40把	38.625	〔朱書〕「高50把内税10把引　3わ掛25〆匁」。〔墨書〕「め方335〆333匁／此石8石3斗3升3合3勺3才／直段515円之1割下／金463円50銭也」／〔朱書〕「但し諸懸りなし」
161	9月28日受取	【入】同上昆布	24把	21.06	〔朱書〕「高30把内6わ引」。〔墨書〕「2わ掛15〆6／め方187〆200目／4石6斗8升／直段450」／〔朱書〕「諸懸りなし手取」
162	9月28日受取	【入】中昆布	17把6分	10.672	〔朱書〕「高22把内4わ4分引」。〔墨書〕「4わ掛30〆8／135〆520目／3石3斗3升8合／直段4517かけ／315円也」／〔朱書〕「同断之事」
	【末尾記載】四口〆金70円75銭7厘／一、金84円8銭2厘1毛　前諸品代〆高かし／差引／一、金13円32銭5厘1毛不足／第10月7日差引済				
163	—	【入】秋味雇中21日給代	—	3.15	〔朱書〕「12月8日直渡し之事」
	【末尾記載】〔朱書〕「12月8日直渡し之事」				

表3－1　矢本家文書Y5・Y6「土人勘定帳」[明治10年・12年(1877・1879)]に登場するアイヌ人名とその収支

凡例

・本表は、矢本家文書Y5・Y6「土人勘定帳」[明治10年・12年(1877・1879)]に登場するアイヌとその収支についてまとめたものである。

・「土人勘定帳」では個々人の名前は、個々人ごとに章立てされている帳簿本文の冒頭と、その丁の横に貼られたインデックスラベルに記されていることがあるが、それぞれで微妙に異なっている場合がある。また、Y5とY6でも微妙に異なっている場合もある。そのため、「人名」欄には、Y5に登場する人物についてはインデックスラベルがある場合はまずその情報を示し、本文冒頭の表記と異なる場合は「(　)」で併記し、かつY6と異なっている場合は「[　]」として併記した。なお、Y6ではひらがなや漢字での表記もあるが、カタカナに直して統一した。

・「収入項目」欄で、「昆」は昆布出荷、「鹿」は鹿皮出荷(鹿角含む)、「鮭」は鮭漁雇い(資料原文では「秋味中廿一日分給代」などとして出てくる)、「鰯」は鰯漁雇い(同じく「いわし雇中〆二日分」など)、「材」は材木流送雇い(同じく「木流し三日給料」など)、「馬」は馬追雇い、「他」はその他、「雇」は何に従事したのか不明な雇い(Y6のみに出てくる)、を示している。また、「○」は明治10年[Y5]のみの情報、「◎」は明治12年[Y6]のみの情報、「●」は両方に登場する情報、という意味である。それぞれの具体的な内容は、表3－2を参照のこと。

・「順」「支出」「収入」「収支」の欄では、Y5及びY6それぞれについて、帳簿に登場する順番、総支出額(矢本店から前借りで購入した物品の総額)、総収入額(出荷品の販売金や雇用に係る給金など、矢本店から渡される金額の総計)、その差引額を示した。金額の単位は円。例えば、「1.2345」とあれば、1円23銭4厘5毛である。

・「Y7」欄には、矢本家文書Y7「当座帳」[明治13年(1880)]、特に表1－1の「人名」欄に登場する人物について、「○」を付した。

・「土人勘定帳」2冊の内、Y5については、水損などの影響で丁が汚損もしくは付着している箇所が多く、情報が読み取り切れない部分が散見される。そのような部分については、表中、灰色の網掛けをほどこした。例えば、No.54のトリは、前半の支出項目の途中までと一番最後の差引金額の記載は読み取れるが、収入項目など、その間の情報は丁の付着によって読み取れない。

No.	人名	収入項目								明治10年(1877)[Y5]				明治12年(1879)[Y6]				Y7
		昆	鹿	鮭	鰯	材	馬	他	雇	順	支出	収入	収支	順	支出	収入	収支	
1	ラウシユク [ラウシユウク]	●		●	○	○		◎	◎	1	41.8278	44.177	2.3492	30	59.6165	40.3785	−19.238	
2	イタカ子	●	○	●					◎	2	35.9305	57.7672	21.8367	1	96.0681	73.907	−22.1611	○
3	ヤヽシハ [ヤヽシパ]	●	○	○		○		◎		3	37.426	52.561	15.135	37	52.236	54.9466	2.7106	○
4	エンカラマ	●	○	○	○	○		◎		4	35.5048	54.2895	18.7847	51	62.425	53.0179	−9.4071	○
5	ハテキヌ [バテキヌ]	●	○	○	○	○				5	45.9805	58.197	12.2165	38	89.8701	70.7265	−19.1436	○
6	ヒコ (彦次郎)	●	○	○	○	○				6	36.906	89.0251	52.1191	59	36.706	78.9	42.194	○
7	シアシン [シアスン]	●		○	○	○				7	23.1776	59.5022	36.3246	53	11.9208	29.4167	17.4959	
8	ヨコ (ハテキヨコ)	●	○		○			◎		8	26.835	34.5516	7.7166	24	37.3316	30.6795	−6.6521	○
9	イカシアステ (エカシアシテ)	○	○	○	○	○			◎	9	47.9162	47.0105	−0.9057	20	14.2056	1.333	7/1精算	
10	コホ (コボキンタ)	●		○	○					10	39.9648	66.2216	26.2568	41	31.5425	43.6765	12.134	○
11	ホヤ (ホヤシヤムン)	●						○		11	47.4717	40.1672	−7.3045	11	59.9181	75.0882	15.1701	○
12	ホノヲツカエ (ホンヲカエ)	○	○	○	○	○		○		12	45.4512	60.046	14.5948	16	5.0011		精算	
13	アシレコロ	○	○	○	○	○				13	33.0905	43.42	10.3295	44	3.6761		8/23精算	
14	イタキホロ	○		○	○	○				14	32.3055	39.7239	7.4184	2	15.3231		精算	
15	チウテキ (シコラム)	○	○		○	○				15	52.631	[　]	[　]	55	10.7144	10	精算	
16	クチヤランテ [クチヤランデ]	○	○	○	○	○				16	35.5664	43.0195	7.4531	36	9.8021		7/24精算	
17	レマカ	○			○	○				17	22.89	19.287	−3.603	35	10.0086		7/23精算	
18	セフトツカ [セフトカ]	●	○							18	31.3187	37.3097	5.991	58	29.8926	10.6373	−19.2553	
19	シコケ	○	○							19	41.5975	27.0615	−14.536	54	10.2969		−10.2969	
20	イカシルラ	○		○	○	○				20	40.8375	49.914	9.0765	5	16.1		7/23精算	
21	カワフセ [カハフセ]	○	○					○		21	41.2966	25.4786	−15.818	26	9.6046		−9.6046	
22	ノシクレ	○	○					○		22	70.8685	44.1056	−26.7629					
23	ウナフト	○		○	○	○			◎	23	19.7443	18.8173	−0.927	32	16.1081	0.212	精算	
24	シラムテ [シラムケ]	○	○	○	○	○		○		24	25.874	27.328	1.454	56	1.076		7/23精算	
25	チヨクヌアン [チヨクノアン]	●	○			○				25	17.0255	36.961	19.9355	17	3.4776	8.992	5.5144	
26	ヲヒタサンケ	○	○	○	○	○				26	58.4383	22.6197	−35.8186	21	32.8012		−32.8012	
27	チヨン	○	○							27	26.6135	28.2577	1.6442					

No.	人名	収入項目								明治10年(1877)[Y5]				明治12年(1879)[Y6]				Y7
		昆	鹿	鮭	鰯	材	馬	他	雇	順	支出	収入	収支	順	支出	収入	収支	
28	アラスロ [アラシロ] [荒四郎]	●	○	◎	○	○		◎	◎	28	31.8731	[29]	[-2]	45	72.6146	55.0742	-17.5404	○
29	ヲツカエタ	●	○	○	○	○				29	34.0714	22.7146	-11.3568	23	29.2364	3.7386	-25.4978	
30	ヤカンテ [ヤカンデ]	●		○	○	○		○	◎	30	52.5146	29.4798	-23.0348	43	86.1455	24.8963	-61.2492	○
31	ランケシユ [ランケシユウ]	○	○	●	○	○		◎	◎	31	29.866	29.9744	0.1084	31	15.6725	8.94	-6.7325	
32	ソユワ [ソユワイ]	○	○	●		○			◎	32	23.0008	23.5621	0.5613	40	10.3696	11.812	1.4424	
33	ハルマツ [春松]	●	○	◎			●			33	34.869	39.2462	4.3772	8	78.7131	52.245	-26.4681	○
34	ホ子ラン	○		●	○	○	●		◎	34	39.5848	28.2384	-11.3464	10	43.346	9.643	-33.703	
35	イタカマ	○	○	○	○	○				35	41.0953	32.4788	-8.6165	6	18.6075		7/14精算	
36	インカルエ	○		○	○	○				36	36.8845	58.6518	21.7673	4	17.5111		7/14精算	
37	シユマカワ	●	○		○	○				37	79.4172	18.2439	-61.1733	57	86.9014	18.97	-67.9314	
38	サウナタラ [正月]	○			○	○			◎	38	32.168	28.2538	-3.9142	48	18.6994	0.532	精算	
39	カフケレ (カフケリ) [カプケリ]	○								39	21.0493	26.377	5.3277	27	8.0186		10/30精算	
40	エトフセ	◎	○	○	○	○			◎	40	19.8693	6.5567	-13.3126	50	24.336	15.9773	-8.3587	
41	イシツ子	○	○							41	16.6195	34.767	18.1475					
42	ホタコロアン	●		●			●			42	32.4448	38.072	5.6272	9	61.5166	44.11	-17.4066	○
43	イテキシマ									43	23.695			3	0.1211		精算	
44	イカマ	○								44	11.559	11.2921	-0.2669					
45	トンカ	●		○	○	○		◎	◎	45	21.343	35.8693	14.5263	12	52.7242	44.2561	-8.4681	○
46	ヲシワ (ヲシハ)			○	○	○				46	2.7525	1.44	-1.3125	22	4.1356		-4.1356	
47	レツカレ		○							47	0.3743	0.6763	0.302					
48	チウクテ (チヤウクテ)	○		○	○	○	●			48	52.8384	56.265	3.4266	18	23.0339	7.8	-15.2339	○
49	ヨタヌンテ	○	○		○					49	26.5304	27.7468	1.2164	25	15.7		7/22精算	
50	サナハ (サナンハ)	○		○	○		○		◎	50	25.8257	42.2834	16.4577	47	1.5997	0.637	-0.9627	○
51	エザエ子 (クンナ)	○		○	○		○			51	(同上)	(同上)	(同上)	66	6.104		精算	
52	レウエン	●			○	○				52	23.9131	41.9075	17.9944	34	14.8692	29.6334	14.7642	○
53	トタヌ			○	○	○	●			53	21.9185	10.56	-11.3585	13	55.6815	41.4	-14.2815	○
54	トリ [トリアイノ]	◎		◎					◎	54	[19]		-15.6606	14	40.2876	15.9164	-24.3712	
55	ヤイセ	○		○						55	22.9099	6.962	-15.9479	39	16.4865	6.103	-10.3835	
56	カユク			○	○	○				56	30.7275	10	-20.7275	29	17.8301		-17.8301	
57	ヨコ悴アフカシユハイ [アプカシ]	◎		○		○	●		◎	57	9.76	4.295	-5.465	46	38.4006	44.2008	5.8002	
58	カナシ	◎		◎					◎	58	6.6425	5.7782	-0.8643	28	44.8819	34.6573	-10.2246	
59	エレコ				○	○		◎		59	8.9506	2.5	-6.4506	62	6.2391	1.65	-4.5891	
60	ニタヌカル			○	○	○				60	5.305	2.21	-3.095	15 63	3.7125			
61	藤太		○							61	1.6595	0.3179	-1.3416					
62	ロク			◎					◎	62	19.2522			7	27.2204	1.632	-25.5884	
63	キモラン				○	○			◎	63	7.4527	2.625	-4.8277	49	1.8575	1.487	-0.3705	
64	シトンマ				○			○	◎	64	4.0025	3.7926	-0.2099	60	6.3536	3.3984	-2.9552	
65	ウイテカン	○								65	7.6333	18.1531	10.5198					
66	レシユク						○			66	38.7958	50.1	11.3042					
67	イタケトク						◎			67	23.225	33.75	10.525	75	23.1824	15.125	-8.0574	
68	キヤン子			○			○			68	24.2558	23.295	-0.9608					
69	タサベサン [タサヘサン]	◎			○	○	○		◎	69	11.419	12.625	1.206	78	19.2127	23.9935	4.7808	
70	エカンヌ [ヤカンテ悴エカンヌ]			○	○	○			◎	70	3.2355	9.09	5.8545	85	1.2205	1.9619	0.7414	
71	セチヤヌマツ			○	○					71	1.585	2.05	0.465					
72	テキサムシ			○						72	0.7195	1.47	0.7505					

No.	人名	収入項目								明治10年(1877)[Y5]				明治12年(1879)[Y6]				Y7
		昆	鹿	鮭	鰯	材	馬	他	雇	順	支出	収入	収支	順	支出	収入	収支	
73	トハテキ			○					◎	73	0.075	0.6615	0.5865	72	0.098	0.3186	0.2206	
74	エサカノク [エサカヌク]	◎		●					◎	74	1.1415	3.9	2.7585	52	19.7615	20.1866	0.4251	
75	チヤケアンテ			○	○				◎	75	0.985	3.1017	2.1167	80	2.784	1.6992	-1.0848	○
76	マカラム				○		◎			76	1.177	1.4112	0.2342	69	12.664	15.36	2.696	○
77	ヤヲクテリ [ゴロ] [ヤヲクテリ事五郎]			◎	○				◎	77	0.3	0.625	0.325	42	5.0033	3.081	-1.9223	
78	ルラク									78	0.1125							
79	ツタヌ	◎			○		◎			79	0.045	0.0882	0.0432	19	16.6892	12.5333	-4.1559	○
80	シタクヌ [クチヤランテ悴シタクヌ]				○				◎	80	0.675	1.323	0.648	79	1.058	2.8149	1.7569	
81	ノンクス													33	20.568		7/13精算	
82	クエラ						◎							61	31.7291	34.0113	2.2822	○
83	エサエ子悴カトナシ								◎					64	0.16	0.4265	0.2665	
84	マタラフ													65	8.291		-8.291	
85	イタケサカン								◎					67	0.169	0.532	0.363	
86	ウナフト妹コノア			◎										68	2.727	0.383	-2.344	
87	シテキ			◎										70		0.128	0.128	
88	ホ子ラン悴アニホカイ						◎		◎					71	13.5982	8.682	-4.9162	○
89	エサンマツ			◎										74		0.255	0.255	
90	ヒシヤンテ								◎					76	5.8946	4.4604	-1.4342	
91	トモツハ			◎					◎					77	3.5905	5.2254	1.6349	
92	テキアン			◎										81	0.14	1.275	1.135	
93	ホ子ラン娘チウコサヨ								◎					82	1.2805	1.4868	0.2063	
94	ヲシワテ／スノアン								◎					83	1.251	1.3648	0.1138	
95	シノアン			◎										84		0.216	0.216	
96	ウロクテ悴トク			◎					◎					86	0.5035	1.6262	1.1227	
97	クチヤランテ悴クニタヲリ								◎					87	0.738	1.0236	0.2856	
98	カリワ			◎					 ◎					88 89	2.065 1.1545	2.55 1. 3806	0.485 0.2261	
99	エトムイ								◎					90		1.0236	1.0236	
100	ソンノマツ			◎					◎					91	1.35	1.6716	0.3216	
101	サンケ[ ]								◎					92	0.106	0.2559	0.1499	
102	スエノ			◎										93	0.15	1.275	1.125	
103	カチヤマン			◎					◎					94	2.712	2.9222	0.2102	
104	アンテマツ			◎					 ◎					95 96	 0. 1	0.638 0.3186	 0.2186	
105	エレコ悴アカ子 [アカ子]								 ◎					73 97	 0.22	 1.1089	 0.8889	
106	サンケマツ			◎					 ◎					98 100	0.515 1.0445	1.148 0.853	0.633 -0.1915	
107	シアンノ			◎										99		0.216	0.216	
108	タラエマツ			◎					◎					101	0.05	1.2342	1.1842	

表３－２　矢本家文書Y5・Y6「土人勘定帳」［明治10年・12年(1877・1879)］に登場するアイヌ人名とその収入項目詳細

凡例

・本表は、矢本家文書Y5・Y6「土人勘定帳」［明治10年・12年(1877・1879)］に登場するアイヌについて、表３－１で示した収入項目の詳細をまとめたものである。基本的な凡例は、表３－１と共通している。

・それぞれの人物について、「Y5」「Y6」の2段に分けて、収入項目を示した。どちらか全てに「×」が付されている人物がいるが、その人物はその帳簿には登場していないことを意味している。

・昆布と鹿皮・鹿角は、出荷総数を示した。収入額として計算される時には税額が差し引かれているが、ここでは差し引かれる前の数値を示した。また、昆布も鹿皮も、上・中・下などの等級別で計上されているが、総数の上では区別しなかった。

・鮭漁雇い、鰯漁雇い、材木流送雇い、馬追雇いは、従事した日数で計上されているので、その日数を示した。なお、一部、セルが結合している部分がある。これは、鰯漁雇いと材木流送雇いとが結合している場合、例えば、「いわし木流中十一日給代」のように一緒に計上されていることを意味している。

・「【備考】」欄では、適宜必要と判断した情報を示した。資料原文の引用は「　」で括った。また、「※」について、例えば、No.15のチウテキでは、「【備考】」備に「※以上」と記したが、これは同じ行の昆布にある「※56把」に対応している。資料の破損・汚損によって、少なくとも56把の出荷は確認出来たが、おそらくまだ出荷されている可能性が高いと考えられる、ということを示している。

No.	人名		昆	鹿	鹿角	鮭	鰯	材	馬	他	雇	【備考】
1	ラウシユク［ラウシユウク］	Y5	90把			27日	6日					
		Y6	55把			5日				「テキアン雇中二日給代」0.17円	2日	
2	イタカ子	Y5	122把	22枚		6日						
		Y6	102把			21日					3日	
3	ヤヽシハ［ヤヽシパ］	Y5	71把	50枚	1.4貫	21日		3日				
		Y6	72把							干布海苔18.5貫、薪5間		
4	ユンカラマ	Y5	91把	13枚		27日	30日					
		Y6	70把							干布海苔7.4貫		収入に「商会へ売上昆布代差引過上分」6.416円
5	ハテキヌ［バテキヌ］	Y5	111把	7枚	0.15貫	5日	25日					
		Y6	99把									
6	ヒコ（彦次郎）	Y5	146把	14枚		6日	25日					
		Y6	100把									
7	シアシン［シアスン］	Y5	103把			25日	34日					
		Y6	40把									
8	ヨコ（ハテキヨコ）	Y5	64把	7枚			2日					過上金はアフカシワイ渡し
		Y6	41把							「シラムテ古金一円受取之内地価代引残金」0.625円		
9	イカシアステ（ユカシアシテ）	Y5	80把	4枚	0.1貫	13日	30日					
		Y6									10日	
10	コホ（コボキンタ）	Y5	145把			4日	2日					
		Y6	60把									
11	ホヤ（ホヤシヤムン）	Y5	89把							柏木皮剥ぎ7日		
		Y6	108把									
12	ホノヲツカエ（ホンヲカエ）	Y5	80把	40枚	2.8貫	鮭3日、鰯・材木15日				煎海鼠416.875斤		
		Y6										
13	アシレコロ	Y5	70把	21枚		鮭2日、鰯・材木22日、鮭・鰯・材木21日						
		Y6										
14	イタキホロ	Y5	66把			※	※					※出荷高不詳
		Y6										
15	チウテキ（シコラム）	Y5	※56把	10枚	0.9貫		10日					※以上
		Y6										

No.	人名		昆	鹿	鹿角	鮭	鰯	材	馬	他	雇	【備考】
16	クチヤランテ ［クチヤランデ］	Y5	79把	3枚		16日	9日					
		Y6										
17	レマカ	Y5	39把				7日					
		Y6										
18	セフトツカ ［セフトカ］	Y5	84把	10枚								過上金は悴ヱカンノ渡し
		Y6	15把									
19	シコケ	Y5	※40把	10枚								※以上
		Y6										
20	イカシルラ	Y5	97把			13日	6日					
		Y6										
21	カワフセ ［カハフセ］	Y5	49把	21枚						干鱈※		※出荷高不詳
		Y6										
22	ノシクレ	Y5	※不詳	1枚						煎海鼠320粒		※出荷高不詳
		Y6	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
23	ウナフト	Y5	※29把			8日	9日					※以上
		Y6									2日	
24	シラムテ ［シラムケ］	Y5	41把	10枚		2日	3日	3日		干煎海鼠380粒		
		Y6										
25	チヨクヌアン ［チヨクノアン］	Y5	※59把	15枚	0.5貫			9日				※以上
		Y6	10把									
26	ヲヒタサンケ	Y5	25把	13枚	0.4貫	19日	15日	7日				不詳収入項目あり
		Y6										
27	チヨン	Y5	57把	7枚								
		Y6	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
28	アラスロ ［アラシロ］ ［荒四郎］	Y5	49把	5枚			21日	4日				
		Y6	72把			10日				薪10間	17日	
29	ヲツカヱタ	Y5	34把	10枚	1.2貫	2日	9日	9日				
		Y6	5把									
30	ヤカンテ ［ヤカンデ］	Y5	43把			23日	7日	8日		干煎海鼠364粒		
		Y6	40把								12日	
31	ランケシユ ［ランケシユウ］	Y5	48把	7枚	0.5貫	22日	18日	3日				
		Y6				31日				「同人之昆布浜貸代入分」3.5円	14日	
32	ソユワ ［ソユワイ］	Y5	39把	6枚		17日		3日				過上金はクチヤランテ渡し
		Y6				17日					4日	
33	ハルマツ ［春松］	Y5	54把	※5枚					76日			※「ケリ々分」。過上金はケリ々渡し
		Y6	69把			※7日			※※35日			※「ケリ々秋味中七日給料」 ※※「ケリ々臨時并馬追共日雇中卅五日給料」
34	ホ子ラン	Y5	39把			35日	19日	10日				
		Y6				39日			21日		11日	
35	イタカマ	Y5	46把	13枚		5日	18日	5日				
		Y6										
36	インカルヱ	Y5	121把			4日	10日	13日				
		Y6										
37	シユマカワ	Y5	31把	2枚			7日					
		Y6	29把									
38	サウナタラ ［正月］	Y5	51把				23日					
		Y6									4日	

No.	人名		昆	鹿	鹿角	鮭	鰯	材	馬	他	雇	【備考】
39	カフケレ (カフケリ) [カプケリ]	Y5	46把									
		Y6										精算はホノヲツカエより10/30に受取
40	エトフセ	Y5		10枚		4日	19日	6日				
		Y6	22把								4日	
41	イシツ子	Y5	60把	10枚								不詳収入項目あり
		Y6	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
42	ホタコロアン	Y5	44把			※			85日			不詳収入項目あり
		Y6	54把			5日			15日			
43	イテキシマ	Y5										判読不能
		Y6										
44	イカマ	Y5	21把									
		Y6	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
45	トンカ	Y5	64把			鮭・鰯・材木25日、鰯11日、材木13日						不詳収入項目あり
		Y6	62把							干布海苔7.9貫	4日	
46	ヲシワ (ヲシハ)	Y5				3日	13日					
		Y6										
47	レツカレ	Y5		2枚								
		Y6	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
48	チウクテ (チヤウクテ)	Y5	※73把			30日	11日		9日			※以上
		Y6							52日			
49	ヨタヌンテ	Y5	31把	10枚	0.2貫		※					
		Y6										
50	サナハ (サナンハ)	Y5	69把			5日	※		加勢 42日			エサエ子と同一精算
		Y6									6日	
51	エザエ子 (クンナ)	Y5	—			—	—		—			サナハと同一精算
		Y6										
52	レウエン	Y5	76把				22日					
		Y6	40把									
53	トタヌ	Y5				30日	27日		8日			
		Y6							加勢 276日			
54	トリ [トリアイノ]	Y5										判読不能
		Y6	40把			30日					21日	
55	ヤイセ	Y5	12把			10日						
		Y6										
56	カユク	Y5				35日	32日					
		Y6										
57	ヨコ悴アフカシユハイ [アプカシ]	Y5				19日		4日	12日			不足分はヨコより受取
		Y6	55把						32日		9日	
58	カナシ	Y5										判読不能。不足分は父・チヨンより受取
		Y6	45把			12日					8日	
59	エレコ	Y5					20日					
		Y6								「冬しま鍛仕事代之分」1.65円		
60	ニタヌカル	Y5				2日	16日					
		Y6										
61	藤太	Y5		1枚								
		Y6	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
62	ロク	Y5										判読不能
		Y6				7日					7日	収入に「冬しま秋味給代差引入」0.4464円、「エサカヌ占廻り分」0.42円

No.	人名		昆	鹿	鹿角	鮭	鰯	材	馬	他	雇	【備考】
63	キモラン	Y5					21日					
		Y6									14日	
64	シトンマ	Y5					14日			納家飯焚29日		
		Y6									32日	
65	ウイテカン	Y5	27把									過上金はシラカ渡し
		Y6	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
66	レシユク	Y5							334日			
		Y6	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
67	イタケトク	Y5							270日			過上金はヲコタマツ渡し
		Y6							加勢121日			
68	キヤン子	Y5				19日			142日			
		Y6	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
69	タサベサン［タサヘサン］	Y5					21日		80日			ヲコタマツヘ正金渡し
		Y6	30把								16日	
70	エカンヌ［ヤカンテ悴エカンヌ］	Y5				21日	33日					
		Y6									23日	過上金はイタカ子渡し
71	セチヤヌマツ	Y5				10日	8日					過上金はクヲニンテ渡し
		Y6	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
72	テキサムシ	Y5				14日						
		Y6	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
73	トハテキ	Y5				9日						過上金エカンヌ渡し
		Y6									3日	
74	エサカノク［エサカヌク］	Y5				26日						過上金はコホ渡し
		Y6	20把			16日					4日	過上金はロク廻し。収入に「商会え売上げ昆布代差引過上分」2.681円
75	チヤケアンテ	Y5				23日	16日					
		Y6									16日	過上金はエサンレル渡し
76	マカラム	Y5					16日					過上金はヲコタマツ渡し
		Y6							128日			
77	ヤヲクテリ［ゴロ］［ヤヲクテリ事五郎］	Y5					5日					
		Y6				20日					5日	
78	ルラク	Y5										
		Y6	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
79	ツタヌ	Y5					1日					過上金はテキアンテ渡し
		Y6	8把						加勢52日			
80	シタクヌ［クチヤランテ悴シタクヌ］	Y5					15日					過上金はクチヤランテ渡し
		Y6									33日	
81	ノンクス	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6										
82	クエラ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6							344日			
83	エサエ子悴カトナシ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6									5日	
84	マタラフ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6										

No.	人名		昆	鹿	鹿角	鮭	鰯	材	馬	他	雇	【備考】
85	イタケサカン	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6									5日	
86	ウナフト妹コノア	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				3日						精算はイタカ子
87	シテキ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				1日						
88	ホ子ラン悴アニホカイ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6							加勢 56日		33日	
89	エサンマツ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				2日						
90	ヒシヤンテ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6									42日	
91	トモツハ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				6日					42日	
92	テキアン	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				10日						
93	ホ子ラン娘チウコサヨ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6									14日	
94	ヲシワテ／スノアン	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6									16日	
95	シノアン	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				2日						
96	ウロクテ悴トク	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				4日					14日	
97	クチヤランテ悴クニタヲリ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6									12日	
98	カリワ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				20日					13日	
99	エトムイ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6									12日	
100	ソンノマツ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				6日					12日	
101	サンケ[　]	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6									3日	
102	スエノ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				10日						
103	カチヤマン	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				16日					14日	
104	アンテマツ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				5日					3日	
105	エレコ悴アカ子[アカ子]	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6									13日	
106	サンケマツ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				9日					10日	
107	シアンノ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				2日						
108	タラエマツ	Y5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
		Y6				9日					4日	

＜年　報＞

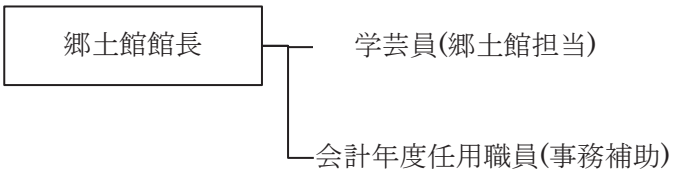
様似郷土館

1. 施設概要

所 在 地　〒058-0024　北海道様似郡様似町会所町１番地
建物構造　鉄筋コンクリート平屋建て
建物面積　199.74 ㎡
開　　館　昭和 42 年 4 月 5 日
開館時間　10：00～16：30
休 館 日　月曜日、祝日の翌日、年末年始

2. 運営

(1) 組織



(2) 職員

教育委員会
教育長　荒木　輝明（～令和３年８月 12 日）
　　秋山　寛幸（令和３年 10 月 26 日～）
生涯学習課参事兼　様似郷土館館長　児玉　正敏
生涯学習課社会教育係係長(学芸員)　髙橋　美鈴
会計年度任用職員　中村　冬吾

(3) 様似郷土館運営審議会（兼）様似町文化財調査委員会

任期：令和３年 11 月１日～令和５年 10 月 31 日
委 員 長：笹島　秀則
副委員長：佐々木　正
委　員：成田　康尋、前　春雄、泉田　小百合

3. 郷土館利用状況

令和３年度は、234 日の開館、312 人の来館者であった。また、５月 18 日から６月 20 日及び８月 29 日から９月 30 日についてはコロナウイルス感染症予防対策のため臨時休館とした。

月別の開館日数、入館者数は、下記のとおりである。

月	日数	大人	小人	町内	道内	道外	計
4 月	26	24	2	11	14	1	26
5 月	10	13	4	9	8	0	17
6 月	7	10	0	1	7	2	10
7 月	25	50	32	50	23	9	82
8 月	24	46	8	14	29	11	54
9 月	0	1	10	11	0	0	11
10 月	27	45	3	24	20	4	48
11 月	22	12	0	3	8	1	12
12 月	23	8	0	2	6	0	8
1 月	21	4	2	2	4	0	6
2 月	22	2	1	2	1	0	3
3 月	27	7	28	32	2	1	35
計	234	222	90	161	122	29	312

4. 郷土館事業活動内容

(1) 寄贈資料受入件数

受　入　日	資　料　名	点　　数
4月1日	お膳　他	427
4月1日	フィルム一眼レフカメラ　他	4
4月7日	日高線普通入場券	16
4月9日	JR 日高本線関係資料	582
4月11日	レコード	5
4月22日	ガラス製浮き玉	25
6月16日	業務用冷凍ショーケース　他	4
6月26日	古文書	2
8月1日	踏切名板　他	15
8月17日	８mm映写機　他	4
9月7日	水筒　他	6
9月29日	障子　他	10
10月26日	写真「住吉神社建替え時上棟式」	1
12月14日	真空管ラジオ	1
12月14日	書籍	2
12月14日	駅名板	7
12月29日	トランシット　他	3
1月26日	書籍「ひだか子ども風土記」　他	5
1月26日	ジュラルミン製湯たんぽ　他	3
2月24日	火鉢	1
	合　　計	1, 123

⑵ 公開・展示

・企画展「イカラカラ・様似と共に～アイヌ刺繍が織りなす美の世界～」

実施期間　令和３年４月 27 日～５月９日　　会　　場　様似町中央公民館　ギャラリー21

内　　容　令和２年度アイヌ施策推進事業の一環として制作されたアイヌ民族衣装など 14 点とアイヌ民族文化保存会の会員が制作した資料を展示した。

・パネル展「蝦夷三官寺巡回パネル展」

実施期間　令和４年２月 18 日～２月 27 日　　会　　場　様似町中央公民館　コミュニティフロア

内　　容　北海道遺産・蝦夷三官寺に関するパネル 16 点を展示した。

・パネル展「冬島遺跡パネル展～ここまでわかった！冬島遺跡～」

実施期間　令和４年３月８日～22 日　　会　　場　様似町中央公民館　コミュニティフロア

内　　容　令和３年度文化庁地域の特色ある埋蔵文化財活用事業の一環として実施した冬島遺跡の地域研究の成果報告としてパネル 10 点を展示した。

・企画展「様似のアイヌ文化～アイヌ施策推進事業報告会～」

実施期間　令和４年３月８日～22 日　　会　　場　様似町中央公民館　ギャラリー21

内　　容　令和２年度、３年度で実施したアイヌ施策推進事業の成果報告会として、絵図「東蝦夷シャマニ之景（複製）」（所蔵　国立アイヌ民族博物館）のデジタル解説などを展示した。

⑶ 講演・講座

・アポイカレッジ(講演)

講座名「矢本家文書調査報告会」

講　師　瀧澤　正　氏

　　谷本　晃久　氏（北海道大学大学院文学研究院）

　　浅倉　有子　氏（上越教育大学）

　　三浦　泰之　氏（北海道博物館）

日　時　令和４年３月 22 日

会　場　様似町中央公民館　文化ホール

内　容　１「矢本家文書調査から見えてくるもの」（瀧澤　正　氏）

　　２「矢本家文書 経営帳簿の世界」（三浦　泰之　氏）

　　３「矢本家文書から見る様似アイヌの生活の諸相」（浅倉　有子　氏）

　　４「アイヌ史的観点から矢本家文書をよむ」（谷本　晃久　氏）

⑷ 共催・協力事業

・企画展「日高本線展」

実施期間　令和３年９月 19 日～10 月１日　　会　　場　様似町中央公民館ギャラリー21

共　　催　浦河町教育委員会、様似町教育委員会

内　　容　駅名板や踏切名板、ジオラマなどの JR 日高本線に関する資料を展示した。

(5) 連携事業

町立様似図書館、様似郷土館、アポイ岳ジオパークビジターセンターの３館の連携講座「カンカン講座」を月１回実施した。実施日、実施内容については、以下のとおりである。

日　付	事　業　名	参加者数	担　当　館
4 月 17 日	自分で製本！オリジナルノートづくり	12	図書館
5 月	（コロナウイルス感染症対策のため中止）	―	―
6 月 26 日	型染めでアイヌ文様ランチバックづくり	14	様似郷土館
7 月 17 日	季節の花や野菜の絵手紙	15	アポイ岳ビジターセンター
8 月 21 日	けずって描くスクラッチシートでお絵かき	15	町立様似図書館
9 月	ペーパークラフトで網かごづくり（キット配送）	30	様似郷土館
10 月 16 日	ラミネートフィルムでランチョンマットづくり	13	町立様似図書館
11 月 20 日	ススキを使ってホウキづくり	16	様似郷土館
12 月 18 日	紙紐 de しめ飾りづくり	12	様似郷土館
1 月 15 日	様似の植物でリースづくり	15	アポイ岳ビジターセンター
2 月	お家でじっくり♪和綴じメモ帳づくり	35	町立様似図書館
3 月 19 日	ダンボール織り機でコースターづくり	10	アポイ岳ビジターセンター

(6) 資料の貸出等

令和３年度の資料貸出等の件数は、11 件であった。内訳は貸出 4 件、デジタルデータ借用・掲載 4 件、複製 1 件、借用・掲載 2 件で、総貸出点数は 131 点であった。詳細は以下のとおりである。

日　付	区　分	資　料　名	点　数
4 月 1 日～３月 31 日	デジタルデータ借用・掲載	町内写真	12
5 月 29 日～31 日	貸出	片口	1
6 月 1 日～8 月 30 日	借用・掲載	鉄道写真	1
6 月 8 日～9 月 27 日	貸出	冬島遺跡出土骨角器	2
7 月 1 日	借用・掲載	日高本線関連写真	26
9 月 16 日	デジタルデータ借用・掲載	国鉄バス写真、日高本線 SL 関連写真、様似駅舎写真	5
10 月 26 日	複製	さまに民報	73
11 月 5 日～12 月 10 日	貸出	トランクキット２「遺跡と海」 トランクキット４「ジオパークと海」	2
12 月 1 日	デジタルデータ借用・掲載	様似軌道図面写真、三井物産様似駐在所写真	6
12 月 18 日～3 月	貸出	冬島遺跡出土土器資料	2
12 月 23 日～3 月 25 日	デジタルデータ借用・掲載	平成 28 年度　トレンチ調査 P-1 出土土器出土状況	1
		合　計	131

5. 学芸員の館外対応

・髙橋学芸員（専門：保存科学）

日　付	所　在　地	内　容
4 月 27 日	様似町	モンゴル国博物館担当職員研修会講義（オンライン）
7 月 7 日	様似町	様似小学校１・２年生遠足の事前学習
8 月 24 日	様似町	禅輪寺講話
9 月 3 日	様似町	北海道博物館協会あり方検討委員会（オンライン）
10 月 26 日	白老町	シンポジウム「2 万年つづくビーズアイランド-旧石器から近世までの北海道のビーズ史」登壇者
11 月 5 日	様似町	様似小学校４年生総合学習「アイヌ文化」指導支援
11 月 7 日～10 日	上ノ国町・恵庭市	北海道ガラス調査
8 月～11 月	様似町	北海道内出土真鍮製品の集成

（髙橋　美鈴）

6. 様似郷土館条例・施行規則

○様似郷土館条例

昭和４２年１月２５日条例第１９号
改正　昭和４３年９月１９日条例第９号
昭和５４年９月２５日条例第６号
平成１３年７月２日条例第１８号
平成２４年３月９日条例第４号

（設置）

第１条　本町の教育学術及び文化の発展に寄与するため、様似郷土館（以下「郷土館」という。）を設置する。

（名称及び位置）

第２条　郷土館の名称及び位置は、次のとおりとする。

名称	位置
様似郷土館	様似郡様似町会所町１番地

（職員）

第３条　郷土館に、館長及び職員定数条例（昭和２７年様似町条例第９号）の範囲内において、様似町教育委員会（以下「委員会」という。）が必要と認める職員を置く。

（郷土館運営審議会）

第４条　郷土館に郷土館運営審議会（以下「審議会」という。）を置く。

２　審議会は、郷土館の運営に関し、委員会の諮問に応ずるとともに、館長に意見を述べる機関とする。

３　審議会の委員（以下「委員」という。）は、学校教育及び社会教育の関係者、家庭教育の向上に資する活動を行う者並びに学識経験のある者の中から委嘱する。

４　委員の定数は、５人以内とし、その任期は、２年とする。ただし、補欠による委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（教育委員会規則への委任）

第５条　この条例の施行に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附　則

この条例は、公布の日から施行する。

附　則（昭和４３年９月１９日条例第９号）

この条例は、公布の日から施行する。

附　則（昭和５４年９月２５日条例第６号）

この条例は、公布の日から施行する。

附　則（平成１３年７月２日条例第１８号）

この条例は、公布の日から施行する。

附　則（平成２４年３月９日条例第４号）

この条例は、平成２４年４月１日から施行する。

○様似郷土館条例施行規則

昭和５５年４月２２日
教育委員会規則第９号
改正　昭和６１年１１月２７日教委規則第３号
平成１３年８月１日教委規則第２号
平成２９年４月２０日教委規則第５号

（趣旨）

第１条　この規則は、様似郷土館条例（昭和４２年様似町条例第１９号）第５条の規定に基づき、様似郷土館（以下「郷土館」という。）の管理及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

（事業）

第２条　郷土館は、次の各号に掲げる事業を行う。

（１）　郷土資料の分類及び整理に関すること。

（２）　資料に関する専門的及び技術的な調査研究を行うこと。

（３）　実物、標本、模写、模型、文献、図表、写真及びフイルム、レコード、録音テープ等の資料を収集し、保管し、及び展示すること。

（４）　資料の利用に関し、必要な説明、助言及び指導を行うこと。

（５）　講習会、映写会、研究会等の開催に関すること。

（６）　郷土館に関する資料の作成及び広報に関すること。

（開館時間及び休館日）

第３条　郷土館の開館時間及び休館日は、次のとおりとする。

（１）　開館時間　午前１０時から午後４時３０分まで

（２）　休館日　次に掲げる日

ア　月曜日

イ　国民の祝日に関する法律（昭和２３年法律第１７８号）に規定する祝日の翌日（ただし、その日が土曜日、日曜日及び月曜日に当たるときは、その翌開館日）

ウ　１月１日から同月５日まで及び１２月３１日

２　前項の規定にかかわらず、館長は、管理運営上特に必要と認めたときは、その開館時間を伸縮し、臨時に休館し、又は臨時に開館をすることができる。

（入館料）

第４条　郷土館の入館料は、無料とする。

（入館の制限）

第５条　館長は、次の各号いずれかに該当するときは、郷土館を利用しようとする者又は利用者に対して入館を禁じ、又は退館させることができる。

（１）　風俗又は公安を害するおそれがあるとき。

（２）　郷土館の建物又はその展示物等をき損し、又は滅失するおそれがあるとき。

（３）　その他郷土館の管理運営上適当と認め難いとき。

（入館者の遵守事項）

第６条　入館者は、郷土館においては、次に掲げる事項を遵守しなければならない。

（１）　所定の場所以外で飲食し、又は喫煙しないこと。

（２）　建物、設備、展示資料等を汚損し、損傷し、又はその設備、展示資料等を所定の場所から持ち出さないこと。

（３）　他の入館者に迷惑をかける行為をしないこと。

（運営審議会）

第７条　様似郷土館運営審議会（以下「審議会」という。）に会長及び副会長各１人を置く。

２　会長及び副会長は、委員の互選による。

３　会長は、審議会を代表し、審議会の議長となる。

４　副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。

５　審議会は、必要に応じて会長が招集する。

６　審議会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによるものとする。

（委任）

第８条　この規則に定めるほか、必要な事項は、館長が別に定める。

附　則

この規則は、公布の日から施行する。

附　則（昭和６１年１１月２７日教委規則第３号）

この規則は、公布の日から施行する。

附　則（平成１３年８月１日教委規則第２号）

この規則は、平成１３年８月１日から施行する。

附　則（平成２９年４月２０日教委規則第５号）

この規則は公布の日から施行する。

アポイ岳ジオパークビジターセンター

1. 施設概要

所在地　〒058-0004　北海道様似郡様似町字平宇 479 番地の 13・14
建物構造　鉄骨造地上 1 階建
建物面積　499.28 ㎡
開館　平成 25 年 4 月 1 日
開館時間　午前 9 時から午後 5 時
休館日　12 月 1 日から 3 月 31 日

2. 運営

(1) 組織

センター長 ― 参事（アポイ岳保全・国立公園化担当） ― 課長補佐 ― ジオパーク推進係
課長補佐 ― アポイ岳保全係

(2) 職員

様似町
商工観光課長　田村　裕之（センター長）
商工観光課参事（アポイ岳保全・国立公園化担当）　板谷　　潤
商工観光課課長補佐　森山　紀之
商工観光課ジオパーク推進係長　佐々木　将貢
商工観光課アポイ岳保全係長（学芸員）　加藤　聡美
商工観光課アポイ岳保全係学芸員　水永　優紀
会計年度任用職員　橋爪　伸恵、吉井　広三

3. ビジターセンター利用状況

月	日数	個人	団体	計
4 月	30	627	4	631
5 月	16	1,561	0	1,561
6 月	10	442	0	442
7 月	31	2,024	18	2,042
8 月	28	2,203	22	2,225
9 月	0	0	28	28
10 月	31	682	0	682
11 月	18	258	0	258
12 月				
1 月		冬　季　休　館		
2 月				
3 月				
計	164	7,797	72	7,869

4. ビジターセンター事業活動内容

(1) 寄贈資料受入件数

受　入　日	資　料　名	点　　数
9 月 14 日	アンモナイト化石	77
9 月 30 日	香港ユネスコ世界ジオパークの酸性火山岩・関連書籍	19
9 月 30 日	香港観光ポスター	12
11 月 22 日	韓国・チョンソンジオパーク関連図書	12
	合　　計	120

(2) 講演・講座等

・「リニューアル展示の見どころ解説」

日　時　令和 3 年 5 月 2 日　　会　場　アポイ岳ジオパークビジター

内　容　リニューアルした地形模型を中心に、ジオパークの見どころなどについて解説を行った。

・「石の世界を見てみよう」

日　時　令和 3 年 5 月 5 日　　会　場　アポイ岳ジオパークビジター

内　容　かんらん岩の薄片と河原にある石について、観察会を実施した。

・自然観察会「ブラアポイ」

日　時　令和 3 年 5 月 3 日、4 日、7 月 23 日、24 日、8 月 7 日、8 日、13 日、14 日

会　場　アポイ岳ジオパークビジター周辺自然観察路等

内　容　ビジターセンター周辺の動植物や昆虫などを探しながら散策し、観察会を実施した。

・ジおさんぽ「かつてのプレート境界をひとまたぎ」

日　時　令和 3 年 7 月 25 日、8 月 22 日

会　場　アポイ岳ジオパークビジターセンター、冬島地区

内　容　冬島地区にある「かつてのプレート境界」サイトについて、ビジターセンターで解説を行った後、現地を散策しながら見どころの解説を行った。

・「観音山できのこ観察会」

日　時　令和 3 年 9 月 20 日　　会　場　観音山公園

講　師　北村益美氏（胆振きのこ菌友会事務局長）

内　容　観音山公園内できのこを採取後種類分けしたのち、講師から解説していただいた。

・特別展「幻の花　ヒダカソウ」

開催期間　令和 3 年 4 月 1 日～6 月 30 日　　会　場　アポイ岳ジオパークビジター

協　　力　様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会、アポイ環境科学委員会、アポイ岳ファンクラブ、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

内　　容　様似町の花「ヒダカソウ」は、近年は登山道沿いではほとんど見られない。生息域外保全のため北海道大学植物園で栽培されたヒダカソウ株を展示するとともに、ヒダカソウを含むアポイ岳の希少植物の保全活動を紹介する特別展を、昨年に引き続き開催した。

・特別展「香港ユネスコ世界ジオパーク標本と香港パネル展」

開催期間　令和３年10月１日～11月30日　　会　場　アポイ岳ジオパークビジター

協　　力　香港ユネスコ世界ジオパーク

内　　容　アポイ岳ジオパークと標本やパンフレット等の交流を行った香港ユネスコ世界ジオパークの紹介パネルを展示するとともに、実際の標本や書籍類なども展示した。12月からは町立様似図書館において展示した。

(3) 連携事業

町立様似図書館との連携事業「サマニクエスト」を実施した。実施日、実施内容については、以下のとおりである。

日　付	事　業　名	参加者数	備　　考
7月30日	金を見つけよう！！（モニター実施）	1	
10月9日	金を見つけよう！！	8	
1月10日	硬さ王決定戦	3	
2月11日	スノーシューＤＥナゾの足あとを追え！	―	まん延防止措置により中止

他は様似郷土館と同様のため省略

(4) 資料の貸出等

令和３年度の資料貸出等の件数は、15件であった。内訳は貸出２件、デジタルデータ貸出８件、提供５件、総貸出等点数は34点であった。詳細は以下の通りである。

日　付	区　分	資　料　名	点　数
4月2日	デジタルデータ貸出	かんらん岩偏光顕微鏡写真、プレートが地球を覆っている図	2
4月21日	デジタルデータ貸出	かんらん岩偏光顕微鏡写真	1
5月10日	貸出	北海道の高山蝶ヒメチャマダラセセリ、ヒメチャマダラセセリ関連ファイル、ヒメチャマダラセセリの記録蝦夷白蝶 vol.5,no.1	3
6月1日	デジタルデータ貸出	日高山脈とアポイ岳のなりたち	1
8月10日	提供	様似町の地質図と説明書、生物標本	3
8月13日	デジタルデータ貸出	日高山脈	1
9月12日	提供	かんらん岩	1
9月14日	デジタルデータ貸出	アポイへの道 The Road to Apoi、ダナイトとハルツバージャイト、レルゾライト、かんらん岩広場、アポイ岳の風景写真	5
9月19日	デジタルデータ貸出	岩と海が織りなす大自然	1
9月19日	貸出	かんらん岩	1
9月20日	デジタルデータ貸出	アポイへの道 The Road to Apoi、ヒダカソウ	2
10月6日	提供	ガイドブック類	7
1月24日	提供	かんらん岩	1
1月24日	デジタルデータ提供	パネル「アポイ岳ジオパーク」	1
2月6日	提供	ガイドブック・広報２冊・平成30年７月豪雨記録と記憶	4
		合計	34

5.学芸員の館外対応

・加藤学芸員(専門：岩石)

日　付	所　在　地	内　容
5月13日	オンライン	様似小学校5年生アポイ登山事前学習会
5月24日	様似町	日本地球惑星連合科学大会ジオパークセッション「新たな見どころ・かつてのプレート境界と地域住民とのかかわり、特に看板製作過程について」iPoster発表
7月6日	様似町・浦河町	浦河第二中学校1年生校外学習
7月14日	様似町	様似小学校5年生アポイ登山学習
8月27日	様似町	様似小学校4年生アポイ登山
8月30日	オンライン	大分県姫島村立姫島中学校1年生「総合的な学習」
9月7日	様似町	様似小学校5年生「総合的な学習」
10月19日	様似町・浦河町	浦河小学校6年生「大地のつくりと変化」
10月20日	様似町	様似中学校1年生「総合的な学習」
11月1日	オンライン	大分県姫島村立姫島中学校1年生「総合的な学習」
11月5日	様似町	様似中学校1年生「総合的な学習」
2月24日	オンライン	JGN（日本ジオパークネットワーク）オンラインカフェ「図書館とジオパークの連携」口頭発表

・水永学芸員(専門：植物生態学)

日　付	所　在　地	内　容
5月17日	様似町	様似小学校3年生アポイ登山事前学習
5月19日	様似町	様似小学校4年生アポイ登山事前学習
7月6日	様似町	浦河第二中学校1年生昆虫標本づくり
7月8日	様似町	様似中学校1年生「総合的な学習」
8月4日、5日	えりも町	「わらしゃんど・えりもまるごと自然体験事業」
8月27日	様似町	様似小学校3年生アポイ登山学習
8月30日	様似町	幼児センターアポイ登山事前学習
8月31日	様似町	幼児センターアポイ山麓自然学習
9月10日	様似町	様似小学校6年生アポイ登山学習

6. アポイ岳ジオパークビジターセンターの設置及び管理運営に関する要綱

○アポイ岳ジオパークビジターセンターの設置及び管理運営に関する要綱

平成２５年３月２９日

訓令第１６号

（趣旨）

第１条　この要綱は、アポイ岳ジオパークビジターセンター（以下「ビジターセンター」という。）の設置及び管理運営に関し必要な事項を定めるものとする。

（設置）

第２条　アポイ岳をはじめとする様似町の学術的に貴重な地質、自然環境及び歴史文化などの地域資源（以下「地域資源」という。）を紹介することで、町民及び来町者の地域理解を図り、もって様似町の教育及び観光振興に寄与するため、ビジターセンターを設置する。

２　前項のビジターセンターの名称及び位置は、次のとおりとする。

名称	位置
アポイ岳ジオパークビジターセンター	様似町字平宇４７９番地の１３・１４

（職員）

第３条　ビジターセンターに、センター長及び必要と認める職員を置く。

（業務）

第４条　ビジターセンターは、おおむね次に掲げる業務を行う。

（１）　地域資源に関連した資料の収集及び展示

（２）　ジオパークの普及啓発

（３）　アポイ岳の自然に関する情報提供

（４）　アポイ山麓ファミリーパークキャンプ場の管理

（開館時間及び開館期間）

第５条　ビジターセンターの開館時間及び開館期間は、次のとおりとする。

（１）　開館時間　午前９時から午後５時まで

（２）　開館期間　４月から１１月末日まで

２　前項の規定にかかわらず、町長は管理運営上特に必要と認めたときは、その開館時間を伸縮し、臨時に休館し、又は臨時に開館することができる。

（入館料）

第６条　ビジターセンターの入館料は、無料とする。

附　則

この訓令は、平成２５年４月１日から施行する。

様似郷土館紀要　４号

発行年月日　令和４年(2022) ３月 31 日

編集・発行　　様似町教育委員会

〒058－8501　北海道様似郡

様似町大通１丁目 21 番地

印　　刷　　株式会社　総北海